葛山の民俗

どんど焼き

富士山と葛山

浅間神社元旦祭

野辺の花かご

景ヶ島の石造仏

景 ヶ 島

依京寺(景ヶ島)

はじめに

裾野市は昭和六三年度から市史編さん事業へ本格的に着手いたしました。以来、専門委員、調査委員の先生方をはじめ、市民の皆様のご協力をいただきながら調査研究を続けております。

近年の急激な都市化に伴い、失われつつある習俗や行事など庶民生活を明らかにし、良き伝統を後世に残すことは重要なことであり現代の社会生活や市の将来を考える時、『民俗』の持つ意味を十分に理解していく必要があろうと思います。本書は、平成元年度に実施した葛山（かずらやま）地区の民俗調査をまとめたものです。葛山地区は本市の北西部に位置する静かな農村地帯ですが、鎌倉、室町戦国期を通じて東駿一帯に勢威を振った今川氏家臣、葛山氏の本拠地です。同氏の平時居住の館跡と城址が遺存し、歴史上貴重な史跡のある地域であります。

調査にあたり地区、話者の皆様には特段のご協力を賜り厚くお礼申し上げます。また調査にあたられた福田アジオ先生を中心とする調査員各位のご労苦に感謝申し上げますとともに、本書がより多くの方々に読まれ、利用していただくことを願います。

平成三年三月

裾野市長　市川　武

調査の概要・例言

一　調査の目的

裾野市史民俗編は平成七年度の刊行を予定しており、現在はこれをまとめるための基礎資料収集のため、市域各地での民俗調査を行っている。特に市域を旧村単位で五地区に分け、民俗編の執筆までの五年間に地域を限定した集中調査を実施することにした。五地区とは、旧小泉村、旧泉村、旧深良村、旧富岡村、旧須山村で、これらは明治の町村制で誕生した村々であるが、裾野市として合併後も西地区、東地区、深良地区、富岡地区、須山地区としてそれぞれに特色ある発展をしてきた。地区ごとに地理的環境や産業構造などが異なっていることから、裾野市域の全体像を得るための準備段階として、これら各地区のうち、伝統的なまとまりを持った地域を順次調査対象としてとりあげ、集中的に資料の収集にあたる予定である。

葛山はその第一回の調査地として、旧富岡地区から一地域を選定したものである。葛山を対象とするにあたっては、まず江戸時代に葛山村という行政的なまとまりであったこと、さらに遡って、中世には葛山城を中心とした城下の村として成立していたという、歴史的にも重要な地区であったことがその理由にあげられる。また、愛鷹山麓にあって山をめぐる伝統的な生活が伝承されていること、特に裾野市域の中心からは離れているために、長らくそうした独自の生活様式が残されることになった点などから、集中的な民俗調査を行うことにしたものである。

葛山は内部が五つの集落からなっており、それぞれに独自の世界を形成している。こうした社会的、地理的な条件を考慮に入れながら、本調査では葛山の伝統的な生活と現在に生きる民俗事象とを全体像として把握し、統一した世界としての葛山の生活文化を描くよう努めた。

二　調査期間

調査は、平成元年九月一四日から一七日の四日間を第一次調査とし、平成二年二月一〇日から一二日の三日間を第二次合同調査とした。なお、予備調査としてこれより以前、昭和六三年一二月二一日から二三日の三日間は五地区のうち田場沢のみの調査をした。これをうけて行われた第一次調査では上城から中村、下条、中里の順で地区ごとの集中調査を実施、第二次は田場沢を含めて葛山全域を対象とした。いずれも共同調査で、予備調査は一二人（うち臨時調査員五人）、第一次調査は一八人（うち臨時調査員九人）、第二次調査では四人（うち臨時調査員一人）が参加した。なお共同調査日程以外も、調査員はそれぞれ必要に応じて数日間の補充調査を個別に実施した。

三　調査関係者

調査にあたったのは、市史編さん民俗担当の福田アジオ専門委員をはじめ一〇人の調査委員と一一人の臨時調査員、それに市史編さん室職員である。調査委員は、民俗担当のみでなく近代担当など他担当からも参加した。調査者の氏名と調査及び執筆分担は次のとおりである。

役職	氏名	調査及び執筆分担 （　）は調査時の所属
専門委員	福田アジオ	序章、第三章第四節
〃	中野　国雄	
調査委員	岩田　重則	第一章
	斎藤　弘美	第二章
	杉村　　斉	第三章第一、二、三節
	新谷　尚紀	第四章
	岩崎　信夫	
	坂本　紀子	
	前田　耕司	
	渡瀬　　治	
臨時調査員	宮村田鶴子	社会と生活 （武蔵大学卒業生）
	根岸　准子	生活環境の民俗 （法政大学大学院卒業生）
	鈴木めぐみ	第三章第四節 （東京女子大学卒業生）

臨時調査員	小澤さと子	社会と生活・時間と生活 （東京女子大学卒業生）
	加藤　高広	生活環境の民俗 （早稲田大学学生）
	田村　美奈	社会と生活 （東京女子大学学生）
	真柴千賀子	時間と生活 （武蔵大学学生）
	海田　千花	時間と生活 （武蔵大学学生）
	黒坂　智子	心意と生活 （立教大学学生）
	沢田　雅子	心意と生活 （武蔵大学学生）
	堤　育子	心意と生活 （武蔵大学学生）

四　調査方法と調査経過

葛山五地区の各区長さんにご尽力いただき、話者のリストアップをしていただくと共に、各地区の公民館をお借りして初日は主だった方々にお集まりいただいた。

調査は基本的には個別面接調査方法をとり、第一次は上城から一日一地区の形で中里までを聞き書き調査した。第二次は仙年寺の葛山地区の公民館を拠点に、各自のテーマに基づいての個別調査を実施した。また、初午や不動講、念仏講などについてはそのつど担当者が葛山を訪れ関与観察による調査を行った。なお、調査員が行かれない場合は、編さん室職員及び地元写真家の永島愛治氏に行事の写真撮影をお願いした。

調査期間中は裾野市内に合宿し、毎日三時間余りのミーティングをして調査上の課題や問題点などを話し合った。調査終了後は、各自の調査結果をカード化して提出し、共通の資料として分類し、関連項目を執筆者に分配した。以上のような経過で本書が作成された。

五　編集上の留意点

編集は、福田アジオ専門委員の指導のもとに、第一集を担当した調査委員の斎藤弘美と市史編さん室の中野鈴子が行った。提出された原稿は編集段階で記述上の統一をはかり、民俗語彙と考えられるものはカタカナ表記としたが、一般に通用するものや漢字を当てたほうが理解しやすいものは例外とした。数字表記については、民俗語彙としての十五夜、二十三夜講などは十を入れ、一般には十をぬかした表記とした。図表は執筆担当者が原図を作成し、写真は調査員や編さん室で撮影したもののほか、地元の方々からお借りした貴重なものも使用させていただいた。

六　調査協力者

調査に話者として協力してくださった方々、あるいは貴重な資料を提供してくださったり、お宅の中を拝見させていただいたりと、お忙しいところをさまざまな形でご協力いただいた皆様には心から感謝申し上げる。特に芹沢正巳さん、勝又常一さんのお二人には原稿の点検もお手伝いいただき誠にお世話になった。報告書の完成をもってお礼の言葉にかえさせていただきたい。

話者名簿（順不同・敬称略）

〈上　城〉

塩崎クラ子（大正三年生）
勝又瀧雄（大正七年生）
塩崎金吾（大正一五年生）
坂田あさ（明治三七年生）
市川勝雄（明治四〇年生）
坂田英雄（昭和一年生）
坂田文雄（昭和五年生）
市川さか江（大正二年生）
勝又つや（大正五年生）
大川守幸（昭和四年生）
大川いし（明治三五年生）
勝又一雄（大正五年生）
勝又たか子（明治四四年生）
塩崎きく（明治四三年生）
市川　泉（明治四五年生）
市川はる（明治四〇年生）
坂田よし江（大正四年生）
勝又壮治（昭和九年生）
勝又文雄（大正一三年生）
西川徳信（大正七年生）

〈中　村〉

瀬戸敬市（明治四五年生）
瀬戸かや（明治四〇年生）
瀬戸芳子（大正一四年生）
勝又元義（大正三年生）
勝又作雄（大正一四年生）
半田しづ（大正四年生）
半田春江（昭和一七年生）
半田　守（昭和一五年生）
勝又さわ（大正六年生）
杉山道子（昭和二二年生）
杉山喜信（大正七年生）
半田　隼（昭和六年生）
半田美佐子（昭和六年生）
入山光信（昭和六年生）
瀬戸太巳（大正一二年生）
木村武雄（大正五年生）
勝又美恵子（大正一二年生）
小宮山静子（大正八年生）
望月周市（大正一四年生）

〈下　条〉

岩佐重雄（大正八年生）
岩佐勝美（大正一三年生）
河内芳美（大正三年生）
岩佐貞良（明治四四年生）
勝又五郎（大正一三年生）
勝又るい（明治四四年生）
勝又　登（昭和一七年生）
佐野たか（明治四三年生）
岡村み子（大正六年生）
御宿きよ江（大正六年生）
名東博美（昭和七年生）
勝又常一（大正一四年生）
荻田憲雄（大正一二年生）
川口アヤ（明治四〇年生）
勝又と志子（大正四年生）
勝又信子（大正一四年生）
岩佐慶子（大正一〇年生）
杉本　充（昭和三一年生）

〈中　里〉

勝又こと（大正九年生）
中野　茂（大正四年生）
真田なみ子（大正六年生）
中村康宏（昭和一二年生）
三尋木俊平（明治三六年生）
真田てい（明治四一年生）
伊藤千鶴（大正九年生）
佐々木林太郎（明治三八年生）

佐々木　はつ江（昭和一一年）
真田　なみ（明治三三年）
本門　さと江（大正一一年生）
勝又　彦作（大正二年生）
勝又　なを江（大正七年生）
遠藤　時中（昭和五年生）
伊藤　政秋（大正四年生）
遠藤　のぶ（明治四四年生）

〈田場沢〉

中村　久雄（明治三七年生）
中村　はる（明治四一年生）
中村　孝一（明治四一年生）
芹沢　正己（昭和四年生）
中村　久（大正九年生）
勝又　なお（明治四一年生）
中村　ひさゑ（大正八年生）
芹沢　秋義（明治三六年生）
中村　よし乃（明治四一年生）
勝又　すみ（大正四年生）
芹沢　フサエ（大正九年生）
芹沢　定平（明治三一年生）
中野　鶴吉（明治三五年生）
中村　秀男（大正一一年生）
芹沢　くら（明治四四年生）
芹沢　正吉（昭和一八年生）
中野　喜美恵（昭和一三年生）
勝又　文作（大正一年生）
芹沢　ひさ子（大正一五年生）
臼井　裕（昭和三年生）
大石　靖孝（昭和一七年生）

〈御宿〉

渡辺　すゑ満子（大正一年生）
石原　ひさ（明治四四年生）
坂口　なか（大正七年生）

目次

口　絵
はじめに
調査の概要・例言
序　章　葛山の歴史と民俗　……1
第一節　市史編さんと民俗　……1
歴史を知る資料／考古学の活躍／民俗学の登場／民俗学の明らかにする歴史／裾野市と民俗
第二節　葛山の歴史的特徴と集落　……3
葛山氏の地／広大な葛山村
第三節　民俗の特色　……4
豊富な民俗／愛鷹山と葛山／注目すべき家をめぐる民俗／さまざまな神々
第一章　生活環境の民俗　……7
第一節　開発と土地利用　……7
㈠　家の立地　……7
カワバタ(川端)の利用と家の立地
㈡　土壌と畑　……7
赤土／縄文式土器／赤土とサツマイモ／サツマ(サツマイモ)・小麦／土と芝／兼業農家と芝／桑／お茶／ラバックスと道造り／大野原の土
㈢　水と田　……11
ナカダ(中田)／ハデヤー(どぶ田)
第二節　富士・愛鷹山麓と生活　……12
㈠　愛鷹山　……12
シカソンキョウユウニュウカイ(四か村共有入会)／草刈り場／クサカリハジメ(草刈り始め)／馬力／堆肥／落葉／笹／馬・牛の骨(肥料)／炭焼き／パイスケ／萱場／モシキ(燃し木)／カイコン(開墾)／カイコンと田場沢川の氾濫／ヤッパタ(焼畑)
㈡　富士山　……16
大野原(演習場)／シドメバラ
㈢　山(愛鷹山)の現在　……17
事例1／事例2／事例3／事例4／事例5／事例6／事例7／事例8
第三節　水と生活　……18
㈠　カワバタと井戸　……18
カワバタ(川端)／井戸
㈡　水源　……19
水源／水神講／タンク
第四節　四季の変化と動植物　……20
㈠　気象の認知　……20
富士山のカサグモ(笠雲)／愛鷹山と雲／箱根山と雨／気象と生業／天神講／こぶしの花／ドヨウサブロ(土用三郎)／虹と気象／動物・昆虫と気象
㈡　カミナリサンと雨乞い　……21

雨乞い／雷とタケノカミナリサン
(三) 風と生活 ……21
ナライ／イナサ／コチ
(四) 動植物との交流 ……22
穴熊／イタチ／飼い猫／飼い犬／烏／雀／鳩／燕／鳥肉／蛇／カマキリ／ナメクジ／植物と民間療法／センフリ／ドクダミ／ヘビイチゴ（蛇苺）／竹／あおじそ（青紫蘇）／マルスギ／梅干しの皮／ハトムギ（はと麦）／いちじく（無花果）／チドメグサ（血止め草）／白つつじ／ヤマホウズキ（山酸漿）／びわ（枇杷）の葉・モロコシの毛／川と魚・カニ／カニ／サワガニ
(五) 幻想としての動物 ……24
河童／ムジナ／ナゼガワの狐／狐
第五節 災害と環境の変貌 ……25
(一) 関東大震災 ……25
事例1／事例2／事例3／事例4／事例5／事例6／関東大震災と川の変貌
(二) その他の災害 ……26
大久保川の氾濫／山火事／チブス
第二章 社会と生活 ……27
第一節 居住空間としての家・屋敷 ……27
(一) 間取りと部屋の使い方 ……27
間取りと各部屋の名称／ナキャー（ヒロマ）はお客の間／ザシキを使うはヨメ・ホトケ／暗いナンドはオサンバショ／コマのヒジロは家の中心
(二) 家の手入れと生活環境 ……30
水の苦労は嫁の苦労／嫁の自慢はモシキとハシラ／ムラ中総出のカヤカリ・ヤネガエ
(三) 新築・家移りの儀礼 ……32
ヤマドリ／ジマツリ（地鎮祭）／棟上げ（上棟祭）／ヤウツリ（家移り）
(四) 屋敷取りと屋敷の神 ……35
屋敷取りと付属建物／屋敷の神様／屋敷の墓／家にまつわる禁忌／家屋の建て替え・直し
第二節 家族生活 ……38
(一) 家族の日常生活 ……38
嫁の生活／姑の仕事／子どもの仕事／子どもの遊び
(二) 相続と継承 ……40
ウッチャリッコとオヤブン・コブン／キャクボトケと念仏法要／インキョ／イセキムスメとテャーマツナギ／ツブレヤシキと両養子・ジュンヨウシ／相続と継承の実際
第三節 親族と付き合い ……44
(一) 本分家関係 ……44
オオヤとシンヤ／シンセキづきあい／葬式の参列と手伝い
(二) 親分・子分 ……46
ナコウドとカネオヤ

第四節　村落の形と組織　……47
(一)　村とムラ　……47
葛山城をめぐるムラムラ／ムラとクミ／ムラ境・クミ境の道と川
(二)　ムラの組織　……52
寄合と公民館／浅間さんと大区長／ムラの役職
第五節　共有と共同　……57
(一)　ムラの共有財産　……57
ヤマの権利／共有財産と共有施設
(二)　共同労働　……58
ヤマの下刈り／ミチツクリと水路掃除
(三)　共同祈願　……59
第一にはムラの安全／水を求めて共同祈願
第六節　ムラの集団構成　……61
(一)　近隣集団　……61
葬式の手伝い／結婚式の手伝い／建前と屋根替え／イイガエシともらい風呂
(二)　年齢集団　……64
青年団／青年と倶楽部の生活／青年のドラブチ・デロブチ／子どもと祭り／アワシマ講と念仏講
第七節　世間との交流　……68
(一)　町・都市との関係　……68
交通と運搬／出稼ぎと奉公／神参りと物見遊山／行商と買い物

第三章　時間と生活　……71

第一節　生活の時間・生産の時間　……71
(一)　葛山の農業　……71
アラクオコシ／オカボの栽培／葛山の稲作＝田場沢の場合／葛山の稲作＝本村の場合
(二)　稲作の一年　……73
種籾の準備／苗代用の田作り／エンスイセン（塩水選）／シロカキ（しろ掻き）／田植え／「ソートメさん」と「トネ」／デロブチ／稲の生育と世話／収穫／脱穀・調整
(三)　芝生の栽培　……76
タネ（苗）を植える／カッチャク（活着）までの世話／その後の世話／出荷／芝の種類
第二節　一日の生活　……77
(一)　一日　……77
(二)　食事の時間　……78
オチャマエ／アサメシ／ヒルメシ／ユウジャ（ヨウジャ）／ヨウハン／ソバブルミャア（蕎麦振る舞い）
(三)　あいさつ　……80
朝のあいさつ／天候や時候のあいさつ／昼のあいさつ／夕方から夜のあいさつ
第三節　一年の生活　……82
(一)　農業暦　……82
農業暦解説
(二)　年中行事　……85

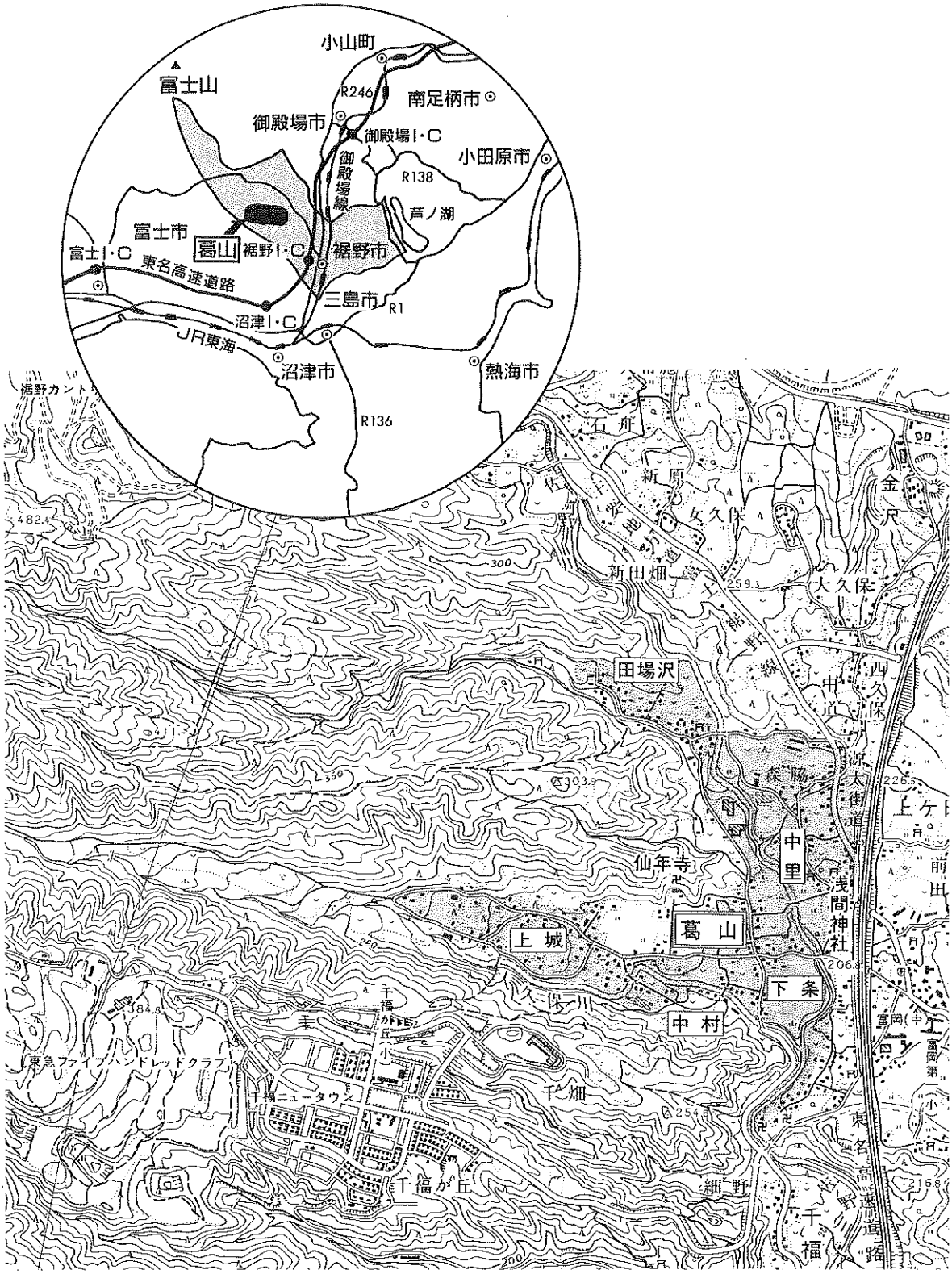
1 正月の行事 …… 85
正月の準備（一二月）／元旦／初山／七草／十一日正月／柿の木叩きで明ける二番正月／二番正月のサイトヤキ／山の神講／二十日正月
2 二月の行事 …… 90
節分／初午
3 三月の行事 …… 91
雛節句／彼岸
4 四月の行事 …… 91
女の節句／浅間神社のお祭り
5 五月の行事 …… 92
五月節句／葛山の観音様の祭り
6 七月の行事 …… 93
農休み
7 八月の行事 …… 94
七夕／盆
8 九月の行事 …… 95
風祭り／月見
9 一〇月の行事 …… 95
オヒマチ（お日待ち）／イノコのぼた餅
10 一一月の行事 …… 96
七五三／恵比寿講
11 一二月の行事 …… 96
カービタリ（川浸り）／冬至
(三) 衣・食の生活とムラの四季 …… 97
1 衣生活 …… 97
夏の仕事着／冬の仕事着／雨具／昔の子供の衣服／ハレの着物／女の髪形
2 食生活とムラの四季 …… 98
葛山の春はタケノコで始まる／タケノコ掘り／タケノコの出荷／葛山の冬はサツマのキリボシ（切り干し）／サツマの栽培／漬物と季節／漬物部屋／寒い時期は蕎麦／夏はうどんが主食代わり／モロコシを使った食物／ヒキワリメシ／オヤキ／モロコシの栽培
第四節 一生の生活 …… 102
(一) 産育 …… 102
妊娠祈願／妊娠／産婆／帯祝い／妊娠中の禁忌・俗信／安産祈願／デミマイ（出見舞い）／出産／オブツナさんのご飯／ノチザン（後産）／オブ湯（産湯）／ヘソの緒／ふたご／子捨て／お産による死／授乳／産後の食事／産後のきよめ／産後の仕事始め／出産見舞い（産見舞い）／出産祝い／お七夜／百ヒトエ／初誕生／初正月／初節句／ホウソウ／子守／七五三
(二) 婚姻 …… 106
結婚相手の決定／恋愛／見合い／ナコウド（仲人）／通婚圏／カネオヤ／結納／結納返し／祝言の時期／嫁入り道具／結婚祝い／婚礼衣裳／ムコイレ（婿入れ）／嫁入り／本祝言／オカタミセ（オカタ見せ）／カオミセ（顔見せ）／ミツメ／離婚／再婚／デロウチ

(三) 厄年・年祝い …… 110
伊勢参り／厄年／年齢の感覚／年祝い
(四) 葬制・葬儀の準備 …… 111
トブリャー／枕団子・枕飯／北枕／魔除け／ヒワリ（日割り）／死の通知／葬儀の手伝い／アナホリ（穴掘り）／禁忌
(五) トブライの儀礼 …… 112
お通夜／湯灌／納棺／火葬と葬儀／タチネンブツ（立ち念仏）／香奠／出棺／タチザケ（発ち酒）／コシアゲ（輿上げ）／野辺送り／埋葬／ハマオリ（浜降り）／キチュウ（忌中）
(六) 供養と先祖祭祀 …… 115
キャクボトケ（客仏）／オトウミョウ／ヒトナノカ（一七日）／フタナノカ・ミナノカ／三十五日／四十九日／百ケ日／一周忌／ネンカイ（年回）／トイバライ／生まれ変わり／火葬／墓と墓地

第四章 信仰 …… 117
第一節 神社と小祠 …… 117
(一) 葛山全体でまつる神社 …… 117
浅間神社／雷さま
(二) 上城の神社 …… 118
天王さま／八幡さま／サイノカミ（塞の神）／水神／コウボウさん（弘法さん）／山の神／屋敷神・屋内神
(三) 中村の神社 …… 120
金山神社／屋敷神・屋内神／クダギツネ
(四) 下条の神社 …… 121
瘡守稲荷／岩佐勲家の稲荷／サイノカミ／屋敷神・屋内神
(五) 中里の神社 …… 123
大六天神社／サイノ神と庚申塔／摩利支天／乳房の神さん／さなださん
(六) 田場沢の神社 …… 124
山の神
第二節 寺院・堂 …… 125
仙年寺／景ヶ島／田場沢の薬師堂
第三節 講 …… 127
念仏講／淡島講／秋葉講／天神講／不動講

〈附録〉 葛山区有文書 1 駿河国駿東郡葛山村明細帳（安永六年八月） …… 129
葛山区有文書 2 村方明細相改書上帳（文政十三年八月六日） …… 135
石造物調査一覧・分布図 …… 141

編集後記
裾野市史編さん専門委員・調査委員名簿


小山町
富士山
R246
南足柄市
御殿場市
御殿場I・C
小田原市
御殿場線
R138
芦ノ湖
富士市
葛山
裾野I・C
裾野市
富士I・C
東名高速道路
三島市
R1
沼津I・C
JR東海
沼津市
熱海市
R136
裾野カント
石脇
新原
女久保
金沢
新田畑
大久保
田場沢
西久保
中道
森脇
中里
仙年寺
浅間神社
葛山
上城
下条
中村
千畑
千福が丘小
東急ファイブハンドレッドクラブ
千福ニュータウン
千福が丘
細野
千福
東名高速道路
482.4
300
259.1
350
303.9
226.5
206.3
384.4
254.1
200

序章　葛山の歴史と民俗

第一節　市史編さんと民俗

歴史を知る資料　多くの人は、歴史と言えば、固有名詞をもった有名な人物が登場し、戦いとか政治の対立とか新しい事物の創造とかをしてきた歩みを記述するものと思っているのではないだろうか。書店に並んでいる大部分の歴史書はそのようなものである。テレビの大河ドラマのように、歴史上の人物が活躍し、そしてさまざまな人間関係に苦悶する姿に歴史の面白さを発見している人も多いであろう。しかし、そのような歴史上の人物だけが過去の歴史をつくってきたのではない。名もなく、ごくありふれた生活を送ってきたそれぞれの地域の人々がその地域の歴史を形成してきた。裾野市域の歴史は、もちろん有名な歴史上の人物が通過したり、あるいは市域の村に命令を発したり、人を派遣して物や金を徴収したりしたことは間違いないが、しかし市域で展開した歴史の大部分はこの地に住んで暮らしてきた人々によって担われてきたのである。

裾野市史はそのような市域に住み、市域の歴史を形成してきた人々の営みに焦点をあてて歴史を記述するものであるが、それを実際に行おうとするとすぐに壁に突き当たる。それは、ごくありふれた人々の日常的な生活や生産の様相を歴史として明らかにできる資料がないからである。歴史を明らかにできる資料は原則として、過去に文字で書き記されたものである。文書とか記録によって、書き記された当時を復原的に再構成するのがその基礎的な作業である。したがって、書き記した文字資料が何もなければ、その地域のその時間の歴史はないということになる。しばしば「無歴史地域」とか「無歴史時間」が生じることになる。よく歴史研究者が簡単にここには歴史がないということをいうのがそれである。

過去において文字で書き記して残すということは普段の生活ではほとんどなかった。昔だけではない。現在でも、少し反省してみると、私たちの日常生活を自分自ら文字に記しているということは少ない。まして、過去においてはそうである。文字は時間を遡れば遡るほど支配者のものであり、支配のための手段であった。文字で記録されるものは限定されていた。たとえば江戸時代であれば、年貢を徴収するための土地台帳（検地帳）、毎年の年貢を徴収するための命令書（年貢割付状）、その領収書（年貢皆済目録）、あるいは村の家数、人数を把握するための住民台帳（宗旨人別改帳）などが文字で書き記されたものの中心である。それらによる研究が、村の生活を随分詳しく、かつ具体的に明らかにしてくれたが、やはり支配のための資料という性格は免れない。日常生活の具体像まで迫ることは困難である。しかも、そのような文書でも時間の経過の中で消失していく。紙や木に書かれた文字資料は、機会あるごとに消えていく運命にあった。火事で燃え、洪水で流され、あるいは塵として出されて襖の下張りや製茶の道具であるホイロに張られたりして無くなった。現在残されているのはよほど幸運な文字資料ということになる。

考古学の活躍　このような文字資料であるから、文字で書いた

ものだけにたよっていたのでは、無歴史の地域と時間はいつまでたっても歴史の明らかな地域や時間に転化しない。そのことに気付いたのは随分古く、先ず考古学という学問が歴史を明らかにするものとして登場して、文字資料が作成されなかった時代、それを古くからの歴史研究の立場から先史時代などと呼ぶが、の生活を明らかにすることとなった。考古学の発展は目覚ましく、今では遺物や遺跡によって歴史を明らかにすることに疑問をもつ人はいない。それほど考古学の発掘に伴う新発見は目覚ましく、その成果による歴史の記述も豊富になってきている。もはや「先史時代」は存在しないと言ってもよいであろう。そして、考古学の活躍はいわゆる歴史時代にも及び、中世や近世の生活史が今までの文字資料のみで描かれていたものに比べて急速に豊かになり、また具体的になってきた。

しかし、その活躍めざましい考古学もアキレス腱はある。考古学は遺跡と遺物という過去から土の中に残された物質的なモノを資料として歴史を組み立てる学問である。したがって、物質に直接に表現されなかった事象は考古学ではなかなか明らかにできない。たとえば思想、信仰、意識、感覚などがそれであるし、また物質的なものでも土のなかで腐りやすいもの、たとえば木や草の葉、紙、布あるいは鉄などの古い時代のものも、発掘で出てくることは稀である。逆に新聞紙上を賑わすのは、その残りにくいものがたまたま発掘されるからである。考古学は万能選手ではない。それが明らかにする対象には自ずと限界があると言わねばならない。

民俗学の登場　文字資料（史料）に依拠して歴史を明らかにする伝統的な歴史研究（文献史学）と遺跡・遺物に依拠して歴史を究明する考古学だけでも、過去の姿は十全に明らかにならない。そこで、考えられたのが、同じように過去から残されたものであるが、文書や遺跡・遺物としてではなく、人間の身体を通して過去から現在に残され伝えられたものを資料とするということであった。文献史学も考古学もよく明らかにすることができない分野を、このような身体によって後世に伝えられたもので研究する学問が登場することとなった。それを民俗学と言い、すでにヨーロッパでは一九世紀には一定の成果をあげるところまで成長していた。そして、日本では、その欧米の民俗学を学んで、それを咀嚼して、日本独特の民俗学として成立させた。それは一九三〇年代のことであり、それを果たしたのは柳田國男という人物であった。

柳田國男は、過去から世代を超えて人々の行為や知識として継承されてきて、現に人々によって行われたり、語られたり、あるいは知られたりしている事象を資料として記録して歴史を研究する方法を確立した。人々の行為や知識を直接調査して記録し、その記録をもとに研究するという方法である。超世代的に伝えられて人々の行為や知識として存在するものは、習わし、しきたり、あるいは言い伝えである。これらを総称して民俗と言い、それを民俗調査を通して記録するのであるが、いずれも古臭いもの、些細なもの、つまらないものという印象をもたれている事象である。それがごく普通の人々の生活の歴史を明らかにする重要な資料であることを柳田國男は多くの著作を通して人々に示した。近年では民俗学の存在を否定する人はほとんどいなくなった。しかし、その民俗学が明らかにする歴史に懐疑的な人は多い。民俗学の説く歴史は信用できない、怪しいという。

民俗学の明らかにする歴史　たしかに、過去の特定の時代を直

接明らかにすることはできないのが民俗であるが、しかし過去からの連続した時間を把握することができる。その民俗が形成されてから現在まで行われてきたという連続性を最大限に使うことで、過去の歴史を明らかにできる。近年の歴史研究も、従来のような変化とか変革という事件の連続による変化にばかり注目するのではなく、一見ほとんど変わらないように見えるゆっくりした変化や持続する時間にも関心が向けられるようになってきている。いわゆる長期波動としての歴史である。それはまさに柳田國男が開拓してきた民俗学の研究課題でもあった。そのため、にわかに民俗学に対する期待も高まってきたと言える。それが、市史のような地域の歴史を記述する計画のなかにも必ずのように民俗編という一冊が置かれることになった理由でもある。

民俗学は、地域の人々が毎日ごく普通に行っていることがらを把握して、その内容から長期波動としての歴史を明らかにしようとする。民俗学は昔から変わらないものを研究するという印象があり、また物事の起源を明らかにするという理解も広く行われている。しかし、それは間違いである。民俗学は生活の変化の様相を、現在から遡って明らかにしようとする研究である。しかも、人々が行為として行うことで過去から伝えられてきたものであるから、その行為に伴う人々の感覚や感情、意識、いわゆる喜怒哀楽も把握できる。これも近年の歴史研究が重視しだしたことである。あることがらを行うことが人々にどのような喜びや感動を与え、また別のことはどのような悲しみのうちに行われたのかを、民俗調査を通して把握し、歴史的理解につなげようとする。

裾野市史と民俗　裾野市史のなかに民俗編という一冊が置かれたのは大変意義深いことと言えよう。民俗編は、市域の民俗の全体像を把握し、そのなかから地域の生活文化の歴史を描こうとする。しかし、民俗は漠然と市域で行われているのではない。必ず特定の地域社会を単位にして行われている。各地区の祭礼を見ればそのことはたちどころに理解できるであろう。地域の組織が祭礼や行事を維持存続させているのである。多くの民俗がそのような伝承の母体をもっている。したがって、民俗を把握するためには先ず伝承母体単位に調査がなされねばならない。その地域のなかで民俗が相互に関連して行われ、その全体が地域の人々の生活を維持してきたのである。

そこで、市史編さんの計画の中で、民俗編は先ず市域の各地区を単位に民俗調査を実施して、その地区のなかで民俗を位置づけることを計画した。その第一年度の調査を葛山で行った。そして、二年目には深良、三年目は茶畑という順序で、市域の各地区毎に詳細な民俗調査を行うことにした。この報告書は、その第一冊目のものである。

第二節　葛山の歴史的特徴と集落

葛山氏の地　すでに鎌倉時代から存在が確認でき、戦国時代には今川・武田・北条の三つ巴の戦いのなかで活躍した有力な武士として葛山氏の名前はよく知られている。その葛山氏が居を構えていた所が葛山である。現在も、その葛山氏の築造した城の跡が山の上にあり、また居館跡とされる土塁に囲まれた大きな館跡がある。そ

の配置は戦国時代の一つの典型的な姿を示している。しかし、葛山氏のこの地での生活や地域支配の様相はかならずしもはっきりせず、またその最後も明らかではない点が多々ある。したがって、葛山氏は有名であるが、その居住した葛山との関係や葛山での生活の様相は殆ど知られていない。したがって、今回の民俗調査においても、戦国時代以前の葛山の様相が現在の民俗とどのように関係しているかを把握することは困難であった。葛山氏と葛山との関係についての新しい伝承や資料は何も無かったと言ってよい。ただ、この城跡や居館跡がある地域を含んだ谷筋がホンムラと呼ばれているように、葛山の中心地区である。このことは恐らく、その歴史が地域の認識に表現されているものであろう。

広大な葛山村　近世に入り、葛山は一つの支配単位としての村として把握された。葛山村である。裾野市域のどこでもそうであり、それは東日本では決して珍しいことではないが、近世の支配単位としての村（藩制村）は広大であり、その内部にはいくつもの集落が含まれているのが通例である。近畿地方や北陸地方では、近世の支配単位としての村は大きなただ一つの集落となっているのが普通であるのに比較して、東日本の特色とも言える。葛山村も内部にいくつもの集落があった。それは、近世の村を継承した大字葛山の広さとその内部での農家が集合している場所がいくつもあり、地域的にまとまっていないように見られることで判明する。その家々の集合した集落は、やはり生活上重要な存在であり、今日ではそれを単位にして生活も行政も行われている。ムラはこの五つの地区である。これを地元ではモヨリ（最寄）と言い、また現在は区と呼んでいる。上城、中村、下条、中里、田場沢の五つである。

葛山村の石高は近世を通して四〇〇石余りであり、それほどの変化は見られない。村の範囲が広いにもかかわらず、村高はそれほど大きくない。水田よりも畑が多かったことが石高の低さに示されているのであろう。支配領主は一八世紀初頭から旗本の松平氏領であった。近世としての葛山には一つの村としての村役人が置かれていた。名主以下の役職者がいた。しかし、それらの村役人が直接個別の家々まで掌握していたかどうかははっきりしない。

明治の町村制の施行に際しての大幅な町村合併によって、葛山村は富岡村大字葛山となった。近年までは、比較的農村としての景観が保たれてきた所であるが、東名高速道路の開通によって、その東部の景観が大きく変わると共に、しだいに東部から新しい住宅が増えつつある。

第三節　民俗の特色

豊富な民俗　葛山での民俗調査は、以下の各章で報告したように、豊富な民俗がこの地に伝承されていることを明らかにできた。歴史の古い村落であることが、民俗の豊かさに関係していると言ってよいであろう。その豊富な民俗のなかから、民俗編の記述に大いに貢献するであろう注目すべき民俗を紹介しておこう。それらは、裾野市域の他の地区においてはどのようになっているのかを、今後の調査で把握していかなければならない。その点で、初年度の葛山調査は、今後の民俗編編さんに大きな指針を与えてくれたと言えよう。

葛山は西側に愛鷹山を抱き、東側は黄瀬川が形成した平地に続いている。全体としては、西から東へと傾斜している土地であり、逆に見れば、東側から西の山の中に大きな谷筋が入っていて、その谷底部を水田や畑に開発し、集落を形成してきた所である。その各集落が伝統的にはモヨリ（最寄）と呼ばれ、現在は区という組織として、家々の生活・生産さらに行政において基本的な単位となっていることが、今回の調査を通じて明らかになった。生活・生産の単位としてのムラは大字葛山ではなく、このモヨリ（区）である。しかも、各モヨリ（区）が完全に別の地域組織となって独立しているのではなく、その連合としての葛山もはっきりと存在している。それは最も明確には氏神浅間神社に示されている。葛山は浅間神社の氏子として一つの社会を形成している。しかし、その祭祀運営の方式を見ると、毎年の祭礼等は結局五つのモヨリ（区）が一年交替で順番に担当しており、葛山が五地区の連合であることを示している。民俗が、この五つのモヨリ（区）を単位に伝承されていることも、民俗を豊かにしている理由の一つと言えよう。

愛鷹山と葛山　愛鷹山と葛山の関係は当然ながら深い。民俗としては先ず愛鷹山の利用が注目されよう。近隣の四か村と一緒になって愛鷹山を入会地として利用し、生活や生産に必要なものを入手してきた。この入会は近世に確定したものと思われるが、四か村とは近世の支配単位としての村が四つということである。葛山としてこの入会には参加しているのである。その利用方法について具体的に報告することができた。実に様々な形で愛鷹山を利用してきたことが分かる。葛山は愛鷹山の懐に抱かれ、愛鷹山の恩恵を受けてきた。

そして、愛鷹山と葛山の関係はそれだけではないことに注目しなければならない。たとえば雨乞いは愛鷹山の、地元の人のいうタケのカミナリサンに対して行われたのである。葛山は水が乏しい。これは殊に関東大震災によって水枯れが起こって大きくなったものとされるが、水の確保のためにさまざまな工夫努力がされてきた。雨乞いの切実さもそれに関連する。

注目すべき家をめぐる民俗　現在、葛山の大部分の家は新しい。古くからの茅葺きの家は見られない。しかし、今回の調査を通して、この地域の伝統的な農家建築の様相を把握し記録することができた。そして、ヤウツリの儀礼は大いに注目される民俗である。ヤウツリにはセンダツ（先達）が設定されて、その人は笠を被り、蓑を着て、小豆粥を萱の箸で柱に付けてまわる。このときの歌が現在でも伝承されている。これは火伏せの儀礼だというが、あるいはそれ以上に深い意味がある可能性も大きい。蓑と笠を着けるというのは、変身の姿であり、ある状態から別の状態に移るための一種の装置である。ヤウツリと蓑笠の関係もその一つと理解できないだろうか。

葛山を歩いていると、田圃や畑のなかに石塔や墓石、あるいは自然の石が積まれている所を随所に見る。また、それぞれの屋敷内にも墓石があったりする。現在は共同墓地があるが、かつては各家の先祖は戸別にそれぞれの屋敷や耕地でまつられていたことが分かる。その先祖祭祀に関連するものとして、葬儀に際して作られて配られる紙の位牌が大いに注目される民俗である。これは葛山ではキャクボトケ（客仏）と呼ばれ、親の戒名を書いたものを子供全員が貰い、それを自分の家に持ちかえって自分の家の仏壇でまつる。

特に七日ごとの念仏は兄弟姉妹が会場を順次担当するようにしてキャクボトケに対して行われる。これは近年民俗学で注目を集めている「位牌分け」である。死者＝先祖を跡継ぎの一人だけが独占的に祀るのではなく、子供がそれぞれ個別に祀る方式であり、分けて貰った位牌は女子の場合は嫁ぎ先に貰って帰ってきて、そこの仏壇で祀るのである。その家の代々の主人夫婦の位牌に加えて、結婚して入ってきた女性（あるいは聟）の両親の位牌も祀られるところに特色がある。葛山で、これがキャクボトケと呼ばれる所以である。このような方式は北関東の群馬から長野、そして山梨にかけて広く行われていることが近年報告されているが、同様の祭祀方式が裾野市域でも行われてきたことは注目される。今後、市域の他の村落においてどのような方式で行われているか注意して調査を進める必要があろう。

葬送儀礼のなかでは、ハマオリ（浜降り）の民俗が注目されよう。ハマオリは裾野市域だけでなく、駿東地方に広く見られるものであるが、葛山では埋葬後にモヨリ近くの川原に位牌を据えて行うハマオリと三十五日に沼津の千本浜まで行って行うものとの二段階をとっていた。現在も川原では位牌を据えてハマオリをしており、人々はその位牌を拝み、終われば位牌を倒して放置する。死者に対する観念を知る手掛かりを与えてくれる重要な民俗である。

近年では設けられることもほとんどなくなったが、オヤブン・コブンの関係も注目される。結婚に際して仲人とは別にカネオヤが設定され、そのカネオヤをオヤブンとしてその後つきあいを続けるものである。駿東郡から伊豆にかけては親分・子分の関係を設ける地帯として従来から知られているが、その具体的様相を裾野市域で把握することができる。ただ、急速に不明になりつつあるので、市域内での調査は急を要すると言えよう。

さまざまな神々　葛山の辻や広場のような所には立派な道祖神が祀られている。そして正月にはその近くでサイトヤキが行われている。子供たちの楽しみな行事である。サイトヤキをドンドヤキとも言うが、この表現は南のドンドヤキ、北のサイトヤキであり、葛山では両者が混在して使用されている。これは民俗の地域差を把握する手掛かりになるもので、今後も注意していく必要のあるものである。

各モヨリには自分たちを守ってくれる神社がある。したがって、葛山には小さな神社が各所にあり、それぞれ別々に祭が行われている。これらと各家が屋敷内でまつる神様とを合わせれば、葛山には多くの神々がいることになり、その全体が人々の生活を守ってきたと言えよう。民俗が豊富に伝承されていると言ったことはこのことに深く関連している。

今回葛山の皆様の絶大なご協力によって民俗調査を実施できたことは、今後の裾野市史民俗編の編集にとって決定的と言える程重要な役割を果たすことになった。これから毎年行う民俗調査の内容について基本的な指針を与えてくれた。これからの民俗調査は、葛山で得た民俗が他の地区ではどのように行われ、どれほど相違があるか注目しつつ行われることになろう。そして、そのなかでまた逆に葛山の特色も浮かび上がってくるものと思われる。その位置づけは本編の民俗編の記述で果たしたい。

（福田アジオ）

第一章　生活環境の民俗

第一節　開発と土地利用

(一)　家の立地

葛山は、上城（カミンジョウ）・中村（ナカムラ）・下条（シモンジョウ）・中里（ナカザト）・田場沢（タバサワ）の五つの集落に分かれている。そのうち、上城は大久保川に沿ったホラに家・屋敷を形成し、田場沢は田場沢川に沿ったホラに家・屋敷を形成している。中村・下条・中里は佐野川・大久保川や仙年寺前の水田から見て、やや高くなった台地状のところに家・屋敷を形成している。

カワバタ（川端）の利用と家の立地　田場沢では、家の立地に関して次のような話が聞かれた。田場沢では、家が田場沢川の端に造ってある。今では、河川改修も行われ、田場沢川を利用することはないが、昔はカワバタ（川端）といって川の水で洗い物をしたので、田場沢川に沿って家を造った。カワバタでは野菜を洗ったり、洗濯をしていた。それで、川はうんと清潔にしていた。飲み水は、一軒一軒井戸を持っていたので、井戸の水を使っていた。田場沢では、昔は、田場沢川や佐野川に魚がいたが、今では畑に消毒をするとか家で洗剤や石鹸を使い、下水を川に流すので川に魚がいなくなっている（川の利用に関しては、後述）。

(二)　土壌と畑

葛山では、表土の下はほとんど赤土であり、井戸などを掘ると赤土の間にときどき黒い土の層があるという。また、ところどころ地表にラバックスといわれる風化した礫が露出しているところもある。

赤土　このあたりの赤土は愛鷹山の火山灰で、黒い土は富士山の火山灰である。富士山の宝永の噴火のときには、葛山には砂が降っただけで溶岩は入らなかったという。土のいちばん上は表土で、その下にアカマサ（「マサ」、あるいは「マサ土」と呼ぶ人もいる）がある。アカマサは、少し硬い赤土でだいたい深さ一メートルくらいまであり、食物の根もたいていここで止まっている。アカマサの下はずっと赤土が続いている。

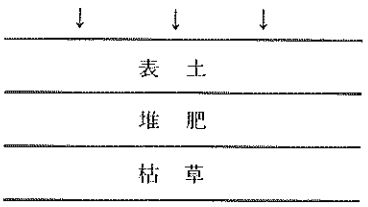
縄文式土器　田場沢の中村孝一さん（明治四一年生）によると、サツマ（サツマイモ）を貯蔵するとき、土を掘ってアカマサを抜くと、アカマサの下から縄文式土器や石器が出てくることがあった。中村さんは青年時分、小学校の先生が縄文式土器を好きで教えられて土器や石器に興味を持つようになった。田場沢では、畑やカイコン（開墾）のところから土器や石器が出ることが多い。中村さんが家の裏山をカイコンしたときも土器が出た（カイコンと山の利用に関しては、後述）。春の三月になって畑や田んぼを見て回ると、地表に土器や石器が出ていることもよくある。

赤土とサツマイモ　赤土のところは、サツマの味がよいと言われていた。現在、千福ニュータウンのところを葛山ではミナミヤマ（南山）と呼んでいて、このミナミヤマは赤土で、ここのサツマの

味はよかった。富士山の黒い土のところをカイコンして作ったサツマよりはるかに味がよかった。ミナミヤマで穫れたサツマは「三島甘藷」として売りに出されていて、黒い土のところから穫れたサツマはデンプン用として出していた。デンプンは、農協でデンプン工場を持っていたので農協に出していた。

サツマ（サツマイモ）・小麦　現在、芝の畑になっているところは、以前はサツマ・小麦かオカボ（陸稲）の畑であった。現在では、サツマ・小麦やオカボを作っている家はほとんどない。

サツマは、五月の天候の良いときに小麦の間に挿していた。サツマを挿すときには、五月で天候が良いとサツマが枯れるので、小麦の間にサツマを挿すと日陰になって枯れなくて済むので、それで小麦の間に挿していた（サツマの挿し方については〈図Ⅰ－1〉土とサツマイモ、参照）。サツマは秋までにとってしまい、その後には小麦を播き、次の年のサツマを挿した後小麦をとっていた。



図Ⅰ－1　土とサツマイモ

サツマとオカボは一年ごとに交替にしてもよかった。サツマの蔓が残っていると、それが次の年の堆肥になった。

山は、雑木や植林であったが、陽当たりの良い高いところにはサツマが植えてあることが多かった。

なお、サツマやオカボに関して、田場沢の中野鶴吉さん（明治三五年生）から次のような話も聞かれた。中野さんが小学校を卒業した時分には、田んぼはあったが少ないので、トウモロコシを作り、養蚕をやっていた。そのころは、カイコンはあったが少ししかなかった。サツマやオカボをたくさん作るようになったのは、その後である。

土と芝　芝は、赤土と黒い土とで生育にあまり違いはない。

兼業農家と芝　現在、葛山には芝が非常に多くなっているが、葛山で芝をやるようになったのは、せいぜいここ二〇年くらいである。このあたりは芝の適地で兼業が楽なので、芝が普及し、サツマ・小麦を作る人がいなくなった。また、米は減反や転作の助成金があるが、芝は政府や農協と関係はないので助成金はないが、芝を作るのは米を作って政府に売るよりはよい。専業農家で家で仕事をしている人は芝を作らず、勤めに出ている兼業農家には芝を作る人が多いようである。

ここの芝はもともと大野原にあったノシバ（野芝）を持ってきて植えている。最近、コウライシバ（高麗芝）もあるが、ノシバがタント（非常に）エライ（たくさんである）。

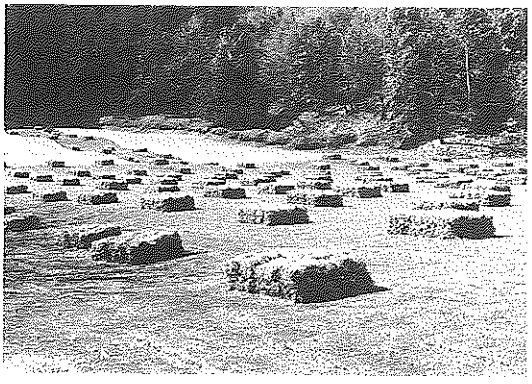
ここらの芝は、大野原から採ってきているので、気候的にも合っている。大野原の芝を九州へ送っていたこともある。大野原の芝は、以前は業者が大野原から持って行ったが、今では演習場で荒らされているため芝を持って行くことが出来なくなり、裾野の農家に業者がお願いするようになった。農家の方でも、とても農家じゃあ食っていけない、兼業農家の方が有利である、ということで芝に転換していったと説明する人もいる。

たとえば、下条の岩佐重雄さん（大正八年生）の家では芝を

やるようになったのはほかの家より遅れて一五年くらい前からである。養豚などをやり、専業農家の時期が長かったので、芝をやるのが遅れた。現在、重雄さんの息子さんが会計事務所に勤めているので、百姓はあまりしなくなっている。田んぼがあったときは田植えは息子さんも手伝ったが、今では田んぼもガソリンスタンドへ貸しているので、全部が芝だけになり、息子さんが手伝うことはなく、重雄さん自身が全部芝の世話をしている。

芝を植えにかかるのは、三、四月から六月の梅雨時分までである。たまに、秋植えもある。業者が植え替える。業者はいろいろな業者が入っていて、家によって違う。農協とは関係ない。どの家でも業者と契約していて、業者が芝を植えるときと刈るとき、中間に二回くらい葉刈り機を持ってきて刈ってくれる。芝の管理だけを葛山の農家がやっている。芝をやっている家では兼業農家が多く、勤めに出ているので、カタッテマ（片手間）にやっていて、日曜日だけで芝が出来る。芝の管理は除草剤（農薬）を撒くくらいである。草取りの手間があるので、除草剤を撒いている。

岩佐重雄さんの家では、除草剤は以前はＰＣＰという農薬を使っていた。ＰＣＰは、芝を傷めないし綺麗に出来るしでよかったが、使用禁止になったため、今では使っていない。現在では、それぞれの農家によって芝に使う農薬は違うが、岩佐さんの家ではシマジンという農薬を使っている。シマジンは、雑草の発芽を抑制する農薬で、四〇日間くらいきくといわれている。ところが、シマジンは芝の発芽も抑制するので出来るだけ撒かないようにしている。シマジンは一年に一回、撒く人で一年に二、三回撒いている。岩佐さんの芝の畑では、害虫として黄金虫が湧き芝の根を食べるが、鳥が群れになってきて黄金虫を食べてくれるのでちょうどよい。雑草を抜くときには、鋸のような抜く道具があるので、それで根元から抜いている。

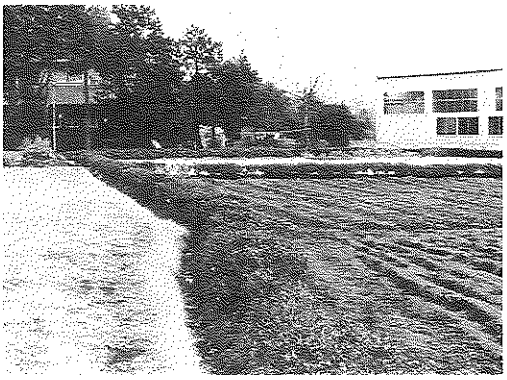


出荷前の芝（田場沢）

芝の出荷は、植えて一年たった三月くらいからで長方形に切って、業者が持って行く。長方形に切る大きさは、一坪を二〇枚に切り一束にする。三月ころだと時期待ちで新芽がふかないので、長方形に切った畑に積んでおくこともある。

なお、芝に関しては、出荷で芝を移植するとき土を持っていかれるということで、嫌がる年寄りもいるという。ただし、若いシュウ（衆）は芝が兼業によいのでそれを気にせずやっているという。

桑　戦後の昭和二五年ごろまでにお蚕を飼っている家があった。そのころ、煙草がここに来たので、桑から煙草に切り替えた。お蚕は、煙草のニコチンが匂うとだめなので、桑から煙草に切り替えた、と説明する人もいる。



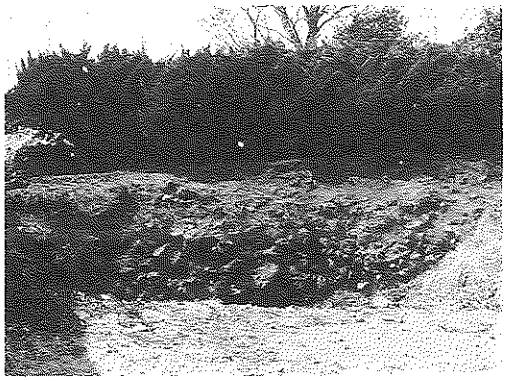
畑のクロのお茶（下条）

お茶　お茶は、畑のクロ（隅の意味）に植えてあるくらいで、自分のうちの分だけを採むくらいであった。畑のクロのお茶は、ちょうど畑と畑の境に植えてあることが多い。

ラバックスと道造り

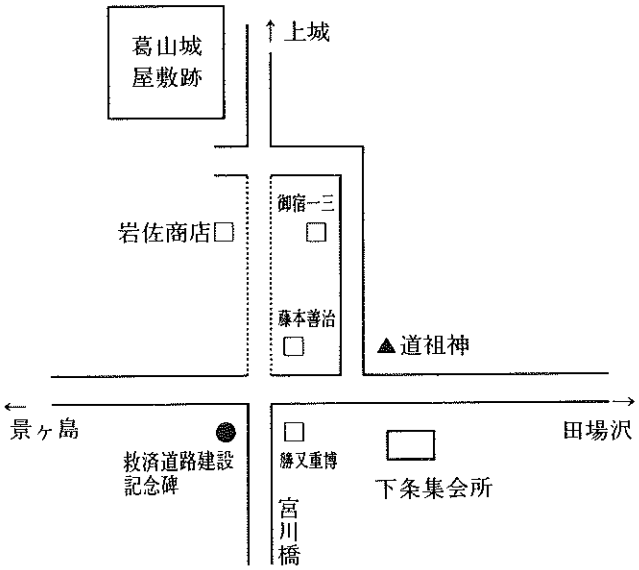
井戸などを掘っていくと、赤土や黒い土のいちばん下に、ここらあたりでラバックスという石が風化した礫がある。ときには、ラバックスが地表まで出ているところもある。そこは、お宮でもないのに木がただ生えているところが多い。

このラバックスは道造りに使われることがあった。



ラバックス（下条）

昭和八、九年ころ、下条に恐慌の「救済道路」を造るときに、下条の岩佐重雄さん（大正八年生）の家の畑にラバックスが露出しているところがあり、そこのラバックスを出して道に埋めて道路を造ったことがあった。岩佐商店の前の道路がそのとき造ったものである（〈図Ⅰ－2〉「救済道路」関係図）。



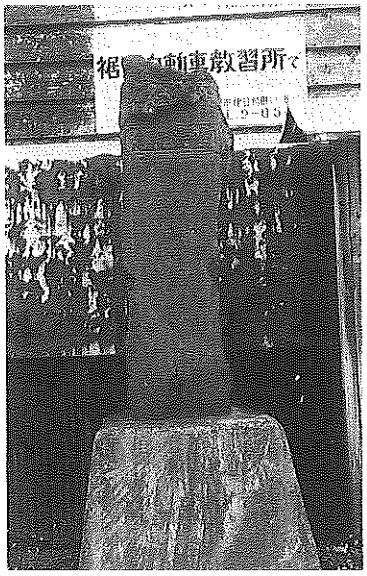
※……の部分が、「救済道路」でラバックスを埋めて作った部分。

図Ⅰ－2　「救済道路」関係図

この「救済道路」に関しては、下条の勝又重博家の前に「救済道路建設記念碑（年不詳）」（縦一三五センチメートル×横四〇センチメートル）があるので、その銘文を以下に記載する。

維時経済機構大変動政府為農村／匡救土木事業施行偶自宮川橋至／中尾路線指定昭和七年十二月挙／起工式翌年三月竣工延長三千九／百余米石積工五百二十面坪砂利／百九十余坪立坪人夫凡五十人総工／費九千円設計至城跡線有屈曲相／謀改直線非常時及道路開修為記／念建之

（以下、寄付者芳名二五名略、葛山道路委員二一名略、村長名略。／による区切りは記念碑における改行部分。）



救済道路建設記念碑（下条）

戦前から戦中くらいまで、「早起き会」という青年の奉仕事業があった。下条から宮川橋を渡ったところにラバックスが地表に出ているところがあり、この「早起き会」では、ここのラバックスを道路に入れて道路を平らにしていた。馬力が通ると、車のところが低くなり水が溜まるので、そこにラバックスを入れていた。戦後は、舗装が出来たのでそういうことはなくなった。

大野原の土　大野原へ行くと、葛山よりも砂が多い。表土は黒い土で、三〇センチメートルも掘ると、赤土と細かい砂が多くなる。そして、それをまた掘ると黒い土が出てくる。

㈢　水と田

葛山には、水田は少ない。現在、葛山で水田がまとまってあるのは主に下条と仙年寺の前くらいである。また、以前は中里でも、現在の清月の東側辺りに田があるくらいであった。

全体的に田んぼの面積が狭いので、田んぼを作っている家のほとんどは一反か二反くらいしか持っていない。多い家でも三反くらいで、自分の家で食べる分くらいである。作柄もあまり良くはなく、一反につき七俵くらいしか収穫できない。

ナカダ（中田）　仙年寺の前の田んぼは、ナカダ（中田）と呼ばれている。ここの田を持っているのは、ホンムラ（本村）の七軒の家である。

ナカダの水は、窪川に設けられたヨコセギ（横堰）から水を取っている。ヨコセギは、中村四組の家のすぐ東側にある堰のことである。水が不足するときには、カケバン（かけ番）で時間を決めて水を取っている。

ハデヤー（どぶ田）　ナカダのうち仙年寺に近い方の田んぼはハデヤー（どぶ田）であった。そのままで農作業をすると腰まで浸かってしまうので、桑の木を沈めて、足をその上に乗せながら農作業をしたものであった。今では、このようなことはなくなったが、昭和三〇年代まではそのような状態であった。

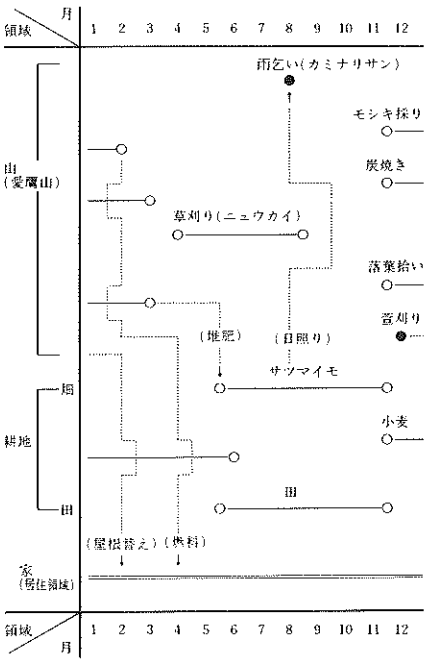
以前は、ドブダは地震のときには田んぼが揺れたとか、稲刈りのときに刈った稲を田んぼに置いておけなかったと言われている。

第二節　富士・愛鷹山麓と生活

(一)　愛鷹山

葛山の人々は、愛鷹山をその生活のために有効に利用してきた。

愛鷹山のシカソンキョウユニュウカイ（四か村共有入会）からは堆肥を作るための草を刈り、落ち葉を拾い、また、そこに生えているザツボク（雑木）を利用して炭焼きを行った。同じく愛鷹山にある沼津町ほか十か村の愛鷹山組合地からは屋根を葺くための萱を刈っていた。燃料にするためのモシキ（燃し木）もニュウカイのザツボクや個人持ちの山から拾ってきていた。このほか、愛鷹山ではヤッパタ（焼畑）やカイコン（開墾）が行われ、畑が開かれているところもあった（〈図Ⅰ－3〉参照。）



図Ⅰ－3　葛山の生活環境の模式図

現在では、ニュウカイは東急に売られている。また、ほとんどの畑が芝に転換しているため、サツマをはじめとする畑作物のために、ニュウカイから草を刈り落ち葉を拾い堆肥を作ることはほとんどなくなり、炭焼きをする人もいない。また、現在葛山の家屋の屋根はほとんどが瓦屋根であり、萱場から萱を刈り屋根を萱で葺くことはなくなっている。かつて、カイコンやヤッパタを行った山も現在では多くのところが植林をされて、山で作物を作ることは少なくなっている。燃料としてプロパンガスや石油が普及したためであろうか、モシキを山から取ってくるということも少なくなっている。

シカソンキョウユニュウカイ（四か村共有入会）　葛山からは、愛鷹山はほぼ西方にあたる。愛鷹山には、金沢・上ケ田・御宿・葛山のシカソンキョウユニュウカイがあり、ここに昔からの草刈り場があった。ニュウカイは、約七五町歩あった。現在では、ニュウカイの草刈り場のところは東急に売ってしまっている。

雨乞いをするためのタケノカミナリサン（岳の雷さん）も愛鷹山にあった（後述）。

草刈り場　ニュウカイの草刈り場へは下条からは馬力が行けなかったが、仙年寺の裏の方を通って行く道があり、田場沢からは馬力が上っていける道があった。ニュウカイへ行く道は春・夏の二回作っていた。ニュウカイは田場沢からみて、山のオキ（沖）の方にあった。それで、ニュウカイから草を刈るのは田場沢のシュウ（衆）が多く、ワキ（脇）のシュウ（衆）はあまりニュウカイには草を刈

りに来ず、大野原の演習場へ行く人が多かった。ニュウカイには草刈り場になっているところと、屋根葺きのための萱場になっているところと、ザツボク（雑木）のところがあった。いいところはカイコンをしていた。

クサカリハジメ（草刈り始め）　春になると、草刈り場のノヤキ（野焼き）をやった。七月一日がクサカリハジメ（草刈り始め）で、八月いっぱいまで草を刈っていた。たいてい、盆前には草刈りは終わっていた。クサカリハジメのときには、夜が明けないイトに（うちに）行って、六把刈ってくればワカイシュウはあとは遊んでいた。草は、馬のコニダ（小荷駄）にした。馬に六把つけてそれが一駄になっていて、クサカリハジメのときには一駄刈ってくればよかった。

なお、草刈りの決まりとして七月一日をクサカリハジメであると覚えている人は少なく、七月から八月にかけて草を刈っていたという人が多かった。

この辺りでは、草刈りはワカイシュウ（若い衆）が、朝、毎日の日課として草を刈ってきていた。草は、その人の都合でモノビ（祭日）などには朝早く刈りに行ったり、前の晩にツキヨザシで行くこともあった。

馬力　馬力を使うようになったのは、戦後の昭和二〇年ごろからで、それまではコニダで出していた。馬力を使うと、最低一二把くらいは積めた。馬力は楽で、たくさん積めたので、馬力を使うようになってからはずっと馬力で行っていた。

終戦後一〇年くらいまでは、馬を飼っていた。馬をよした後、牛を飼うところもあった。牛は、朝鮮牛でおとなしいのでオンナシュウにも使える牛であった。牛を飼っても、馬と同じように馬力を引かせていた。牛も、たいてい一〇年かそこらでやめた。今では、車や耕運機を使っている。

堆肥　刈ってきた草は、堆肥にした。草を刈ってくると、草を厩に入れて馬の糞や小便を染みさせて、一か月くらいで出して、堆肥舎に入れた。厩の中では、馬が糞尿をするところは決まっているので、入れた草を何度も散らしながら馬も動けるようにして、馬の糞尿と草が混ざるようにした。堆肥舎に移す前に、一度、草を外に積んで雨をかけて水分を持たせて腐らせ、堆肥舎に移す人もいた。

堆肥舎では、何度もキリカエシ（切りかえし、キッカエシと発音する人もいる）をした。堆肥舎に入れると、草が乾くのでこれに人糞をかけて、何度もキリカエシをした。マンノウガ（万能鍬）でキリカエシをした。フォークが出来てからは、フォークでキリカエシをした。

人糞は、葛山では自分のうちのものだけでよそに取りにいくということはなかった。昔は、外便所から人糞を汲むとそれに水を入れて薄めてから草にかけていた。旧富岡村では御宿の人が富岡第一小学校の人糞を落札して使っていたが、葛山の人が落札することはなかった。しかし、しまいには、回虫が湧くとかいって人糞を使わない人も多くなった。

七月くらいに刈った草は、早くには八月ごろには大根のコエ（肥料）に使うこともできていた。

落葉　一二月から三月までは、落葉をかいて堆肥にしていた。冬の落葉から作った堆肥は、窒素が多いのでいちばんよかった。落葉は、ニュウカイのザツボクリン（雑木林）や自分の家のザツボク

リンから取ってきていた。自分の家のザツボクリンがない家では、少しお金を払って他人の家のザツボクリンから取ってきていた。

ニュウカイから落ち葉を集めるときには、暗いうちから提灯を持ってニュウカイに行き場所を陣どって、朝の合図でコマンザライ（熊手）で集めていた。ニュウカイのザツボクリンは、愛鷹山の中腹のタケノカミナリサンの辺りで、ここは植林をしないでザツボクリンになっていた。

落ち葉はコマンザライで集めると、ススキや藁の間に落ち葉を組んで一把、二把にした。萱で編んだ炭俵のようなものを持って行き、それに入れる人もいた。

落ち葉は、草と同じように厩に入れて、馬の糞尿で湿らせて、それから堆肥舎に出してキリカエシをして人糞を入れて堆肥にしていた。熱があるので、これがいちばんよい堆肥になり、サツマに入れるとよかった。今ではほとんどサツマを作っている人はいなくなっているが、サツマを作るときには今でも落ち葉で作った堆肥を使っている。

笹　山へ行って笹を刈ってきて、これを燃やして灰にして肥料の一部にしていた人もある。笹は、山にあるものを自由に刈ってきてよかった。

馬・牛の骨（肥料）　現在、雇用促進住宅のところが、昔は林になっていてここが死んだ馬や牛を埋める場所であった。終戦後まもないころ、肥料がなくて、ここから、埋めた馬や牛の骨を掘って、粉末にして肥料にしていたことがあった。

炭焼き　山ではニュウカイ（入会）や組合地（後述）に生えているザツボクを使って、炭焼きも行われていた。

田場沢の中村久雄さん（明治三七年生）によれば、昔はこのあたりは、一一月から四月くらいまでは、竹を切ってパイスケの材料にするか炭を焼くしか商売がなかった。炭焼きは、ケヤキ（欅）・カシ（樫）・カンバ（樺）・クヌギ（櫟）・ナラ（楢）・クリ（栗）などのザツボクを使った。クヌギは一〇年目くらい、ナラ・クリは二〇年目くらいのものから切ることが出来た。

炭焼きの窯は、三、四人でひとつ持っていて、山の中の窯で炭を焼いた。窯は、一度作ると一〇年くらいはもった。窯の横には、泊まることの出来るように小屋はあったが、あまり泊まることはなかった。夕方になると、煙の按配を見て、それで家に帰って来ていた。炭が出来ると、個人分けをして売っていた。

中村さんは、七〇歳くらいまで、一〇年くらい前までは炭焼きをやっていた。中村さんより少し年が下くらいまでの人は炭焼きをやったことがある人が多い。

パイスケ　冬の仕事として、ニュウカイとか自分の家のしの竹を切って、パイスケの材料にしていた。三〇年くらい前までは、佐野（現、裾野市佐野）にパイスケの業者があって、その業者に頼まれてうんと竹を探して歩いていた。葛山だけではなく、ワキ（脇）に出て伊豆あたりまで行き、しの竹を探しに行った。一把いくらでお金を貰っていた。

萱場　屋根を葺く萱も愛鷹山の組合地やニュウカイから刈ってきていた。

田場沢の中村久雄さんの記憶によると、屋根を萱で葺いたのは昭和三五、三六年ごろから昭和四〇年ごろまでで、それから瓦屋根になった。ニュウカイとは別に沼津町ほか十か村の愛鷹山組合の

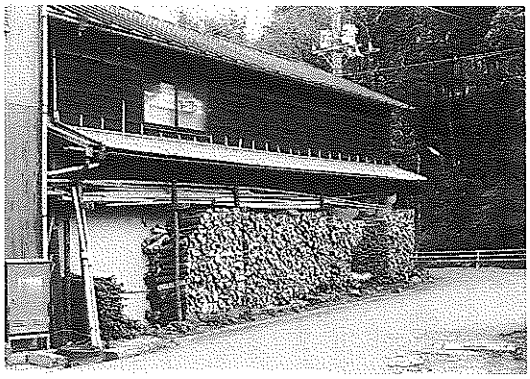
組合地に萱場があって、その萱場から刈ってきていた。組合地は、組合役場が管理していた。組合地は、もともと帝室御料林であったところを江原素六の尽力によって払い下げたものであり、「農地解放」後、各部落へ払い下げ、さらにその後個人分けにしている。

組合地には、ザツボクリン（雑木林）のところもあり、ここから薪を取ってくることもあった。また、組合地をカイコンすることもあった。

なお、屋根を葺き替える萱をニュウカイから刈ってきたという人も多かった。

モシキ（燃し木）　植林をした山からは、モシキを取ってきた。「農地解放」前は、このあたりの植林してある山は、ほとんど御宿の上湯山・中湯山・下湯山の山であり、その山から貫ってきていた。組合地やニュウカイから取ってくることもあった。

モシキはサツマをとって、麦播きが終わって畑の仕事が終わってから、サブイイト（寒いうち）にカレモシキ（枯れ燃し木）を拾いに行った。モシキは、カレモシキだからどのうちの山のものでも拾ってきてよく、山の中へモシキを拾いに行った。木の枝をとってはならないが、拾ってくるのはよかった。



モシキ（田場沢）

モシキは、馬のコニダでとりに行った。モシキは、太いのがマキ（薪）で四把で馬のコニダのひとつになった。細いのはモヤ（もや）で六把でコニダのひとつになった。馬力を使うようになってからは、馬力でモシキを出していた。馬力の行くところまで二把ずつくらいしょって来て、馬力に乗せて出していた。

カイコン（開墾）　葛山から愛鷹山に続く山では、昔は、カイコン（開墾）がエラカッタ（多かった）。カイコンのところは赤土であった。今では、昔、カイコンにしたところは植林にしてあるところが多い。

カイコンは、戦争中「増産、増産」と言われ、供出をさせられたときと、戦後「農地解放」のころ行われることが多かった。戦時中の供出のころは、供出で一反歩何俵とか決まっていて、カイコンで作ったものを出していた。余りが出ると闇をやった。御殿場線で関東の方から買いにきていた。畑のないシュウが個人持ちの山をカイコンしたり、ニュウカイの一部をカイコンしている人もいた。葛山は不在地主の多いところで、このあたりの山は御宿の上湯山・中湯山・下湯山などがほとんど持っていたが、「農地解放」のあとその土地をカイコンして作るようになった。

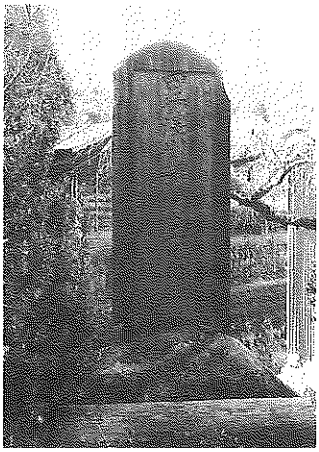
カイコンと田場沢川の氾濫　田場沢では、カイコンによる木の伐採の結果、田場沢川が氾濫したと認識されている事実があるので、それを紹介する。

田場沢では、震災（関東大震災）の後、家を造るために木を切り、その後、カイコンによる乱伐のおかげで、山に木がなくなり田場沢川に水が出て困ったことがあった。特に、カイコンのおかげで土が

昭和39年頃の田場沢川の水害（氾濫）

山から田場沢川に流れて川が浅くなり、それで、川の水が増えると水に浸かる家が出来た。田場沢の中で、田場沢川に面した下の方の家では床上浸水も起き、困って田場沢川を改修した。今では、植林をしてあるので、再び水が出なくなった。

改修は、地元選出の代議士の遠藤三郎が尽力して、建設省がやった。それでも、地元負担金も出した。この河川改修に関しては、田場沢の子ノ神橋のたもとに「改修記念碑（昭和四二年三月）」（縦二〇三センチメートル×横八四センチメートル）がある。



田場沢川改修記念碑

「改修記念碑」には、「昭和四十二年三月吉日／田場沢川防災工事竣工記念碑／元建設大臣衆議院議員遠藤三郎書」と書かれている。

ヤッパタ（焼畑）　雑木や杉・檜を伐採すると、ヤッパタ（焼畑）といって、残っている枝とか草を焼いて灰にして、そこに少し溝をつけてソバを播くとよくソバが育った。

ヤッパタでは、一年目の夏にソバを播き、一一月ごろソバをとった。タモを作ることもあった。二年目の春播きに小豆などを作った。そうすると、だんだん開墾地がよくなっていった。ヤッパタはいいところは畑になり、サツマ（サツマイモ）を作った。サツマを作ると、その後に麦を作った。オカボ（陸稲）を作った後は連作が出来ないので、次の年にはサツマを作ったりしていた。よくないところではサツマ・麦・オカボは出来ず、その後植林していた。

タモは、紙の繋ぎに使った。大根の種のような種で、出来ると朝鮮人参のような形であった。裾野の地元に仲買があったので作っていたが、三〇年くらい誰も作っていない。

カイコンは、猿や猪に荒らされることがあり、ここは作れないということでカイコンを手放すということがあった。対策がないので、カイコンのところはじり下がりに下がって植林になって行ったところもある。

植林がもっとも盛んであったのは、二〇年から三〇年くらい前のことである。現在では、下から目で見える山のほとんどは植林がされていて、以前ザツボク（雑木）であった山もほとんど植林されている。植林の半分、あるいはそれ以上は檜で、あとは杉である。

ヤッパタの出作り小屋はなかった。

(二)　富士山

葛山では、古くからの草刈り場を愛鷹山のシカソンキョウユウニュウカイに持っていたが、富士の大野原（「演習場」という言い

方をする人も多い）に草を刈りに行く人も多かった。

大野原（演習場）　中里では、愛鷹山へ行くには道が悪くて遠いので大野原に草を刈りに行くことが多かった。中里は、もともと大野原に草刈り場を持っていたが、早くに下和田にその権利を売ってあったので、草を刈りに行くときには大野原の須山の草刈り場の権利を何軒かで一緒に買って、草を刈りに行っていた。ひと場所二・三反歩くらいあり、けっこう刈りでがあった。

大野原に生えている草は、萱・芝がエラカッタ（多かった）。萱は、今のように大きくならないので刈りよかった。また、大野原へは馬力で行きやすかったので、戦後、馬力を使うようになると大野原へ行く人が増えていった。特に、戦後のドサクサのときにはどこで刈ってもよいという状態であった。当時は、供出が多くて堆肥が欲しかったので、葛山のキョウユウではなくとも割合に度胸よく刈りに行っていた。

刈った草は、愛鷹山のキョウユウから刈った草と同様に堆肥にしていた（前述）。

シドメバラ　大野原の芝にはシドメバラが入っていて、シドメバラが入っていないと、大野原の芝ではないと言われていた。最近では、シドメバラのシドメ（実）を採ってきて、焼酎漬けにして神経痛などの痛み止めの薬にしている。シドメバラを採るので、大野原では最近シドメが少なくなってきているという。

㈢　山（愛鷹山）の現在

葛山では、近年、山（愛鷹山）が荒れてきているということがあちらこちらで聞かれた。同時に、それは山から動物が下りて来て作物を荒らしていることとの関連で話されることが多い。

以下、葛山の人々によって語られる、近年の山と動物とに関する、見聞と認識を記しておきたい。人によって相違もあるので、事例別に記述する。

〈事例1〉　上城の市川さか江さん（大正二年生）・勝又つやさん（大正五年生）によると、東急団地（千福ニュータウン）が出来て、山から猿が来るようになったという。五、六匹や親子で来るときもある。モロコシ、柿、サツマ、大根の葉を食べている。

鹿も来る。鹿は新芽や杉の皮を食べるので、木が枯れることもある。鹿は、法律で禁止されていて、撃ってはいけないことになっている。

〈事例2〉　上城の市川泉さん（明治四五年生）によると、このあたりの山には鹿、猿、猪がいるという。愛鷹山は、昔は植林をしていて人がよく入っていたので、動物はあまり出なかった。しかも、大人が木の枝を切ったり、モシキを集めていたので、子供が山に入っても恐くはなかった。今は、逆に山に登る人がいないので、今の方が恐いという。

〈事例3〉　中村の瀬戸かやさん（明治四〇年生）によると、五、六年くらい前から猿が出るようになったという。最近、山が荒れて食物がなくなってから出るようになった。中村では、大久保川の南側までよく猿が出てくる。

大久保川の南側にある瀬戸敬一さんの家の裏屋敷に猿が出て、お相撲をとって遊んでいるのを見たことがある。猿は、モロコシ（トウモロコシ）やサツマを食べて荒らすので、網を張って荒らされないようにしている。

中村には、鹿、猪は出てこない。

〈事例4〉　下条の岩佐重雄さん（大正八年生）によると、下条にも最近は猿が出てくるようになった。以前は、カイコンに農産物がたくさんあったので、ここまで下がってくることはなかった。猪は、猿ほどはこちらに下りてくることはない。

最近、ハクビシンが来ることもある。イタチくらいの大きさで、川から来て、トウモロコシを荒らしている。

〈事例5〉　中里の中野茂さん（大正四年生）によると、猿や鹿は佐野川の西側までは来るが佐野川を渡って中里へ来ることはあまりないという。

〈事例6〉　田場沢の中村久雄さん（明治三七年生）によると、五、六年くらい前から猿が出るようになったという。田場沢では、道路の端に猿が来てモロコシを盗ったり、栗林を荒らしている。猿は、栗の渋もむいて食っている。

鹿も、六、七年くらい前から出るようになった。鹿は、梅の新芽を荒らしてしまう。

猪も、ここ二、三年のイトニ（うちに）、このあたりで六、七頭捕まった。猪も、以前は人家のあるほうへは来なかったが、山を東急に売って山が荒れたため山に食べるものが無くなったので、下りてくるようになった。

〈事例7〉　田場沢の中村孝一さん（明治四一年生）によると、田場沢では、近年猿、鹿が出るようになったという。鹿は、田場沢のゲートボール場や中村孝一さんの家のあたりまで出てくる。猿の一群が来たときには、サツマが一反歩くらい駄目になったこともある。

〈事例8〉　田場沢の中野鶴吉さん（明治三五年生）によると、ニュウカイのところが現在東急に売ってあるため、植林をしたまま手入れがされていない。それで、山が荒れて、猿、鹿、シシ（猪）が田場沢の家屋敷のあたりまで出てくるようになった。シシは撃つことが出来るが、猿・鹿は保護動物なので撃つことが出来なくて困っている。猿は、椎茸を食べて荒らすことがある。

第三節　水と生活

葛山は、全体的に普段の生活用水に不便なところであった。特に、関東大震災以後は田場沢川、佐野川、大久保川の水が枯れるなどしたため、常に生活用水の確保に心を砕いてきた。

そのため、葛山では大きく分けて、①大久保川、佐野川、田場沢川のカワバタ（川端）、②井戸、③水源、の三種の方法によって、生活用水の確保に努めてきた。

(一)　カワバタと井戸

カワバタ（川端）　生活用水として、川の水が利用されていた。昔の人は、「一寸（いっすん）下がれば、水の神様が清める」と信じていて、上流で水を使っていても気にせず、川の水を使っていた。

中村では、昔は大久保川の水がきれいだったので、大久保川のカワバタで洗濯をしたり、お風呂の水を汲んだりしていた。川へ障子を洗いに行くこともあった。今では、下水の水が川に入っているので、川の水は使わず、水道の水を使っている。田場沢では、田場沢

川のカワバタで洗濯をしたり、野菜を洗っていた。現在では、田場沢川に畑の消毒(農薬)や下水が入っているので、使うことはない。

井戸　上城・中村・田場沢では、たいていどの家にも一軒にひとつ井戸があり、家を建つと必ず井戸を掘った。インキョ(隠居)・オオヤ(大家＝本家)の場合は、インキョがオオヤの井戸を使うこともあった。

たとえば、田場沢の中村孝一さん(明治四一年生)の家は隣のオオヤからのインキョなので、隣のオオヤの井戸を共同で使っていた。普通は、井戸の水を使い、洗濯は田場沢川に行っていた。風呂の水は、井戸から釣瓶で上げていた。

上城では、上城通りの筋は井戸が浅くて井戸の水を杓で汲めるくらいであった。これに対して、大久保川の筋の方は深く掘らないと水が出なかった。井戸は、戌亥の井戸がよいと言われている。

中村の瀬戸かやさん(明治四〇年生)の家にも井戸があった。井戸には、釣瓶がついていて、それを振って水を汲んでいた。イドサライ(井戸浚い)をすることもあった。イドサライの日は決まっていないので、自分のうちの都合で井戸の中に入ってイドガエ(井戸替え)をした。ほかの家に手伝ってもらうことはなかった。瀬戸さんの家では、井戸が浅くていい水が出たので、イドガエも楽だった。井戸には、水神さんを祀ってあるが特に祀る日はない。

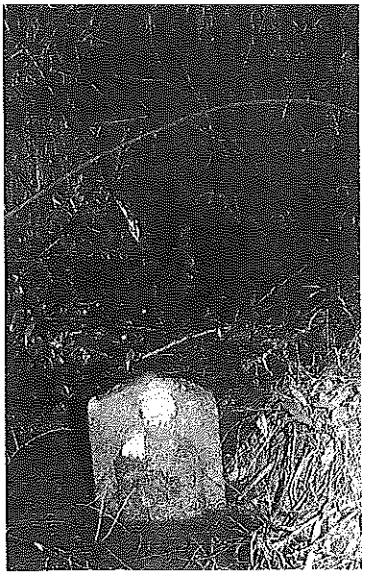
(二)　水　源

水源　下条の岩佐重雄さんの家の上の道を山の方へ入って行ったところに湧き水があった。下条の家の一部はここの水を昔から引いていた。「大正の震災」(一九二三年九月一日・関東大震災)が終わってから、葛山では水が枯れたため(後述)、水が貴くなって土管を伏せた。湧き水から土管に水を落として、下条のいちばん上の家である岩佐重雄家のところにタメ(溜め)を作って、まず岩佐家が利用した。このタメから、土管を伏せてまた次の家のタメに行った。下条の上組のうち根方街道から東側の全部で七軒の家がこの水源の水を利用していた。いちばん下のところは、現在名東博美さんの家のある辺りに大きなタメを作り、ここで中組の人たちが利用していた。なお、下条の上組では、根方街道より西側の家では、仙年寺の西の方の田んぼの中にあった湧き水を川で引っぱってきて、利用していた。

終戦後、簡易水道でまかなうようになったので、だんだん使わなくなった。今も、少しは使っているが、あまり重きを置いていない。

水があまり来なくなると、土管の掃除をしていた。土管の割れ目などから、ノロシといって竹を四つ割りにしたものを通して、掃除をしていた。特に、日を決めて掃除をやるということはなかった。

水神講　水源には水神さまがあり、水神講のときにはみんなで



寛延３年　水神(下条)

お参りをしていた。水神講は、戦後、岩佐貞良さんが主になってはじめた。毎年四月一日に下条全体でやっていた。水神講は夜やったので、昼間この水源と縁の深い人たちが寄り合って、お参りに行った。

なお、水源には水神さまの石造物があり、その銘は「寛延三年」（一七五〇年）である。

タンク　中里にも、タンクと呼ばれる飲み水を溜めるところがあった。上ケ田から木管を伝って水を流していた。タンクには、蛇口が付いていて水を出せるようになっていた。タンクの位置は、①金比羅橋の近く、②中里橋の少し下、③現在中里バス停留所のあるところ、④現在、中野旭さんの家の少し上、であった。

第四節　四季の変化と動植物

㈠　気象の認知

葛山の人々は、四季の移ろいを自然との交流の中で感じとってきた。気象の変化も自然とのかかわりあいの中で感じとっている。

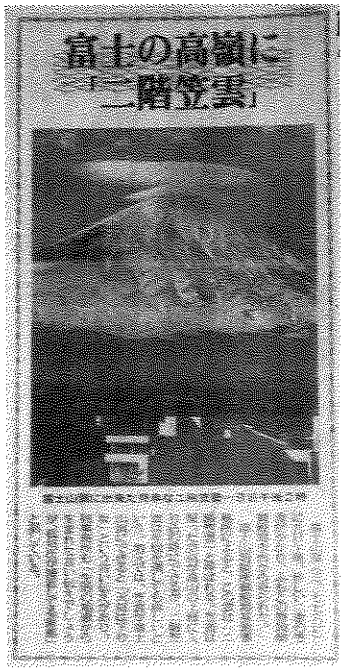
富士山のカサグモ（笠雲）　富士山に綺麗なカサグモ（笠雲）がかかり、笠をとると必ず雨が降るという。

また、富士山にカサグモがかかって、その下にオビグモ（帯雲）が細くかかると、夕方になって必ず雨が降るという人もいる。カサグモは風が吹くと東へ飛び、オビグモが流れてくると雨が降るという。

あるいは、富士山にカサグモをとり、東へ流れると風（晴れ）になる、西へ流れると雨になる、という人もいる。富士山の中腹にあるオビグモは、天気とはあまり関係はないともいう。

なお、『毎日新聞』一九九〇年一月一〇日・朝刊の社会面（全国版）に、富士山のカサグモに関して次のような記事が写真入りで報道された。

富士の高嶺に二階笠雲



笠雲を報じた新聞記事
（『毎日新聞』1990年1月10日朝刊）

富士山頂（三、七七六メートル）に九日午後、珍しい二重の笠雲がかかり、ふもとの静岡県御殿場市内からも見られた。

富士山測候所御殿場基地事務所によると、この雲は「二階笠雲」と呼ばれる。笠雲は湿った空気が高山の上層に入り込む時にできるが、二階笠雲は年間を通しても珍しいという。地元では、笠雲が富士山頂にできると「天気は下り坂」という言い伝えがあり、同事務所も「生活の知恵から生まれた言い伝えでしょうが、低気圧が接近している証拠」と話している。

愛鷹山と雲　愛鷹山に雲がかかると雨になるという。また、愛鷹山が明るくて天気がよければ晴れになるという。

それで、以前は、六月に小麦を干しているとき愛鷹山が曇ってくると、干しものを取り込んでいた。

箱根山と雨　箱根山に雨が降ると、こちらでも必ず雨が降る。

これについて、「箱根山の雨と隣のボタモチは必ず来る」という人もいる。

気象と生業　正月一日に天気がよければ、ワセ（早稲）がいい、正月二日に天気がよければ、ナカテ（中稲）がいい、正月三日に天気がよければ、オクテ（晩稲）がいい、といわれている。

天神講　二月になって、梅がぼちぼち咲き始めるころ、天神講をやっていた。

こぶしの花　二月末から三月初めにこぶしの花が咲く。こぶしの花が咲くと里芋の芽を見よ、といっていた。これが農作業の始まりとなる。里芋は、地の中にイケテ（埋めて）おいて、大きいのとか小さいのとかを選んで、里芋の芽付き芋を植えていた。

ドヨウサブロ（土用三郎）　夏にドヨウサブロといって、土用から三日天気がよければ、その年は陽気がよいといっていた。

虹と気象　アサニジ（朝虹）はその日のうちに雨が降り、ユウニジ（夕虹）は晴れになるという。あるいは、朝日が虹のようにさすときには、「朝、日がたったから、今日はタテコボシ（雨が降る）」という言い方をする人もいる。

動物・昆虫と気象　蟻がゾロゾロと動いていると天気が悪くなるという。トンボが家の中に入ると台風が来るという。猫が顔や耳を洗うと雨になるという。

(二)　カミナリサンと雨乞い

雨乞い　夏、雨が降らないと作物に影響するので、雨乞いをやった。雨が降らないと、雨乞いをやってもらいたいといって区長に申し込んだ。あるいは、区長が区の役員と相談して、「雨乞いをやらなきゃぁー、しょうがにゃぁー」ということになると、伝達があって、葛山じゅうから一軒に一人が出て、雨乞いをやった。上城・中村・下条・中里・田場沢全体から出ていた（第四章を参照）。

雷とタケノカミナリサン　雷が激しく鳴ると、「タケノカミナリサンが鳴っているぞ」と言うことがある。ちょうど、自分の家の上で鳴ったときには、先祖さん（仏壇）に線香を三本あげると、鳴り止むという。

あるいは、雷が鳴ると蚊帳を吊り、中へ入り「クワバラ、クワバラ」と言うとよいといっていた。

(三)　風と生活

ナライ　富士おろしの北風をナライ（「ナリャー」と発音する人も多い）といっている。秋から冬に吹くことが多く、寒い風である。ナライは寒いので、「今日は、ナリャーだからサミィー（寒い）」とか「南風だからヌクトイ（暖かい）」と言ったりすることもある。あるいは、ナライが吹くと、「ぼちぼち冬の支度にするか」などといったりする。

ナライでは、風の被害があることはほとんどない。

イナサ　箱根山の方から吹いてくる東南東の風をイナサといっている。イナサの風が強く吹くと危険であるといっていた。以前は、

草茸きなので草が傷むとか飛ぶとかいっていた。

下条の岩佐重雄さん（大正八年生）の家は少し高いところにあるので、イナサの風が吹くと危険なので屋敷の東南東に木を植えた。ちょうど、岩佐さんの家では豚小屋がイナサの吹いてくる東南東にあって、イナサの風で飛ばされたことがあった。

岩佐さんの親戚の下条の井上敏治さんの家でも屋敷の東南東に木が植えてあり、岩佐さんが「ここに木を植えていたら、じゃまじゃぁーないか」と言ったら、「イナサの風が吹くとあぶないから植えてある」と言っていた。井上さんの家でも豚小屋が飛ばされたことがあったという。

コチ　東風をコチという人もいる。

(四)　動植物との交流

近年、葛山では山から猿、鹿、猪などの動物が下りてきて、作物を荒らし、被害を与えている（前述）。しかし、葛山の人々には、動植物を生活の中に取り込みつつ、暮らしに利用している面もある。

穴熊　穴熊は、ちょこちょこずんずくで、愛鷹山にいる。フジバタノカミナリサンの辺りで見たことのある人もいる。

穴熊は、作物をひどく荒らすということはない。

イタチ　最近、イタチを見かけることはなくなった。以前は、イタチは鶏の卵を持って行ったり、鶏の生き血を吸うということがあった。

飼い猫　最近、モロコシ（トウモロコシ）の丈が短くなっているため、飼い猫がモロコシをかいて食べて困るという。

飼い犬　最近、飼い犬がゴミ置き場を荒らすことが多い。

烏　烏は、モロコシを食べにくる。本物の烏をとって、吊る下げておくと烏が来ないという。しかし、葛山の人で、沼津の肥料屋から烏の模型を買って来て吊り下げておいた人がいるが、あまり効果はなかったという。最近では、黒いビニールの紐に目玉みたいなものを付けて、風が吹くとビューと音をさせ、烏よけにしている人が多い。

烏が鳴くと、誰かが死ぬと言われている。あんまり烏が鳴くときには、災難が来ないように「ヨロコベ、ヨロコベ（喜べ、喜べ）」と烏に向かって言ったりする。

雀　雀は米を食べにくる。葛山にはあまり稲はないので、上ケ田の方に行くことが多い。今では、早生を作るとそれを狙って雀が来るので、網を張っている。ひところは、雀脅しを使ったこともあった。案山子も置く。

鳩　最近、鳩が極端に増えて、農作物が食べられることがある。

燕　燕は稲や野菜についた害虫をとってくれる。

鳥肉　肋膜を患った人はニンニク（大蒜）や鳥肉を食べるとよいという。また、精がつくといって、鳥の生き血を飲むこともあったという。

蛇　マムシの焼酎漬けは、切り傷・擦り傷の熱さましにいいという。打ち身で黒ぶちになったときにも、マムシの焼酎漬けにしたのを塗るといいという。

マムシの皮を剝いで干して粉末にしたものと、演習場からセンフリを採ってきてセンフリの粉末を混ぜて飲むと、心臓とか肺(結核)、肋膜にいいという。センフリは青い草で、九月ころに花が咲く。蛇は、スジナメラ（しま蛇）でもよい。

ヤマカガシは、このあたりでは弁天さまといってお金の神様だから、捕ったり食べたりしない。

とぐろを巻いた形で脱皮している蛇の皮を神棚に供えると、家のまもり神になるという。

カマキリ　カマキリは害虫を食べるという。

ナメクジ　ナメクジを生で飲むと白血病に効くといわれている。

植物と民間療法　薬にするための植物は家のまわりや道に生えているので、それを採った。たいてい、土用の日に採って洗って日陰干しにしていた。普通は、乾かしてから煎じて飲むが、最近は焼酎漬けにするようになった。昔は、焼酎を買う金などなかった。

センフリ　センフリを大野原の演習場から採ってくる。お湯で浸して飲む人もいるが、乾かして粉末にして飲むと胃によいという。お腹が痛いときに飲むとよい。

ドクダミ　ドクダミの葉を若竹の皮にくるんで、焼いたものはおできの吸い出しに効くという。

洗って日陰干しにしたドクダミを飲むと、血管を丈夫にして出血を止めるという。

やぶれた障子をあんまり早く貼ると腫れ物が出来るといっていた。腫物は、ドクダミを塩でもんで貼って直す。

ヘビイチゴ（蛇苺）　虫に刺されて痒いときには、ヘビイチゴ（蛇苺）を焼酎漬けにしたものを塗るとよく効く。飲むと下痢止めになる。

竹　咳が出ると、竹（孟宗竹）を切ってきて半分に割り、火であぶって出た雫（油）を飲むと効く。肺炎にもよいという。

あおじそ（青紫蘇）　あおじその焼酎漬けは咳止めに効く。

マルスギ　マルスギを小さくきざんだものを煎じて飲むと神経痛に効く。

梅干しの皮　梅干しの皮をとって、こめかみに貼ると、頭痛に効く。歯が痛いときにも貼るとよい。

ハトムギ（はと麦）　ハトムギの汁をつけると、いぼ（疣）が直る。

いちじく（無花果）　いちじくは痔の人がたべると効く。

チドメグサ（血止め草）　傷の血止めには、チドメグサをもんでつけると効く。

白つつじ　白つつじを乾燥したものに湯をかけて飲むと、破傷風、指腫れ、ばいきんが入ったときに効く。

ヤマホオズキ（山酸漿）　ヤマホオズキは消化によいので、「出そうで出ないとき」（便秘）に効く。

びわ（枇杷）の葉・モロコシの毛　びわ（枇杷）の葉とモロコシの毛は煎じて飲むとおしっこによい。

川と魚・カニ　葛山では、関東大震災による川の水量の激減（後述）、近年の河川改修と、現在の下水、生活用排水の川への流し入れによって、川に生息する魚・カニはほとんどいなくなっている。しかし、以前は葛山にも、魚、カニが多くいたという話が聞かれた。

カニ　たとえば、大久保川は以前は水がうんと綺麗で川にはハヤ、カニ、どじょうなどがいた。カニは、モジリという竹で編んだ籠に餌（たとえば蛙の足など）を入れて捕り、カニジル（かに汁）にして食べていた。カニは子供ではあぶなかったので大人が捕りに行った。

また、以前は、黄瀬川が綺麗だったので黄瀬川まで捕りに行ったこともある。

サワガニ　佐野川で魚を捕って遊んでいた子供たちの話によると、現在、葛山では、田場沢川と佐野川にはほとんど魚はいないという。佐野川の上流の、田場沢の家もなく下水も流れ込んでいないところへ行くと、岩の間に囲まれて川の中に流れが留まっているところがある。そこまで行くと、何という魚かは知らないが少し魚がいる。しかし、少ないので釣りは出来ない。夏になると、イモリもいる。三月ころでもサワガニがいるが、夏になって田場沢川の上流の方へ行くと、サワガニが多い。

(五)　幻想としての動物

河童　お盆になると、仏さんが河童になって引っ張り込むので、子供は川へ遊びに行くなといわれる。

昭和のはじめ、佐野川の「ガニブチ」のあたりで、子供が河童に引きずり込まれて、死んだことがあるという。

ムジナ　上ケ田にムジナの穴があるというが、葛山にはない。ムジナを捕るときにはムジナの穴の裏に囲いを組んで、表の方でボッコを燻すとムジナがコホンコホンといって出て来るという。

ナゼガワの狐　現在、中里の中野工業のあるところにナゼガワの狐が住んでいた。今はないが、以前はここに人間が入れるくらいの横穴があり、この横穴に三本足の狐が住んでいた。この狐は誰かが撃って三本足になったという。三本足でよく景ケ島まで行ったり来たりしていた。

また、このあたりは以前は藪になっていた。ここから田場沢に行く道のところのススキが夜露に濡れていて、夜、歩いているとススキが顔を撫でるので、ここには幽霊が出るということになっていた。

狐　中里の中野茂さん（大正四年生）が子供のころ、金沢の人が葛山の山奥で炭を焼いていて、狐に化かされてリンゴの箱に横になって入るということがあった。みんながさんざんに責めたら、沼津から来た狐なので、狐が「裾野駅まで送ってくりょう」というので、裾野駅までお金を持ってついていくと、石脇のサカイ橋のところでチンチンオドリをして、お金を落としたりした。それでも、裾野駅まで行ったところ、「上り列車は来ましたか」と聞いたという。それで、ホームまで出たところ下り列車が来たので、下り列車と一緒に歩いていたところ、ころんで突然正気にかえって、「おりゃー（俺は）、何しに来ただ」と言ったという。

中里の勝又ことさん（大正九年生）のおじいさんが大野原に行ったときに、狐に化かされて自分がどこにいるのかわからず、林や草むらをさまよったという。そのとき、おじいさんは「まあ、提灯が綺麗だった」と語ったという。おじいさんは、その後、上ケ田をぼおっと歩いているのに気がついたという。

また、同じく二〇年ほど前、勝又ことさんのおばさんの様子が変なので、ある人にみてもらったところ、ひいおじいさんが撃った狐が憑いているといわれた。それは、ひいおじいさんが明治時代に黄瀬川で後足の一本欠けた狐を撃って、その狐が憑いているということであった。それで、箪笥の中の着たこともない縮緬の着物の袂に狐の毛が入っていたりするので、縁の下に向けて鉄砲を撃ったり、座敷の四隅に木を置いたらやっと狐が出ていったという。

第五節　災害と環境の変貌

(一)　関東大震災

葛山では、一九二三年（大正一二）の関東大震災の際の経験が今でも語られることがある。それは、地震そのものに対する経験と、地震のあと水が枯れ葛山の環境に変化が起こったことに関する経験である。

以下、それぞれ個人の経験を記述する。

〈事例1〉　上城の市川泉さん（明治四五年生）は、地震が起きたとき学校にいたので、すぐに学校から帰ってきた。傾いている家が多かった。

地震の後、竹藪は根が張っているからといって、竹藪に蚊帳を吊って一週間くらいいた覚えがある。

〈事例2〉　上城の市川さか江さん（大正二年生）と勝又つやさん（大正五年生）は、地震の後、竹藪は根が張っているから安全だといって、竹藪に避難した覚えがある。それまでは、上城に水が湧いているところがあったが、関東大震災のときから水が出なくなった。

関東大震災よりひどい被害にあったことはない。

〈事例3〉　中村の半田しづさん（大正四年生）は、関東大震災を田場沢の実家で体験した。このときは、地震の後、藪の中に竹を切り蚊帳を吊って一週間くらい組中でいた。ただ、養蚕をやっていたので、親は様子を見て家の中に入って蚕の世話をしていたのを覚えている。

〈事例4〉　下条の勝又と志子さん（大正四年生）は、地震の後、竹藪に蚊帳を吊って布団を敷いて寝たのを覚えている。このとき、朝鮮から朝鮮人が攻めてくるというので恐かった。家を建ててから一〇〇年くらい経っていたので家が地震で傾いたが、養蚕をやっていたので蚕の餌をやるときと食事のときだけ家の中に入っていった。

関東大震災のときでも井戸の水は枯れなかった。

〈事例5〉　田場沢の中村孝一さん（明治四一年生）によると、田場沢には現在田んぼはないが、「大正の震災」（関東大震災）前には田んぼがあったという。田場沢川から水を取って田んぼを作っていた。ところが、大正の震災で田場沢川に亀裂が出来て、水が地下に入ってしまうようになった。それで、水が枯れ水が引けなくなり、田んぼをヨシテ（やめて）畑に替えた。

「大正の震災」前からあった井戸は、このときに水が枯れたので、さらに井戸を掘って足している。田場沢でも中村家より上のシュウ（衆）は、震災の後、水がなくなり山の湧き水を竹で通して水を引いていたことがあった。ところが、「これじゃぁーしょうがない」ということになって、井戸を掘り直して足している。

〈事例6〉　田場沢の中野鶴吉さん（明治三五年生）は、「大正の震災」のとき、二三歳であった。ちょうど、青年団の分団長をしているときであった。九月一日、山で下刈りをしていたときに地震が起きた。山が崩れて、イセーデ(急いで)帰ってきたらうちの石垣が崩れていた。このあたりは、火災はなかった。朝鮮人が来るといって、女子供は隠れろ、といっていたが別に朝鮮人は来なかった。

このあたりは、竹藪に逃げた。組中が竹藪に逃げ、萱で屋根を葺

いて小屋を作った。余震があったので、竹藪に一か月ばかりいた。

その後、大工さんがあちらこちらから頼まれて出はらってしまい、大工さんがいなくなったので、田場沢では磁石を使って家が傾いたりしたのを協同で直した。

以前は、地震が来るとこのようなことを言っていた。

「ゴヒチガアメデ（五七が雨で）、

ヨツヒデリ（四つ日照り）、

ムツヤツドキガカゼトシルベク（六八つ時が風と知るべく）、

クハヤマイ（九は病い）」

と言って、たとえば、五つ時に地震が来ると雨が降った。

「大正の震災」のときも、四つ時くらいであったので、その後日照りが続いて困った。しかも、佐野川や田場沢川の地下に亀裂が出来て水が入り井戸の水も枯れて困ったことがあった。中野さんの屋敷のまわりも震災の前までは田んぼであったが、震災で水が枯れて田んぼをヨシタ（やめた）。

雉が鳴くと、地震が来るとも言っている。雉は地へ寝ているので地震を感じているらしい。震災のときも、雉が鳴くと余震が来ていた。

関東大震災と川の変貌　現在、葛山を流れる大久保川、佐野川、田場沢川とも水量がきわめて少ない。それに関して、いずれも「大正の震災」で、水が流れなくなったといわれる。それまでは、川に魚が多くいたという。

(二)　その他の災害

大久保川の氾濫　昭和二二年～二三年ころの秋、大久保川に鉄砲水が出たことがある。水が引いた後サツマを拾って歩くことが出来た。

山火事　葛山の奥山から火が出たことがある。その火事で下和田が全焼するということがあった。

チブス　中里で戦争中チブスが流行って八人死んだことがある。このときは、金沢でひどかった。

（岩田重則）

第二章　社会と生活

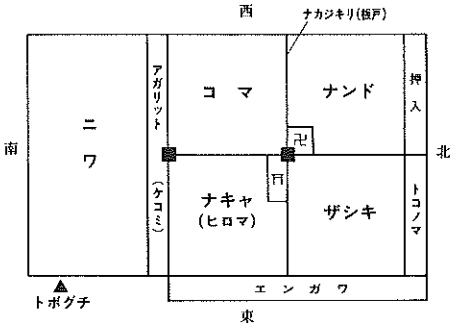
第一節　居住空間としての家・屋敷

(一)　間取りと部屋の使い方

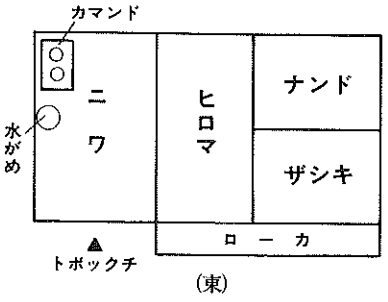
間取りと各部屋の名称　葛山では、一般的に東向きの家が多く、トボグチ（入口）側からみて左にニワ（土間）、右にザシキがあった。残念ながら、地域内には古い形で現存する民家がほとんどないため、調査はすべて聞き取りによるものである。図Ⅱ－1は葛山における標準的な間取りで、南側からトボグチ（トンボッチ・トンボグチ・トボックチなどともいう）を入ったところにニワ（土間）がある。右手のアガリット（ケコミ）をあがった奥には、ナキャ（ヒロマ）・コマ（オカッテ）・ナンド・ザシキの四部屋が田の字型に並んでいる。

図Ⅱ－2～4は話者の記憶にある旧住宅の間取りを集めたものだが、このうちS家の型はナキャとコマが一つの部屋になっている。これはより古い型式をあらわしていると考えられる。オカッテ・ヒロマ（S家ではヒロマ一部屋）とナンド・ザシキを仕切る板戸はナカジキリと呼ばれ、部屋の区切りはこの板戸のほか、コシダカショウジ（腰高障子）やフスマ（襖。カラカミとも呼ぶ）を使用した。

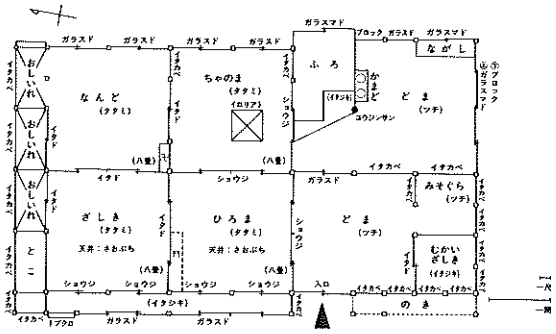
ニワには、つけものやミソを入れておくミソグラや、米や俵を入れるムカイザシキのついていることもあった。また、ニワ



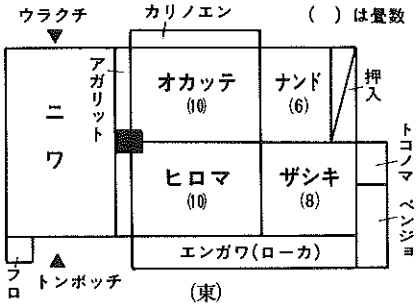
図Ⅱ－1　平均的な間取り



図Ⅱ－2　旧S家



図Ⅱ－4　旧芹沢治男家



図Ⅱ－3　旧O家

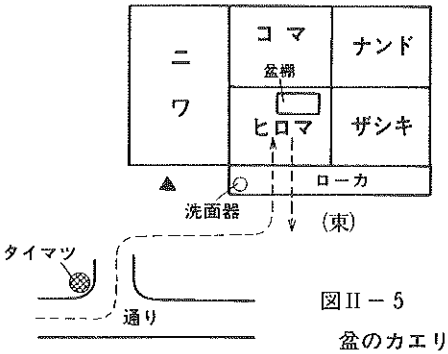
ではカラウスで米をひいたり、モロコシをむいたり干したりしたという。

ナキャー（ヒロマ）はお客の間　ヒロマには神棚がしつらえてあり、お盆には盆棚がつくられた。結婚式はヒロマとザシキが使われ、ヒロマはハレの日の接客の場であった。人間ばかりでなく、神様や仏様も迎えるこの部屋を、毎年「お客」として長期間使っていたのが「オカイコサン」と呼ばれた蚕であった。葛山では昭和一五年ごろまで（遅い家は一七、八年まで）多くの家が養蚕を行っていた。当時の重要な現金収入の道だったために、蚕は大変大切に扱われ、家人はオカイコサンの棚の間にすき間を見つけてムシロを敷いて寝たものであった。

春秋二回の蚕の季節になると、ヒロマの畳をあげて板の間にする。ヒロマの畳の下には炭やマキを燃す炉が切ってあることもあった。婚礼がヒロマとザシキを打抜きで使うように、蚕もまた育ってくるとザシキにまで広げるために、家族はオカッテや廊下に寝かされることになる。ヒロマに招かれるオカイコサンは、その名の通り家の重要な「お客」なのであった。

一方、未婚の娘のいる家では、祭りの晩などにこのヒロマをこっそりと訪ねてくる客もあった。戦前までこの地域でさかんに行われた若者たちのヨバイは、村の中では半ば公認されたものでもあったようで、そうしたエピソードはいろいろと語られる。特に家屋敷の面からみると、当時の家の間取りはどれも同じようなものであったから、入りやすかったこと、さらにその家に嫁が来るまでは夜でも戸を閉める家はほとんどなかったということ、また娘たちは親とは別に（親はナンド）、エンガワから入るとすぐのヒロマに寝ていたこと――などから、そうしたヨバイの若者たちに好都合にできていたといえる。

年一回、ご先祖様もヒロマに帰ってくる。オタナと呼ばれる盆棚は、お盆の一三日にヒロマの奥に東向きにしつらえる。盆棚には家の位牌をすべて並べ、オッサン（僧侶）にお経をあげてもらう。先祖の霊は一三日の夕方、竹のウラッポ（先）にスギッパ（杉の葉）をつけたタイマツを、ジョウゲチ（屋敷の入口）にツットシテ（突きさして）迎える。この火を、先祖が帰ってくる目印になるという意味で「カエリビ」（又はムカエビ）と呼んでいる。カエリビを目指して戻ってきた先祖はヒロマへ客として迎えられるが、ヒロマへはアガリットから入らずに廊下から直接入ってくる（図Ⅱ－5）。また廊下にはホトケ様が足を洗うための洗面器を用意しておいた。



図Ⅱ－5
盆のカエリビ

先祖の霊と同様に、お盆に棚経に来るオッサン（僧侶）もやはり廊下から出入りするが、トボグチを通らずに直接ヒロマに出入りしたのは、お盆の僧とホトケ様、それに先に述べたヨバイの若者ばかりであった。

ザシキを使うはヨメ・ホトケ　家族の多い家ではザシキに舅、

姑が寝ているが、余裕のある家ではザシキやヒロマは普段はあまり使わなかった。特にザシキはハレの特別な日に使用する部屋として、子どもがオネショをすると畳にしみるといって寝かせないというほど、大事に使った。もっともそのザシキも前述したように、養蚕の季節にはカイコサマの寝室となっていた。

ザシキが使われた代表的な家の行事は、結婚式と葬式、法事という家の構成員の変化に関係する出来事である。

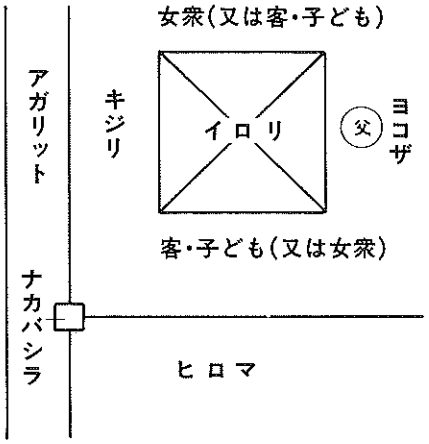
家で結婚式をあげていたのは昭和三〇年ごろまで、昭和五年生まれの人達くらいまでであった。婿と嫁はザシキの床の間を背にして座り、その両側にカネオヤとナコウド、婿側、嫁側のシンセキが相向き合って座る。嫁はトンボグチからヒロマを通ってザシキの席に着く。

嫁が家に入ってくる逆を通って出ていくのがホトケである。ザシキは棺の置き場でもあった。棺はザシキに北枕に置かれ、葬儀が終わるとヒロマを通ってトンボグチから出ていった。同様にネンカイ（法事）の時も、もとはザシキを使っていた（三、四年前くらいから法要は寺、直会は料理屋になった）。この時もザシキに祭壇をつくり、一列めに一番濃い身内が座って読経の間にまわし焼香する。ネンカイの時の僧侶は廊下からではなく、トンボグチから入る。

ザシキとヒロマは余裕があれば普段はあまり使わないというように、家にとっての大事な日、特別な日のための部屋であったといえる。

暗いナンドはオサンバショ　陽の当たらない北西角に位置するナンドは、もっぱら若夫婦と子供の寝室に使われた。子供が大きくなるとナキャ（ヒロマ）に寝るようになったりしたが、小さいうちはナンドを使った。ナンドは日常の寝室として使用されるほかに、オサンバショ（お産場所）としての役目があった。ヒロマに神棚があるのに対して、子どもが生まれてくるこの部屋には仏壇がおかれた。仏壇は神棚同様、ニワの方を向いていた。

コマのヒジロは家の中心　コマは、チャノマあるいは（オ）カッテとも呼ばれ、その中央にはイロリが切ってあった。イロリのことは、ヒジロまたはユリイともいい、イロリのある部屋ということで、コマのこともユリイバタと呼ぶこともある。家族の生活はこのヒジロを囲んで営まれていた。モシキ（燃し木）を燃してお茶をわかしたり、その火で「なんでもかんでも煮て食べた」というように食事の仕度もした。暖かなヒジロバタにはいつも家族が集まってきたものだった。



図II－6　ヒジロの座席

ヒジロの座順は図II－6のようになっていて、父親の座る場所をヨコザ、またはカミザといい、「カミザ、ヨコザへは子どもは座るもんではない」と言われたもので、父のと

なりに誰かが並んで座ることはなかった。またヨコザの正面、アガリット側はキジリと呼んで、普通はモシキを置く場所であったが、大勢のときは座ることもあったといい、中にはここをキジリセといって嫁の座る場所としていた家もあった。

ちょっとしたお客があると、いつもはヒロマ側のアガリットで話をするが、寒くなってくるとヒジリのあるオカッテ側のアガリットへ客を招く。「あたってきな」と言われると、それだけで客の方も気持ちがいいものだったというほど、ヒジリの火は人の心をなごませてくれる効果ももっていた。冬、子どもたちが足が冷えるといってヒジロに足を出していると、「バチが当たる」といって火箸でたたかれたという話を聞いた。それほどこの火は大切なものであった。女たちは夜なべ仕事や雨ふりの日はヒジロバタで話をしながらボッコツギ（衣類の繕いもの）をしたものだった。

(二) 家の手入れと生活環境

水の苦労は嫁の苦労　葛山は一部を除いて、水には苦労することの多かった地域である。特に中里では、ほとんどの家に井戸がなく、主にテンスイ（天水＝雨水）を利用したという。雨が降ると大急ぎで風呂に取りこんだり、ぞうきん水を溜めたりした。朝の水汲みは嫁の仕事だったが、水に不自由しないところから嫁に来た人には大変につらい仕事だったという。

中里のSさん（大正六年生）は、毎朝、中里に四か所くらいあった井戸へ水汲みにいったが、下のポンプから順に水がなくなって、最後は金沢まで三〇分かかって汲みにいったという。オカッテの水だけでも、天秤にバケツをさげて三、四回ではきかないくらい往復した。子どもを背負って川にも水汲みにいった。朝早く、牛や馬を洗うまえの川がきれいなうちに水を汲み、飲料水にもしていた。下条でも宮川の水を汲んだが、宮川の水が枯れると井戸も枯れたという。

もっとも上城は例外だった。一軒に一つは井戸があって、柄杓で汲めるくらいに浅かったといい、一日半も掘るといい水が出た。田場沢のR家では、オモヤの西にツルベ井戸があり、昭和八年ごろまで使用した。その後手押しポンプになり、昭和三〇年ごろに自家水道をひいたという。

水は大切だったから風呂の水は五、六日はとりかえなかった。その様子を「アカで棒が倒れないほどだった」というほどで、その水はドエと呼ばれる肥溜に捨てた。ドエは四尺×五尺ほどの大きさ、深さ五尺ほどで、外便所のところにあり、ここにためたあと畑にかけたり、堆肥舎（二間×三間の石組み）の堆肥にかけたりして最後まで有効に使ったものだった。

下条の北村ではかつては一一軒のうち三、四軒しか風呂のあるうちはなかったので、互いにもらい風呂にいっていた。田場沢の芹沢フサエさんによれば、ゴエモンブロ（五右衛門風呂）は昭和二〇年ごろから使うようになったというが、上城の大川いしさん宅ではいしさん（明治三五年生）の子どものころ、つまり明治末から大正初めには木製丸型の風呂があったという。風呂桶は冬はニワ（土間）の中、夏はニワの外の庇の下に置き、家の中で服を脱いで入りにいった。風呂桶をおくカマヤ（釜屋）を持っている家もあり、カマヤのあるのはいいうちだといった。中村の旧勝又作雄家のカマヤには、二口のカマンド（カマド）と風呂があったが、大久保川がたびたび

あふれて釜が浮いてしまうので、エンギ（縁起）が悪いといって壊してしまったという。カマヤに風呂桶をおいたのは、今の風呂場の原型であった。

嫁の自慢はモシキとハシラ　秋の農作業を終えて、忙しさに一段落ついたころのお正月前になると、女衆は共有林に入ってモシキの枯れ枝を取りに行った。モシキには櫟、檜、杉などを一メートルくらいの長さに切って束ねる。子どもをおぶって出かけたりしたが、女衆みんなで行ったので、仕事といってもこれは楽しみな仕事だったという。朝出かけて昼前に二、三把、ヒル（昼食）を食べてからまた出かけて二、三把採ってバリキ（馬力）にのせて持ってきた。

とってきたモシキの束は、軒下や便所のグルリ（周り）にオッカットイタ（重ねておいた）。「たんとおっかってあるというのは、こうまん（＝自慢）のようだった」とか「あそこのうちはモシキがたんとあるからアンキ（安泰）だ」といったものだった。モシキがたくさんあるということは、それを取る余裕があるということで、家が裕福にみえたものだったから、女衆は正月までいっしょうけんめい集めた。また置いておくにも「きれいにまるって（まとめて）積んどくのがこうまん（自慢）だった」というように、きちんときれいにたてかけるのが主婦の自慢になった。

モシキトリは秋の収穫を終えた安心感と、女同士でする楽しさ、そしてモシキを積み上げたときの充実感で、女衆にとってははりあいのある仕事の一つだった。

主婦の自慢のいまひとつは黒光りのする大黒柱であった。大黒柱はナカバシラと呼ぶ。嫁はこのナカバシラと戸を、毎朝ヌカゾウキンで顔が映るほど磨いた。そうして柱をいつも光らせておくのは、もう一つの嫁のこうまん（自慢）であった。

ムラ中総出のカヤカリ・ヤネガエ　田場沢では昭和三五、六年ごろから四〇年ごろにかけて、萱葺きの屋根はトタンや瓦葺きにかわっていった。萱葺きのころの萱は、沼津町ほか一〇か村の愛鷹山共有地に萱場があり、秋が終わるとすぐにムラ中総出でカヤカリに行った。カヤカリの日は、朝の暗いうちから女衆が昼の弁当をつくり、それをもって男衆は出かけていく。男衆のうち一、二人残ったものは、ヨウジャのモチを搗いて山へ運んだ。

萱を刈るときは小束で刈り、小束三つで一ワとし、これを六ワで一駄という。屋根には三、四〇駄使うので、一回葺くためには五四〇の小束を刈ることになる。馬を持っている家からは馬を、バリキ（馬に荷車のついたもの）のある家からはバリキを出してくれたので、これを使って山をおりた。カヤカリの日の様子を上城の大川守幸さん（昭和四年生）が、昭和二八、九年に葺き替えた時の記憶から話してくれた。

・朝早く　各自朝食をすませてから山に行く。
・一〇時ごろ　カヤバで昼食。葺き替えの家で用意した昼食は、野菜ごはん（人参、大根、油揚げなどの入った混ぜごはん）とおしんこ。
・三時ごろ　ヨウジャ（お茶休み）。組の責任者が「さあヨウジャにしてくれよ」と指示すると、お茶とモチを出す。
・六時ごろ　山から戻って葺き替えの家で酒とソバ、煮物の夕食を振舞う。

こうして刈ってきた萱は、屋敷内に横積みに二か月くらい積んでおくと落ち着いてくるという。

屋根の葺き替えや、草屋根を瓦屋根に替えることをヤネガエといった。葺き替えは二〇年から三〇年に一回行うが、田場沢ではどの家を葺き替えるかはクジで決めたという。実際のヤネガエの日までに、カヤカリをして萱を集めておくほかに、葺き替えの家では下地用の竹もヨウガイ（準備）しておく。竹は屋根の下地を直すためのもので、タテの太い竹は真竹で九月に切っておき、ヨコにかける細い竹はコダケといって篠竹を使う。

ヤネガエは一月から三月の間、主に豆まきが終わったころに行った。ヤネガエの一か月前になると、組の責任者がまわってムラ中に手伝いを頼む。以下は再び、三五年ほど前に葺き替えた時の大川守幸さんの記憶から、ヤネガエの手順を示す。

・家の中のものを出す　畳をあげ、家の中のものを出してしまう。戸棚などはナヤに入れる。古い葺はミカンバショへもっていってミカンの木の下へ敷く。残りの散らかった萱は、燃して、その灰を畑の肥料にする。

・屋根をくずす　シンセキとムラ（上城）の人達が寄って、一日がかりで古い屋根をこわす。

・下地を作る　こわれている屋根組みの竹を、屋根屋を頼む前に直して下地を作っておく。

・屋根屋を頼む　ムラ内の屋根屋に頼んで職人を五、六人集めてもらった。職人は御殿場や印野などから来た。

・屋根を葺く　屋根の上と下とで合図をしながらヘギ（竹）で束ねた萱をとめていく。とめる人のことをハリヒキという。下で萱を渡すのはジバシリといい、ハリヒキもジバシリも手伝いの男衆がやった。手伝いの人達が、片面に一〇～一五人くらい、総勢で三〇人くらい屋根にのぼって、下から順に積んでは締めていく。主なところを手伝いの人達でやったあと、すみずみを屋根屋が葺いた。

・形を整える　素人が葺いた屋根を職人がきれいに刈って形を整える。九尺くらいの煙出もつくる。

・ダンゴやミカンを撒く　シンセキなど、主だった人一〇人くらいが、葺きあがった屋根の上からダンゴとミカンを撒く。

ヤネガエの時に撒くダンゴは、三日くらいかけて米の粉を一斗挽いて用意する。球形ではなく、平たい形につくる。ダンゴを撒くころになるとあたりは暗くなっていたという。

(三)　新築・家移りの儀礼

ヤマドリ　新築にあたっては、まずヤマドリ（山取り）をする。これはかつて自分の山の木を使って新築したため、近所の人が手伝って山の木を切ったり、それを山から出したもの。

ジマツリ（地鎮祭）　神主を頼んで土地を浄める地鎮祭は、ジマツリ（地祭り）ともいって大工、施主、シンセキが出席して行われる。

真竹を四方に立てて注連縄をはり、榊をつける。そこへ机を置いて、七品、九品というふうに奇数の、海のもの（魚。錦といって赤い魚。昔は魚のかわりにスルメを使った）と山のもの（野菜、鳥のかわりに卵）、あるいは昆布、海草（アオイタ）、寒天、旬の果物などの供物を供える。

このあと近所の人やシンセキの人が手伝って、ヂヅキ（地ならし）をする。この時の手伝いには食事は用意するが、手間賃は払わない。

棟上げ（上棟祭）　上城の木村豊治家を新築した昭和二二年の時の棟上げの様子を、木村武雄さん（中村。大正五年生）の聞き書きをもとにまとめてみた。

棟上げの日は、組の人やシンセキが手伝いに来た。あらかじめ土台、アガリカマチ、差物、梁、鴨居などと柱を組んでおいて、三〇人からの人達皆でいっぺんにこれを起こす。棟には五色（黒・黄・赤・白・紫）の旗に扇、女性の鏡や髢、櫛をつけてたてる。さらに弓矢を表鬼門へ向けて、鬼門に近いほうのコバ（棟の端）に置く。

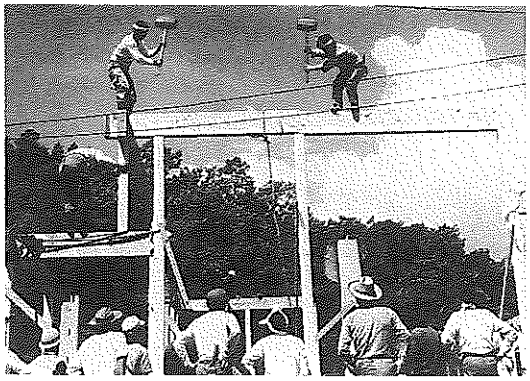
棟の上には、ハンダイに入れたモチ、皿に入れたお洗米、ブッキ（仏器。神様に使う木製の皿）に入れた塩と酒をあげて、棟梁、施主、シンセキの主な人、下職の人達（畳屋、左官など）が上にあがる。

上にあがった棟梁は、まず弓を引く真似をして「射る弓はサンジョウの山に響きつつ、みなことごとく身をぞ治まる」と唱え、つづいて塩を撒いて「あら塩のシオのヤシオのヤシオジの、シオのヤオアイに神ぞまします」と唱える。次に米を撒き、酒を飲んで手締めをする。

少し大きめにつくったシホウモチ（四方餅）を、棟梁が「ヒトツボや八百萬のカガミ、宝を降らすオタズミの神」と唱えながら、東の鬼門（表鬼門）、西の鬼門（裏鬼門）、南、北の順に一つずつ撒く。つづいて、上にあがっている人全員でハンダイに入れたモチを撒く。

下りてきて、家の中に板を敷いての直会には手伝いの人全員、下職全員とシンセキが加わり、施主は職人さん達にご祝儀を渡す。上城の大川いしさん（明治三五年生）の家で三六年前にカイコシを建てた時の話では、手伝いの人達は朝米る時に、モチ米、米、酒、お金など（シンセキからは少なくとも一斗の米、多ければ一俵の米）をご祝儀にもってくるので、夕飯で出したおかずのモリツケやお赤飯、道具などの引物を返したという。

また建前（棟上げ）の日には朝からモチを搗く。オモテにかまどを作って、近所の女衆が米を蒸し、撒くモチだけでも一俵、四方餅は少し大きめにして四つ、大工さんに供えとして渡すのが一升で、棟梁には二、三升、世話人にもお供えをもっていってもらう。この日のヨウジャ（三時のお茶）にもモチが出される。モチは、縁起をかついでふた親ある男女だけがオモテで搗くという。


昭和47年頃の家の建前（田場沢）

ヤウツリ（家移り）　建前の直会では、手伝いの男衆のうち両親の揃っている人がセンダツ（先達）となって歌を歌う。センダツはトンボガサ（笠）をかぶり、ミノ（蓑）を着て、ブッキ（仏器）に盛った小豆粥を萱の箸で柱につけてまわる。この粥をヤウツリガユといい、一箸一箸家の神様にさし出してから、人に配ったり、自分もすすって食べる。他の男衆もセンダツのあとについて歌って歩く。このときの歌をヤウツリガイ（家移り粥）あるいはヤウツリギョウ（家移り経）といい、その文句は田場沢の中野鶴吉さん（明治三五年生）によれば次のようなものである。

ここのヤカタはよいヤカタ
四方八方　八棟造り
ああメデタイな　メデタイな
霜柱　氷の桁に　雪の梁
雨のタレヒ①に　露のフキグサ②
幸いツク（続く）③　幸いツク（続く）
鶴は千年　亀は万年　トウホウ菩薩④は八千年
美村⑤の大助　百六ツ百まで
エーヤハイヤ（栄家繁家）の八棟造り
寿家（ときわや）普請で
延命長者のヤウツリガユをしんぜろや⑥
戌亥の方から十三本の柱へ梁をあげて
ヤウツリガユをすすろうや

（注）①垂木（タルキ）のことと思われる。
②福草と書くものもある。
③ツクは「続く」とするものと「付く」とするものとがある。
④「公法礼」「弘法菩薩」「東方朔」とする人もある。
⑤「三浦」または「三村」ともいう。
⑥最後の部分は「綿帽子粥をしんぜろやい、すすろうやい、此所にも御粥がござるやい、しんぜろやい、すすろうやい」とするものや、「時のヤウツリ　ヤウツリガイをすすろうじゃ、あなたも一杯すすろうじゃい」あるいは「わたしも一杯すすろうな」「それなら皆ですすろうや」などとする例も聞かれた。

ヤウツリガユの儀礼は火伏せの意味があるという。センダツのつける笠や蓑は昔の雨具で、かつては非常用にろうそくとともに土間にかけてあったものだった。笠や蓑が道具として水（雨）を呼ぶものなら、ヤウツリの歌は言葉で水を呼ぶまじないになっている。歌詞に出てくる霜、氷、雪、雨、露といった言葉は、それを唱えることによって火をよける力をもっていると考えられていたのである。

また歌詞にある「戌亥の方から十三本の柱」というのは、昔の家には一軒に十三本の柱があり、戌亥（北西）の方よりオモヤの入口方向へ順に名前がついているのだという。これも先の中野鶴吉さんが話してくれた柱の名前である。

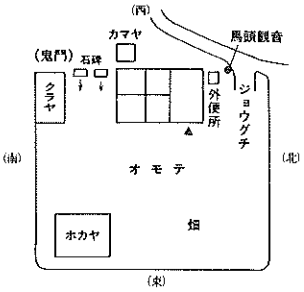
一本の柱はイチイの神社
二本の柱はニノウの神社
三本の柱はサガキ神社
四本の柱は信濃の諏訪神社
五本の柱は護国の神社
六本の柱はロクドのショウジン
七本の柱はナナオの神社
八本の柱は八坂神社
（この間不明）
十一本の柱はツシマの神社
十二本の柱は十二社権現
十三本の柱は四国讃岐の琴平神社

こうして、できあがった家を見に行ってお祝いを渡すことをイエミ（家見）といった。

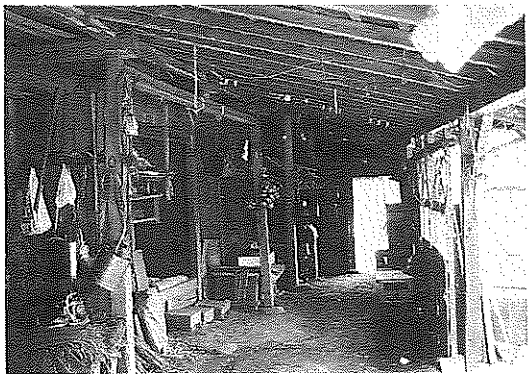
(四) 屋敷取りと屋敷の神

屋敷取りと付属建物

図Ⅱ－7は中村K家旧宅の屋敷取りである。クラヤは自家用の米や麦を入れていたところで、昭和二〇年代に豚舎になった。ホカヤといわれる建物は物置のことで、K家ではここにミソ樽を置いたり、農具をおいた。またホカヤの中に小さい石臼を置いて、モロコシやソバを挽いたり、同じ屋根の下に牛舎を作ったりもしたという。



図Ⅱ－7　旧K家の屋敷取り



ホカヤ（下条）

下条のC家ではミソグラは家のゲヤにあり、ホカヤは下が米倉、馬舎、バリキその他物置として使い、二階を養蚕に使用した。C家のホカヤは八間半×二間半と大きかった。馬や牛は堆肥作りと開墾に使い、昭和四〇年ごろまでは飼っている家は多かったが、今では馬や牛のいたホカヤ（ナヤ）は自動車の車庫に変わってしまった。

葛山での家畜は主に労働力であった。三〇年ほど前までは馬が主流で、耕作に使ったり山へ堆肥を運んだり、収穫物を運ぶのに使った。その後、おとなしくて女衆にも扱えるからという理由で朝鮮牛にかえた家が多く、一〇年ほど飼ったが、今はその労働力も耕運機や自動車がとってかわっている。馬牛のほかは豚、ニワトリなども飼っていた。

便所はもとは外にあり、その脇にはドエと呼ばれる肥溜があった。溜まった肥は堆肥舎にかけたり、畑へまいたりして使った。カマヤにはカマドと風呂をおくことが多く、風呂の水もこのドエへ捨てた。また昔は川がきれいだったので、家からすぐ川に出られるカワバタ（川端）を一軒一軒がもっていた。大久保川にカワバタをもっている中村では洗濯をしたり、お風呂の水を汲んだ。

屋敷地の中には好ましい方角とそうでない方角があって、建物をたてる目安にしていた。タツミ（辰巳＝南東）にセッチン（便所）、サル（申＝西南西）にウマヤ、イヌイ（戌亥＝北西）に井戸、その内にクラ。またウシトラ（丑寅＝東北）はキモン（鬼門）といわれ、ここに石碑のたっていることが多い。K家の石碑は二基で、一つは夫婦名の刻まれた墓と思われるもの、もう一つはヤシキの守り神と伝えられるものである。

屋敷から通りに出る出入口のことをジョウグチまたはキャード（カイド）と呼ぶ。屋敷の境にはかつては石を低く積む程度で、あまり生垣などを作らないのが普通だったが、植えるとすれば、梅、イチジク、ヤマモモ、カキなど実の成る木をまわりに植えた。

屋敷の神様　屋敷の中には稲荷様を祀ることが多い。鬼門除けといって丑寅（東北）の角に家内安全のために祀られる。中村の半

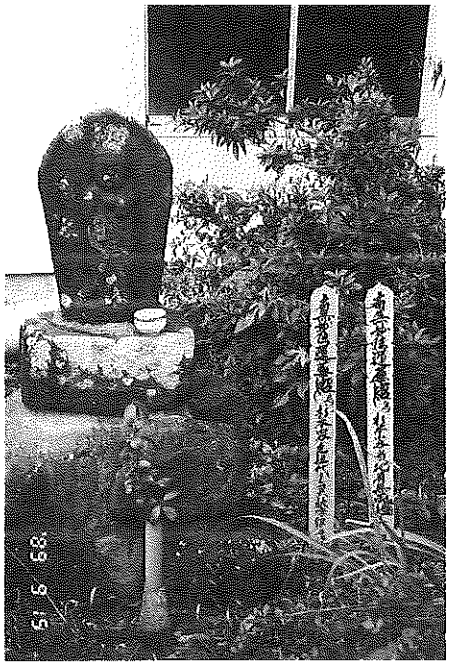
田隼家では、若正月（元旦）にお供え餅をあげ、十五日正月に紅白のダンゴを梅の木にさしてもって行き、さらにその梅の木やお飾りを初午の日に燃して、改めて御供（赤飯）をあげてハタをたてている。このほか暮れにはソバを供える家もある。

稲荷様の他によく見かけるのは馬頭観音である。かつて馬や牛を飼う家が多かったためだが、馬頭観音について中村の勝又さわさん（大正六年生）は次のような体験をしたという。

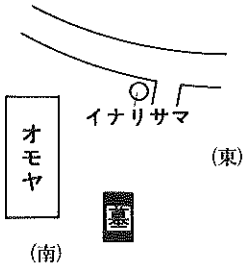
昔から牛は家風に合わなかったようで、姑さんが「牛はハリヤワルイ（思うように育たない）から」と馬頭観音を、ジョウグチの通りに向くようにして建てた。ところが一〇年ほど前、さわさんが水や供え物をあげるのに便利なようにと家の方に向きをなおしてしまったところ、三日目に腰が痛くて立てなくなってしまった。理由が他に思いあたらないので馬頭さんのせいかと思い、元の向きにもどしてもらったら三日目に治ってしまった。さわさんは今も不思議に思っているという。

ジョウグチには地蔵様の祀られることもあり、中村の半田家の地蔵は今は寺にあずけてあるが、高遠の石工が作ったものだという。また半田家はかつての葛山氏の館の西側の家だが、その館跡のウラキモンにあたるところには金比羅さんが祀られている。

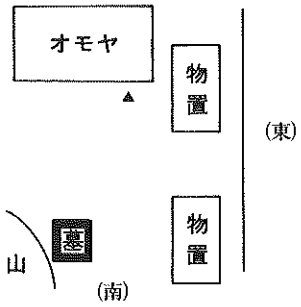
屋敷の墓　葛山の古い家には、畑の中や屋敷地内に古い墓地のあることが多い。下条のS家では文化五年の石碑をゴセンゾと呼び、オシャカサンだといって毎日お茶をあげて祀っている。田場沢のN家にも大小さまざまな墓が八基ほどあって、その中には文化九年のものがあるという。下条のC家と田場沢のM家の墓はともにオモヤのオモテにあって、C家の石碑の中にはゴリンサン（五輪塔）も一基ある。



屋敷の墓（下条）



図II－8　C家の屋敷墓



図II－9　M家の屋敷墓

家にまつわる禁忌　屋敷内の建物の位置や植物についての禁忌には次のようなことがいわれている。

・建物について
・便所は西にするな。
・玄関が出っぱると長男が住みつかない。
・オモテ（庭）に池を作ってはいけない。あの世にイケにつながる。
・池を作ったら鯉を二匹入れるとよい。コイコイで金が入る。
・東玄関がよい。
・入口の土台へ登ってはいけない。
・植物について
・ヤシキ内にコウバナ（仏さんにあげる木＝香花）を植えてはいけない。
・ヤシキ内にビワの木を植えてはいけない。
・シュロの木を植えると、年をとってオショロヌケ（ボケ）になるから植えてはいけない。
・ビンカ（柘植）は「貧花」につながって家が栄えないから植えてはいけない（ただし一方で、代々継いで栄えるともいう）。
・鬼門にはヒイラギを植えるとよい。
・庭木にはマキ、モチ、カシワ、マツ、モクセイがよい。特にカシワは芽が出るまで葉が落ちないことから、「跡継ぎができなきゃこぼれない（亡くならない）」といってよい木と言われる。
・ナンテン・ヒイラギは魔除けになる。
・その他
・建前の投げモチは焼いて食べてはいけない。
・神社の木を切ってはいけない。どうしても切るなら神主に浄めてもらう。

また、禁忌作物を伝える家もいくつかある。上城の大川イットはキュウリを作らない。これは大川家がカギトリ（鍵取り）をしているテンノウサン（天王様）の紋が、キュウリの切り口に似ているからだといわれ、食べるのはかまわないが、作るとお腹を病むという。また大川イットのみならず、天王様を祀る中里の家々ではキュウリを輪切りにするのを嫌って、斜めに切って食べたりしている。

中村の瀬戸家四軒ではショウガを作ってはいけないとしている。作ると人が死ぬといわれ、これまでにも明治四五年生まれの話者の父親がショウガを作り始めてすぐ亡くなったこともあり、今も作らないようにしている。これも食べるのはかまわないという。この他、旧六月一五日にうどんを食べてはいけない、ワセイモ（早稲の里芋）を作ってはいけない、黒い馬を飼ってはいけない（必ず死んでしまう）とする家もある。

家屋の建て替え・直し　葛山には古い形の民家はすでに残っていない。家の建て替えは昭和三〇年代から五〇年代にかけて徐々に行われたが、特に多かったのは東名高速道路の工事と東急の開発により家を移動したり、賠償金が入ってきた時期だった。屋敷を移動した家が多いのは須山オーカン（往還）に家が並んでいた中里地区で、その他の地区でも山を売ったりした金が入ったことにより、オモヤの新築は一斉にはじまった。「別に不便はなくても、お金が入ったらまず家を直したし、どこかの家で直すと次々に壊されていった」というように連鎖反応的なものだった。カヤ葺きの屋根がトタンや瓦にかわっていったのも、昭和四〇年代のことである。

昔の新築はムラ中が手伝って行ったものであるが、その場合、ジョ

ウヨウといってその材料（木材）は施主が用意する形態をとっていた。現代では工務店が請負えば、材料から何からすべてをまかせてしまうのが普通だが、当時のジョウヨウでは大工は日当をもらって家を建てるだけであった。また、かつては古い家を買って移築することも多かった。カイコシといって、骨は骨（骨格になる柱）でくずして移し、新たな家に生まれかわらせる。上城O家のもとのオモヤは、今里の一〇〇年ほど前の家を運んだものだったという。

中村の木村武雄さん（大正五年生）は大工をしていたので、付近の家を長い間直してきた。木村さんによると、終戦後、昭和二三年ごろからオオド（二間×六尺の大きな引き戸で左隅に二尺くらいのくぐり戸がついている）をやめてガラス戸をはめてくれという注文が多くなったという。またその頃から、以前は、いい家（資産のある家）でなければついていなかったケコミ（アガリット）を注文する家がふえて、さかんにつけて歩いた。アガリットの歴史は一般の家では割合新しいものであった。

終戦後のもう一つの変化はエンガワであった。その昔はソトエンといって、エン（縁）の内側、つまりヒロマとザシキの障紙に重なるように雨戸があり、エンは雨戸の外側についていた。ソトエンには稲や麦を置いていた。終戦後、エンの外側に雨戸がつくように改築する家が多くなり、以後エンはロウカ（廊下）と呼ばれるようになったのである。

家の様子の最大の変化の一つは、電気の登場ではなかったろうか。石油のランプやロウソクを使っていた明かりが電灯にかわったのは、田場沢で大正七年、中村で大正末だったという。

第二節　家族生活

(一)　家族の日常生活

この項では家族の日常の生活を、女・子どもを中心に書いてみよう。男たちの仕事は第三章時間と生活に詳しく書かれているが、女や子どもはそうした生産のための労働のほか、消費生活にかかわる労働も多かった。そこでここでは生産における日常ではなく、家の中の、言ってみれば消費生活について述べることにする。

嫁の生活　中里のNさん（大正六年生）は昭和一五年に嫁に来て、姑と兄嫁につとめた。朝は四時前には起き、夜は一二時を過ぎてから寝る生活を振り返って「よく泳いできたと自分でも感心することがある」という。

田場沢のHさん（明治四一年生）の若い頃も、朝は暗いうちから起きて、農作業に出る前に掃除、朝食、弁当の仕度をしたという。洗濯は仕事の合間にやっていた。夜の風呂は一番最後で、燃してくれる人がないのでいつもぬるい風呂に入った。嫁が入るころは湯も減ってしまっていたから、膝が出てしまうような湯につかった、と上城のIさん（明治三五年生）は話す。Iさんの嫁のころの「こうまん（自慢）」はナカバシラ（大黒柱）をからぶきして、鏡のように顔が映るほど黒光りさせておくことだったという。

中村のSさん（大正六年生）の姑も「キレイガタ（きれい好き）だったから」毎朝、ぬかぞうきんで戸や柱を磨いていた。畑仕事に出る前に「釜の尻をみがく」のも嫁の仕事だった。ご飯をおひつに移して、釜の尻を燃し灰（カマドの灰）をタワシにつけて磨く。こ

れは毎朝やらないとタカッチャウ（とれなくなる）から、とれなくなった時は、茶碗のかけらや包丁のうらでこすりとるのだという。畑仕事に出かける前の嫁さんの朝はこうした掃除と弁当作りとでとても忙しかった。

育った環境と嫁に来た先との違いが大きいほど苦労も多かった。水に不自由しないムラから来た人にとっては中里での水汲みはたいそう辛かったし、何といっても百姓仕事をしてこなかった人にとっては、婚家の仕事は嫁として勤めるにはひととおりの苦労ではなかった。

嫁に来て初めて百姓仕事をしたというNさんは、はじめは鎌の持ち方も手順もわからなかった。麦や芝などの仕事では、腰が痛くなってのばしていて、夫から「かかしはいらない」といわれたのは今でも忘れられないという。嫁が里帰りできるのは盆、正月、節句くらいしかなかったが、それすら自分からは言い出せなかった。親に会いたいのが人情であろうが、「親があれば（生きていれば）ヒガンメイリ（彼岸参り）なんて行かなくていい」と言われたとB田さん。田場沢では嫁と姑の関係を「オジがオバでもカカアとなれば、つらいもんだよヨメシュウト」といったものだという。

姑の仕事　嫁が姑になっても女はやはり忙しかった。嫁が来た当座はまず、自分がやって来たことを嫁に教えることから始まった。ご飯の仕度をはじめ家事全般、女の野良仕事から親戚づきあいまでのひととおりを教えたところで主婦権を渡した。上城のKさんはオバアサン（姑）からいろいろ聞きながら家のことを覚えて、二〇代で「トシマリはたいへんだけど、あんたに渡すよ」といわれて渡されたという。

姑になると、嫁が野良仕事にいくときはもっぱら食事の仕度を担当した。特に夕食は嫁が戻ってからでは間に合わないので、姑が作るのが普通だった。人の食事ばかりではない。姑はもっぱら蚕の世話役だった。蚕と一緒に寝て、蚕のエサをやるのも姑の仕事だった。

このほか嫁も姑も、冬になると手があいてさえいればボッコツギやモズを編んだ。衣類の手入れは女の大切な仕事の一つだった。モズは蚕がシゴトする（マユを作る）ための溝のできているもので、このあたりの女衆は誰でも藁でモズを編んだものだった。

子どもの仕事　昔の子どもは大切な労働力だったので何でも手伝った。父親が山に行けば山で馬をひいたり、百姓仕事をしたりと充分手助けになっていた。中でも小さい子どもの面倒を見るのは、年長の子どもの重要な仕事で、両親が野良仕事に出て忙しい時は、上の子が下の子をおぶって学校に行ったものだった。

朝は学校に行くまえにお茶の用意、庭の掃除、雨戸の開閉、蚕の糞の始末などをした。学校から帰ると、まずはザルをもって桑取りに行った。下条のYさん（大正一四年生）はこの桑取りがいやでわざわざナンドで本を読んだりしたという。桑取りや草取りは自分の家ばかりでなく、兵隊に行って人手のないうちを手伝ったりもした。田の草取りではまちがって稲を抜いておこられたりもしたが、初午やお盆が近づくと、おこづかいがほしくて一生懸命に手伝いをやったものだった。

このほか冬は麦踏み、秋はカラウス（モミスリ）を手伝ったり、女の子は汁煮うどんを作ったりもした。また、女衆と同じようにモシキ拾いや水汲みも、子どもの大切な仕事だった。水汲みは大変だったが、モシキ拾いは皆でいったので割合楽しい仕事だったようで、

学校から帰るとショイコをしょって山に入った。山に風が吹いて落ちたスギッパ（杉葉）や薪は、どこの山から拾ってもよかった。皆で入るので怖くはなかったが、夏は蛇（蝮・青大将）が出るし、草の背が高かったので行かなかった。

子どもの遊び　男の子はメンコ、竹馬、ビー玉、馬乗り、戦争ごっこやチャンバラをした。チャンバラの刀は自分で木を削って作ったものだし、パチンコも自分で作って遊んだ。また、夏は川遊び、お正月は凧あげをした。

女の子は石けりやアヤトリ、オハジキ、まりつき、オジャンメ（オジャミ）をして遊んだ。オジャンメはお手玉のことで、小豆かハト麦を入れた普通のお手玉のほか、長さ二〇センチ、幅二、三センチの竹を使って竹の青を出したり、白を出したりして遊ぶ「竹オジャンミ」で遊ぶこともあった。正月はカルタや羽根つきをした。羽根は木蓮の実に羽をつけて自分で作った。このほか、明治生まれの人は、重ねた半紙の上に向かって針を口からプッと吹いて、針がささった分だけもらうという遊びもしたという。

山や川は格好の遊び場だった。小さい川で笹舟を作って流したり、竹の水鉄砲をつくったり、あるいはどじょうをとって味噌汁の実にしたりもした。女の子はオキナジョウという紫色の花をとって遊んだが、花をとりに山へ行って遅くなったり、メンコに夢中になって着ていたおぶい半てんを泥だらけにしたりして、叱られた思い出は誰にでもあったものだった。

日常の遊びとは別に、子どもたちの楽しみは、祭りの日の露店だった。葛山ではお盆の仙年寺と、初午の日の瘡守（かさもり）稲荷がにぎやかで、一銭、二銭とにぎりしめてあれこれ考えながらお菓子を買うのが何より楽しみだったという。

昭和になると自転車や自動車が登場して、子どもたちの行動範囲も広がった。炭を担いで貯めたお金で、中古の自転車を買った小学生もいて、自転車で三嶋大社まで遊びにいくことも珍しくなくなった。馬車にかわって登場したバスは富岡に一台しかなかったが、いたずらな男の子がジープのようなバスのワッパにくっついて乗り、得意顔をしたのは昭和八年ごろだったという。

(二)　相続と継承

ウッチャリッコとオヤブン・コブン　中里のSさん（明治三八年生）は五人姉弟の、末子の一人息子だったので、たっしゃに育つようにとウッチャリッコされた。E家が男ばかり四人兄弟だったので、Sさんはそのシャテイ（舎弟）になって、その家にキリコミを食べにいったという。昔はこのように、女兄弟の中の男の子一人は育ちにくいといって、男兄弟の多い他家に預けることが多く、預かった家と本人との間で特別な関係が形成された。

田場沢のNさん（明治三五年生）も姉妹が女ばかりの一人息子だったうえ、父親が四二歳の厄年の時に生まれたため、「捨て子」になった。厄年の時に生まれると「（親子の）どっちか負ける」といって「捨て子」をする。Nさんの家では、Nさんを捨ててM家が拾ってくれたことにして、NさんをM家の籍に入れた。M家には五人の男の子がいたので、Nさんはその六人めに入った。とはいっても儀礼的な捨て子であるので、生活は実家で、籍はM家となっていた。

Nさんが捨て子になったのは、それ以前の事情もあった。Nさんの上には兄がいたのだが、Nさんが生まれる以前、女兄弟の中にあっ

てその子が小さい頃に赤痢で亡くなった。こうした経験もあって、N家ではNさんが生まれるとすぐに捨て子をしたのだという。小学校を卒業後、Nさんは改めて実家の養子となったが、以後もM家をオヤブンとしてつきあいつづけ、N家は今もM家にカネオヤをたのんでいる。

キャクボトケと念仏法要　初七日の念仏の日に、お寺で書いてもらった戒名を死者の子ども全員に渡す。この戒名をキャクボトケといい、普通は紙位牌である。これをもらってくると、その家では近所の年寄を集めて「キャクボトケだけどおねがいします」といって念仏を頼む。四十九日までは七日ごとに、子どもたちが順にその家で、キャクボトケの戒名で念仏の法要をする。負担が跡継ぎ一人に集中しない方法で、家が小さくて人呼びが出来ない場合は、本家で法要をしてもかかった金は順にその兄弟が支払う。

家に迎えたキャクボトケは仏壇にはっておくが、年忌はやらない。また家によっては位牌を一週間ごとに兄弟の家にまわして法要をするという家や、まれには四十九日を過ぎて、兄弟全員に位牌を作ってわたすイハイワケをするという家もあるという。

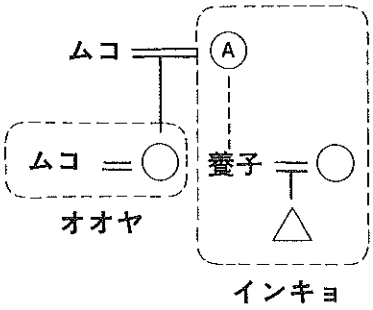
インキョ　大正から昭和の初めころ、葛山には「インキョのおばあさん」と呼ばれる人がたくさんいたという。インキョのおばあさんは、オモヤの裏に一人で住み、食事は別だったがオモヤで水を汲んであげたり、おばあさんに縫い物をしてもらったりと生活上のつながりは深かった。

インキョという言葉は、オオヤ（本家）に対して親が分家することをさしたり、その家そのものを意味することもある。葛山では、他の地区にみられるような跡取りが嫁をもらうことで親が出る、といった形のインキョは一般的ではない。インキョに出る時のキッカケは、オモヤに親が一緒に暮らしにくい特殊事情のあった場合であった。もっとも、特殊事情とはいえその事例は多い。

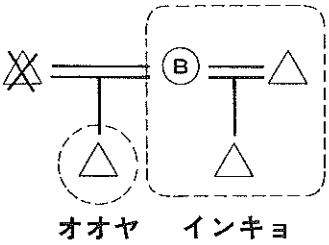
〈A家の場合〉Aさんは自分の娘と折り合いが悪かったため、婿をとってオオヤをとらせ、自分はモトヤシキに家を建ててインキョした。インキョの跡取りとして、二三歳でもらった養子に四年後に嫁をとった。

〈B家の場合〉最初の夫の子どもにオオヤを継がせたBさんは、その後とったムコとの間にできた子をつれてインキョに出た。インキョヤは、すでにBさんのおばあさんがサンモンアキナイ（三文商い）をしていたクラヤと呼ばれる家があったのでそこへ出た。

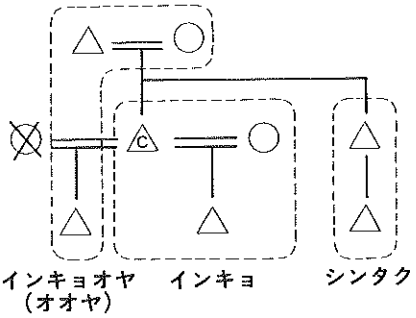
〈C家の場合〉Cさんは先妻の死亡した翌年に後妻をもらい、五人の子をなしたが、先妻の長男が結婚したのを機に、妻子を連れてインキョに出た。インキョヤはオオヤの東側の土地を買って建てた。



図II－10　〈A家の場合〉



図II－11　〈B家の場合〉



図II－12　〈C家の場合〉

Cさんがインキョに出たので、オオヤはCさんの親と先妻の長男夫婦が残り、オオヤの家督はCさんをとばして、Cさんの親からCさんの息子へと受け継がれることになったが、これについては親類の承認を得るのが大変だったという。またオオヤは、インキョとシンタクの二軒の「インキョオヤ」と称している。

インキョにはおじいさん、おばあさんが住んでいることから、年寄り（祖父母）になついた子どものことを、転じてインキョッコと呼んだりする。

イセキムスメとテャーマツナギ　かつて葛山では「長男、長女は（ムコやヨメに）行くじゃない」といって、最初の子が跡を取ったものだった。最初の子をオオゴといって、震災前までは女でもオオゴが家を継ぐのが普通だったという。跡取りを、このあたりではイセキというので、跡取り娘のことをイセキムスメといった。ムコをもらう前のイセキムスメが、建前の餅撒きで棟の上にあがったこともあったという。イセキムスメはムコをとっても、戸主は女の名のままで、相続権も女にあった。

相続についての習慣は、大正末ぐらいから変化をみせた。イセキムスメは、その下の弟が跡を継ぐまでの繋ぎとなったのである。長男の生まれるのが遅いと、跡を継ぐまでに両親は年をとってしまうため、先に生まれた長女にムコをもらってオオヤを守らせるのである。このことを、長男が成長するまでの間の「手間を繋ぐ」という意味で、テャーマツナギ、あるいは「松明が消えないように間を繋ぐ」と解釈してタイマツナギともいう。イセキムスコが大きくなると、ムスメムコに財産を分けて分家させる。これを「テャーマツナギにくれる」という言い方をする。

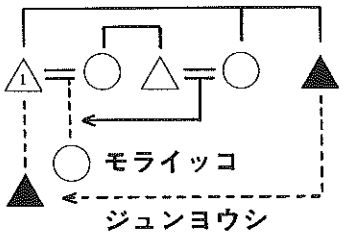
上城のIさん（明治三五年生）は、長女として一四歳で戸主になってから、二九歳で弟が祝言をあげるまでの一五年間、テャーマツナギとしてオオヤを守ったという。Iさんの父は次男だったが、オオヤのイセキの兄に子がなかったため、Iさんの弟がイセキムスコとなった。Iさんの父親はIさんが八歳の時に亡くなり、母親もIさんが一〇歳の時に家を出され、さらにイセキだった伯父も一四歳の時に亡くなってしまったため、それ以後、弟が嫁をもらうまでIさんが戸主としてオオヤを守った。Iさんは一八歳で九歳違いのムコをとったが、弟がオオヤをついで自分たちがシンコに出る二九歳までの苦労は「今考えるとゾングリする」ほど「気骨が折れた」という。

ツブレヤシキと両養子・ジュンヨウシ　跡を継ぐものがなく途絶えた家をツブレヤシキといい、シンセキがその屋敷地を管理した。ツブレヤシキは、その一族が分家したりして再興されることも多い。

上城のSさんはもともとは伊豆佐野に生まれたが、兄弟が多かったので、子どもを亡くしたばかりで乳がはって困っていたS家へ預けられていた。三、四歳の時に実家から返してほしいといわれたが、S家ではかわいがっていたので手離せず、Sさんを養女にしてムコをとり、ツブレ地のヤシキを再興して分家させた。

ツブレ地のモトヤシキの再興は、インキョの際に行われることも多かった。前出のA家の場合のインキョの養子は、高根村のK家の四男で、四歳のときに上城のS家へもらわれた（モラワレッコ）。さらにM家へ小学校四年を出てから八年間奉公に出たあと、二三歳のころに養子ムコとしてA家に入り、ヨメを迎えて両養子となった。このように両養子が跡をとる例は珍しくなかったようで、中村のKさん（大正六年生）の嫁いだ家は、先代、先々代と両養子だったという。

全く縁のない養子をもらうのではなく、血のつながっている養子を求める傾向はもちろんある。ジュンヨウシ（準養子）は、年下の兄弟を、子がないのでかわりに跡取りとしてたてることをいい、よく行われている。N家では、長男に子がなかったため、年のはなれた弟をジュンヨウシに、また妻の兄の末子を養女にして育てた。養女は生まれてすぐに母親が亡くなったので、モライッコをしたもので、成長したのちはN家から嫁に出た。

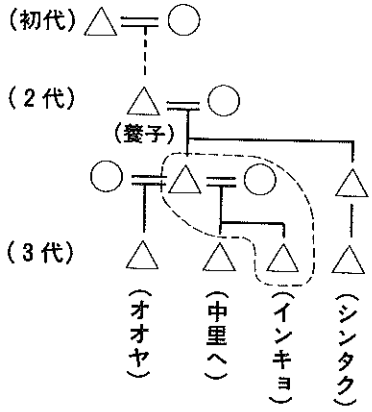


図II－13　〈N家の場合〉

子どものうちにもらうのをモライッコ、大きくなって相続を目的としてもらうのを養子といって、両者は扱い方も意識の上でも区別されている。

相続と継承の実際　先に述べたように、葛山での相続は長子（男女の別なく初生子が継ぐ）相続から、長男相続への変化が大正年間に起こっている。さらに昭和になると、長男は家を出てしまい、次三男が家を継ぐ例が珍しくなくなってきた。家の相続と継承については、さまざまな条件の中でいろいろな形をとって現在に至っていることが、調査結果に明らかである。ここでは二つの家の事例から相続継承の実際を述べておこう。

〈a家の場合〉　上城のa家では、初代が御宿からラオヤをはじめるために移り住み、金沢から嫁をもらったが子がなかったため、養子をとった。その息子は先妻が亡くなったので、翌年後妻をもらい五人の子をなしたが、先妻の長男が結婚したのを機に、妻子をつれてインキョに出た。このインキョは、長男が中里へ出てしまったため、次男が跡を継いでいる。オオヤは先妻の長男の子が継いでいて、インキョの代はオオヤの代数としては数えない。つまり世代順ではなく、家督が継承された順に代数は数えられるというわけである。インキョやシンタクはオオヤを「インキョオヤ」といい、オオヤのカネオヤは二代めの養子の実家がつとめている。

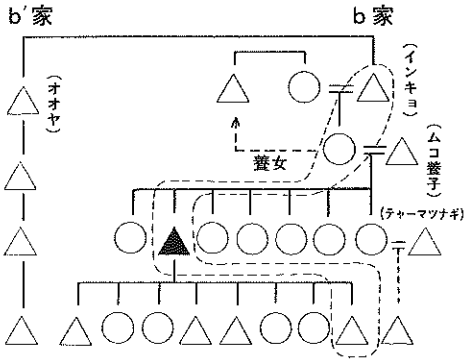


図II－14　〈a家の場合〉

〈b家の場合〉　b家の長男だった話者の祖父は、妻に死なれてから、一人娘を妻の実家に養女に出して自分はインキョし、オオヤはその弟が継いだ。一五、六歳になった娘を改めてインキョヤにひきとったものの、娘をb家の籍に入れるとなると、オオヤの相続の問題が生じるため（長男の一人娘となると当然相続権があるから）、

籍は祖父の仲人をしたN家に入れた。

b家に戻った娘は今里からムコ養子を迎えて七人の子をなしたが、話者である一人息子はその六番めの子であった。そこでb家ではこの子が無事育つようにと、捨子をして一時S家の籍に入れてもらい、長女にテャーマツナギをさせた。話者の長姉はムコをとってテャーマツナギをしたが、子がなかったので養子をとったものの、その子は結局出身地の沼津へ帰ってしまったので、その後はb家の下の畑へ分家した。こうして話者が今住んでいる家は、その祖父がインキョし、母がムコをとり、さらに姉がテャーマツナギをして継承したインキョヤというわけである。



図II－15　〈b家の場合〉

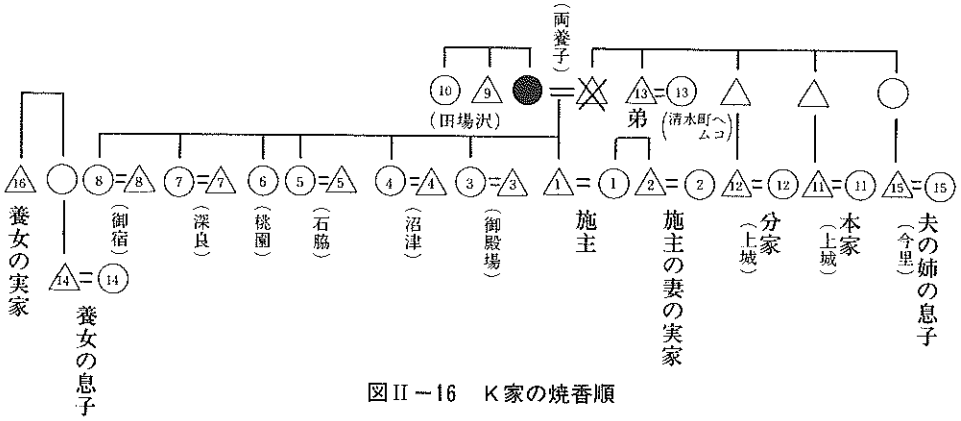
b家のカネオヤについては、話者の母親とテャーマツナギの姉は、母親の籍を入れてもらったN家、話者は捨子で籍を入れてもらったS家、そして話者の長男、さらにその長男（話者の孫）はb家のオオヤのb′家となっている。

第三節　親族と付き合い

(一)　本分家関係

オオヤとシンヤ　葛山では本家をオオヤ、分家をシンヤ、シンコ、あるいはワカレといい、隠居分家は別にインキョと呼ぶ。また本家、分家の系譜が意識されてる家々の集まりをイット（ウ）という。オオヤとシンヤ、インキョとの関係は土地の分与によって成立している。シンヤやシンコは、次三男、あるいは姉が本家から宅地や畑、あるいは共有林の権利を分けてもらって一軒前となる。インキョはその主体がオオヤの跡継ぎの兄弟ではなく、その親であることにシンヤとの違いがあるが、土地の分与が伴うことにはかわりがない。そこでオオヤということばは、血縁関係にない家でも、土地の貸し主（地主）に対してオヤブンの意を含めて使用される。反対に土地を仲介にしない本分家関係についてはオオヤ－シンヤとはいわず、遠く離れてしまうとその関係自体、三代以上はつきあわないという。

シンセキづきあい　一家の手だけでは足りないような仕事や行事のある時に、その手伝いをするのがキンジョとシンセキである。労働力の提供は、「お互いさま」が前提で、シンセキ同士で行うことの多かったイイガエシはその代表的な例である。田植えや田うない、サツマイモ掘りなどのテツダイでイイ（ユイ）を組むシンセキは決まっていたものだった。また、家を建てたり、屋根を葺きかえたりする時は、近所が総出で手伝うものだったが、この時もシンセキは近所以上に働き、ご祝儀も建前で米一斗は出したものだった。



図II－16　K家の焼香順

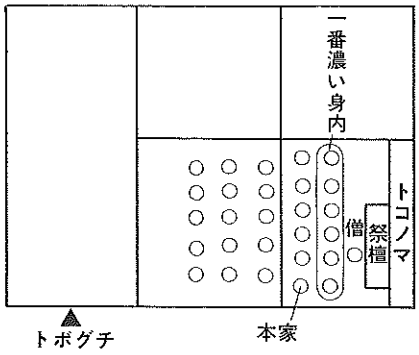
結婚式や葬式、法事などは、とりわけシンセキの出番で「シンセキは義理固かった」という。昭和三〇年に結婚式をあげた人の話では三回の座敷があって、一番めが午後二時ごろまでシンセキ、二番めはその後夕方までで消防団や青年団、三番めに夜まで友人をもてなした。シンセキの席では組の衆が、組の人の席ではシンセキがトリモチをするというように、モヨリ（近所）とシンセキは共に働きあった。

昭和五〇年ごろに自宅で結婚式をしたというMさんは、オオヤの跡継ぎだったので、シンヤのYさんが、二、三日前から手伝いに行ったという。この時は自宅のにわとりをつぶしてもって行き、男衆は魚を焼いたり、家の中の片付を手伝った。

葬式の参列と手伝い　葬式手伝いには、トブライグミ（葬式組）の人は夫婦で来るのに対し、イットウは家内中で来る。昭和六三年一二月に田場沢で行われたK家の葬儀の例から、シンセキの参列と手伝いについてみてみよう。

前日の通夜の席と、当日焼香のあとに参列者に挨拶をするのがシンセキ代表で、K家では死者の娘（長女）の夫がつとめた。また、ハマオリのあとのキチュウ（忌中）はイットウの家を提供することになっており、ここでは婿の姓にかわってはいるが、田場沢に居住するのでイットウとしてつきあっているN家が会場となった。

焼香順については図II－16のようになっていて、死者により近い、いうなれば血の濃い順になっている。まず施主、つづいて施主の妻の実家、そのあとは娘とそのつれあいが続く。さらに同じ田場沢内に住む弟、妹、それに両養子でK家に入った夫の本家と次の兄が出た分家（共に上城）、そして婿養子に出た夫の弟。夫の姉の息子の前には養女の息子が入り、最後がその実家という順であった。死者の血縁関係が優先しているのは、この夫婦が両養子であったこと、あるいは死者の弟妹が同一部落内に居住していること



図II－17　ネンカイの座順

にも関係があると思われる。

葬式後のネンカイ（法事）の際にも、自宅で行う場合には一列めに、死者に一番濃い身内が座ることになっている。

(二) 親分・子分

ナコウドとカネオヤ　昔は誰にでもカネオヤとナコウドの両方がいたものだという。ナコウドは実際に結婚の世話をしてくれた人、口をきいてくれた人で、嫁をもらいにいく時などに骨を折ってくれる。婿側、嫁側それぞれでたてるが、嫁側のナコウドはそうした口をきいてくれた人にたのむ場合が多いのに対して、婿側ではクミの有力者や一番のシンセキに頼むことが多い。そうしたナコウドを「親ナコウド」ということもある。ナコウドは財産があるなしにかかわらず、懇意の家がつとめる。

これに対し、カネオヤは「オヤブン」とも呼んで、「どんなことがあっても力を借り、困った時はカネオヤに頼む」というように、頼れる存在であることが第一の条件であった。カネオヤは一軒だけ頼む場合と、両家でそれぞれに頼む場合とがあるが、シンルイである必要はなく、オオヤでも家が衰えていれば頼まない。つまりカネオヤを頼まれるということは、その家が高く評価されたということになるわけで、頼まれて断わることはまずないという。こうしたことから葛山に限らずこのあたりでは、御宿村の名主だった下湯山の湯山匡秀家が頼まれることが多く、匡秀氏で五、六軒、その父芳香氏は二〇軒近い家のカネオヤになっている。最近では市会議員などがその選挙活動の一部として、このカネオヤを買って出ることも多いという。

カネオヤは結婚後は、子どもができると紅白の腹帯やお祝いをくれ、名付けも頼まれる。頼んだ方でも盆暮にはあいさつにいき、その関係を「ナコウド三年、オヤ（カネオヤ）一生（五年とすることもある）」という。このことばは、ナコウドは結婚に関してのみ頼んだオヤであるのに対し、カネオヤは一生の生活においてオヤとして頼りにすることをあらわしている。婚礼の席もカネオヤが上座、ナコウドが下座に座る。

N家では、長男のナコウドは祖母の弟の息子で、カネオヤはN家のオオヤがつとめるという具合に、それぞれの意味合いは異なっている。また、その家にとって頼みにするという関係であるから、ナコウドもカネオヤも必ずしも代々同じ家に頼むというわけでもない。

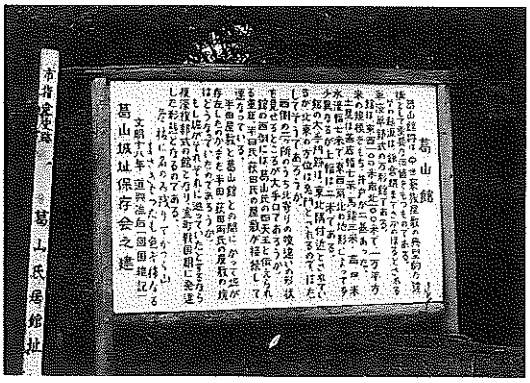
オヤブンに対して、頼んだ方をコブン（子分）ともいう。コブンはカネオヤが亡くなるとシンセキ並みの香典や生花、供物などを出し、手伝いもお通夜から葬式のすべてが終わるまでする。オヤとコの関係であるから、カネオヤやナコウドのことはオトーサン、オカーサンと呼び、その子にもオジーチャン、オバーチャンと呼ばせるという。またナコウドの実の子のことはニーサン、ネーサンと呼んだという。

第四節　村落の形と組織

(一)　村とムラ

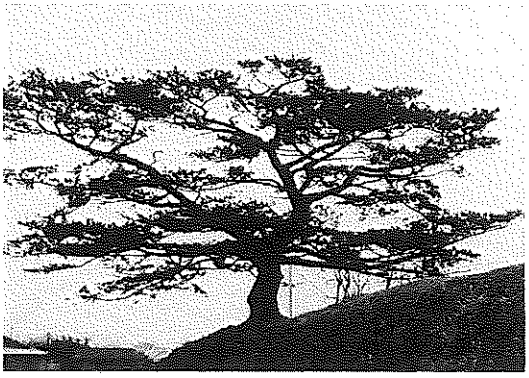
葛山城をめぐるムラムラ　葛山は江戸時代四二〇石余りの石高を持つ旗本領の村であった。明治になって町村制がしかれると、葛山は千福・御宿・上ヶ田・金沢・今里・下和田などと共に富岡村となったが、遡ると、この旧富岡村の範囲は中世、葛山郷と称されていた地域であった。これらの村では今も富岡大念仏が行われ、区長会が開かれて、深い関係にある。

葛山の名称のもとになったのは、室町・戦国時代を通してこの地に居を構え、勢力を伸ばしていった葛山氏と、その城、葛山城であった。葛山一〇代城主惟信（これのぶ）によって、愛鷹山中から現在地へ移転したと伝えられる仙年寺のある小高い山が葛山城跡で、現在裾野市によって城館跡の井戸の発掘作業が行われている。葛山のムラはこの城跡のある山を囲むように存在したが、その中心は葛山氏の館とその重臣たちの住いのあった、城の南側である。



葛山城館跡に立てられた案内板

葛山城にまつわる地名や家系が、葛山には今もたくさん残っている。山の中には遠見塚・城の腰と呼ばれる地名があり、北村の道祖神の近くの旧道の端にあったインキョの店やを、クラヤ（蔵屋）と呼んでいた。館の土地と呼ばれるところが中村にあり、その周囲にはオギタヤシキ（荻田屋敷）、オカムラヤシキ（岡村屋敷）、ハンダヤシキ（半田屋敷）、コウチヤシキ（河内屋敷）と呼ばれる古い家がある。特に半田隼家は、葛山氏の館のすぐ西側で、今もヤカタの七つの社を祀り、ヤカタ跡に「半田松」と呼ばれる松の大木が一〇年ほど前まであったという。


半田松（中村）

現在の葛山は、上城（かんじょう）・中村（なかむら）・下条（しもじょう）・中里（なかざと）・田場（たば）沢（さわ）の五つのムラから成っており、田場沢が城山の裏手、中村が館のあったところで、上城・中村・下条のことをホンムラ（本村）と呼び、これに対してあとの二村を田中（田場沢と中里）と呼んでいる。また、葛山の田は仙年寺南側にしかなく、これをムラダ（村田）と呼んでいる。五つのムラは葛山城東にある浅間神社を、年番をまわして祀っている。また、仙年寺もこの五つのムラが管理しており、葛山の村寺となっている。

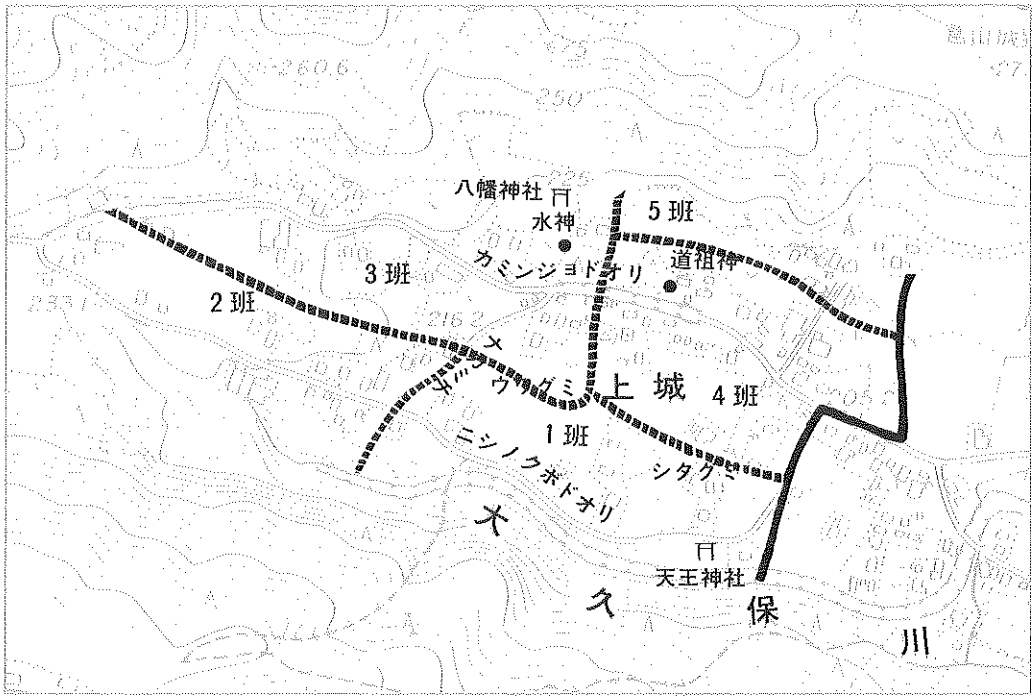
ムラとクミ　この項では葛山の中にある、普段はモヨリ（最寄）、ブラク（あるいは区）と呼ばれる集落を、かつての葛山村や旧富岡

村と区別するために、ムラと呼ぶことにする。五つのムラにはそれぞれに集会場があり、まとめ役の区長がいる。集会場は、以前はクラブ（倶楽部）と呼ばれて、ムラの若者が寝泊まりする場でもあった。子どもたちはムラごとに道祖神の脇に小屋をつくり、サャートヤキ（ドンドヤキ）をやっていた。ムラムラは共同で浅間社を祀るが、各ムラで祀る神社もある。

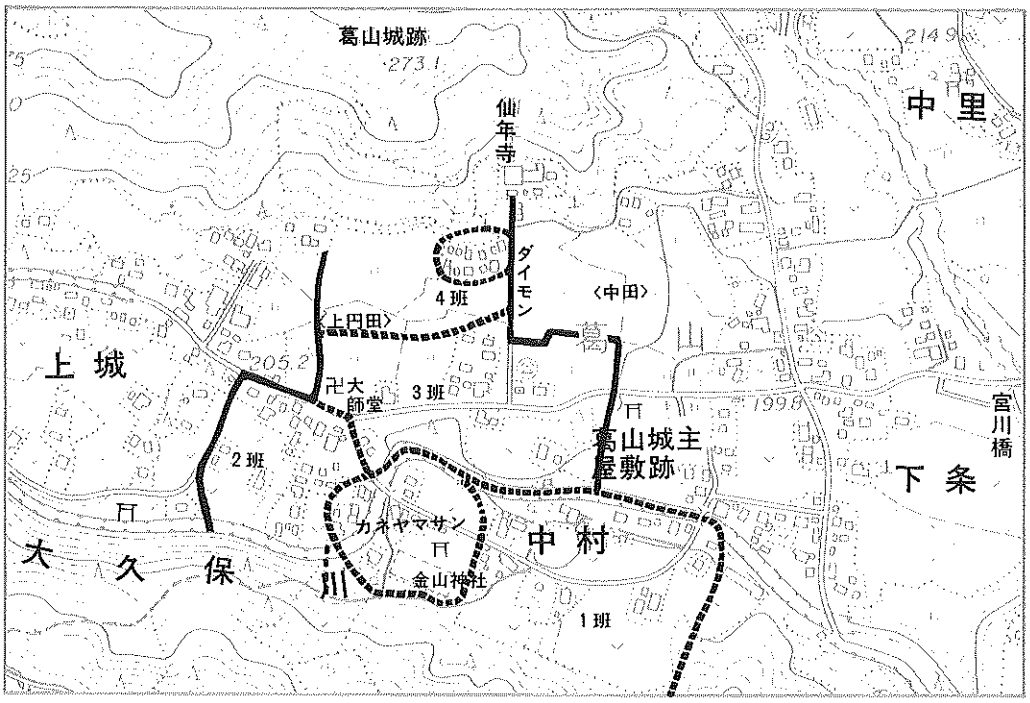
ムラの中にはさらにこれを区分するクミがある。葬式にあたっては、かつてはオクヤミ（会葬）には葛山中から来ていたが、その手伝いはムラの中のクミが行った。現在は家数が増えたために組の数が各ムラとも増加したが、かつてはそれぞれに二ないし三組程度のものであった。クミは基本的には葬式組を意味し、クミアイともいう。現在も、葬式を出しているクミアイ以外の家々は、組ごとにまとまって香典を持って来る。昭和六年に、田場沢では『輿揚当番見

区＼組	現在の組	かつての組	葬式組
上城	1	西窪下組	西の窪
	2	西窪上組	
	3	上城上組	上城
	4	上城下組	
	5（新）		
中村	1	1組	1組
	2		
	3	2組	2組
	4（新）		
下条	1	下条下組	下条
	2	下条中組	
	3	北村組	北村
	4		
中里	1	上組	上組
	2		
	3	中組	中組
	4		
	5	下組	下組
	6		
	7（新）		
	8（新）		
田場沢	5（新）		下組
	1	下組	
	2		上組
	3	上組	
	4		

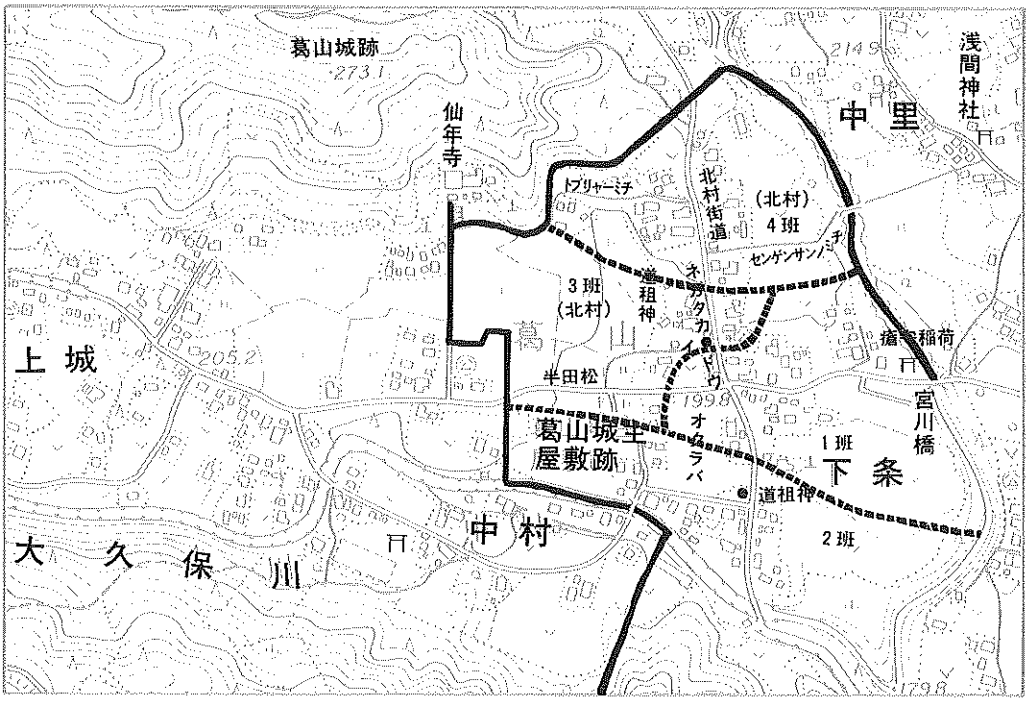
表1　葛山のムラ（区）とクミ



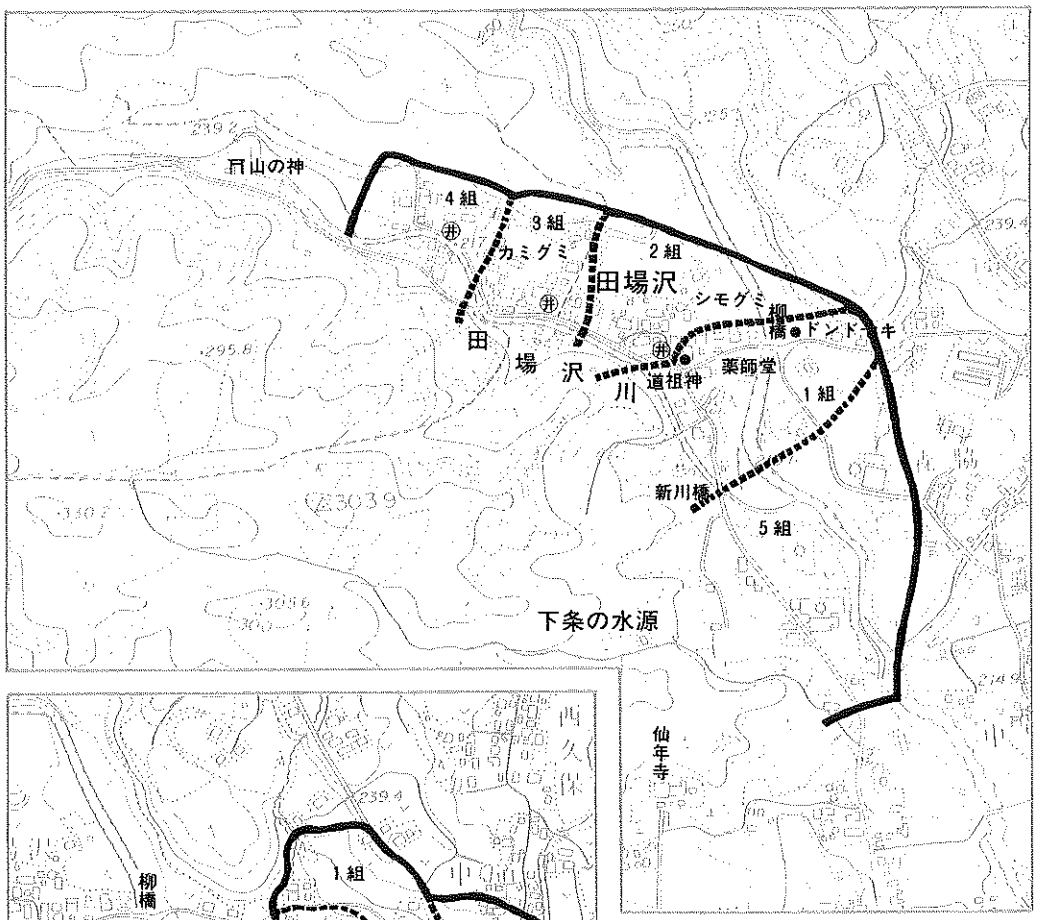
図II－18　上城地区



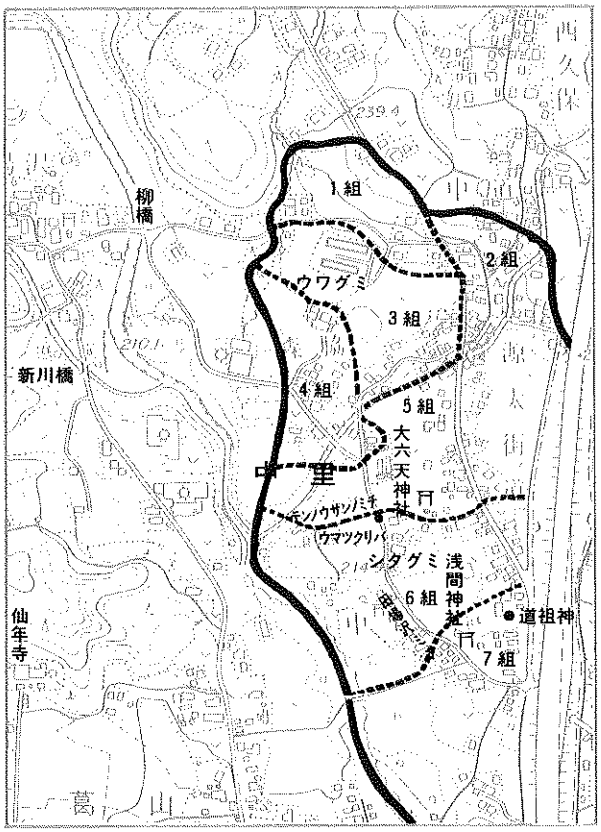
図II－19　中村地区



図II－20　下条地区



図II－22　田場沢地区

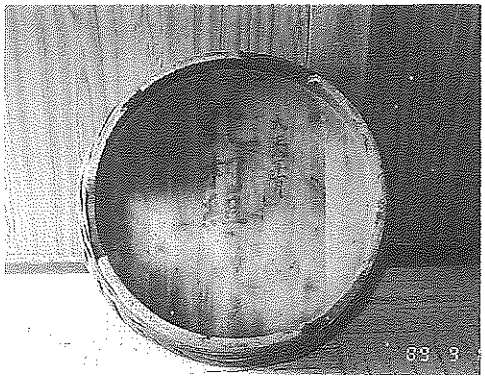


図II－21　中里地区

出控帳』の改正を行い、この時には「輿揚は葬式組で出すこと」と決めている。田場沢では戸数の少なかった昔は、ムラ中で葬式手伝いをしたものだったが、今は二、三、四組が上組、一、五組が下組と二つのクミに分かれて葬式を出している。

上城は、新しい家が出来て五組になったが、もとは一・二組が西窪、三・四組が上城と呼ぶクミで、さらにそのウワグミ（上組）とシタグミ（下組）とに分かれていた。今も西窪と上城は別々に葬式を出している。中村もかつては二つのクミしかいなかったので葬式はムラ中で手伝ったが、今は四組になって一・二組と三・四組に分かれてやっているという。

下条のクミは、現在は四組だが、かつては今の一組を下組、二組を中組、三・四組を北組といい、さらに下組と中組をあわせて下条、北組を北村といっていた。北村は他のムラのクミよりさらに独立性が高く、北村所有の膳椀を持ち、ドンドヤキも下条とは別に行っていた。クラブ（現集会所）は下条と共有にしていたが、意識の上では別々だった。このことは、下条公民館脇の秋葉神社の常夜燈（明治四二年）に「北村・下条・中村　最寄中」と刻まれていることにも明らかである。



北村組と書かれたお櫃（下条公民館）

中里は三五、六軒の当時は上（うえ）・中（なか）・下（した）の三組だったものが、二五年ほど前に五組になり、現在はさらに自動車会社ができたために八組に増えて、葬式組も二組ずつ、四組となっている。

田場沢ももとは一・二組を下、三・四組を上としていたが、今は五組に増えたので、二・三・四組を上、一・五組を下としている。ムラの中のクミは戸数の増減に応じて、しばしば組替えられるのが普通である。

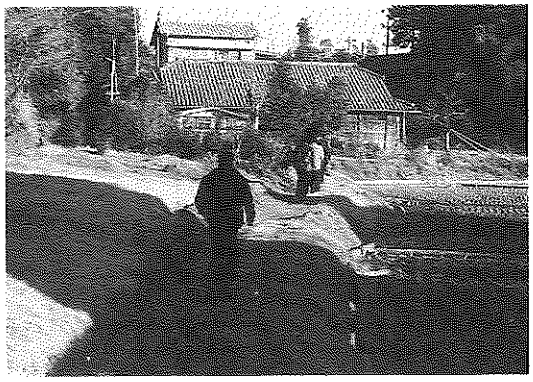
辻の道祖神（田場沢）

ムラ境・クミ境の道と川　葛山ではムラやクミの境を、道や川で区切っている場合が多い。上城、中村、下条、もとの北村はそれぞれ道によって分かれている。また、上城の中も、上城通りに沿って建っている家を上城、西の久保通りに沿っている家を西窪という具合にクミを分けている。田場沢では、臼井裕さん宅へ通じる道を境にミチウエ、ミチシタとに分かれて下刈りなどをしていた。

一方、下条と中里は宮川（佐野川）を、中里と田場沢はその支流を境としている。この中里と田場沢の境の川を、人々はナデ川（またはナゼ川）と呼ぶ。これは中里と田場沢を結ぶ道のナデ川付近が藪になっていて人気がなく、暗くなって歩くと夜露に濡れたススキが顔を撫でるのでついた名前だが、境のあたりはいかにも不気味で、

顔を撫でるのはカヤボー、つまり幽霊に思われたものだった。こうしたところには幽霊のほかオイハギや狐も出るといわれた。ナデ川には誰かに撃たれて三本足になったという狐が住む横穴があって、中里のNさんは落葉をかきに行った時に穴に入って狐の毛を見たという。しかしナデ川の狐が人を化かすことはなかったという。

ムラの境に幽霊が出るといわれるのは、そこが、ただムラとムラの境というより、この世とあの世の境のように感じられるからである。田場沢では葬式の時に、葬列を組んで寺へ行く途中、下条へ通じる北村道（根方街道）のムラ境、田場沢川の橋の上から、葬儀に使った仮門をナンマイダブを唱えながら投げ捨てる。ちなみに葬列は、往きは北村道を通って正面から寺に入るが、帰りは仙年寺の参道を通らずに東側のトブリャーミチを帰っていく。



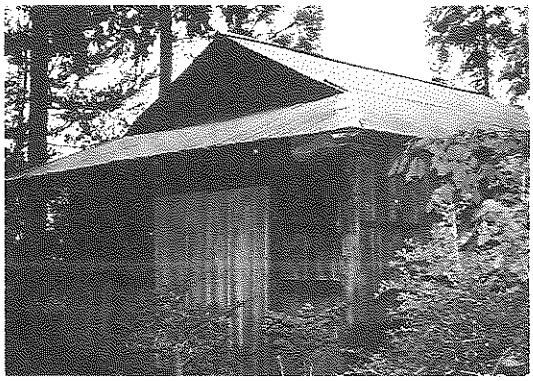
葬式帰りのトブリャーミチ

葛山の村の中を分けるのは道と川であるとしたが、前述のように、ホンムラ（本村）と呼ばれる上城・中村・下条を分けるのは道、中里、田場沢を分けるのが川であることに注意したい。道は川ほどに二つの地区を大きく分けない。境が何によって決められるかは、ムラ同士の関係を表しているともいえよう。

(二) ムラの組織

寄合と公民館　公民館は、その前身をクラブ（倶楽部）といって、青年たちが寝泊まりし、集団生活をする場であった。こうした活動が行われたのは、明治から大正にかけての青年団運動の盛んだったころで、農閑期には夜学会などもひらかれた。その後、倶楽部を建てかえて、今のような公民館を作ったムラがほとんどだったが、中には中里のように全く別の場所に作ったというところもある。中里のもとの倶楽部は、大六天社の境内に今も使われなくなったまま残っている。

倶楽部という名称からもわかるように、その起源は、近代の青年団運動の中でできあがってきたと考えられ、さほど古いものではない。しかし倶楽部以前、ムラにはお堂があった。現在、田場沢の公民館の並びにある薬師堂は、公民館のできる前は倶楽部として使われていたという。同様に、上城の公民館はもとは一五畳くらいの倶楽部で、となりに大師のお堂があったのを建てかえて、公民館の奥の間を仏間とした。公民館は念仏堂としての機能も兼ねていて、田場沢の下組では

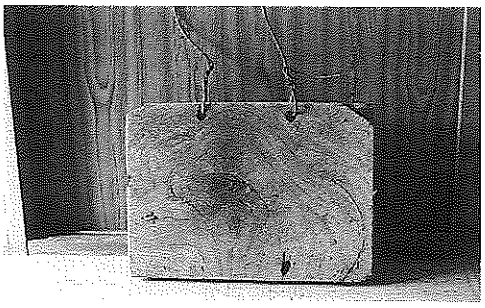


中里の青年倶楽部

葬式のあとのキチュウ（忌中）は公民館で行う。

寄合はムラごとに行われるが、今は市からの通知を伝達するために二か月に一回くらい、組長が組の人に声をかけて集まっている。

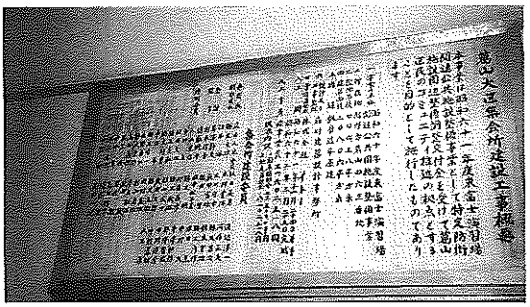
上城では寄合の集合時間には、番木や太鼓をたたいてこれを知らせたものだった。市からの通知の多い四月、五月は月に一、二回開かれることもあるという。田場沢では毎月の寄合を二〇日頃に開くので「二十日会」といい、市の水道料や区費、淡島講の会費なども集める。集金以外の集会には、必ずしも全戸が集まるわけではなく、主として役員が集まることが多いが、年一回のハツヨリアイ（初集会）には全戸が集まる。初集会は一月二日で、役員の選出や年間の事業報告などを行う。また田場沢では、正月一七日の山の神講の時にも、ジョウカイ（常会）をやりながらナオライをするという。山の神講は各ムラで公民館（昔は宿）に集まるが、昔はこの時にバクチなどもよくやったものだという。



寄合を知らせた番木（下条公民館）

田場沢の「二十日会」と同様に、集金のために各地区とも毎月二七日ごろに「集金常会」が開かれる。これらの集まりには女衆が出る。かつては納税のための集会だったが、今は区費をあつめたり貯金講などといって貯金をしたりしている。

また、葛山全体の総会も、昭和六三年に大区を廃止するまでは、正月五日に仙年寺で開かれていた。大区長の引き継ぎはこの初寄合で行っていた。



葛山大区集会場の額（仙年寺）

浅間さんと大区長　昭和六二年度まで、葛山には大区長と小区長とがあった。葛山全体を大区、各ムラを小区として、この小区をモヨリ（最寄）といった。ムラごとの五人の区長を昭和四四年までは「最寄総代」と呼び、そのまとめ役が大区長であった。大区長は、明治時代には葛山中で選挙をして選んでいたが、お金はかかるし手間も大変ということで、モヨリ（五区）の区長の中から、葛山の鎮守である浅間さんの当番区の区長を順に大区長とするようになっていた。

浅間神社の当番は、上城→中村→下条→中里→田場沢の順にまわり、当番にあたったムラが一年間の神社の世話と祭典の準備をする。祭礼は本祭典が四月三日（もとは一五日だった）で、臨時祭典が一〇月一六日（現在は一六日前後の日曜日）で、秋の祭典の後に、神社で当番区の引き継ぎが行われ、祭りの決算報告書、目録、神社の鍵、幟など、神社関係のものが引き渡されている。また、この時には前の当番区から次の当番区へ、ヒキツギモチといわれるモチも渡される。

神様と共に引き渡されていた大区長であったが、昭和五七年、財

産管理委員会を新たにつくって、六三年度からは大区制を廃止、大区長もなくなった。大区制のころには、各区の最寄総代よりも上に、大区の議案を作成したりする、大区のための協議員という役職もあった。

ムラの役職　公民館が倶楽部と呼ばれていたころの田場沢のムラの役職は、最寄総代(1)、協議員(1)、道路係(1)、部農会長(1)、組長(4)だった。かつては農家ばかりだったので部農会長という役は忙しく、名誉職でもあったという。また道路係は今もミチツクリのオヤカタとして、河川の清掃（草刈り）とコサウチ（道にかぶる樹木を切る）をする「盆ミチツクリ」の指揮をとる。

また、戦前までの大区長には、必ずその人の子分関係の人を頼んでジョウヅカイ（定使い）をたてていた。家によっては子分関係の家を頼むのではなく、区長格の家が互いに区長と定使いをやりあうこともあった。

区長は他の役員とともに、正月二日の初集会で選ばれ、中村では三月一〇日、中里では四月一日にひきつがれる。昔は区長は名誉職であったから、ひきつぎの日は区長宅でムラの人たちにごちそうしたものだったという。区長の仕事は、市の関係の連絡や、老人会、青少年の育成、防災など行政と関連するもののほか、浅間神社に関することや葛山城跡保存会の仕事といった葛山全体のこと、あるいは葬式のコシアゲの台帳の管理といったムラでの生活に関連することまで幅広い。

区長の任期は一年で、前年の区長が次の年の副区長となって区長を補佐する区もある。区長になるまでにはいろいろな役職を経ているものだという。中村の半田守さん（昭和一五年生）は、区長になる前に子どもの小学校のＰＴＡの副会長、中村の子ども会長、体育委員長、組長などを経ており、区長の翌年には副区長をつとめている。特に選挙をするわけではなく、どのムラでも「あの人はどうだろう」と噂され、自然に推薦されるものだという。

連絡係としての役割が主の組長については、各ムラとも家順にまわしている。

また富岡地区ではムラを越えた事柄を話しあうために、区長会を開くことがあり、そのまとめ役としての区長会長を決めている。区長会では消防団や、八月五日の市の夏祭り、一〇月の体育祭などについて話し合いがもたれる。また、一〇月の体育祭については、九月二〇日前後に富岡地区の各区の体育委員長とその補佐が集まって細かい打合せを行う。この他、一二月上旬に中里の公民館に富岡地区の各区長と氏子総代が集まって、タイマ（大麻）の式というのを行い、タイマ（天照皇大神宮）のお札のほか、氏神様（葛山は浅間神社）、歳神様、火の神様のお札を配っている。

なお表2、3に示した役職は、昭和六三年度の田場沢と平成元年度の中村の例である。現在は、この他に葛山集会所管理委員、浅間神社管理運営委員が各区三名出ている。

63年度役員

区長	臼井　裕
副区長	大石　省吾
協議委員	芹沢　友治
事務会計	中村　忠行
1組組長	芹沢　利光
2組組長	芹沢　知春
3組組長	中村　久
4組組長	瀬戸　信治
5組組長	長島　正夫
自主防災会長	勝又　青一
〃（副）	大石　強
体育委員	中村　正仁
〃（副）	大石　隆義
道路係	大石　賢一
部農会長	勝又　実
青少年育成	芹沢　哲哉
子供会会長	長谷川　博
葛山財産管理委員	芹沢　正己
〃	芹沢　友治
〃	中村栄太郎
婦人会支部長	芹沢佐代子
婦人会副支部長	勝又　智子

表2　田場沢役員一覧

平成元年度役員（中村）

区長	半田　守	補佐	勝又　明
副区長	望月　周一		半田　隼
顧問	小見山博文		岡村　治夫
部農会長	瀬戸　秀人		半田　和広
道路係	瀬戸　茂美		勝又　倬泰
衛生委員	真田佳三男		若林　敏
体育委員長	松村　希一		三好　和行
体育副委員長	荻田　政市		
子供会長	荻田　三郎		
青少年育成委員	木村　武利		
組長	①兼井　登		
	②菊地　昌志		
	③勝又　一		
	④荻田　哲弥		
自主防災会長	杉山　秀親		
宮世話人	御宿　昌彦		
寺世話人	岡村　治夫		
	荻田　人見		
財産管理委員			
代表者	勝又　作雄		
	兼井　登		
	荻田　人見		

表3　中村役員一覧

（参考）村規約

契約書

自明治卅五年
至　仝卅九年

富岡村葛山

契約書

今回大字葛山ニ於テハ諸般ノ幣風ヲ一結スルタメ一同協議ノ上諸事取究メヲ為シ茲ニ契約締結スル事左ノ如シ

第壱條

一会議ヲ要スル事件到来主任者ヨリ触示タル時ハ必ズ日時等ヲ違ハズ出席可致候事

但シ不止得事故有之出頭相成兼候節ハ其理由主任者ヘ届出可申候事

第弐條

一諸納税義務ハ必ズ納期日完納可致候事

第三條

一道路橋梁修繕及ビ共有地栽培等人夫ヲ要スルトキハ主任者ヨリ触示タル節ハ萬障操合セ午前八時ヲ期シ必ズ出勤可致候事

第四條

一法律規則ニ依リ萬事取調物到来致主任者ヨリ触示タルトキハ時間ヲ違ハズ必ズ出頭可致候事

第五條

一一同総会議ヲ要スルニ替ヘ組合長会議ヲ為ス時ハ重要ノ事件ニ付キ万一組合長不止得事故ニテ出頭相成兼候ハヾ相当ノ代理人ヲ出頭可為致候事

第六條

一大字ニ於テハ徴兵現役中ノ者ニ対シ道路橋梁修繕人夫其他ノ追廻シ役ト称スル人夫等総テ免除スル者トス

第七條（ママ）條

一当大字ニ於テハ諸般改革ヲ行フニ付テハ祝儀無祝儀ニ拘ラズ甲乙二種ニ分チ甲ノ客席ニ於テ使用スル酒量ハ壱人ニ付キ弐合ヅヽ乙ノ客席ニ使用スル酒量壱人ニ付壱合ヅヽト相定メ誤施行スルニ付テハ各組合長管理ヲ致シ不都合ナキ様取締可申候事

第八條

一大字ニ於テハ諸芸人ヲ雇ヒ奥（ママ）行等一切致間敷候事

第九條

一当大字ニ於テ伊勢参宮ハ下宮ノ節乗馬ニテ迎等一切致間敷候事

第拾條

一前條ノ如ク定ムルニ於テハ縁故薄キ家ニ対シ浅別等持参致間敷ハ勿論参宮人ニ於テモ同類ノ家ニ対シ御守札土産物等一切持参致間敷候事

第拾壱條

一当大字ニ於テ各自ノ親類等ニ於テ死亡者有之候節ハ隣家組合ノ者悔ニ出頭可致候得共各惣代トシテ弐名限リ出頭可致候事

但シ香料ノ義ハ各適宜惣代人ヲ依頼可致候事

第拾弐條

一当大字共有地内ノ生拵木及ビ諸共有物件等売却スル場合ハ協議員組合長ト相談ノ上ニアラザレバ是ヲ売却致間敷候事

第拾三條

一同盟規約ニ対スル役員ハ当分ノ内之ヲ置カズ故ニ同盟者一同ニ於テ規約ヲ確メ相寄リ可申候事

契約追加

一大字協議費ノ義ハ納期日十日以前ニ切符ヲ発シ納期日完納可致ハ勿論ニ候得共五日以内ノ猶予ヲ与ヘ尚ホ不納スルニ於テハ組合長立合不納者所有ニ係ル物品ヲ抵当トシテ組合長之ヲ預リ置キ五日間ノ猶予ヲ乞フ事アルベシ前記猶予ヲ乞ヒタルニ付テハ萬々一五日以上ニ及ブモ尚ホ完納セザルニ於テハ誤物品ヲ売却致シ其代金ヲ以テ納金ヲ完納セシメ若シ残金有之候節ハ所有者本人ヘ返戻スルモノトス

一他人ノ諸（ママ）有山林ヘ猥リニ入込立木等採伐致間敷ハ勿論田畑等ノ畔苅及ビ苅敷場茸場等人入込ミ猥リニ株等一切苅取申間敷候事

一一個人ノ所有地外ノ茸場等ニ於テ茸穂等一切苅取申間敷候事

一壱個人ノ所有地外ノ雑地等ニ於テ新竹一切採伐申間敷候事

但シ屋根用筆軸等ハ此限ニアラズ

一総テ集会ニ正当ノ事故ナク欠席スル者ハ左ノ処分ヲ為ス者トス

一日以上ノ集会ニ欠席ナス者ハ其日時ニ相当スル歩役を課ス者トス

但シ早朝ニ出席スベキ会議ヲ午后ニ出席ノ者ニハ則チ半人ノ歩役ヲ課ス者トス

第拾四條

一前條ノ如ク契約スルニ於テハ萬々一違約者有之候節ハ協議委員組合長ノ会議ヲ開キ相当ノ処分法ヲ定是ガ処分ヲ為ス者トス

右契約締結スルニ於テハ各々署名捺印シ相互ニ違約仕間敷候事

第五節　共有と共同

(一)　ムラの共有財産

ヤマの権利　近年まで、葛山には葛山全体の共有林と、それぞれムラごとの共有地があった。人々はこれをヤマ、ニュウカイあるいはキョウユウと呼んで共同で手入れをしながら、さまざまに利用してきた。長い年月をかけて植林した木々は三〇年以上でないと売れないので、父の代で植林したものを息子の代で伐採した。伐採によって得た金は、青年会の活動資金となったり、区の財源や寄合の時の宴会費用になったりした。

田場沢では、赤潮会（せきちょうかい）という名前の青年会が共有一町二、三反のヤマの木を売ったお金で浅間前の土地を買い、そこで野菜を作って活動費としていたという。ヤマを開墾して作物を作った時代もあった。ヤマの木を売った金を分配したこともある。下条では昭和九年ごろ、共有二五軒でヤマの木を売り、その代金を一軒につき六円五〇銭ずつ分配した。ある家ではその金で、草屋根を杉皮で葺き、瓦屋根に直したという。上城では立木を売ったお金で、手動のポンプを購入したことがあった。

共有地の利用として重要なものの一つに、屋根替え用のカヤバがある。上城には四、五町歩のカヤバがあり、年に一度山焼きをしていいカヤを作ったという。共有地の草やカヤは誰が刈ってもよく、冬になるとムラ中で、屋根替え用のカヤを刈りに行った。このカヤバは、もともと愛鷹山共有地に、沼津町ほか一〇か村共有のカヤバがあったのを、のちに解散してムラごとに払い下げていたものである。

ヤマの権利は、分家に出る時に権利金を出して買う場合と、本家の権利を分けてもらう場合とがあった。しかしこうしたヤマの権利も、カヤ葺きの家がなくなり、材木が売れなくなってあまり利用価値がなくなってきたのと、開発ブームとが重なり、共有林は次々に売却されることになった。共有地にかわって、昭和四五年ごろからはじまった東急への売却のほか、自衛隊の演習場などのため、売却したり貸与したりした金が、今度は「共有の財産」ということになったのである。

共有財産と共有施設　田場沢では、共有地を売ったお金で、昭和四七年に公民館を建てた。残金の一部で、全戸に水道をひいてメートル機をつけ、さらにあまったお金を預金してその利子を増やし、ムラの財産としている。この財産の権利者は四八、九人で、新入者には権利はないとしている。また田場沢は同じくカミナリさんの反対側の共有地を売ったお金で、田場沢川の改修もしている。共有地の権利のない人もその恩恵はこうむることになるので、一戸につきアタマッパライ（頭払い）で一〇万円を払ったという。

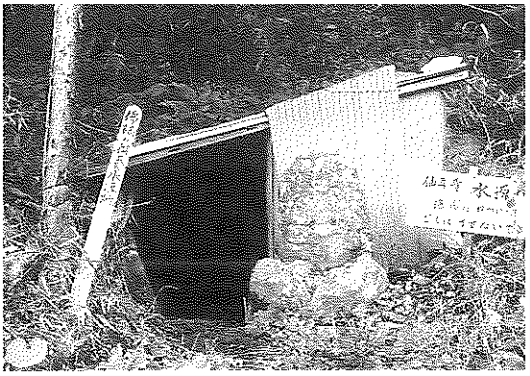
上城でも、二町歩のヤマを売った時に、そのお金で公民館を建て、

ムラの共有物（下条）

残りの一部を各戸に分けて、あとはムラの一般会計に入れている。公民館が建ったあとに上城に入って来た人は、利用の権利として、一人あたりにかかった費用の八割見当ということで、やはり一〇万円を払ってムラ入りすることになっている。葛山全体のヤマの財産管理については、現在は各ムラから財産管理委員が出ることになり、共同で管理している。大正一三年に造った宮川橋は葛山全体の共有林の立木を売ったお金でできたもので、富岡地区では最初のコンクリートの橋として建設された。

もちろんムラ全体で共有の施設や道具をもつことは古くから行われてきたことではある。前述の公民館にしても、これを建てる以前にもすでに倶楽部があり、さらに遡るとムラごとにお堂があった。田場沢の薬師堂は古い時代には今より西の山の方にあって、明和元年（一七六四）に今の場所に移したと伝えられるが、現在の土地はムラ共有のものであり、三〇人ほどがその権利をもっている。登記上は個人になっているが、ムラとして登記者の権利は放棄してもらっているという。

田場沢にはまた、膳椀小屋もある。どのムラも、公民館に講や寄り合いの時に使用する共有の食器や道具類を保管している。下条公民館には「北村」と書かれた道具の箱が並んでおり、道具については下条と北村は別々の管理だったことがわかる。



水源地（仙年寺）

水の確保が大変なムラでは、水源の共有も重要な問題だった。下条では、古くから葛山城の裏の山の水源から水を引いている。特に大震災以降、水が不足するようになってからは、一番上の家のところにタメ（溜め）をつくり、そこから土管を伏せて次の家のタメに送るというようにしていた。下の方は辻のところに大きなタメをつくって、中組の人達が飲み水に使用したという。田場沢では井戸が枯れることが多く、山の神の下または上のホラから竹の筒で水をひき、ムラの中の三か所の水槽にためて使った。個人個人で水を確保できないムラでは、共有の設備によってこれを得るくふうをしていたというわけである。

(二) 共同労働

ヤマの下刈り　夏になると、ヤマの権利者は全員が出て、下刈り、つまり草刈りを行った。中里では若い衆が、七月の初めから一〇月にかけて毎朝、日課で草刈りをしたが、大野原の演習場は、

演習が激しいので日中はあまり行かなかったという。他のムラではムラ中が一斉に下刈りに入り、最寄総代（区長）が場所などを指示した。権利を持つ人がでられないときは、権利のない分家に頼んだり、出不足金を払った。七、八月は日曜日のたびに出て、終わると倶楽部の前にムシロを敷いて酒を飲んだ（上城）。田場沢は日曜ごとに、タケのカミナリさんの方まで三時間もかかっていって下刈りしたという。

九月になると草がコワク（固く）なるので七月にやった。また植林のネン（年数）の浅いところは、早くやらないと植林した木が草に押さえられてしまうので先に下刈りをする。植林も四、五月にムラ中が出て行った。間伐は以前は二月から三月にかけてやっていた。

下刈りやミチツクリで、一戸に一人の男衆が出られない時はデブソクニットウ（出不足日当）あるいはデブソクといって、日当にあたるお金を払わなければならない。現在も、上城では一日分三〇〇〇円で、女が出た場合はその半額を払うことになっている。もっとも、戦中戦後の男の少なかった時期などは女衆が出ても一人前として扱ってくれることもあったという。

ミチツクリと水路掃除　道普請はミチツクリといって、サトミチツクリとヤマミチツクリとがある。サトミチツクリは里の道、つまりムラの中の道の普請で、盆ミチツクリともいう。お盆の前、マンガアライのあとの旧七夕のころ、今は八月第一日曜日に各戸一人出て行っている。最近は道がよくなったので、コサウチといって道にかぶる樹木を切ったり道の草を刈ったりする程度だが、ドミチ（土道）だったころは大変な作業だった。当時はどの家にも、馬に荷車をつけた馬力があり、この馬力が道を荒らすために「馬力道はコンボリミチ（くぼみがたくさんある道）」といったほど、葛山の道は悪かったという。ミチツクリでは、川原から馬力で砂をあげて直していった。

里の道に対して、共有山の道を普請するのがヤマミチツクリである。田場沢のヤマミチツクリは、春と秋の二回、弁当持ちで朝の八時から夕方五時まで、一日仕事で行った。毎年作っていたので、台風や大水などよほどのことがなければさほど荒れなかったとはいうが、ヤマの耕地へ行く道の穴を埋めていく作業は重労働だった。このヤマミチツクリは、ヤマの耕地を売却してしまった二〇年程前からはやっていない。

水路掃除は、特に寺の前の四町歩のムラダ（村田）の水路で行う。種蒔き前の四月二九日ごろに、ムラダを耕作しているホンムラ（上城・中村・下条）の人と田場沢の一人でつくる。今の水路は大洞堰ができた六、七年前からのものだが、かつてはナカオから四キロくらいを一日がかりでやっていた。この時にセギ（堰）の鉄板を塗ったりもした。

㈢　共同祈願

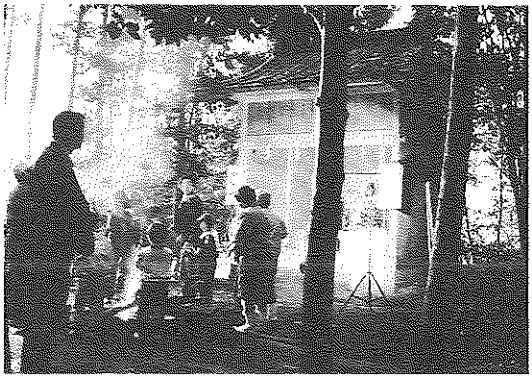
第一にはムラの安全　ムラの人々が力を合わせてするのは作業ばかりではない。人の力が及ばないことに対しては、共同で神に祈願をすることにより、ムラでの共通の利益を得るのである。その代表が祭礼である。祭礼には葛山全体の浅間様の祭りのほかに、ムラごとの祭りがある。田場沢では毎年正月と一〇月の一七日に、山の神まつりを行っている。山の神さんの神社に田場沢中の戸主や子供たちが集まり、夕方五時（昔は昼間だった）から、当番の用意した

山の神講（田場沢）

御供（赤飯）をあげてお祭りする。行灯には「区内安全」と書いてあり、ムラ全体の安全を祈願して祀っていることを示している。

安全祈願するための講としては不動講がある。上城では、昔は毎月二七日に集まったが、今は年二、三回になったという。特に一二月二七日には代参の打ち合せのために集まり、そこで決まった代参人が二月の節分に、神奈川県秦野市の大山神社へ参拝する。田場沢でも、マメマキの晩（節分）にクジをひいて、翌年の代参人四人（昔は二人）を、ムラの上と下からそれぞれ決める。その年の代参人は大山詣で頂いてきたお札を、ムラの人達に配る。かつては代参のための金はサシマワシ（縄につけてまわす）で集めたものだったという。

火事は、ムラの安全を脅かすものの一つである。下条では一二月から二月ごろまで、かつては毎晩二、三人が順に、拍子木をたたいて家々をまわり、火の用心を告げて歩いたものだった。夜まわりのなくなった今も、火事から家を守るために、ムラごとに清水市の秋葉神社へお札をうけに出かけている。公民館前は秋葉様の常夜燈がたっている。中里では区長と組長が一二月五日に、田場沢ではクジで選ばれた代参人が一二月一一日に出掛けていき、ムラ中全戸のお



山の神講（田場沢）

札をもらってくる。各家では秋葉様のお札は台所や風呂場に貼って、今も火伏せの守りにしている。

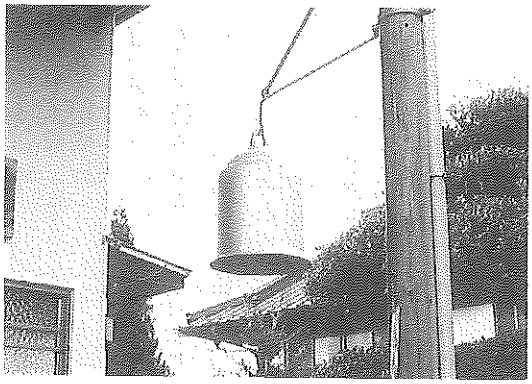
ムラの安全を願う念仏も共同祈願のひとつといえよう。田場沢では、昔は各家をまわって若い人がマワシネンブツをやっていたが、現在は年寄が行うようになって以前ほどには盛んではなくなったという。また薬師堂での念仏は今も年寄りが集まって毎月旧一二日に行っている。

富岡地区全体でも念仏が行われる。大念仏といって、各ムラ一人ずつの世話人が出て、毎年の春と秋に二回、当番のムラにお年寄八〇人ほどが集まって行う。当番の順は、春は御宿新田－葛山（下条）－（上ヶ田）－金沢－今里－下和田で、秋はその逆に、下和田－今里－（上ヶ田）－金沢－葛山（田場沢）－御宿となっている。葛山は春は下条、秋は田場沢が会場となる。

水を求めて共同祈願　水が不足しやすい葛山の人々は、貴重な水を得るために、共同の施設を整えるとともに、協力して神だのみをする。葛山ではカンバツが続くと雷神宮で雨乞いをした。カミナリサンには二段階あって、下のフジバタで効果がなかった時には、さらに上のタケのカミナリサンで再び雨乞いをする。昭和三年生ま

れの話者の二〇代のころに、タケで三〇〇人ほどが集まって雨乞いをしたことがあるという。山の上では「雨降らせたまえ」という組と「カミナリサンへのリュウガンだ」という組が交互にこれを唱えつづける。雨乞いを行うと三日のうちには雨が降るといわれたものだった。

七月二〇日に雷神宮の祭典があり、当番区から代表が五、六人出て、桜塚の一の鳥居から社までのミチガリや境内の掃除をしてお神酒をあげる。また下条ではこの日に辻に幟をたてて、ソフトボール大会などをしている。昭和三〇年代ごろまでは、この時青年団が相撲をとったものだった。



公民館前の半鐘（下条）

一方、上城の水神さんでも、昔は四月一日に祭りをしていた。祭りをやめたのは財産区から予算が出なくなったためという。また、下条も四月一日に水源の水神講を戦後、水道管を付設したのを機にやるようになった。葛山全体の水神として、主に関係する人たちが、昼間のうちに水神に参り、夜講をした。ちなみにこの水神の石塔の年号は、寛延三年（一七五〇）となっていて、今から二四〇年ほど前のものである。

第六節　ムラの集団構成

(一)　近隣集団

ムラでの生活には、血縁関係や系譜関係あるいは姻戚関係といった「縁の結ばれた」シンセキとともに、「近くに住んでいる」家々との関係が重要な意味をもっている。「箱根山の雨と隣のボタモチは必ずくる」ということわざにもあるように、近隣の家同志、何か特別なことがあるたびに交流を深めてきたものであった。このことは、家にとって何かしら日常ならざる出来事が起こった時に、頼りになるのは近所の家、すなわちよくいう「遠い親戚より近くの他人」という事情から来ている。ここでは、そうした非日常的な出来事に際して、近隣の家々が果たす役割について述べておこう。

葬式の手伝い　近所の家々、組内の家々が、最も重要な働きをするのが葬式である。日常における家同志のつきあい、たとえばボタモチを贈るといったようなつきあいは、この突然おとずれる葬式という、一家の大事を無事にとりおこなうためにあるといってもよいほどである。

葛山では葬式組のことをトブライグミという。上城では、一組で葬式が出ると同じ道筋の二組の家が手伝うという具合に、西の窪通りと上城通り、それぞれの道筋ごとに葬式組ができている。手伝いには、同じ組内からは夫婦（一軒につき男女一人ずつ）が出ることになっており、おくやみには上城だけでなく葛山中から出ていく。田場沢では組内以外の家は「部落」として組毎にまとまって、主に嫁さんたちが普段着で香典を持っていく。

昭和六三年一二月に田場沢の三組で行われた葬式では、組長が葬儀委員長となり、通夜に入る前にまず組長が手伝いの役割を決めた。通夜の席には田場沢の全戸から集まってきており、親戚代表の挨拶につづいて組長からそれぞれの役割が発表される。二、三、四組から二名ずつ六名が受付と帳場に入り、トブライグミは夫婦で、イットウは家内中で手伝いに来る。

田場沢のコシアゲについては、昭和六〇年に「輿掲当番見出控帳」を改正して、上組の二、三、四組と下組の一、五組それぞれの組内から出すことになり、一五年くらい前に火葬になってからは組内から二名が出るようになった。コシアゲ台帳と呼ばれるこの帳面は普段は区長が管理しており、

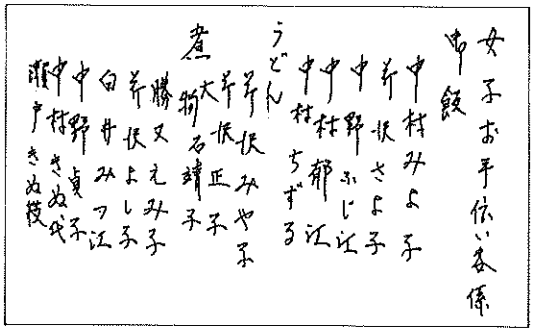
(1)	災害非常時避難場所	上組　芝勝園広場　　中組　天皇神社境内　　下組　浅間神社境内
(2)	祭典行事の件	金比羅神社（3月10日）　大六天皇神社（7月15日）　各神社の祭典は、当日の近い日曜日に挙行する。
(3)	区内葬儀の件	・葬儀は区を4等分して行う（1・2組、3・4組、5・6組、7・8組）但し、人数を特に必要とする場合に於いては、更に隣組の応援を求める事も出来る。 ・通夜、葬儀とも該当組にて行う。但し、通夜には組長以上の役員は全員出席すること。 ・掛米は、該当組1,000円、他組は500円を葬儀日の朝出すこと。 但し、これは香典とは別である。香典は故人との関係で任意である。
(4)	公民館の掃除は、毎月第2日曜日の朝、各組順番制にてこれに当たる。終了後組長は、必ず次の組長に申し送ること。 お休み前にもう一度（火の用心）、外出前に戸締り確認、お隣に一言、災害のない明るい中里区にしましょう。	

昭和63年10月1日の中里区民名簿の末尾につけられた
「中里区民日常あれこれメモ」より

妻が妊娠していたり、濃い身内やイットウの家は除いて台帳順にコシアゲをつとめる。中村ではこの帳面を、コシアゲの人数からヨッタリヅケ（四人付け）と呼んでいる。火葬になってからは、火葬場へはコシアゲとセッタイ（男女数名）が行くようになった。

お勝手では、庭に別火のカマドをしつらえて、張り出された分担表にあわせて嫁さんたちが煮炊きをする。一方、おばあさんたちはダンゴをつくるのが仕事である。組内のおばあさんたち六、七人がコマに集まって、一升五合の米の粉をダンゴにまるめる。男の人たちは、葬儀社がもってきた籠と色紙で花をつくる。旗はやはり葬儀社がもってきた紙を寺へ持っていって字を書いてもらってくる。

このような組内の手伝いは宗派、宗教に関係なく行われるもので、田場沢では過去に創価学会会員の家の葬式を出したことがあった



手伝い分担表

葬式の手伝い

が、この時も念仏講のおばあさんが集まって、ダンゴをつくったり念仏を唱えたりと、ムラでのしきたり通りに葬式を出したという。一見宗教的であるように見えて、葬式というのは意外に慣習的な部分が多く、古くからの一定のやり方というものがムラにはあるものなのである。

近所の年寄りは、三十五日になるまで七日ごとに念仏を唱えるために葬式を出した家に通う。三十五日は浜（このあたりでは河原）に行って供養をし、家に帰って組内や親戚に振る舞いをして引き物を出す。これをハマオリというが、最近は葬式当日に終えてしまうことが多い。

結婚式の手伝い　結婚式も自宅で人呼びをしていたころには、近所の手伝いがなければできないことだった。上城では、葬式の時と同様に通りごとに手伝い合ったもので、大きい家の場合には前日から翌日まで、三日間手伝ったという。

昭和二一年に行ったという下条のK家の結婚式ではキンジョ（北村）は全員が祝いに来て、障子をとっぱらって宴会をしたという。かつては結婚式は農閑期の二月、三月に行われることが多かった。手伝いの中から頼んだ料理番は、式の前日から準備に行き、当日は外につくったカマンド（竈）でオトコシ（男衆）が鯛を串にさして焼いた。祝宴は、親戚、青年団、友人の三回に分けてお膳を出したものだった。

葛山では最後と思われる自宅での結婚式は、昭和四五年一〇月に、新築した上城のN家で行われた。この時は料理の手伝いに、組内の人達が来てくれたという。現在では、すっかり結婚式場が会場となってしまったが、料理は作らないものの、「接待」として酒をつぐなど、来賓のとりもち役をするために、組内の人達は今もホテルや宴会場に呼ばれている。農協の会場では後片付けは組内の仕事となっている。

以前は手伝ってくれた組内に対して、男衆には式の当日にお振舞いをし、女衆は翌日に改めて各人一升のお米を持参して、自分たちで作ったごちそうを食べる。この席をオカタミと呼んでいる。組長さんは、新しくその組に入ってきた嫁さんを組内に連れてまわるクミマワリをする。若夫婦がムラには実際に住んでいないことも多いが、それでも組内に来た嫁ということには変わりはなく、今も名入りのタオルを持ってまわっている。

婚礼ではないが、昔は奉公の年季が明けた時にも本家で組内を呼んでお祝いしたものだった。

建前と屋根替え　家屋の普請については、その労力をお互いに融通しあうのが一般的だった。専門家として大工さんや屋根屋さんは頼むにしても、細かな作業には人手がいるものであったから、やはりシンセキや組内の人達の手を借りなければならなかった。

普請の時の手伝いは、賃金ではなく、労力奉仕であって、施主は食事を出してやってもらうやり方がとられていた。建前では、特に地搗きや地祭りといった建築前の準備の段階で手伝ってもらった。また屋根替えは、萱を刈るところから始まって、萱き替えのためには二日がかりで手伝った。職人は主なところをムラの人達が葺いたあと、隅々の細かいところを葺いたり、形を整えたりしたもので、大まかに葺く段階ではムラ中総出の作業となった。

こうした建築上の手伝いは、屋根を葺く必要がなくなったり、素人が手を出す必要のない家になったり、あるいは大工さんではなく

て工務店の請負という形をとるようになって、近隣の互助の中では最も減ってきている分野であるといえよう。

イイガエシともらい風呂　農作業の助け合いは、シンセキやキンジョの、組織的な組ではなくて懇意にしている家同志の間で行われることが多かった。田植えや田うない、サツマイモ掘りなど、一度期に集中して労働力を必要とするときには、あらかじめ「イイを組んべえ」と誘い合った家同志が手伝いをしあう。イイガエシといって、労働力は同等のものを返すのが決まりだった。馬は人の倍の働きをするので、二二ンといった。つまり、馬一頭と人一人が手伝いに来れば、そのイイガエシは人間三人分に相当した。

キンジョの家々は、もらい風呂をしあった。風呂のない家が多かったり、風呂はあっても水が貴重だった時代には、風呂をたいた家が声をかけると、多い家では二〇人もの人がもらい風呂に来たりした。「ユー(湯)沸かしたからコネャーキャー」と呼びっこしてもらいに行くと、最後は「アカで棒が倒れないほど」あるいは「よく(体を)振って出ないとアカがついてしまうほど」だったという。このようなもらい風呂の習慣は、互いの家を行き来して家内中がより親しくなるよいキッカケになっていた。そうした日常のつきあいが、いずれ起こってくるさまざまな出来事、婚礼、葬式、建前などの手伝い合いの際に生かされてくるのである。普段のつきあいが深いと、田場沢の二組のように「組の結束が固いのでワル(悪口)などぜったいに言わない」という形となってあらわれてくるということであろう。

(二)　年齢集団

青年団　学校を卒業してから徴兵検査まで、ムラの男子は青年団に所属した。大正半ばごろの青年団は、一五歳から二五歳までで、結婚すると年齢に関係なく退団したが、役員になっていると結婚してもひきつづき活動していたという。当時、青年団に入ると夜学があって、一月から三月までの農閑期には読み書き算盤を習っていた。夜学には、今の御宿の公民館に富岡小学校の先生が来て教えていた。夜学を終えると修学旅行として熱海や長岡へ一泊で遊びに行ったりしたという。この夜学は、戦後の一時期に青年学級として復活したこともあった。

当時の青年はムラのためにいろいろな仕事をしたものだった。共同事業といって、山の下刈りを一反いくらで請負ったり、青年団の土地を買って、そこで野菜を作って活動費にしたりした。また、小学校移転の時は、富岡村の青年団全員が出て地ならしをしたという。「朝起き会」という会をつくって青年が道路の整備をしていたので、青年の活動が活発だった昭和二五、六年ごろまでは葛山の道路は大変きれいだったといい、冬は夜まわりをしたものだった。

青年と倶楽部の生活　もちろん勉強したり働いたりばかりが青年の生活であろうはずがない。何といっても遊ぶことが一番の年頃である。体育祭を開いたり、相撲大会を催したり、二〇貫の石を持ち上げる力くらべや菓子の大食い競争やら、水一升飲みくらべて腹をこわしたりと遊びには事欠かなかった。時にはスイカ盗みをしたり、花札で賭をする者もあったし、あるいは夜学の帰り道にそのままヨバイに行ってしまうツワモノもあった。

このような青年たちの拠点となっていたのがモヨリ(最寄)ごとに建てられていた倶楽部であった。当時の倶楽部は、今はそのほとんどが公民館として生まれ変わっているが、中には田場沢のように

昭和21年1月頃の朝起会

薬師堂を倶楽部として使用していたものや、中里のように今も大六天社の社脇に古くなり使われずに倶楽部の建物が残っているものもある。青年たちは明治の終わりごろから戦後まで、この倶楽部に寝泊まりして共同生活を行った。田場沢のNさん（明治三七年生）のころは、薬師堂では（年）上の衆の言うことをきかないとビンチョウ（平手打ち）をもらったりしたという。年功序列の世界で、年下の者は雑用で忙しく、入りたてのころは人より早く行ってランプの掃除をしたものだった。布団は銘々自分のものを一枚ずつ運び込んで、食事は各家でとってから倶楽部へ行った。時には田場沢の青年が中里の倶楽部に泊まりに行ったりして遊んだりもしたという。

田場沢では、赤潮会という青年団は昭和三七、八年ごろに解散したが、この時に青年団の財産だった共有林を区に寄附し、これを売ったお金で現在の公民館を建てたという。

青年のドラブチ・デロブチ　倶楽部に寝泊まりしていた青年たちは、ヨバイに出かけることがあった。夕食後、一人ではなくオヤブンをたてて一〇人程度で出かける。娘の家へは二人一組で行って、年長の方が中に入り、年下の者は見つかって逃げる時のために、外で下駄の番をした。

かつては家の造りはどこも同じだったので入りやすく、親を起こさないように、戸に帯や水をひいて音のしないくふうをしたりしたという。家々でも昭和二五年ごろまでは、息子の嫁が来るまでは、夜でも戸をツメタ（閉めた）りはしなかった。また「ヨバイに入ってもらわないと立派な娘にならない」などということもあったという。

ヨバイは祭りの夜に行くことが多く、好きな娘がいるような時は、反対にヨバイに入られないように青年が守りに行ったりもしたものだった。ヨバイに失敗した青年が、その腹いせに娘の家の庭に石塔を投げ込むなどの悪さもした。このようなヨバイのことをこのあたりではドラウチといい、「ドラウッて結婚した」とかドラウチでできた子を「ドラウチッコ」とか「ドラッコ」などと呼んだ。昔はドラッコは珍しいことではなく、地名としてヨビャー（ヨバイ）坂と呼ばれるところもある。

結婚に関して、青年の係わりは大きかった。婚礼の宴席には青年団は親戚の席のあと二番めの座敷に招かれ、青年団としての祝儀をもっていく。大正四年二月の田場沢S家の婚礼祝儀控帳には「田場沢中里青年　金五〇銭」という記述が残っている。青年たちはムラに嫁いできた新婦に対して、少々手荒い歓迎も行った。デロブチあるいはデロカケといって、田植えの時に新しくきた嫁さんに苗を投げつけたり、植えたばかりの田で泥をかける、あるいは田の中に引き倒すといった泥打ちの儀礼をしたものだった。

子どもと祭り　子どもたちにとって一年中で一番大きな行事がドンドヤキ（サイトヤキともいう）であった。田場沢の子どもたち

は一月四日のハツヤマ（初山＝仕事始め）の日に、山から切ってきた木を六本の柱に骨組みして、麦藁でつくった草屋根の小屋をこしらえた。七日になって小屋の前に正月のお飾りを重ねておいたり、道祖神に注連縄をまいたりするが、上城や北村ではこの時に小屋をつくったという。ムラごとにできあがったこの小屋を、ガキ大将が中心になって壊し合う。葛山の中ばかりでなく、御宿や千福、上ヶ田など富岡中をまわって壊して歩いたという。一方、小屋のそばに穴を掘って、穴の中に下肥を入れ藁をかぶせた落とし穴をつくり、他のムラの子をブチョッタ（落とした）ものだった。

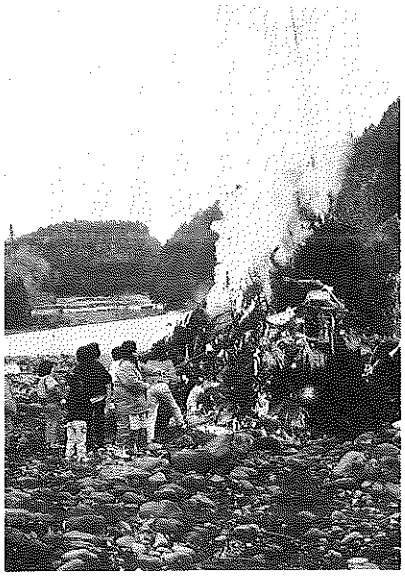
またドンドヤキ当日の一四日まで、高等一、二年の子がオヤカタになり、学校に入ったばかりの七、八歳の子が道祖神のある辻のところで七五三に綯った縄をはる。一週間くらいこの縄で辻の道を通せんぼしては、大人たちから通行料としてお金を集めた。一回につき一、二銭ではあったが、このころになるとあちこちの辻で子どもが縄をはるので、大人たちは何度もお金をとられることになった。集めたお金で子どもたちは鉄砲玉（黒いあめ玉）や菓子を買ったものだった。

田場沢の辻は前が狭いので河原へ行くが、他のムラではだいたいムラの辻のところでドンドヤキをした。お飾りを重ねて竹をさし、そこにダルマを一〇個ほどさげて、お飾りに火をつける。竹に書き初めをさして、この火の煙にかざし高く舞い上がると「手があがる」つまり字がうまくなるといった。またこの火で焼いた餅を食べると一年中カゼをひかないという。

子どもたちがドンドヤキをするグループはモヨリ（区）が基本単位だが、下条についてはかつてのムラの範囲通り、下条と北村は別々に行っている。下条と北村が別々のグループで行う行事では、他にお盆のボンメシがある。ドンドヤキは男の子ばかりの行事だが、ボンメシの方は高等二年ぐらいまでの男の子と女の子が一緒にやった。米を一合とお金を少しずつ各家から集め、家を一軒借りて子どもたちが食事をする。正月のドンドヤキと盆のボンメシは、子どもの二大行事であった。

このほか、子どもたちが楽しみにした祭りには、二月初午の瘡守稲荷の縁日や浅間神社の祭典があった。瘡守稲荷は初午の前日の夕方に、ムラごとに子どもが五色の旗をたててお参りする。稲荷の前には露店が並び、これが子どもの楽しみだった。浅間神社の祭典は、春には子供会の（昭和四一年から）、秋には壮年の（昭和三八年から）ソフトボール大会が区ごとの対抗で行われる。

アワシマ講と念仏講　子どもから青年へとムラの伝統的な行事にかかわるのはいつも男の子で、女の子はなかなか集まる機会はなかったが、嫁にいってからは女の人の集まる機会が生じてくる。



ドンドヤキ（田場沢）

ソフトボール大会優勝旗

年三回（四月、一〇月、暮）ムラの中の家を順に宿にしてお振舞いをするアワシマ講（淡島講）は嫁さんたちの講である。お振舞いのごちそうには白和え、酢のもの、鳥ごはん、おみおつけなどが出された。

アワシマ講を卒業すると、念仏講に入る。念仏講はモヨリのおばあさんたちの集まる講で、月並の念仏のほか、葬式や法事があるとその家に呼ばれていく。葬式を出した家では七日ごとに三十五日まで、念仏講をたのみ、また年忌の時も来てもらう。念仏のお礼にはお金（二〇〇〇円ぐらい）か引き物、それに食事を出すのがならいである。月並の念仏は一四日で、田場沢では旧一二日にも薬師さんの念仏をやっている。上城の弘法さんの念仏は、一四日の月並念仏と一緒にやっている。一四日の月並念仏は、昔はムラ中の供養のために各家を順に宿にして、ムラ中でマワシネンブツをやっていたが、次第におばあさんたちだけが念仏をするようになっていったのだという。

葛山の念仏にはもう一つ、春・秋の彼岸に行われる富岡地区六部落（御宿、葛山、金沢、上ヶ田、今里、下和田）合同の大念仏がある。講員は六〇歳以上の約八〇人で、当番が秋は下和田―今里―上ヶ田―金沢―田場沢―御宿の順に、春は下和田―御宿新田―下条―上ヶ田―金沢―今里の順にまわる。当番に当たったムラでは、お茶やお新香を用意し、ムラでは各五〇〇円、一般参加者三〇〇円のオサンセンを集める。このお金で、最後に温泉旅行などに行ったという。

念仏講のおばあさんたち（下条）

念仏に限らず、年寄りが神や仏の世話をすることは珍しいことではない。葛山でも老人会が一日・一五日の月二回、ムラごとに神社やお墓などの掃除をしている。また老人会の集まりは毎月一日か二日に大畑のセンターで開かれ、九月には富岡地区全体の敬老会が開かれている。

第七節　世間との交流

(一)　町・都市との関係

交通と運搬　かつて野菜などの運搬にはバリキ（馬力）やリヤカー、荷車、自転車を利用した。中でも馬力は自動車が登場するまでさかんに使われたものだった。上城のNさん（大正七年生）は、山師が伐採した材木を馬力で沼津や三島へ運搬する「馬力ひき」を昭和二二、三年ごろまでやっていた。その後自動車が発達して佐野の斉藤運輸などの運送屋ができて馬力ひきはなくなってしまった。

中里には西川馬力屋があった。Nさんは始めは今関馬力屋で職人として働いていたが、のち独立して馬力屋になったという。上ヶ田の人が中里で乗り合い馬車をやっていて、一〇人ほど乗れる馬車が須山街道を笛を吹いて走っていた。馬車は昭和五、六年ごろまでで昭和七年には自動車にかわった。今のようなバスになったのは戦後のことで三島本町から上城入口まできて、田場沢行きと上城行きに分かれていたが、田場沢行きのバスは今はなくなった。またこのバスが葛山まで入るようになったのは昭和三〇年代になってからで、それまで葛山の道はジャリ道でバスが入れなかったため、葛山の人たちは御宿までいってバスに乗っていた。

出稼ぎと奉公　仕事で葛山以外の土地へ出ていくことは多かった。特に御殿場は戦後の復興期には仕事が多く、Nさんも馬力をやめたあとは、水道管を通したり、道路の舗装といった土方仕事をしばらくやり、その後深良の鈴木本管に勤めた。御殿場にはマユ市場もあり、裾野からはマユをここへもっていってセリにかけた。

須走峠方面へサキヤマ(キコリ)に行くこともあった。昭和三一、二年ごろで、一本切って一五円、朝八時から夕方五時ごろまでで一〇〇本くらい切れた。一日一五〇〇円といえば、当時は相当な額になったもので、一番金になる仕事だったという。箱根へもよく行った。特に竹切りは、秋から一二月にかけての一か月程出かけてよく稼いだものだった。シノダケ（篠竹）の古竹を切り、まるって（束にして）担いでくる仕事だったが、これは大変な割にはたいした稼ぎにはならなかったという。箱根や函南、丹那へは芝切りにも出ていった。

奉公も、ムラの人たちの世間を拡げるのによい機会であった。上城にはきせるの羅宇をつくるラオヤが多く、葛山中から奉公人が入っていた。下条のKさん（大正三年生）は、一八、九歳の頃に二年間、上城のラオヤに奉公して一六〇円をもらい、その金で下条に家を建てたという。当時の奉公人は、倶楽部で寝泊まりして奉公先へ通っていた。中里へ大工の奉公に行った中村のMさん（大正五年生）は、中学を卒業した一四歳から二一歳の兵隊検査まで修行をした。当時給金は月平均三円くらいで、葛山内での奉公ではあったが、やはり盆と正月しか家には帰れなかったという。また奉公中、一七歳の頃には親方の言いつけで半年間、東京の錦糸町へ行って職人として働いた。その頃は景気が悪く、腕のいい職人でも一日五〇銭ほどの手間賃だったという。錦糸町から戻ると年季が明けるまでは、沼津で家屋や工場を作ったり直したりした。初めて一人で墨つけをして建てたのも、沼津の倉庫だった。

沼津は都会だった。葛山の女の子は沼津に奉公に行った人が多く、中村のHさん（大正四年生）も小学校を出ると沼津へ行った。田場

沢のSさん（大正九年生）は一五歳から二〇歳までの六年間、やはり沼津に女中奉公に出た。奉公先にはその頃、五人の女中とじいやが一人いたが、Sさんは今でもこの奉公先とのつきあいは続けていて、暮れには手打ちそばを持っていくという。昭和の初めころの葛山では、小学校を出ると女の子は女中や子守、男の子は丁稚にと奉公に行くのがあたりまえになっていて、近くは御宿へ、あるいは佐野の製糸工場へ行く子もあったが、中には小田原や東京、大阪に丁稚奉公に出ていく男の子などもあった。

神参りと物見遊山　神参りのためにムラを出たり、ムラに来る人があったりと、信仰を媒介にした往来は江戸時代からさかんに行われていた。富士山の裾野に位置する葛山には、登山道に通じる根方街道（旧甲州街道）が通っていて、行者たちがしばしば立ち寄っていた。街道は、長泉―富沢―桃園―大畑―葛山―金沢―今里―須山―須山口と結んでおり、宮川（佐野川）で禊をした行者たちが須山南の登山口にある浅間神社へ参っていた。下山すると葛山などの浅間神社でゴマをたき、順にムラムラをまわっていく。下条の明王寺は、古くは富士山から下ってきた法師の立ち寄る足場でもあったという。また時として行者がムラに定住することもあった。葛山の鎮守の浅間神社の日栄という神主は、沼津出身の行者だったが、須山から千福一帯をまわり歩いて景ヶ島の依京寺に住んだりしていたところ、葛山のムラの人たちに請われて浅間神社の神主になったといわれる。

ムラから出ていく神参りのうち最も盛んだったのが伊勢参りであった。戦前は兵隊検査のあとに個人で行くことが多かったが、田場沢のUさん（昭和三年生）のように一四歳の時に学校で連れていってくれたこともあった。伊勢参りは、伊勢神宮へのお参りはもちろんだが、その道中の物見遊山が、ムラを出る機会の少なかった時代には貴重な体験だった。田場沢に残る伊勢参宮日記は明治時代に書かれたと思われるもので一部紹介すると、一月四日に「佐野仕立屋で」脚半を買い、ワラジを買って旅立った。まず佐野へ出て汽車で江尻まで行き、そこから静岡までは馬車で、一日めは静岡泊まり。翌日はさらに静岡から掛川まで出てのち、船で天龍川を渡って豊橋へ、そこから汽車に乗って熱田へと出ている。汽車、馬車、船と乗り継いでムラから出た人々は、日常接しているのとは異なった風物や風情に触れ、これをまたムラへ持ち帰ることで世間を広めていったのが伊勢参りであった。

葬式のあとの三十五日のハマオリは、昭和の初めまでは黄瀬川へ降りていたが、最近は沼津の千本浜で位碑を流すことが多い。このためアタマヤなど沼津の食堂は、ハマオリに立ち寄って飲食をするための会場として利用される。非日常的な儀礼では、ムラから出てマチへということは結婚式などにも見ることができる。

行商と買い物　葛山からの買い物は、ムラうちでは中里に魚屋はあったが、ちょっとしたものは御宿へ出た。御宿ではたいていのものが間に合ったもので、大正初めからは富岡村の村医も御宿にいた。日用品は御宿だったが、ちゃんとしたものはスソノまで出ていった。スソノといえば、かつては佐野のことをさしたもので、スソノへは下駄を履いて、着物を着てハレの支度で出掛けた。御宿から裾野までは乗り合いバスに乗っていった。結婚式の引き物も佐野の商店に頼んだもので、暮れの買い物には佐野からさらに沼津まで出ることもあった。若い人たちは佐野へ映画を見に行ったが、さらに足

をのばして三島に出ることも多かった。三島までは子どもたちは自転車で遊びに行ったもので、明神さん（三嶋大社）の祭日には葛山からも必ず出かけたという。今も七五三や初詣でといえば、葛山から三嶋大社に行くこともある。

魚などは行商でムラへ売りにくるのを購入した。行商のおばあさんが箱を背負ってガニュウドウ（我入道）から朝一番の列車で岩波まで来る。岩波から行商しながら葛山まで来るので、中里へは九時頃だったという。沼津から週一回来ていた人は、自転車にイワシやサンマをのせて売りに来ていた。長年の付き合いで顔馴染みになり、行商の人にさつま芋や里芋、鍋焼きなどを出してあげることもあった。行商人の方も、魚屋与一のようにいつも決まったところに来る人もあり、いつものことなので家の人がいなくても戸棚に魚を入れていってくれたりしたものだった。

祭りの日にだけ来る露店商もあった。特に初午の日に瘡守稲荷に並ぶ露店は子どもたちの最大の楽しみだった。中でも深良から来ていたヤオキチさんは、一、二銭のオモチャ、ミカン、鉄砲、イカの煮たのやおでん、ザガシ（雑菓子）、あめ、キャラメル、麩菓子、ニッキ水やニッキ棒など品数が多くて安いので子どもたちに人気があった。田場沢に育ったOさん（大正一四年生）も初午の日は田場沢から下条まで、一、二銭の小遣いを握りしめて遊びに来たものだったという。初午のほかお盆にも仙年寺境内に露店が出た。またふだんは御宿の菓子屋などにも行ったが、Oさんなどは田場沢からわざわざ来たというと遠くから来たからと、菓子屋がアメ玉を一個余計にくれるのがうれしくて御宿まで行ったものだったという。

（斎　藤　弘　美）

第三章　時間と生活

第一節　生活の時間・生産の時間

(一)　葛山の農業

田場沢の中野鶴吉さん（明治三五年生）は葛山で農業一筋に生きてきた人である。その鶴吉さんに葛山の農業について尋ねたところ、開口一番「葛山は水が無くて、田が少ないから、畑作地域だ」と言われた。鶴吉さんから次のような畑作の辿った歴史を聞いた。

明治の頃はモロコシが多かった。モロコシの他には、アワとかサトイモとかを作ったくらいのものだったという。

稲はオカボ（陸稲）で、良い肥料ができたりしたこともあって、大正頃から作り始めた。

その後カンショ（サツマ、薩摩芋）を作るようになった。サツマ作りは流行って、収穫最盛期には、毎日のように裾野駅から大阪の方面への出荷があったという。鶴吉さんのところでも、戦後、多い時は四〇〇俵の供出をしたそうである。

ヒトッキリ（一時期）ではあるが、換金できる作物として、タモ作りをやった。タモは花も実もオクラに似た植物で、紙のつなぎにしたという。仲買人を通して、製紙工場に売った。タモと同様に、葉タバコを作った時代もあった。

現在もやっているシバハタ（芝栽培）になったのは、これらの次であった。芝に変わった最初のころ、「みんな気が狂ったずら」などと言われたという。

中野家では、今は、すでにシバハタも止めて、植木の生産販売を手広くやっている。苗木を買ってきて、生育させ、売る。苗木の種類は、ひのき、しゃら（ひめしゃら）、さざんか、つばき、もみじ、もくせい等々である。

「葛山は、時代ごとに、転々と農業を変えてきたところだ」と、鶴吉さんはしみじみ昔を振り返った。

アラクオコシ　葛山は畑作地域であり、葛山の人々は「開墾百姓」と、自称している。

田場沢の中村ひさゑさんは、昭和二七年に農地法で分けられ、手に入れたウメクボ（梅久保）の山林を、アラクオコシ（開墾）したときの事を語ってくれた。

「手に入れたのは持田呉服店が所有していた山林で、一二人位の者で分けた。一反四畝位が手に入った。大変良い土地だった。畑にする者、山林で所有する者などがあったが、中村家はアラクオコシをして、畑とした。伐採した木はタキギにし、みんなで分けた。根はトンガア（唐鍬）で掘って出した。アラクオコシをして、最初に作った物はオカボ（陸稲）だった。米が少なく、高かったからだ。次に冬作に麦を作った。二年目の夏作にタモを作った。タモの栽培が最盛期の頃だった。その後、オカボと麦の交代で作ったが、出来なくなり、ニンジン、ゴボウを作るようになったが、今ではそれも止め、再び山林となっている」

オカボの栽培　オカボ播きは、五月五日頃から始めて半ば頃までの間に行った。

鍬で畑をサクリ（耕す）、ウネ（畝）を作り、堆肥に種を混ぜて播く。混ぜ方は「五合あわせ」といい、堆肥一俵に種籾が五合だった。堆肥には二箕（ふたみ）のチッソ、リンサン、カリも混ぜた。五升の種籾で、一反の畑に播くことができた。播き終わったら足で土をかぶせておく。

チューコーといい、播いた後をサクルことは最も大切な手入れだった。「サクレば、作物は肥料をやったのと同じように色が出て、良くなった」そうである。

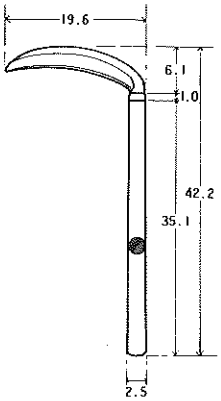
六月の下旬から七月にかけて、三回サクル。一番はカラッザクリ（耕作のみ）で、二番サクリには化成肥料を混ぜ、三番サクリはたっぷり肥料だった。七月末にはホゴエ（穂肥え）を施し、鍬で撫でるくらいにサクッタ。裏作に、冬のあいだ麦を作ったときは、麦を刈り終えるまでサクルことができなかった。

八月半ばには穂がでた。

一〇月に入って、ワセ、ナカテ、オクテの順にオカボカリが始まった。オカボカリは麦刈り鎌を使ったが、麦より楽に刈れた。

刈り終えてカッポシタ。地干しだった。三日間程干せば十分だった。雨でぬらすと、重くなるし、馬にやる飼い葉にするので良く干した。

乾燥したものは家まで運んで脱穀した。



麦刈り、オカボ刈りに使用した。

図Ⅲ－1　麦刈り鎌

籾になったオカボは、庭にムシロを敷いて、天日に二日ぐらい干した。良く乾燥した籾ははぜた。実が白くなった。この様にならなければカラウスにはかけられなかった。カラウス業者は中里から来てくれた。

オカボのモチは水稲のウルチと交換した。

葛山の稲作＝田場沢の場合　「田場沢の稲作は大正の大震災（大正一二年九月一日の関東大震災）によって終わった」と、多くの人からしばしば聞いた。大震災前までは、田場沢にも約一町歩の水田があったが、地震の後、その影響なのか、沢の水が涸れてしまい、田が作れなくなってしまったという。

田場沢は「開墾百姓」であるとも、しばしば聞く。これは水田が無く、山を切り開いて作る畑（アラク）作百姓であるという意味である。水田は、余所（上ケ田、御宿等）に出作りしていた者、「葛山本村」に田を所有する者もいたが、ごく少なかった。

葛山の稲作＝本村の場合　では、葛山本村ではどうだったであろうか。本村のムラダ（村田）は全部で八町歩であったという。この数字も多いとは言えない。本村でもやはり、御宿の方などに水田の出作りをしている者がいた。

本村では、新参の嫁がきた年の田植えの時に行う「デロブチ」の儀式を、新しい田を手に入れた時にも行うと聞いたが、それ程に田を手に入れることが地域の人々にとって珍しいことであり、かつ、めでたいことだったのであろう。

このように葛山の稲作は、田場沢と中里を除く、本村と言われる上城、中村、下条に限られていて、しかもそう多くない。総体的には畑作地域と言える。

(二) 稲作の一年

葛山の稲作地域は、上城、中村、下条の三地区である。生業のなかで水田の占める割合がそう多くないというものの、地域の一年の生活のリズムは稲作を基本としている。

水田がなくても畑でオカボ（陸稲）を作った。また、地域内に水田を所有しなくても、御宿などの余所に出作りをするものもいた。

したがって、季節ごとの、作業の間に行われる農耕儀礼には、稲の生育を祈願する儀礼が多い。かつては、米作りが農業の基本であったことを物語るものである。

以下、葛山の稲作の一年を概観してみる。

種籾の準備　秋、収穫のとき、種籾を別にとり、保管しておく。種籾は、水田一反について四升が必要だった。稲作の一年は、秋の収穫時にすでに始まる。

籾の脱穀には、古くは足踏みの脱穀機を使い、後には動力の脱穀機を使用したものであるが、種籾を取るためにはこうした機械では籾が傷むので手こきにした。下条で、手こきにはマンガを使用したと聞いた。千歯こきをマンガと称する。

手こきで別にとった種籾は、カマスに入れ、折り曲げ、カマスの真ん中を二回し縄で結わえ、米と一緒にクラヤ（倉屋）へ保管しておいた。クラヤでは、厚い五分板の上に置くなど湿気には注意した。

籾を入れたカマスは、藁のため、空気は流通するし、籾のような生き物の保管には最適だった。

種籾には、アイコク（愛国）、コウヤサン（高野山）などの品種があった。

苗代用の田作り　苗代をナガシロともナエシロとも称した。現在は苗代は作らず田植え機用に家の庭で苗を育成させてしまうが、昔はナガシロ作りが大切だった。

苗代にする田は毎年四月二九日ごろ種播きと決まっていたが、酉の日だけは鳥が拾うからと言い播かなかった。ナガシロ用の田には、前年の収穫の後、レンゲの種を播いておいた。レンゲは鎌で刈り取り田に埋め込んで苗代の肥料にした。

最初は苗代田をスキドウグで犂く。馬にスキドウグを挽かせて、田を耕作する作業である。

大きく耕作した後、田に水をカケ（入れ）、再び馬を使いカク（平らにする）作業を行う。苗代に土の凸凹が出来ないようにうんと良くカイタものだという。

田が平らになったところで、馬を上げ、田の泥が流れ出さないように注意を払いながら水を抜いた。この時、クロガリといって、畦の草刈りもした。

苗代の仕上げは、手ならしで、田の隅から隅まで丁寧に、手でゴミ等を押さえて埋め込む作業である。

田ができると種籾播きとなる。畝を作り、アリキ（歩行）用の溝を作る。

エンスイセン（塩水選）　苗代に播く種籾は、播く日の三日ほど前にエンスイセンでよい種を選別しておく。悪い籾は塩水に浮くので、それを取り除き、良い籾はエンスイセンの後、出して日陰干しにする。

エンスイセンで籾の準備ができたところでいよいよ種播きとなる。種播きの日は、昔は五月五日以前に行い五日はナガシロ休みと

いって休日にしたものだったが、その後五月の中旬に行うようになった。

播き終わった種は烏やそのほかの鳥に食べられたり踏まれたりしないよう、案山子を作り、立てたものだった。案山子にはトンボ笠をかぶせたり、田には養蚕で使う網をかぶせたりして注意を払った。

シロカキ（しろ掻き）　トネがクワナラシをする前に、馬を田にいれてシロカキをする。馬はどこの家でも一頭飼っていたもので、重要な働きをした。シロカキをする場合には、牛よりも馬の方が良かった。牛はノロイ（動作が遅い）ので、土がイッツクからだった。つまり土が固くなってしまった。土がイッツキ易いのは、その田の土壌が粘土質であるからだった。シロカキを手早くやるのはこうした土壌質によることもあったが、また植え手のソートメ（早乙女）が待機していたので、ソートメに追われるように急いでシロカキをした。

シロカキは、馬の鼻面を持つハナドリ（鼻取り）と、馬の後ろからシロカキをする者と二人で、リズミカルに調子よくやった。お互いに声を掛け合いながらシロカキする。

シロカキ　ヨンヤサ、ヨンヤサ
ハナドリ　ソレヤイ、ソレヤイ
シロカキ　キャーダセ、キャーダセ（かきだせ、かきだせ）
ハナドリ　フジサン、アシタカ（富士山愛鷹）
ハナドリ　ヒックリカエセ、ヒックリカエセ（ひっくり返せ）
シロカキ　カイコメ、カイコメ（掻き込め）
ハナドリ　マケヤイ、マケヤイ（肥料を撒いてくれ）
シロカキ　ナラセヤイ、ナラセヤイ（平らにしなさい）

この後にトネがクワナラシに入り、最終的に平らにし、植えるばかりとする。

田植え　「イイ（結い）を組んべえ」と、四月の浅間神社のお祭り頃になると、親戚や近所で寄り合い、お互いに田植えの時の共同作業を約束し合った。実質的な稲作作業の開始はこの時である。イイを組んで自分の田が終われば、次はイイガエシ（結い返し）である。また、自分の田が少なかったり、余所より早く田植えを済ませてしまった者は、ニットウトリ（日当取り）で田植えを手伝ったものである。サツマッポリ（さつまいも掘り）でイイガエシを済ませる場合もあった。

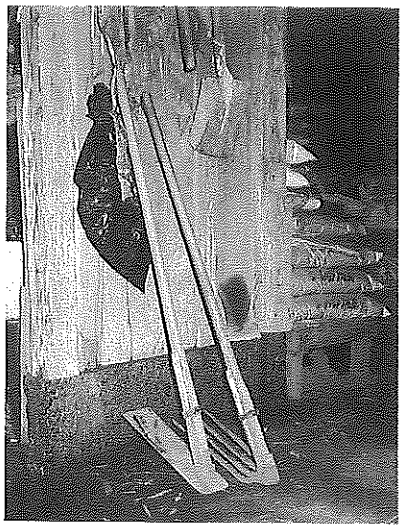
葛山には水田が少ないとはいうものの、やはりこの時期が一年で一番忙しく、また活気づく季節である。

イイの相手にはもちろん、ニットウトリのお手伝いにも「ご馳走のしっくらだった」という。つまり、競ってご馳走で、もてなし合った。

田植えの時期は年々早まり、現在では五月中には既に植え終わってしまうが、昔は六月の中旬が始まりだった。但し、種播きの日から四九日目という日を忌み、その日だけは避けた。

「ソートメさん」と「トネ」　田植えの主な働き手は女性だった。「ソートメさん」と呼んだ。早乙女の訛りである。「ソートメさんを遊ばせるな」といい、周りで働くものは手順良くソートメさんを手伝った。

女性のソートメさんに対して、田植えのときの男衆の働き手を「ト



鍬　左ヘラックワ　右マンノウ（下条）

ネ」と称した。トネのする主な仕事は、田植えをするばかりに平らにならすクワナラシの作業だった。ヘラックワ（平鍬）を使って、田面を平らにならし、ソートメさんが植え易いようにした。

デロブチ　田植えが終わって、田の畦で、誰彼となく「ころばしっくら」をやって、植えたばかりの田んぼに人を突き落とした。おかげで、植えたばかりの田はめちゃめちゃになり、再び植え直さなければならないこともしばしばだった。その晩、田植えの終了と、新しく田を買った祝いのオフルマイを行った。

新しくムラに嫁に来たり、婿入りした者などがあった場合、やはり田植えが終わった時に皆でその者を田に突き転ばして、荒々しくムラへの仲間入りを祝った。

稲の生育と世話　七月の上旬から中旬にかけて、三回、田の草取りをした。

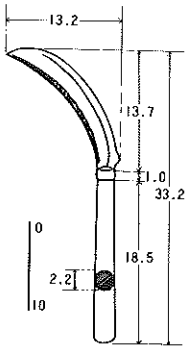
また、七月は、オカボやモロコシの中耕と追肥、蚕のハキタテなどが一度にやってきて最も忙しい月となったが、一日だけはマンガアライ（馬鍬洗い）で一日休んだ。

八月になると稲も成長するが雑草も伸び、中旬にはアゼ（畦）のクロガリ（草刈り）をしなければならなかった。

九月、二百十日には、台風の襲来のないことを祈願して、カザマツリ（風祭り）をした。

収穫　稲刈りは、一〇月の上旬から一一月の上旬にかけての頃だった。ワセ（早稲）から次第にオクテの稲へと、刈り進んだ。

鎌はイネカリガマといい、鋸のような刃を持ったノコギリガマだった。手刈りである。その後、稲刈機が導入され、最近ではコンバインが使われるようになった。



刃がノコギリのようになっていて稲が楽に切れた。稲刈り鎌とも称している。

図Ⅲ－2　ノコギリ鎌

脱穀・調整　脱穀は、足踏み式の脱穀機を使った。後には動力の脱穀機になったが、これらは籾が傷み易かったので、翌年の種籾用には手こきの千歯を使用した。千歯はさらに昔に、脱穀に使用したものであった。

脱穀を終え、籾になったものは、ニワ（庭）にムシロを敷いて乾燥させた。天日干しであった。これも現在は乾燥機があり、籾干しの方法が変わった。

トウミ（唐箕）を使って、籾の風力による調整を行った。

次は籾すり。カラウス（唐うす）をひいて、籾殻を取り除いた。カラウスのことをマメイタとも称した。カラウスの歯は孟宗竹を使い、泥とシガジオ（シガ塩）を混ぜたものの中に埋めた。

大型のカラウスをセンタラ（千俵）ビキと称していた。

籾すりは夜の仕事だった。遅くまでやって、ネブッタカッタ（眠かった）から、皆で歌を歌ったり、俵のカツギッコ（力比べ）をやったりしたものだったという。カラウスヒキの歌は次のようなものだった。

ヤリギノモトデ　オアゲアレ
オイラガアトヲ　ツケテヤレ

カラウスヒキニ　ヤトワレテ
カラウスハヒカネド　オナノテヲヒク

クモレバクモレ　ハコネヤマ
ハレタトテ　オエドハ　ミエルデモナイ

イチバンビキガ　イマオエル
アラモトヲヒキヨセ　コメガハチコク

ナナツヤッツデ　フミヲカク
アイラシヤ　コノテヲ　オヤニミセタイ

（中野鶴吉さん）

(三)　芝生の栽培

葛山を歩いていると、三〇センチくらいの長さの竹ぐしが軒先いっぱいに広げられ、干されている風景に気がつく。時には、日だまりに筵を広げて、竹をせっせと割っている老人の姿も見掛ける。「シバグシ（芝ぐし）」である。シバグシは、ゴルフ場などの斜面に芝を植え付ける際、芝が地面にしっかりと根付くまで固定させる為の押さえピンに使う。

葛山は竹の多い所であるにもかかわらず、近年は竹の需要が全くというほどなく、せいぜい春のタケノコを掘るくらいのものだったから、たとえシバグシ作りが微々たる竹の消費量であっても、この生産は地域に適した生業と言える。

それは葛山が竹の産地だからという理由だけではない。葛山は、そのシバグシを使用する芝生の生産地でもある。芝生の生産は葛山も含めた富岡地区一帯の産業として、近年急速に広まった新生業であった。

芝生を作り始めた頃には、水田をシバハタ（芝畑）に転換させているのを見て、ひとは「バカなことをやっているものだ」と非難したものだったというが、その後、富岡地区に「芝生御殿」と称されるような立派な新築家屋が建ち始めるのにそれほど時間はかからなかった。芝生は儲かる生業だったのである。

こうして芝生の生産地として急激な変化を遂げた地域の状況の背景には次のような理由が相乗したことが考えられる。

理由の第一は芝生の需要の増加という外からの要求だった。戦後の高度経済成長に伴い、道路工事や河川の堤防工事、ホテルや住宅の建築、ゴルフ場の開設など、芝生を必要とする工事が急増。需要に間に合わないくらいの注文量だったという。

次に、地域における理由は、芝生栽培は畑の維持管理が楽で老人にもでき、兼業農業をしやすい、という利点があったからだった。

従来の葛山を含めた裾野富岡地区は、水田が少なくモロコシやサツマなどの畑作で生業を維持させてきたところだったが、戦後の経済成長期になると、そうした微々たる畑作専業を止めて勤めに出るという兼業農家が増えた。つまり、外からも内にも芝生栽培に転換し得る格好の条件が揃っていたのだった。

タネ（苗）を植える　タネは芝生の苗のことである。新しいシバハタを作るときは、苗場を作り、タネを育成しておく。

シバハタにはあらかじめ筋を付けておき、株をほぐしたタネを筋に沿って、深さ六センチ、一〇センチ間隔くらいで二、三本ずつ植える。一か月くらい経つとタネの伸びが分かる。

カッチャク（活着）までの世話　肥料を撒く。一か月に一度、化成肥料をトラクタ上か手で撒く。

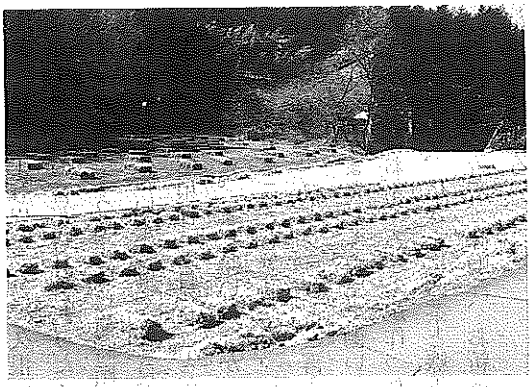
クサトリ（除草）はシバハタの管理で唯一最も大事な作業である。これを怠れば芝生は育たない。クサトリは、時季を問わず草が出た時に、手或いは鎌を使って草を取り除く作業である。

こうして世話したタネはやがて完全に根付く。活着という。活着が良いのは、春先の、霜が終わった頃に植えた苗で、これだと一〇〇パーセント活着する。

その後の世話　活着しシバハタが青々としてくると、次は根を強く張らせるための世話を始める。芝の葉刈りである。いわゆる芝刈りで、この作業の繰り返しによって、養分を葉から根に回し、更に日光を根にあてることによって強い根を育てる。葉刈りは、地温五度から七度くらいの時期に行う。すなわち、一一月ころまでの間に、月に二回くらい行う。

消毒も重要な世話である。芝生の害虫にはヨトウ虫やシバヨトウ虫がいる。これを退治するには秋口に薬剤を散布する。

またシバハタがじめじめすると、芝が腐りやすいので土の殺菌剤も散布する。クサトリの手間の省略の為、春と秋に除草剤を散布することもある。



シバハタ（田場沢）

出荷　芝生の生産者にとって、最も良い出荷時期は春先であるが、現在の出荷はゴルフ場などの需要者の必要に応じて行うものであるから、必ずしも春先に限らない。

芝の種類　ノシバ（野芝）はフジシバ（富士芝）とも称される。寒さに強く、病気に罹りにくく、土地への順応性がある。ゴルフ場のラフ、河川のノリ面などに使われる。

コウライ芝は、目が細かくきれいな芝である。ゴルフ場のグリーン、フェアウエイや公園に使われる。

第二節　一日の生活

(一)　一日

人の生活は一日、一月、一年というように決められた時間単位の

繰り返しによって成立している。その中の最小時間単位の一日を、葛山の人々がどの様に過ごしたかを眺めてみたい。

現在でこそ、兼業農家も増え、きっちりとした定型の一週間単位のサラリーマン並みの生活スタイルが一般的になっているが、かつての葛山は純粋の農業地域であり、日々の繰り返しは四季それぞれの農作業に対応した一日の過ごし方にならざるを得なかった。すなわち、昼の長い夏は仕事量も多く、反対に冬は朝遅く野良に出掛け夕早く帰り、また、収穫時の、忙しい日々にはヨナベで働き、雨が降って野良に出掛けられない日は縄をない、俵を編むなど、季節や天候によって一日の過ごし方は異なった。

このような農家の一日の生活で、年中不変だったのは忙しさと食事だったと言えよう。忙しいのはとにかく、食事は一日でも欠かすことができない。季節によっては食事の回数が異なったが、食事が、不定期な農家の一日の生活に節目をつける役割を果たしていた。食事を切り回すのは主婦の役目だった。主婦は野良にも出掛け、家事も担当した。農家の主婦にうかがった葛山の一日の食事時間で、葛山の一日を見てみようと思う。

百姓の一日は「ホッサン（宵の明星）がまだ高い」朝の暗い時刻から夕方の暗くなる時刻までは野良で、その後はヨナベをやるなど、長時間働きづめだったが、忙しかったので一日が長いなどと思ったことはなかったと言う。

百姓の嫁は舅から「油売りはバンカタ（晩方）忙しい」などと皮肉を言われ、昼ブラブラと楽していることを戒められたので、嫁の一日は、寝るテマでオバンシ（食事の支度）をした。つまり、寝る時間もさいて、ご飯の支度をしたというほど忙しかったのだそうである。

(二) 食事の時間

オチャマエ　オチャマエというのは、朝食前の事で、そのわずかな時間に簡単に片付ける仕事がアサメシマエである。仕事を苦もなく片付けることを「朝飯前」というのは、ここからきているのだろう。オチャマエの仕事をするのは、夏などの昼の時間の長い季節の、それも忙しい時期でのことだった。田の水を見回りに行く、馬の飼料の草刈りに行くなどはオチャマエの仕事だった。

アサメシ　アサメシはその後になる。アサメシの時間は季節により、仕事により異なった。久根の製紙工場の午前五時の「ボー」（サイレン）の音が時計替わりだった。夏のアサメシは早かった。しかし、現在のように正確に何時頃などと、時刻では言わなかった。昔は「暗いから暗いまで働く」と言って、とにかく早起きであった。「ヤネムネ（屋根棟）を見たことがない」と、御宿きよ江さん（下条）は表現した。まだ暗い時間から野良に出掛けるから自分の家をあらためて見ることもできなかったという意味だ。

「アサボシ、ヨボシ」などと言う人もいる。星の見える時間に起きだし、星がまたたく夜まで働いたというのである。

アサメシはおふくろさんが作ったり、嫁さんが作ったりした。その間に男衆が、仏さんにお茶と線香とご飯を供えた。

家族はその後で、味噌汁、お新香、ご飯を食べた。普段のアサメシの内容である。

昔は葬式のあった翌朝などは「オチャに来てくれ」などと近所に触れて、朝食にさそった。イイなども仕事のある日はアサメシにき

てもらうもので、アサメシを食べないとアテにならないといった。

ヒルメシ　ヒルメシ(昼飯)は家で食べることが普通だったが、遠くの野良へ行くときは弁当を持って出掛けた。

家で食べる時は、嫁が一足先に家に帰り、ヒルメシを用意した。弁当の時は朝食を作りながら準備をした。弁当の事をノラベントウと称し、オヒル（昼）とヨウジャ（三時）の二食分を作って野良に出掛けたものである。オバク(麦飯）をザルかオヒツに入れて持って行った。一人弁当の時は、オバクを真竹で編んだベントウイザルかススダケで編んだベントウイザルに入れて出掛けた。弁当のおかずは梅干しかタクワンぐらいのものだった。水は一升壜に入れて持って行った。

昼時間は、「腹時計」で計り、おなかが空けば「そろそろ昼にするか」などといい、ヒルメシにした。

腹時計でもだいたい一二時頃には食べた。ご飯のほかに、朝の味噌汁の残りにミソ（キンザンジ）くらいで、上等なものだった。

食事の内容に関して、昔は「三度（一日に）食べられれば良い」などと言い、極めて質素な内容だったのである。

ユウジャ（ヨウジャ）　オヒルとヨウハン（夕ご飯）の中間にユウジャをとる。

時刻は二時ぐらいだったであろうか。「ユウジャを早く食わないと、夕方の仕事がたんとできない」と言って、ユウジャの時間はきちんと守ったものであった。また、その頃腹がへるのである。

ユウジャにはオヒル（弁当）の残りを食べたり、「チャゴシに食べる」などとも言い、簡単なもので腹ごしらえとした。

チャゴシの食べ物は季節によって異なるが、小麦のオヤキ、サツマ（さつまいもの蒸した物)、トウモロコシなどであった。

ユウジャという言い方のほかに、「三時のコビル」などの言い方も聞いた。本格的に食べるヒルメシに対して、簡単に食べる（小昼）という意味であろう。サトイモやサツマイモを食べたり、冬はホシイモや落花生を炒って食べたものだという。

ヨウハン　夕ご飯をヨウハンという。

ヨウハンにはご飯と、冬は蕎麦、夏はオシルニ（うどん）が普通だった。

「暗くなるまで働く」ことが常だったから、野良から帰ったらヨウハンを作るなどということはなく、前夜に用意しておいた（切って、うでて、モロバコに入れておいた)。蕎麦を食うことが、毎晩のヨウハンだった。夏のオシルニは、うどん、ねぎ、大根を入れたもので、いわば「ほうとう」である。うどんは夏でも「すえず」（腐らず）臭くならなかったから、夏の食べ物として重宝だったのだ。オシルニのことをキリコミとも称した。うどんを茹でないまま「ぶっこむ」（入れる）からである。

ヨウハンの時間は季節によって異なったが、秋の麦播きの忙しい頃、夕方遅く帰って来ると、子供がもう寝ていることなどもあった。ヨウハンに蕎麦やオシルニなどの簡単な食事にしたのは、留守番の子供にも用意ができるようにとの配慮からだった。

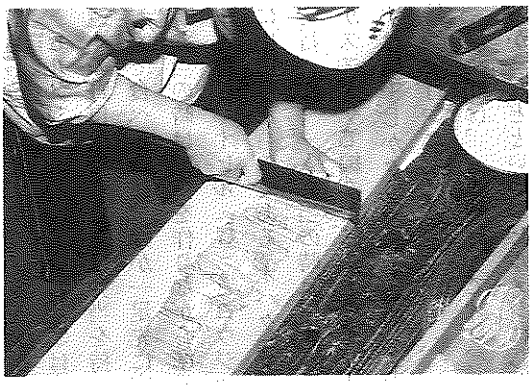
オシルニや蕎麦は軽い食べ物だったから「幾ら食ってもけぶ（煙り）みたいだ」（腹がへる）などと言った。

ヨウハンが終わってからヨナベ（夜業）だった。カセギのラオコキ(パイプ用のラオ竹作り)をしたり、母親は洗濯、ボッコツギ（繕い物）などをしたものだった。ヨナベはイチバンドリ（一番鶏が鳴

くのは午後一一時から一二時にかけての頃だった）が鳴く頃までは早いほうで、ニバンドリ（午前二時）頃までやったものだった。

ソバブルミャア（蕎麦振る舞い）　御宿の大地主だった湯山半右衛門の日記の中にしばしば「蕎麦斬り振舞い」と記されている箇所が見受けられる。文面から、どうも、ある程度大事な客があった時に、蕎麦でもてなすことを言っているようである。三島あたりでも昔はたくさん蕎麦を作り、自家製の蕎麦で客をもてなすソバブルミャアをしたものだと聞いている。おそらく葛山でも同様なソバブルミャアのもてなし方があったものと思われるのである。

葛山の作物および食物の中で、蕎麦が占める割合が大きい。蕎麦は重要な作物であり、また重要な食糧だった。ソバブルミャアはむろんのこと日常の食べ物としても欠かせないものだった。



蕎麦を切る（下条）

晴れの日に蕎麦を食べることがあった。お節句の食べ物はすしと蕎麦。蕎麦はウドン粉と長芋を蕎麦粉に混ぜて、自分で打ったものだった。蕎麦粉とウドンコ（小麦粉）の割合は六対四だったとも聞いた。ミソカソバ（晦日蕎麦）を食べる。いわゆる年越し蕎麦のことで、田場沢の中村ひさゑさんは「昔も今も大晦日にはお爺さんが長芋を掘って来て、ミソカソバを作って食べる」と、語ってくれた。

日常の食事のなかで、蕎麦は主食に近い食べ方をした。蕎麦の季節は寒い時期であった。秋から冬、子供たちは両親の仕事が忙しく、夜遅くなって帰らなければならない時など、毎晩のように蕎麦を切って、うでて（ゆでて）モロバコに入れておいたものを、自分でこさえて食べたものだった。

ソバブルミャアは、蕎麦が特別な食糧というものではなく、蕎麦しかなかったから蕎麦でもてなすよりほかなかったとも言い換えられるだろう。

㈢　あいさつ

ムラにはムラ独特のあいさつ言葉があるものである。あいさつ言葉の方言といい、言い回しといい、ムラのあいさつは、そのムラにしかない雰囲気を持っている。

ムラのあいさつを拾い集めることによって、葛山の一日を概観してみようと思う。

朝のあいさつ　野良へ出掛ける途中で出会う近所の人とは「おはようございます」という一般的なあいさつを交わす。裾野でも、下和田や須山の方へ行くと、「おはようございす」と年寄りはあいさつする。古くは葛山でもそうした言い方だったのであろうが、今では誰も言わないそうだ。

葬式のあった翌朝「チャノコ（朝食）に来てくれ」と言い、隣組を朝ご飯に誘うこともあいさつ代わりだった。

天候や時候のあいさつ　あいさつに天候や時候のあいさつを交わすことが多い。天気が良い日は「いいあんばいだなあ」で、雨降

りで野良にも行けず困る日は「ふんなきゃいいなあ」と言う。夏の暑い日は「あついなあ」とか「なんとあついじゃにゃあか」などと言い合い、反対に寒い日は「さびいなあ」があいさつ代わりだった。

やはり下和田や須山では天候のあいさつにも「おさむうござんす」「おあつうござんす」という言い方をしていたという。

昼のあいさつ　昼は「こんちわ」という言い方が普通だった。天候や時候のあいさつも昼のことが多い。

隣近所の家を訪ねた時のあいさつも昼のあいさつといえる。「いるかや」「いたきゃあ」と言いながら大戸口から入る。訪ねた家に入るときの呼び掛けのあいさつである。「入りますよ」という意味である。同じムラの、お互いに何もかも知った者同士の親しみのこもったあいさつと言えよう。

夕方から夜のあいさつ　田や畑で、そろそろ日暮れにかかる頃、「おしまいなせやあ」とか「しまうべえよ」と声を掛け合い仕事を終わりにしたものである。婦人で丁寧な言い方をする者には「おしまいなさいまし」という人もいた。

夕方、人と別れるときは「おやすみなさいまし」と言った。

また、夜に他家を訪問する場合は「こんばんは」が普通だったが、中には「おばんです」という人もいた。

第三節　一年の生活

(一)　農業暦

葛山の農業暦を作成してみた。農作物は水稲を始め、葛山で取材できたそのほか七種類の作物に、かつて盛んだったカセギ（稼ぎ）を含め、農耕儀礼も併せて表にした。ところが、この中に葛山の一年を、暦という形で十分に語り尽くせる農作物は見当たらないのである。しいて取り上げるならば、水稲であろうか。あるいは現在盛んな芝生栽培ということになろうか。

現状の葛山は、もはや農業地域とは言えないほどに、兼業化が進んでいる。従って、作成した農業暦を解説するにあたり、こうした現状を踏まえておかなければならないのである。

さて、葛山の農業の歴史的変遷をごく簡単に概略して眺めておく必要がある。次のように言える。

古くは水田稲作農業を基本とし、近年には畑地の開墾を進め畑作を行い、また養蚕を盛んに行った。しかし現在は、かつて開墾した畑地は山林にもどり、畑作農業は縮小し、兼業農家の激増をみた。

元来、耕作地の多くない当地域であるから、いつの時代にも、稲作なら稲作のみとか、畑作ならモロコシだけとか、養蚕一筋に生きるなどというような単一農業で生きる生業形態は望むべくもなかった。

つまり、できる限り多種類の作物を一年中作り、たとえ僅かな期間でも耕地を遊ばせておく余裕は無かった。「昔は遊ぶ暇も無くよく働いた」と必ず聞くのは、こうした事情によったものなのである。

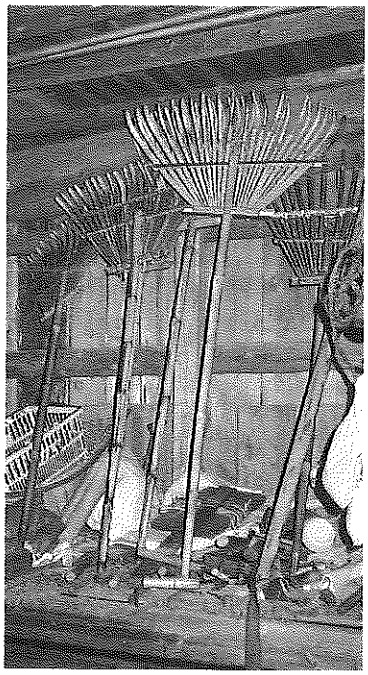
農業暦解説　葛山の農業を季節で分ければ、水稲や陸稲の主要夏期農業と、サツマ・モロコシのような夏の畑作と、水田の裏作の麦やカセギ（稼ぎ）などの冬期農業（生業）とに二分することができる。

水稲は四月末頃の、ナガシロ（苗代）にする田への堆肥入れに始まる。種播きは、水稲も陸稲も五月五日が目安となって行われた。田植えは六月の下旬。その後水稲には田の草取り、陸稲には草取りと中耕が主な世話となる。一〇月になると稲刈りの季節。早稲、中手、奥手の順に刈り、一二月の初めまで脱穀、籾干し、籾すりと収穫調整作業が忙しい。以上のように、夏期農業は主食の米を取ることが、まず中心となった。

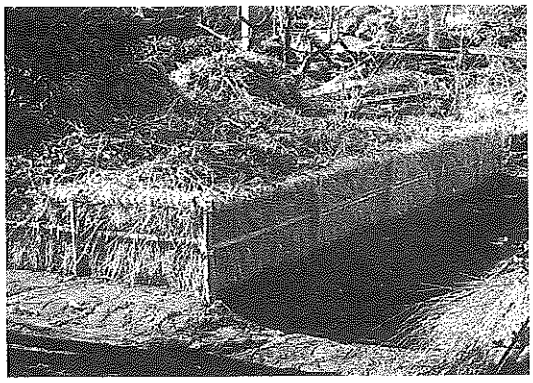
サツマとモロコシの栽培は、金になる重要な農業だった。

モロコシの種播きは四月の末から五月にかけてだった。七月には中耕。ヘラックワ（平鍬）でさくった。収穫は一〇月。もぎ取り、剝いで、吊るして干した。

サツマの栽培は夏だが、準備は冬の仕事だった。コマンザライ（熊



コマンザライ（下条）



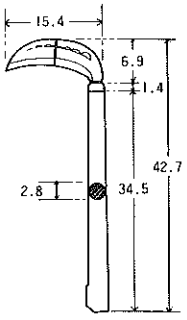
サツマグラ（田場沢）

手）で山から落ち葉を掻き集め、サツマグラに入れる。サツマの苗床作りである。腐葉土の肥えた土がサツマに一番だった。五月、苗を切り、畑に挿す。七月の耕作を行い、収穫は一一月からのサツマ掘り。掘ったサツマは貯蔵し、翌春まで出荷を続ける。サツマもモロコシも、主食を補う物でありながら多く穫れれば金になる生産物だった。

冬期農業は裏作の麦作。米の収穫に忙しい一一月に種播き。真冬の二月から三月、サクキリをヒラグワで行い、麦踏みをして、寒さをしのいだ。麦刈りは田植え直前の五月下旬から六月の初旬だった。麦作の場合冬期農業とはいうものの、実際その期間とりわけ忙しいこともなかったので、田には麦を残したまま人々はカセギに出掛けることが多かった。

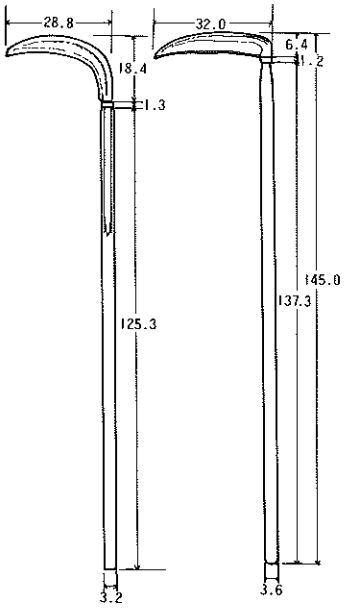
冬のカセギは山仕事だった。シノダケ（篠竹）切り、炭焼き、サキヤマ等。シノダケ切りは特に盛んで、麦播きを終わると男衆は組を作って、竹のある山（愛鷹山、箱根山、時には伊豆又は相模の方）へ出掛けた。木や竹笹で簡単に造った山小屋へ寝泊まりをして、一日中竹を切り、夜は小屋で竹をマルッテ（束ねて）、夢中でやったものだという。山には同じような小屋がいくつも並んで、それぞれが自炊で正月前まで竹を切り続けた。いわゆる出稼ぎの男たちの切った竹を、家にいる女達はラオコキをして手伝った。ラオヒキが山から運んでくる竹を、皮をむいて、パイプのラオになるように仕上げ、束ねて商人に売る。この竹のカセギは三月まで続けられた。以上のように、夏でも冬でも、遊ぶ暇もなく一年を過ごしたのが、葛山の暮らしだった。

このほか、水稲と芝生栽培については第一節の生活の時間・生産の時間のところで述べた。また、後に年中行事の中や食生活の一年のところでもそのほかの作物について触れるので、ここでは次に「農業暦」を掲げておくのみとする。



刃は厚く、丈夫で竹を切るのに使用した。

図Ⅲ－3　ナタ鎌



柄が長く、振り回すように使って、山の下草刈りをした。

図Ⅲ－4　草刈り鎌

表1　葛山農業暦

		水稲	陸稲	麦	モロコシ	サツマ	ソバ	養蚕	芝	カセギ	農耕儀礼
一月	上旬					貯蔵					初山（4日）
	中旬					出荷					二番正月（14・15日）
	下旬										
二月	上旬			●サク切り							年越し（マメマキ）
	中旬			麦ふみ							
	下旬										
三月	上旬					●シバかき					
	中旬					落葉かき					
	下旬					※コマンザライを使う					
四月	上旬					○苗床作り					
	中旬										
	下旬	肥入れ●（タイヒ）			●種まき	○苗をさす					
五月	上旬	○ナガシロ種まき（5日）	●オカボまき		○			○ハキタテ			
	中旬										
	下旬			○麦刈り				春蚕			
六月	上旬					○					
	中旬	○田植え		○				○出荷			
	下旬	○	○草取り		サクル（中耕）○	○耕作		○			農休み（30日）
七月	上旬	○田の草取り	追肥		※平グラを使用						マンガアライ（1日）
	中旬		サクル（中耕）					○ハキタテ	桑の耕作		
	下旬	○ 一番 二番 三番	○		○	○					
八月	上旬							夏蚕	○		
	中旬	○クロガリ（畦草刈り）									
	下旬							○出荷			
九月	上旬						○種まき	○ハキタテ			二百十日（風祭り）
	中旬						耕作（サクル）				
	下旬							バンシュウ（秋蚕）			
十月	上旬	○	○オカボ刈り（早稲）		○収穫			○出荷			
	中旬	稲刈り	○オカボ刈り（ナカテ）		モギトリ						
	下旬		○オカボ刈り		●吊して干す	○サツマ堀り					
十一月	上旬	○	モミ干し	●麦まき							
	中旬	○脱穀	カラウス●（10日）				○刈り取り				
	下旬	モミ干し				○	干す			○炭焼き	
十二月	上旬	●モミスリ		○		貯蔵	※クルリでこなす			サキヤマ	
	中旬					出荷				竹切り	
	下旬						○			※パイプのラオひき	

(二) 年中行事

1 正月の行事

正月の準備（一二月）　ススハキ（煤掃き。或いはススハライと称する大掃除のこと）は、一二月の天気の良い日を選んで、一家総出で行った。その日取って来た竹を三本くらいまとめて、家の中のススハキをしたり、川へ障子を洗いにいった。破れた障子をあんまり（余りにも）早く張り変えると、腫れ物ができるなどと言った。ススハキはたいてい二〇日近くに行っていた。最初の正月準備の作業である。

田場沢の中野鶴吉さん（明治三五年生）は、毎年一二月の半ば過ぎになると、家の庭からせんりょう、松、梅の枝と竹を取って来て「門松」を作り、正月の準備を始める。一対の門松を作り、正月を迎える気持ちになるという。

正月飾りを作る（田場沢）

「門松に定型は無かった。それぞれの家が思い思いに山の松を切ってきて作るので、現在、町などで見られるような決まった形ではなかった。オシメ（しめ縄）を張り、オモテ（表）と玄関正面に二個飾った。タルマツ（樽松）が面倒な人は、松の枝だけだった。タルマツを作る人はそう多くなかった」

（坂田よし江さん・大正四年生　談）

玄関に置く門松には、男松と女松を揃えた。

オカザリと称する正月飾り作りもまた重要な正月を迎える準備の一つと言えよう。オカザリの材料は、藁、ユズリハ、ウラジロの葉などだった。一軒の家で何個も作り、いろいろな神様へ飾る。家の中の神では火の神、恵比寿さん、台所や仏さん（仏壇）。屋敷の中では馬屋やクラヤ（倉）、牛小屋、お墓にも飾る。

この様にオカザリの準備をしながら、飾るべきところをあっちこっち掃除したり、寺にまで墓掃除に行ったりする。

近年は、オカザリに、藁で作った宝船を加えるなど、従来の素朴なオカザリとは異なる、派手で手の込んだものが作られ、人々に好んで迎えられるようになったが、豊かになった時代を反映した風潮と言えるだろう。準備できたオカザリは、遅くても一二月三〇日には飾った。「イチヤカザリ（一夜飾り）は良くない」とされ、大晦日には飾るものではないと言われたからであった。

また、昔はオカザリは必ず家で作ったものだったが、この頃では商店で買ってきたものを使うこともあると聞いた。兼業農家が増えたこと、田が無くなって材料の藁が無いことなどにもよる。

正月用の餅つきは二七日か二八日に行った。二九日に行うことは「クンチモチ（九日餅）」といい、「九」は苦しみの「苦」に通じるからと、忌み、行わなかった。三一日につく餅はイチヤモチ（一夜餅）と言われ、やはりこの日は餅つきを行わなかった（三一日のイチヤモチを気にしない人も多い）。

年神を迎えるために、年神さんの棚をつくる。棚はダイジンサン

正月の神棚（田場沢）

（神棚）の下に作った。その年に不幸のあった家では年神さんの棚は作らなかった。

大晦日の夜、家で作った山芋の入った蕎麦を食べて、年越しとなる。

元旦　元日の朝は、お浅間さん詣でから始まった。午前一時ごろ、米をおひねりにして、お賽銭を持って出掛けた。最近では、初詣での人に甘酒が振る舞われる。

昔は、浅間神社の次に山の神様に詣でたものだったが、今はあまり行かないようだ。またもっと昔は、三嶋大社にも参拝に出掛けたものだったとも聞いた。

年神さんの棚には、お供えのお餅を奇数にして上げた。中村の瀬戸家では、年神棚の下に食卓を出し、男はそこで雑煮を食べる。元旦の雑煮は、紅白の丸い餅である。

坂田よし江さんの家の正月料理は、自分の家で作った小豆の羊かんが特徴だった。かまぼこやハス（蓮根）を用意し、すしも作った。

正月、お年玉と称し、家の子供や親戚の子供にお金をあげるのは、かなり前からの習慣だった。田場沢の中村よし乃さん（明治四一年生）の思い出によれば、お年玉は一銭位のものだったという。正月には、必ず新しい着物と履物を、着たり履いたりしたものだった。

子供たちは、書き初め（二日）をし、年神棚の下に貼った。

初山　元旦から五日までを若正月と呼ぶ人もいる。かつては、この間に親戚や親しい者のところへ袴を着て年始の挨拶に出掛けたが、今はあまり行われなくなった。

三が日がすんで、四日が初山。その年の仕事始めの儀礼で、昔はお米を、今はお金を持って、山の神様まで行く。お金はオサイセンと称する。

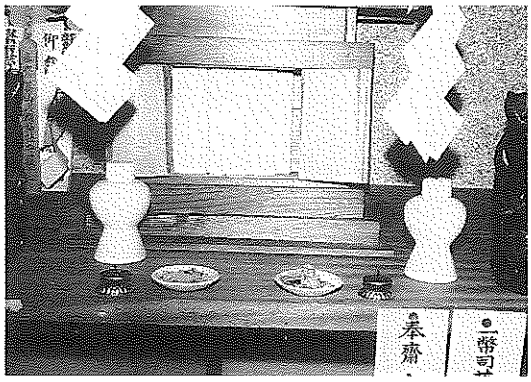
五日には、ムラの初寄り合いが開かれる。大事な寄り合いだったから一家で一人は必ず出席。たいてい、主人が出る。初寄り合いでは、ムラの事業計画を話し合い、その日程を決めた。区の体育祭、農休みなども、この日決める事項である。現在の初寄り合いは、日曜日を当てることが多くなった。

七草　正月の七日は、七草粥の日である。この日、「七日の風を吹かせるもんじゃない」といい、元旦以来供えてきた正月のお餅に代えて、ナナイロ（七種類）の草を入れた粥を作って、諸神に供え、また人もそれを食べると良いと言った。七草とは、いわゆる春の七草と言われるものでなくても、人参や大根などの七種類の野菜が入っていれば良かった。七草は、六日の晩に刻む。キリバン（まな板）の上に七草を載せ、それを神棚の下へ持って行き、アタリボ

ウ（すりこぎ）や、しゃもじでキリバンを叩きながら次のような歌を歌って、七草の野菜を叩くように刻んだ。

「ナナクサ、ナズナ、トウドノトリト、イナカノトリガ、ニホンノトチヲ、ワタラヌサキニ、アワセテ、バッタバタ」

この七草がすむまでは、混ぜ御飯や色の着いたご飯を食べるものではないと言った。また、七日のお粥を食べない人は一五日（二番正月）のお粥を食べてはいけないとされた。「カタッカユ（片粥）」は縁起が悪いと禁じられた。



神棚に供えた七草粥（上城）

上城の木村豊治さん宅では、七草粥をダイジングウ（大神宮＝神棚）や庭の水神様などに供えて、七草を祝っている。

また、この日は正月のお飾りをはずす日だった。はずしたお飾りは子供がムラを一軒一軒集めて回る。サイトヤキの準備である。昔は、お飾りを集めると、辻の所へこしらえた道祖神の小屋まで持っていったものだったが、現在は小屋を作らない。

十一日正月　田場沢の中野鶴吉さんによれば、十一日正月は「ソナエワリ（お供えを割る日）」といい、この日、正月の供え餅を下げて、割って、お雑煮にして食べたという。

お飾り集め（下条）

柿の木叩きで明ける二番正月　正月一五日の早朝、カツの木の棒で、隣に負けないようにと大声を張り上げて柿の木をハタク（叩く）のは子供の役割だった。

「カーキノキ、カキノキ、ナールカ、ナンニャーカ、ナールトモーセ、センヒャクタワラ、カネヒャクタワラ、タキャトケナルト、カラスガトルゾ、シクイトケナルト、コドモガトルゾ、チュートケ、ターントナレ、ターントナレ」

二番正月の朝は「柿の木叩き」の合唱で明けた。

各家では、アズキガユ（小豆粥）を煮て、家中の神様に供えた。子供たちが起きたところで、柿の木叩きを始める。

柿の木を叩く棒は、正月四日の初山日に切り取っておいた手ごろのカツの木で、先端に少し十文字の割りを入れ、小豆粥を付けたものである。

柿の木叩きは、家によってもその時期は異なるが、昭和三〇年代

頃を境に、次第にやらなくなったようだ。しかし、上城で、今でもやっている家もある。子供の頃やったことのある人は、「一生懸命叩けば、きっと今年もたくさんの柿がなるに違いないと信じたものだった」と、思い出を語る。

柿の木叩きに始まる、いわゆる二番正月を、「団子の正月」とも称する。米の粉で紅白の団子を作り、繭の形の団子や丸い団子や、みかんなどを木にさして、供えた。団子をさす木をダンゴボク（団子木）と称した。

二番正月のサイトヤキ　正月一四日の晩のサイトヤキは、二番正月の代名詞的な行事である。正月のお飾り、サイノカミサンのコヤ（小屋。オンベという人もいた）や書き初めなどを燃やし、その火にあたり、その火で焼いた団子を食べれば、一年間無病息災であるとされる。サイトヤキは、現在も続いているムラの大きな行事である。

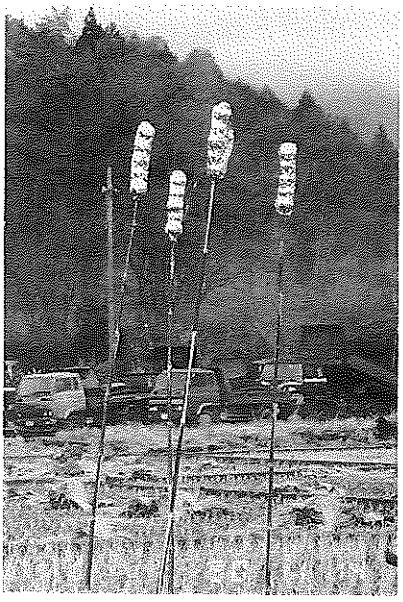
かつて、サイトヤキの準備は、小学校に入った子供から高等科二年（今の中学二年生）までのムラの子供が中心となって、正月七日から始められた。正月が終わり、七日にお飾りを下ろしたので、子供たちはお飾りを集めてまわり、コヤ（小屋）の材料にした。早い部落では、四日の初山に山から木を切ってきて、コヤ造りの材料にしたところもあった。屋根を葺くムギカラ（麦藁）、オンベ（オンビと称する人も多い）の竹ざおとそれに吊るすダルマやキツネのお面などを買った。そうした準備の費用は、暮れから子供たちが「サイノカミサンのお金」として、部落をまわって集めたものである。コヤやオンベ造りは大人が手伝ってくれた。コヤが出来て、下条では「奉納道祖神」と書いた幟も立てたという。

コヤはサイノカミサンの前に造った。コヤの構造や規模は、田場沢と中村では異なり、また戦前と戦後でも異なっている。各地区ごとで、コヤを造る子供たちが競い合い、隣部落より少しでも立派なコヤを造ろうとしたからだった。戦後は、次第に簡単なコヤになってきた。

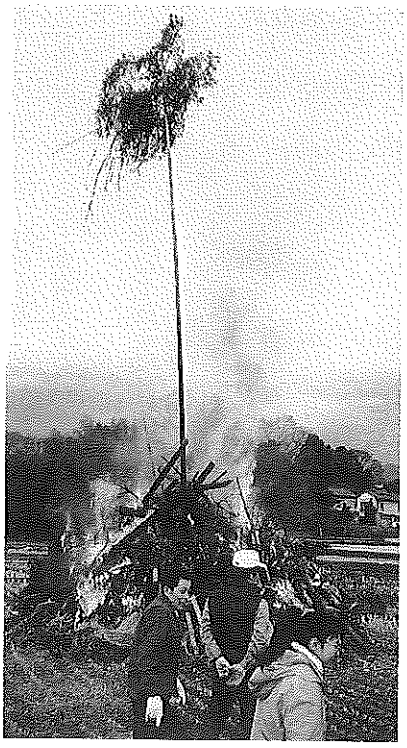
大正七年生まれの杉山喜信さんの話では、戦前（昭和一二年）までの中村では、九尺×六尺ほどのコヤをイナムラの形に造って、中にサイノカミサンを置き、コヤの周りにはお飾りを付けて、旗を掲げたという。コヤにはサイトヤキの一四日まで五、六人の子供たちが泊り込んだ。余所の部落の子供たちが来て、コヤや旗を壊すなどしたからだ。一四日には、午後三時か四時ごろにはコヤに火を点け、中のサイノカミサンも一緒に焼いてしまった。その火で餅を焼いたりした。終わって後に、サイノカミサンに、わらじなどを作って供えた。

サイノカミサンはサイトヤキの主役である。七日に造ったコヤにお迎えして、一四日には火の中に入れて焼く。したがって、サイトヤキを行う場所はたいていサイノカミサンのある場所の辻か広場（田場沢ではサイノカミサンの辻が狭かったので佐野川の川原で焼いていた）である。

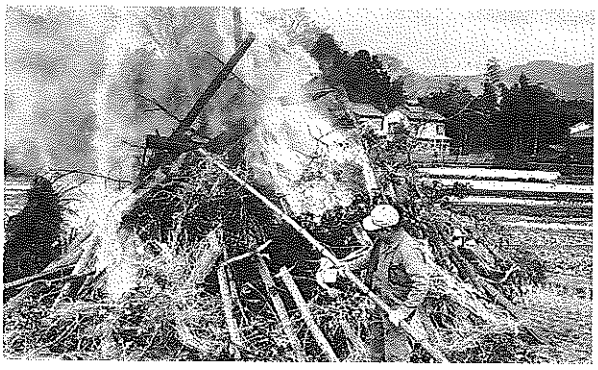
サイノカミサン主役のサイトヤキの火で厄落としをするという。その年厄年に当たる者は、サイトヤキの時にみかんやお菓子を買って子供たちに振る舞う。また、サイトヤキの火にあたると様々な健康の御利益にあずかる事ができる。その火で焼いた餅や団子を食べると一年間風邪をひかない。虫歯にならない。サイトヤキのモシジリでタバコを吸えば身体を病まない等々、サイトヤキの火の効用は



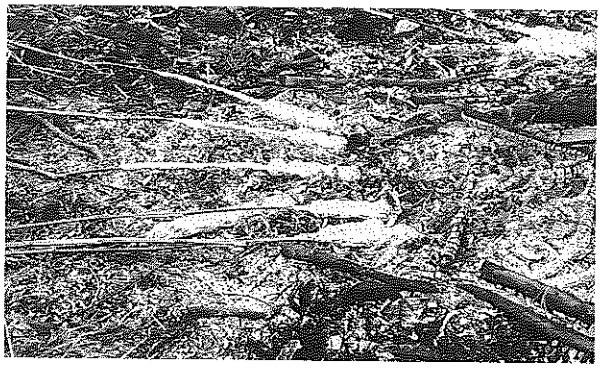
竹に刺した団子



お飾りに火を付ける



燃えさかるお飾り



団子を焼く

サイトヤキ（下条）

大きい。

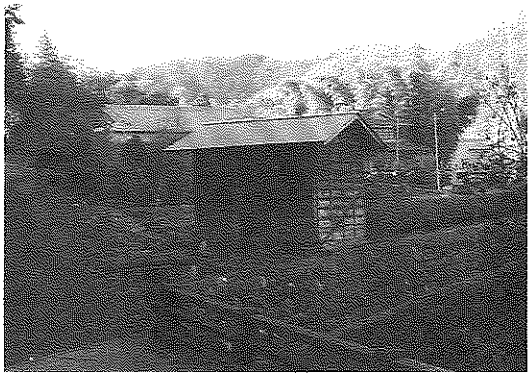
サイトヤキをドンドンヤキという伝承者もいる。裾野市の南隣の三島市あたりではドンドンヤキが通称であり、反対の北側御殿場市ではサイトヤキの言い方が多い。裾野は中間的な呼称になったものだろうか。

山の神講　正月一七日と一〇月一七日は、山の神講である。田場沢では、講のオフルマイは、当番制で掛け軸などの入った箱を回り持ち、共有の食器を使って行っている。田場沢にはムラが共有で使う膳椀小屋が、上と下の二か所にあった。現在上のコヤは子ノ神橋を渡った右側に建っている。しかし、今は余り使われないらしく茶碗やモロバコに交じって、養蚕の道具などが詰め込んである。

なお、昔から、山神社の祭日には「鉄砲を使わない日」などとも言われている。

二十日正月　「二十日正月」（ハツカショウガツ）という言葉があるが、この日特別なことはしない。ただ、「二十日正月目が覚めた」などと言い、この日を境に正月気分からふだんの生活に戻るのだという。

この日、嫁の「里帰り」をしたという。



田場沢上組の膳椀小屋

2　二月の行事

節分　葛山で、節分は「年越し」と呼ばれるように、重要な春の節目の行事である。

節分を一般的には、「マメマキ」と称している。大豆を炒って、年神さんにあげてから、男衆が、部屋を始め家畜の小屋から物置きにまでマメマキをして回る。その文句は「福は内、鬼は外、鬼の目を潰せ」で、大声を張り上げて、家の中や外に向かって豆を投げる。また、この豆を「年の数だけ食べるもんだ」と言った。

田場沢の中野鶴吉さんによれば、節分の豆を焼いて、その年の天候を占っていたという。イロリの端に、一月から一二月までに相当する一二個の豆を並べ、豆の焼け具合で占った。豆が黒く焼ければその月は雨が多く、白く焼けた場合は晴れの日が多いと占えた。イロリの在った頃のことである。

マメマキの夜、葛山は各部落ごとに不動講を開く。地元ではこの行事を、神奈川県の大山への代参者を決めることから、オオヤマサン（大山さん）と称し、オオヤマサンノツツガユ（筒粥）ともいう。代参者は、前年のマメマキの夜にクジで決められた者で、新しい年の厄年を迎える者も同行するという。昔の代参は、大山に決まった宿があって、一泊で行ったものだったらしいが、現在は交通の便もよくなり、日帰りで行って来る。

平成二年二月三日の田場沢の不動講を見学させていただいた。公民館には、各々の家でマメマキをすませた部落全員の講員が集まった。正面の床には、「不動明王」の掛け軸が掛けられている。

その前に、榊とローソクを立て、拍子木と鐘を飾り、お供えの供物が上げてある。供物は、味ご飯、味噌汁、お新香、きんぴらごぼう、うずらまめ、こんにゃくの白あえ、水。その年の代参者四人の先導で、「なうまくさんまんだらばさらだんせんだんまかろしやたそはたやうんたらたかんまん」と唱え、その後「十三仏真言」「不動明王」を七回唱える。終わるとクジ引きで、来年の代参者を選ぶ。そして、区の寄り合いに移る。講員はこの夜全員が不動さんのお札（ヒョウゴ）をもらう。

今は行わなくなったが、昔は節分の日にイワシの頭にツバを吐きかけて棒の先につけて焼く「カラスノクチア（ヤ）ケ」をやったものだった。それを家の入り口に挟んでおく。カラス（烏）や害虫が農作業の邪魔をしないようにする意味があるという。虫除けのためである。この時「とらのおばあの口焼き」などと、わざと憎まれ口を言って、嫌な者が入って来ないようなまじないをした。

田場沢で、イワシの頭を串に刺してあぶって、入り口に挿しておくことを「ヨウカドウ」と呼んだと聞いたが、節分の行事と二月八日のコトヨウカの行事の混同ではないかと思われる。昔はコトヨウカを行っていたものと思う。

初午　葛山の初午は下条の瘡守稲荷のお祭りとしてとらえる事の方が多いようだ。「イナリサンのお祭り」あるいは「稲荷大明神」などの言い方をよく聞く。祭日は二月初午。昔は盛大な祭りで、お参りに来る人も多く、子供は小遣いを五銭とか一〇銭貰って（昭和の初めごろ）、縁日の店まで出かけたものだったという。

稲荷を祀ってある家では、自分の家でもお祭りする。家内安全の神様であると考えられ、屋敷内の鬼門（東北）に祀り（キモンヨケ）、災疫の侵入を防ぐとされる。初午には、五色の紙に「正一位稲荷大明神」と墨で書き、小さい子供の数だけ作って立て、病気などに罹らないように祈った。稲荷さんを祀っていない家ではハタだけを作り、近所の稲荷さんに掲げた。

稲荷様のご神体をキツネだとする伝承もある。初午の日に油揚げと赤飯を供えるのは、そのためであるという。「稲荷へのお供えは、初午の日は赤飯、正月は餅、暮れは蕎麦だった」と、中村秀男さん（田場沢、大正一一年生）に聞いた。

3　三月の行事

雛節句　現在では三月三日に「女の子のお祭り」として、お雛様を飾ったり、長女が生まれたときはモチ（餅）をついたりする者もいるようだが、ほとんどは四月三日に行っている。

彼岸　春分の日を挟んで三日間を春の彼岸というが、葛山ではこの期間に墓参りを行う。

彼岸に入る前には寺に出掛け、墓の掃除をして、新しい花を供える。彼岸は、「イリボタモチニ、ナカビマンジュウ、アケダンゴ」といい、第一日目にはボタモチを作り、中日には小麦まんじゅう、最後の日を明けの日と称し団子を作った。

4　四月の行事

女の節句　四月三日は女の節句で、女の子のいる家では「ヒーナサン（雛さま）」を出して飾り、女の子の成長を祝う。

特に長女の初節句は盛大に行い、ヒーナサンは嫁の実家から貰った。ヒーナサンのほか、座布団や毛布、おひつなどの道具なども貰うなど、派手だった。節句には赤、白、ヨモギ（餅草）の餅をつき、寿司を作り、蕎麦も打って食べた。昔は白酒を用意し、モヨリの組の人がお祝いを持ってきたりしたので、家で振る舞いなどもした。

お祝いをもらえばお返しかオフルマイをしなければならず大変だった。

「ヒーナサンをいつまでも出しておくと縁遠くなる」などという。

浅間神社のお祭り　四月一五日は氏神社の浅間神社の例祭日である。今では四月三日に行っている。

葛山の五つのモヨリ（部落）が回り持ちで当番を務める。当番の引き継ぎは一〇月一六日の臨時祭典の日に区長から区長へ、決算報告と目録が渡され、引き継ぎとされる。当番区になると、その年の祭り費用はその区内で徴収した費用で賄われた。祭り前には、神社のしめ縄を新しく替える。終われば直会である。

昔の浅間神社のお祭りは、今よりずっと盛大で、葛山の人々のなによりの楽しみな行事であったという。山車があって、葛山中を引いて練ったり、夕方には映画を見せたり、ムラの青年たちが村芝居を演じたりしたものだったようだ。

5　五月の行事

五月は野良が本格的に忙しくなる月である。作物の種播きが種々ほぼ同時に始まる。まずナガシロ（苗代）の種播き。昔からたいてい五日が種播きの日とされていた。葛山では水田は少なく、この日をむしろオカボ（陸稲）の種播きの日と記憶している人も多い。また、葛山の代表的農産物、モロコシの種播きも四月の末から五月のこの頃にかけてあるし、苗床から切り取ったサツマの苗を挿すのもこの時である。更にこの時期を忙しくするのはカイコ（蚕）だった。春蚕のハキタテは五日頃に始まり、ほぼ一か月続く。こうした極端に忙しい日々のため、実際のところ、お祭りどころではなかった。

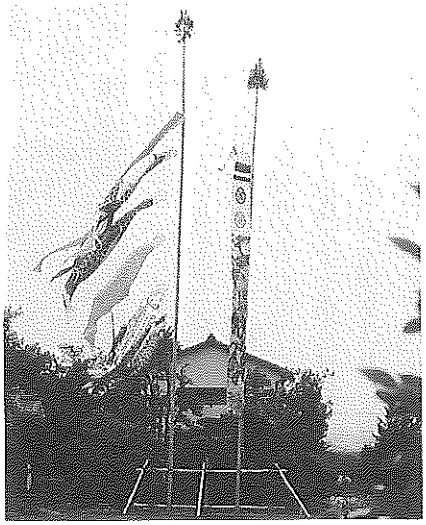
茶摘み（上城）

五月節句　五月五日を四月三日の女の節句に対して男の子の節句としている。「男の子のお祭り」などの言い方もある。しかし、農（業）が最も忙しくなる時期でもあり、昔は「たいしたこたあしなかった」と聞いた。餅をついたり、幟を立てたりはした。

むしろ現在の方が派手になっているようだ。これは現在は農業をやる人が減って、兼業でサラリーマンの家庭が増えてきたからであろう。現在、四月も中頃になると、ムラのあっちこっちに鯉幟の竿が立ち、大きな鯉が風に舞っている風景が見られる。これはかなり新しい現象であるという。

中村の勝又利裕さんの長男大和君の初節句（平成二年五月五日）のお祝いの宴席（オフルマイ）を見学させてもらった。庭には、竿の先に杉の葉を付けた鯉幟と武者幟が立てられていた。杉の葉は長

男の時だけ付ける。出席者は両親の兄弟や祖父の兄弟など親戚と、カネオヤや仲人など約四〇人。座敷の中央には嫁方の実家から貰ったという鎧兜や座敷幟、仲人さんから貰ったショーキ（鍾馗）の人形が飾ってある。利裕さんも「昔よりだんだん派手になってきた」という。



鯉のぼりと武者のぼり（下条）

五月五日のオフルマイ（中村）

葛山の観音様の祭り　五月か六月だったか、年一回、葛山の観音様のお祭りの日に、獣医が来て、馬の健康を診たり馬の爪切りを行った。

6　七月の行事

七月の野良は、チューコー（耕作）がすべてである。オカボ（陸稲）のチューコー。モロコシ（とうもろこし）のチューコー。サツマ（薩摩芋）のチューコー。

チューコーは耕作の事。葛山ではサクルと言う。あらゆる作物は伸び始めた勢いを助け、根元の草を除かなければ育たない。それをするのがこの時期である。やはり七月は忙しく、大きい年中行事は少ない。

農休み　しかし、水田を所有している農家では、七月一日に農休みとなり、ほっと一息する。

葛山には水田が少ないが、それでも、田を作っている者は六月の末頃には田植えを終え、七月一日頃に農休みを取った。

一四日にはお天王さんのお祭り。青年達が相撲を取り、勝った者にはバケツ等の賞品を出すなどしたことがあった。

二〇日頃にカミナリサン（雷神）の祭りだった。各区の当番が道刈りしながら、酒を持って山に登り、豊作の祈願をした。

雨量が少なくて困った年には、ムラからたくさんの人を出して奥のカミナリサンまで登り、ふたてに分かれて、「アーメヲフーラセターマイナ」「カミナリサマエノリューガンダ」と、交互に大声で唱えて雨乞いをした。必死だったから泊まりがけの大行事となった。しかし、この雨乞いは必ず効果があり、ある年には祈願を終えて帰り道に大雨になったことがあったそうだ。

7　八月の行事

七夕　葛山の七夕は八月七日。竹に短冊などの飾りを付けて祝った。餅をつき、赤飯を作り食べた。七夕が終わると、竹は畑に挿しておき、後に燃してしまう。十五夜のすすきも同じように、野菜の畑に挿しておく。「七夕様は百姓の神様だ」だからだという。

墓の掃除（仙年寺）

また、上ケ田生まれの本間さとえさんは、「七夕の時は、川（黄瀬川）へ行って、七度水を浴び、七度ご飯を食べるものであると聞いていた」と、伝承している。

盆　葛山の盆は八月一三日から一六日までである。いわゆる八月盆。

盆を迎えるにあたり、様々な準備がある。墓の掃除、盆道の整備、盆花を用意するなどである。墓の掃除は、古い花を取り除き、新しい花に替えること。盆道は一〇日ごろから部落内の道を整地したりした。盆花は山から取ってきて、一三日にお供えをした。

八月一三日は仏様が家に来る日だという。その日に、坊さんが経を詠みに回る。家では盆棚を作り、生姜、芋、栗など四季の物を供えて坊さんを迎えた。「仏さんが家に来る」ので、迎え火をたく。

八月一四日、ニイボン（新盆）のある家に、年寄の念仏が回る日。念仏の後、ご馳走をいただいて帰る。

またこの日はボンメシ（盆飯）、ボンガマ（盆釜）といって、子供が部落を回り、米を貰い歩く。その年に亡くなった人の家を宿にして夜を明かし、翌一五日の朝、集めた米を朝飯にして食べた。ボンメシは、終戦頃までやっていた。

田場沢の中村はるさん（明治四一年生）は金沢で子供の頃体験したボンガマを語ってくれた。「金沢では、ニイボン（新盆）の家を宿にしてやっていた。ボンガマの前に娘たちが、一軒一合ずつの米を集めて回った。二四日の晩はニンジン・ゴボウ等を刻んだ。この日、娘たちは宿に泊まった。二五日の朝、起きると、娘たちはイモンバ（芋の葉）を採ってきて、赤いご飯でむすびを作り、イモンバでくるみ、子供が一軒に二個ずつ配った」金沢では、昔、盆は七月二四日から二五日にかけてだった。

一般的には八月一五日が盆の中心日であろう。この日を葛山では、「仏様が田畑を見回りに行く日」とか「買い物に行く日」と伝承する人は多い。したがって、この日、盆棚に財布に小遣いを入れて供え、赤飯を握り飯にして芋の葉っぱに包んで「買い物に行ってきて下さい」などと祈願するという。

セガキ（施餓鬼）と称し、新盆の家では、仙年寺に頼んで仏さんのお経を上げてもらった。昔は一五日に寺の境内で、相撲をやったものだが、戦後は戦死者の墓地が増えて場所がなくなり相撲は中止となった。

一六日は送り盆。「仏さんが（お墓に）帰る日」という。朝の涼しいうちに佐野川に仏さんを持って行って送る。ナス、キュウリな

どをかたわらに置いて、団子などを供え、線香をあげて拝む。「仏さんにお弁当を持たせてやる」といい、芋の葉にお供えした物を少しずつ載せて川に流した。朝、早く行ったのは、仏さんが「遅れると可哀相だから」という理由からだった。現在は川に流すのは禁止されている。夕方は送り松明をたく。

盆棚を作ることを「座敷棚を吊るす」と言った。新竹でやぐらを組み、芋の葉、稲の穂で飾り、ナス、キュウリで馬や牛を作っておいた。位牌を真ん中に据え、すいかやキュウリ等の作物を供えた。「盆の一三日に死ぬと死者は頭をはたかれる(叩かれる)」と言った。仏さんが帰ってくる日だからである。逆に一六日に死ぬと、「仏さんがうれしがって車で連れてってくれる」と言った。

8　九月の行事

風祭り　九月は台風の季節。水稲も陸稲も収穫を一か月後にひかえて、農民はただひたすら穏やかな天候を望むばかりである。九月には、蕎麦の種播きを行う。晩秋蚕（バンシュウ）のハキタテの時期でもあり、やはり、忙しい月であった。

二百十日を風祭りといい、台風が農作物に被害を及ぼさないように祈願した。昔、出場沢の青年が集まった宿が、現在の薬師堂だった頃、風祭りには、そこで、青年が相撲を取った。

月見　月見は九月の大事な行事であった。昔は、十三夜、十五夜、二十三夜の三回をやっていた。しかし、現在では、十五夜の一回だけである。二十三夜は深夜になってしまうので早くすたれてしまった。十三夜、十五夜は最近までやっていて、「片見月は良くない」などと言われ、両方をやっていたが、それも、十三夜が何年か前にすたれた。

二回の月見をやっていた頃、「十三夜にはすすぎ芋、十五夜にはきれいに洗った芋」といい、「十五夜はていねいに祝え。お供えの里芋をていねいに洗えば良い子ができる」という年寄りの言葉を守ったものだったという。

十五夜の供え物は、団子のほかは、秋の植物と収穫の作物で決まっていた。ススキ、ケイトウの花、里芋、生姜、サツマ、モロコシ等である。この日、ムラの子供は他人の家の供え物をこっそり盗って回ってもよいことになっていた。十五夜の日の子供の楽しみである。

9　一〇月の行事

オヒマチ（お日待ち）　一〇月一五日の秋の収穫祭をオヒマチと言っている。一五日は浅間神社の秋祭りとも重なる。昔、浅間神社の祭りは、春秋の二回催され、春が浅間神社の本祭典で、秋は臨時祭典として、収穫祭を行っている。

昔のオヒマチは一五日から一七日までで、青年が集まって歌を歌ってカラウスヒキ（唐うす挽き）をやり、秋の収穫を祝った。

カラウスヒキは一一月頃まで、あっちこっちの家で毎晩のように夜遅くまでやった。青年たちは手伝いに出掛けたものだったが、ネブッタカッタ（眠かった）から、カラウスヒキの歌を歌ったり、俵のカツギッコ（俵担ぎの力比べ）をしたりした。カラウスヒキの歌は次のような歌だった。

ヤリギノモトデ、オアゲアレ
オイラガ、アトヲツケテヤル

カラウスヒキニヤトワレテ
カラウスヒカネド、オナノテヲヒク

クモレバクモレ、ハコネヤマ
ハレタトテ、オエドハ、ミエルデモナイ

イチバンビキガイマオエル
アラモトヲヒキヨセ、コメガハチコク

ナナツヤッツデフミヲカク
アイラシヤ、コノテヲ、オヤニミセタイ

イノコのぼた餅　「亥の子のボタモチやったり取ったり」と、ムラ中どこの家でも作ったボタモチ。この日のボタモチは配ったりせず、家で食べたという。旧暦一〇月の亥の日の行事だった。現在でもボタモチだけは作る。

10　一一月の行事

七五三　七五三は子供の成長を祝って、お宮参りをする。一一月一五日、晴れ着を着て、氏神さんと三嶋大社にお参りに行く。三歳の祝いのときは嫁の実家から着物が贈られた。お赤飯を作って、実家やカネオヤ、近所の人にも配った。

恵比寿講　旧暦の一〇月二〇日ということになっている。俵の上に、恵比寿さんを据え、大根二本とおかしらつきの魚とお金を供えた。前の晩には蕎麦を供え、当日は家でもおかしらつきの魚で赤飯を食べた。商人の家に行けばみかんが貰えたので、子供はみんなで出掛けたものだったという。

七五三祝（三嶋大社）

11　一二月の行事

カービタリ（川漫り）　一二月一日は、カービタリといって、「人間も馬も川を渡ってはいけない」とされた。禁止されたのは午前中だけだったので、その日は人も馬も山仕事にも行かず、家の周りの仕事をやって過ごしていたものだったという。

冬至　冬至の日は「トウジトウヤ」といって、豆腐を買ってきて味噌汁にしたり、カボチャを煮て食べたりした。

㈢　衣・食の生活とムラの四季

ムラの一年の生活サイクルを、衣生活・食生活の側面を中心に据えて、それぞれの季節の生業との関係を見ながら概観してみようと思う。

現代のように衣料事情の発達した時代には、ムラごとに、あるいは地域ごとに、更に四季に応じて衣料の民俗的変化が見られることはなくなってしまった。

食生活にしても同様のことが言える。相当なへき村でも、今ではムラにいながらにして、全国各地の産物を、四季に関係なく手に入れることができ食卓に載せることが可能な時代である。

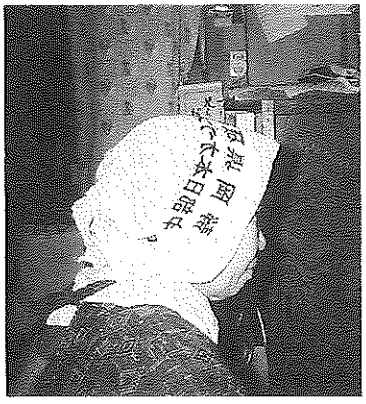
従って葛山の民俗について、ここでは現代のように商品の流通が発達していなかった時代、主に戦前に照準を合わせて過去形で記述することとした。

1　衣生活

まず、衣生活だが、現在に比較すれば極めて貧しく、かつ質素そのものの衣生活ではあったが、そうした貧しい中にも四季に応じて、あるいは季節の農作業に応じて衣類の変化が見られた。

夏の仕事着　夏、葛山の仕事は、水田が少ないとはいうものの、稲あるいは陸稲の育成がおもな仕事である。

女のシゴトギは、絣の着物に襷掛けだった。下体にはコシマキを巻いた。手にはテッコウ（手甲）、足にはキャハンをつけた。木綿だった。履物はワラゾウリ、頭にはテヌグイをアネサンカブリにかぶりトンボガサをかぶった。



アネサンカブリ

男はシャツを着、下体はモモヒキだった。手のテッコウ、足のワラゾウリは、女と同じだった。やはり、頭にはトンボガサをかぶった。

冬の仕事着　一〇月の収穫を終えると、ムラは冬仕事の季節になる。キンマヒキ、炭焼き、竹切り等々、山での仕事が多い。また、葛山はわりあい寒い所で、冬のシゴトギにも夏とは異なる厚手のものを欲しくなった。

上体には、男も女も綿の入ったものを着た。女は綿入れ袖無しのチャンチャンコ。男は綿入れのハンテンだった。女のコシマキはネルのものとなった。履物はワラジガケで山に入った。

雨具　雨の日の仕事は夏に多い。雨具は普段のシゴトギの上に、女はゴザを着、男はミノ（蓑）を着た。

頭には、男も女もトンボガサをかぶった。

昔の子供の衣服　大正九年生まれの芹沢フサエさん（田場沢）に伺ったことによれば、小学生の時代には、絣や縦縞の着物を着て学校に通ったものだったという。その頃でも、裕福な家の子供は洋服を着ていたが、殆どは着物で、足にはワラゾウリをはいていたものだった。ゴムグツもあったが、貧しくて履けなかった。

明治三五年生まれの中野鶴吉さん（田場沢）になると、さらに古く、子供はみんな裸足だったという。

ハレの着物　若い頃、奉公に出ていた芹沢フサエさんは、「奉公先からお正月に家に帰るときは、羽織を着たものだった」そうである。羽織はハレの日の着物だったのだ。

フサエさんは昭和一九年に結婚した。その時の衣装は、新郎は国民服、フサエさんはイツツモン、チリメンの黒い着物だった。この衣装は女中奉公をしていた家で作ってくれたものだった。髪は、沼津の奉公先での知り合いのカミユイ（髪結い）さんに来てもらって結った。

昔は、花嫁の衣装は、黒の紋付きだった。また、ハタ（機）を自分の家で織っていた時代には、娘の頃から嫁入り衣装を自ら用意していたものだったという。

女の髪形　髪形は女の衣装ともいえる。

子供はオカッパだった。娘になると、マキムシといって、後ろでまとめてダンゴにするのが普段の髪形だった。チランガミと言って、髪を束ねず、垂らしておくことは嫌われた。「束ねて、きちっとしていないと、娘じゃない」と言われた。

2　食生活とムラの四季

四季折々に、そのムラか地域でないと食べられないという食物がかつてはあったものである。ムラの特産物、習慣などが、そうした特色ある食生活を作る。

ここでは、年中行事の食生活を除き、葛山の四季の食物で一年を綴ってみようと思う。

葛山の春はタケノコで始まる　「葛山のタケノコは京都のタケノコより美味しい」とか「葛山のタケノコを食べると余所のタケノコは食えない」とか「葛山のタケノコは熱海の高級旅館で使われている」等々、葛山のタケノコ自慢は実に多い。

タケノコのシーズンは、普段は四月三日の節句頃から五月の連休過ぎ頃であるが、早い年には三月の彼岸前後から掘り始める。

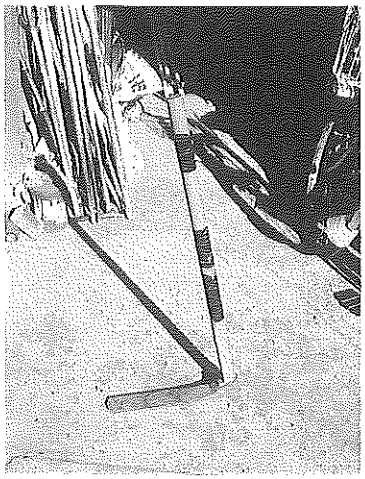
竹の種類によってもタケノコを掘り始める時期が異なる。孟宗は早く、真竹は遅い。真竹は五月の末頃まで掘れた。かつてハチク（淡竹）という種類が在ったが、今は少ない。ハチクは真竹よりも遅いタケノコだった。

タケノコのおいしい食べ方はアクヌキ（灰汁抜き）から始まる。田場沢の中村家では、掘ってきたばかりのタケノコの皮をむいた後、すぐ大釜で茹でるが、その際なにも入れずに湯だけで茹で上げるのだという。茹でる時間は約一時間半くらいと長い。時間をかけなければ「ミバが良い」（見た目がきれい）が「ヒズイ」（えぐい）のだそうだ。茹で上がった後、水に浸して、包丁の背で剝ぎ残った皮を取ってきれいにする。

一本のタケノコでもウラッポ（先端）と真ん中とネッコ（根の部分）ではそれぞれに味の違いがあると聞いた。従って、調理も部分の特徴に合った仕方をすればおいしいのだという。柔らかいウラッポは酢の物。真ん中は刺し身や煮物に。固く歯応えのあるネッコはタケノコの混ぜ御飯が良いのだという。

タケノコの産地らしい調理の工夫である。また、煮物には何も混ぜないタケノコだけの煮物が良いともいう。

タケノコ掘り　彼岸近くの、まだタケノコが地上に見えていない頃に掘るのは難しい。コツは藪の中の土が僅かに膨らんでいる所を見つけることである。

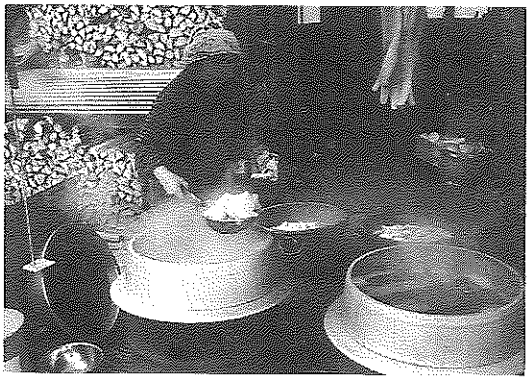


トンガ（唐鍬）

掘る道具はトンガ（唐鍬）。笹を掻き分けると、僅かに先端が見える。最初の一鍬は、その先端の曲がっている側に振り下ろし、そこから掘り始める。地中の根の部分が必ずこの側にあるからだという。

タケノコの出荷　現在、田場沢の中村家では茹でてきれいにしたタケノコを塩漬けにしてオケに入れて保存しておき、得意先の求めに応じて出荷するようにしている。タケノコは、春のごく短期間に集中して穫れるものだけに、最盛期には出回り過ぎて安価になってしまう。従って、保存することによって、常にタケノコの高値出荷を維持することが出来るからであろう。

昭和三〇年代の中村家では、彼岸の走りのタケノコは、その時期の間、自転車に一〇貫目くらい付けて御宿まで出て、そこからはバスで三島に、電車に乗り換えて熱海までというコースで出荷したものだという。



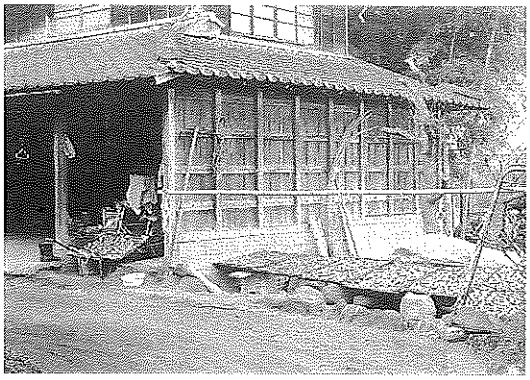
筍をゆでる（田場沢）

葛山の冬はサツマのキリボシ（切り干し）　サツマ（薩摩芋）は、葛山の特産物の一つである。おいしいサツマで、昭和の初めには盛んに大阪方面まで出荷したものだと聞いた。サツマを作るようになったのはモロコシが駄目になってからだという。サツマの収穫の季節は秋から冬にかけてである。一〇月の末から一一月中掘り、三月頃まで貯蔵して出荷する。

キリボシはこの間に作る。主に自家で食べるための保存食であるが、冬の味覚に欠かすことのできない食物といえよう。キリボシの作り方は、サツマをふかし（蒸し）、皮をむき、平たく切って干すだけである。しかし、出来上がったキリボシは甘く、おいしい。菓子など少なかった時代には子供のおやつに最適であった。

ニンジンイモといって、赤くて甘いサツマがあったが、これはキリボシに最適な種類であった。ニンジンイモは、片面を四日干して、裏返して三日、計七日間でできた。

サツマの収穫は秋である。掘ったサツマは、翌年の夏ジャガイモのできる頃



サツマの切り干し（田場沢）

まで、穴を掘ってイケテ（埋めて）貯蔵しておく。出荷も、キリボシ作りも、これを小出しにして使う。現在でも、自家で食べる分くらいのサツマ栽培をしている家は多い。

サツマの栽培　サツマ栽培は、冬の、クヌギ等の落ち葉（シバ）かきから既に始まる。コマンザライ（熊手）で、落ち葉をかきためておき、これを藁で作ったサツマグラにいれる。十分に落ち葉が溜まった四月上旬、苗床を作る。堆肥を入れ足で踏み、土を入れた。次に、芽を下にイモを伏せる。最後に芽の出がよいようにモミガラを上にかぶせた。

サツマの種類には、コウケイ、ベニコマチ、オイラン、オキナワなどがあった。コウケイは、粉がふき、早掘り用で、食べるとホクホクしていた。ベニコマチは、粉が出なく、甘く、ベトベトしたが美味しかった。

また、作る土地によっても微妙に味が違ってできた。例えば、山の畑のものは水はけが良いので、ホクが多く、値も良かった。

葛山では、南山（現在の千福が丘）の畑で取れたサツマは良かったという。

漬物と季節　一年を通じて種々の漬物が食卓を賑わすが、こうした漬物も、野菜の穫れる時期によって、夏と冬では異なる。

冬の漬物はタクアンと白菜であった。「タクアンは、霜の来ないうちに漬けるとおいしい」と言われ、早めに漬けたものだという。「トンガラシ（唐辛子）とコヌカ（粉糠）を入れると虫がつかない」「大根は、桶の中に井桁のように並べると味がしみておいしい」等々の、昔から伝えられたコツを守った。同じ冬の漬物でも、白菜は一二月になって漬けた。

こうした冬の漬物は「三月頃までに食べてしまわないとなあ」と言い、漬ける量もその分だけを見計らった。春には、次の野菜ミズカケ菜が出てくるからであった。

ミズカケ菜は、もっぱら御殿場方面から買っている。

一般的に漬物は寒い時期のものであったから、八月の暑い頃まで食べようとするときは、塩の割合を多めに漬けた。

漬物部屋　一年間いろいろな漬物が食べられるように、季節の産物を漬けて保存しておく漬物部屋を備えている家は多い。

田場沢の芹沢フサエさん宅で見た漬物部屋は、オモヤの西側に建っており、七種類の漬物樽が据えてあり、それぞれには異なる野菜が漬けてあった。訪ねた季節が一二月だったから、入り口に近いところに季節の白菜の樽があり、その次に大根のあさ漬けの樽が据えられていた。そのほかに、おからで漬けたタケノコ、タクアン、ハヤトウリの粕漬けなどが並んでいた。

寒い時期は蕎麦　葛山では蕎麦は実によく食べられる。現在でも、何かの祝いごとや人の集まりの酒宴の最後には必ず蕎麦が出され、「蕎麦だけは必ず食べて下さい」といい、もてなされる。

また、ソバブルミャア（蕎麦振る舞い）という蕎麦で客をもてなす習慣があるように、蕎麦はご馳走でもある。

昔、蕎麦は、米のかわりに日常の食事に食べられていた。蕎麦の時季には米より多く食べた。毎日が蕎麦だった、と聞いた。その時季は、新蕎麦が収穫されて以後の秋から冬、そして春のはじめにかけての寒い頃だった。

蕎麦の種播きは九月上旬に行われた。途中で耕作（サクル）をし、一一月の中下旬には刈り取る。刈り取りはムギカリガマ（麦刈り鎌）

を使った。刈った後は畑に三角に立てて干し、クルリで叩いてこなした。「人の噂と蕎麦種は七十五日」といわれるように、蕎麦の収穫は早い。

なお、蕎麦の栽培期間に、「蕎麦の花が咲いたら地蜂の巣を取る」（田場沢・中野鶴吉さん談）といい、地蜂を取って食べたものだったという。

こなした蕎麦の実はムシロで再び干して、貯蔵し、必要量だけ出してきては石臼でひいて粉にした。蕎麦のヒキガラは枕にいれた。

かつて、山の木を切った後を燃して、そこに蕎麦を播いたりする人もいた。山の地主に蕎麦を作りたい旨を告げ、苗木を植える際に蕎麦を播く。こうすると、下草刈りの手間が省けたので、双方が得だったのである。蕎麦のほか、小麦、陸稲、小豆なども播いた。

こうして取った蕎麦を暖かくなる頃まで食べた。「蕎麦は足が早い（腐りやすい）から、梅雨に入ると傷む」といわれ、この頃は、うどんの時季となった。

夏はうどんが主食代わり　「足の早い蕎麦」に代わり、夏はうどんが主食代わりに食べられた。戦争中、切ったうどんにネギや野菜を入れ味噌味にしたキリコミをよく食べたという思い出を持つ人は多くいる。

うどん粉を取る麦刈りの季節は、田植え前の五月末から六月中旬にかけてである。麦刈りはわざわざ雨降りにやった。雨降りは湿りけがあって「穂が飛ばない」からだった。うどんをよく食べるようになるのもこのころからだった。

一日の食事の内、うどんをいつ食べたかということになるとまちまちである。家ごとに、事情によって、異なった。朝は必ずうどんだった。うどんは夜昼、弁当以外は食べた。ヨーハン（夕飯）は、子供が手伝って作ってくれたうどんを食べた（農繁期）。このように、うどんを食べる時に決まりはなかった。主食代わりだったのだ。

戦後、子供にも出来るうどん作り機械ができ、買って備えた家は多かった。

モロコシを使った食物　サツマが盛んに栽培されるようになる以前は、モロコシが畑作物の主なものであった。モロコシが収穫される頃には、毎日の食事にモロコシがさまざまに調理され食された。

ヒキワリメシ　モロコシを臼でひいて、米と半々に混ぜて炊いたご飯だった。味は良く、アサメシに、これを食べたりもした。ヒキワリゴハンとも称した。

オヤキ　臼でモロコシをひいたとき、荒くひいたものはヒキワリメシに、粉はオヤキに使った。オヤキは粉を湯でこね、丸くひらべったく（偏平に）作り、茹でた。砂糖か醤油をかけて、ヨージャによく食べた。

ヒキワリメシもオヤキも、少ない米の代わりの主食の役割を果たした。モロコシの収穫の季節は、秋、一〇月の末頃だった。

モロコシの栽培　種播きは、四月の末から五月にかけての頃。麦畑の麦の作の間に、ツボ（穴）を掘って堆肥を入れ、合い土を入れそこに三粒くらいずつの種を播いた。

耕作は六月の下旬から七月にかけて行った。一番は平鍬を使ってサクリ（耕作）、肥料に人糞を撒いた。二番は盛った土を分けた。

そして、秋収穫後、サヤ（モロコシ）を取ってきて、皮を剝いでマルッテ（束ねて）、軒下に吊るして乾燥させた。

（杉　村　　斉）

第四節　一生の生活

(一)　産　育

妊娠祈願　子供が授かるようにと、富士山の方で行われていた子安講に出て、拝んだ。その結果、子供が生まれると、お七夜のとき、お礼として子安講のお経を唱えた。

妊娠　妊娠したらしいと気がつくと、姑または自分の親に、初めに言った。姑または親が、「うちのお嫁さん（娘）、どうも気分が悪いというので、診て欲しい」と、産婆を呼びに行った。妊娠していることを「ハランデル」、妊婦のことを「ハラミット」といった。

産婆　お産婆さんは終戦後に現れたもので、昔は、トリアゲバアサンと呼ばれる、近所の慣れたお婆さんにやってもらうのが普通だった。大正六年生まれの女性は、子供を六人産んだが、初めの三人の子をトリアゲバアサンにやってもらった。上城の高橋さんなどが上手だと評判だった。産婆としては、中里の真田ていさん（明治四一年生）、御宿の渡辺す満子さん（大正元年生）などが、葛山での出産を、多く手がけた。

帯祝い　五か月めの戌の日に、カネオヤ（鉄漿親）さんから貰った紅白の布（晒）一丈を、お産婆さんのところへ持っていって巻いてもらった。産婆を経験した人の話によると、お礼にと、赤飯を重箱に詰めてくる家が多かった。何かの事情で作れない家では、「いいときに作って下さい」と、お米と小豆を少しずつ持ってきたりもした。迎えに来て貰って、出向き、向こうで赤飯をふるまわれる場合もあった。戌の日にするのは、犬が多産、安産のためだという。

芹沢桂次郎さんの記した娘ふみ子さんの「帯立祝儀及初節句祝儀控帳」（大正五年四月、以後「祝儀控帳」と略す）では、帯祝いを「帯立祝」と称し、近親者より、以下のようなものが祝い品として贈られている。ガス織（ママ）一枚／木綿一枚／メレンス／大島カスリ／木綿／縮緬／本メレンス／絹メレンス／新ヲメシ／メイ仙ツムギ／メイセンヲブイ羽天（ママ）／木綿一反／布切／金十銭／金二十銭／金一円

妊娠中の禁忌・俗信　「かます（わらむしろの袋）は口が大きいから、腰をかけると、口の大きい子ができる。敷くもんじゃない」といった。

「田の尻水口じゃない所を三つ口にかくと（三つ口にかいて水を出すと）三つ口の子ができる」といった。

「イカなんか食べると、骨のない子ができる」といった。

「葬式のとき、ホトケさんにさわるな」といった。

「葬式のときは、鏡を向こう側に向けて、帯にはさみこんでおけ」といった。

「あの人はケン顔、ズナイ顔（きつい顔）だから男の子、やさしい顔だから女の子」と、妊婦の顔つきで、生まれてくる子の性別を予測することもあった。

安産祈願　八幡様に参ったり、淡島様に祈ったり、全く祈願しなかったり、人によってさまざまである。

淡島様は女衆の神様で、正月、四月、一〇月の年三回、講を行って祀っている。お嫁さんなど若い女性が参加するもので、現在は四七名ほど集まる。集会所で、ジュースやお菓子などを飲食する。その際、子供を抱いている女神の掛け軸をかける。この淡島講では、一人あたり五〇〇円ほどの賽銭を集め、これを借りたい人に貸す、

という制度がある。お産をする人は、これを優先的に借りることができ、肌着など身につけるものを買う。実は、最近はお金を借りる人が少ないから、お産をする人に強制的に貸さないと、利息がとれず、淡島講のお金が増やせないのだ、という話もある。正月に借り、翌年一割の利息をつけて返すことになっている。妊婦の場合、安産のあかつきには、利息もはずんだらしい。

中里の浅間神社内に、安産子育ての石というものがある。昔はたいへん評判になったものらしいが、大正から昭和の初め頃の間に地面に埋まり、忘れられていた。田場沢の中野鶴吉さんが、言い伝えを覚えていて、「この辺にこういう石があったらしい」と指摘、頭部三分の一くらい地上に出ていたこの石を見つけて、昭和六三年に掘り起こした。

デミマイ（出見舞い）　出産の一か月ほど前に、妊婦の実家が餅を持ってきて、組内の家、カネオヤさんに配る。これを「デミマイ（出見舞い）」という。餅は丸餅、「まるく育つように」との意味がこめられているという。最近では、餅ではなく、饅頭（紅白饅頭）になっている。

出産　「適当な仕事は、している方がいい」と言って、出産の直前まで働いた。特別な物を食べることはしなかったが、栄養をつけるために、何でも食べた。

出産場所は、婚家の納戸、または座敷である場合が多い。畳をあげ、油紙や産褥布団をしいて、その上でお産をした。大正八年生まれの人は、子供を産むとき寝産だったという。

産気づくと、ウチの人が産婆を呼びに行く。姑、または手伝いの者が、たらいに湯を沸かす。このたらいは、妊婦が嫁入りのとき、カネオヤさんに貰ったものである。昔は家の者が皆忙しく、産気づいてから自分で湯を沸かしたという人、産婆が湯を沸かしてやった場合などもあった。男性が手伝うことも少なくなかった。

オブツナさんのご飯　赤ちゃんが生まれて、無事の声をきくと、近所の手伝いの人が、ご飯を炊いた（前もって用意しておくこともあった）。お釜のふたを仰向けにして、その上に茶碗を置き、ご飯を盛る。盛るときに、上手に高くすると、生児の鼻が高くなるという。床の間の神棚に供え、後二日間に、産婦が少しずつ食べた。

ノチザン（後産）　後産は、家の男衆かお婆さんが、頑固な紙にくるんで、先祖さんがイカッテ（埋まって）いるお墓へ持っていき、石塔の裏側や竹やぶに捨てたり、土を掘って埋めた。別名エナともいい、届けを出すと、エナさん取り（エナ取り）と呼ばれる人が、家まで取りに来たという話もある。

オブ湯（産湯）　オブ湯は、「日なたに出すといけない」と言って、縁の下や、家の陰など、日の当たらない、人の踏まないところに捨てた。

ヘソの緒　オブ毛（ウブ毛）などと一緒に、紙にくるんでしまっておいた。お嫁に行くときもっていくと、幸せになれるともいった。

ふたご　男女のふたごは、心中の生まれ変わりだと言って、あまり喜ばれなかった。

子捨て　子供が生まれても、すぐ死んでしまうなど、子供のハリヤ（運、行く末）の悪い人は、生まれた子供を一旦道に捨て、ハリヤのいい人（他人）に拾ってもらい、その家の子供の衣服など着せてもらって、返してもらった。下条の瀬戸みつよさんの両親も、ハリヤが悪く、みつよさんの前に二人の子を失ったので、みつよさ

んを一旦捨て、山水園の人に拾ってもらったという。

お産による死　下条の大正六年生まれの女性の話によると、自分が嫁に来て間もなく、御宿の方かどこかで、お産で死んだ人があった。川にさらしを張って水をかけてやるんだといって、葛山あたりから行った人もいた。

授乳　乳の出のよい人は、売ったり、どんぶりにしぼって生木（ナンテン）にかけたりした。逆に乳の少ない人は、多い人からモライヂしたり、重湯に砂糖を入れて生児に与えた。生児がおなかがすいて泣いていても、この子はナキンヅラ（泣きん面）だといって、そのままにしておいたりもした。

産後の食事　産後三日、あるいは一週間という説もあるが、塩けのあるものは食べない。塩釜さんが、塩立てをするからだという。その後は、ご飯に白湯をかけたものなどを食べた。「丸干しは血おさめになる」といって、魚の干したものをよく食べた、という人もいる。お乳がよく出るようにと、さつまいもを食べた人もいた。油っこいものは、食べてはいけなかったらしい。

産後のきよめ　出産後初めてヘッツイの前に行くときは、「さわりがないように」と、シオバナを三回ふる。マッコ（いろり、火の端）の前に初めて行くときも、シオバナをふるという。

産後の仕事始め　人によってまちまちである。「お産のそのあした」から働いたという人もいるし、一週間くらいで起き出して、お勝手のことぐらいをした人もいる。ただ、やはりあまり早くから動いたり、重いものを持ったりすると、おりものがいつまでも出るからよくないと言った。水仕事も、身体が冷えるからいけないと言った。お産の前が忙しくて準備ができなかったので、お産の後に、浴衣をこわしておむつを縫ったりもした。

出産見舞い（産見舞い）　身内、組内、その他つき合いのある家で出産があると、特に女衆が見舞って祝う。産後三、四日は、気がねをして、水分補給の砂糖水を差し入れる程度だが、その後顔みせに来て「おめでとう」と言う。今では、入院先の病院へ祝儀を届けるのが普通である。これは、特にお返しはしない。

前出の「祝儀控帳」では、産見舞いを「ネイミ（小児見）」と称し、近親者より白米や赤飯を、祝いとして贈られている。

出産祝い　産後間もなく産婦のオヤモトから、紋の入った産着が届いた。ただし、ハツノコ（最初の子）の場合だけ、という家が多い。

お七夜　赤ちゃんが生まれて七日めに、祝いの宴を催す。近所の人や産婆が呼ばれて、赤飯または、おこわめし、尾頭つきの魚、吸い物などをふるまわれた。赤ちゃんは、お風呂に入れ、頭をそっておしろいをつけ、新しい着物を着せた（これは産婆がやった）。命名もこの日で、決めた名前を紙に書いて、神棚の所にペタンと貼った。産婆、またはトリアゲバアサンへの謝礼もこのときで、産婆を経験した人の話によると、帰り際に赤飯を重箱に詰めて持たせてくれ、その上にご祝儀がのっていたという。以後、産婆と生児とのつながりは特にない。近所のトリアゲバアサンに頼んでいた時分には、そのお婆さんが亡くなると、「お前は、あのお婆さんに取り上げてもらったのだから、送りくらいしてやれ」と、その子を葬儀に行かせたりもした。

百ヒトエ　赤ちゃんが生まれて百一日めに、産婦、姑が赤ちゃんを連れて、浅間さんへ参る。人によっては、三嶋大社に同時に参っ

たという人もいる。産婦のオヤモトから、赤ちゃんのためにオブギ（産着）が届き、それを着せていく。米、塩、赤飯、賽銭などを持っていって供えた。浅間さんの石段に、赤ちゃんをいったん寝かせてきた。

同じ日に、浅間さんから戻った後、「子どもらの仲間入りをさせてもらうのだ」と言って、近所の子供たちを家に呼び、赤飯をお重に詰めてやったり、食べさせたりした。

初誕生　嫁のオヤモトから、産着などを貰った。氏神様にお参りにいく家もあった。誕生日の前に、赤ちゃんがあるくと、餅一升を風呂敷でしょわせ、歩かせた。

初正月　嫁のオヤモトへ、赤ちゃんを連れて帰り、祝った家もある。

初節句　女の子の場合、四月に、男の子の場合、五月五日頃祝う。嫁のオヤモトからおひなさん（女の子に）、ざしきのぼり、おぶい半てん、夏がけ布団、反物などを贈られた。組の衆も、祝いの品物やお金、何かと用意してくれるので、「お茶飲みに来てよ」と誘い、午後三時頃、ごちそうやお酒を振る舞った。昔は、白酒も造ってもてなしたという。餅をついて配ったという家も多い。

「祝儀控帳」によれば、初節句の祝い品として、近親者より、以下のようなものが贈られている。大利一組／天神／シズカ御前／高砂一組／神宮皇后／ケイセイ／石道丸／立雛／金二十銭。

下条の御宿一三さん（明治四三年生）の記した「祝儀名簿」（昭和一〇年一月）には、初節句の祝い品として、以下のようなものが記録されている。花人形／瀬戸ナベ一ツ／ニュウムナベ一ツ／ヲヒツ大一個／ヲヒツ小一個／ヤカン（ニュウム）一ツ／重箱二ツ／反物一反／反物切レ／着物／ヲボン／ヲゼン五ツ／チャワン十人前／金一円五十銭／金一円／金五十銭／金二円。

ホウソウ　子供がホウソウにかかると、ホウソウ棚を作った。これは、藁のさん俵を作り（円形または正方形）、四すみをヒモでつったようなもので、「なるべく小さく済むように」と小さく作った。この中に、ホウソウ団子（ホウソウまんじゅう）と呼ばれるふかしたまんじゅうで、上に赤く紅で点をつけたものを、六個くらいのせて、赤い紙を鳥居の形に組んだものをつけ、神棚の脇に下げておいた。

ホウソウがかせると（治ると）、このホウソウ棚に赤飯などものせて、サイノカミ様のところへもっていった。これは後で集めておいて、ドンド焼きの時に燃やした。また、中里の川の近くの家では、ホウソウ棚を川へもっていき、ヤブコウジの葉と一緒に流したという。ヤブコウジには「きよめ」の意味がある。昭和三〇年頃までやっていたという。

ホウソウが治ったお祝いに、昔は親戚や組の者から、ホウソウまんじゅうを一重または二重ずつ貰った。赤飯を炊いて、そのお返しとした。

「祝儀控帳」では、「痘見舞」と称して、以下のようにホウソウまんじゅうを貰ったという記録がある。小二十一／大二十／大九／大十一／小二十二／大一絵重四十七入／小二十／自製二十一／小十二つ／小十／自製一絵重／同十／六十三／六十二つ／自製二十一／大十八／自製一絵重五十一／大十五／大十。

子守　おばあさんが家で子守をする場合もあったが、母親が子供を連れて畑へ出ることも多かった。ムシロをしいたりハンモック

を吊ったりして寝かせておいたり、カジキダワラ（さつまいもなどを運ぶもの）に入れて畑に置いておいたりした。

七五三　昔はあまり盛大にやらなかった。三つの時は、実家の親から着物を贈られる程度。七歳のときを「七つの祝い」といって、華やかにやる。三嶋大社へお参りに行き、お神酒を貰って帰る。その際、最初の子の場合だけは、おじいさん・おばあさんも同行するという。オヤモトからは祝いとして着物を貰う。二番目の子からは、前の子の時の着物を着せるので、お金で貰う。親戚からも祝儀や祝い物が届く。その子供の家では赤飯や引き物を、実家、カネオヤ、仲人、近所の人に配る。

(二)　婚　姻

結婚相手の決定　青年団の行事で知り合いヨバイにいくという恋愛のケースもあったが、親同士が決める場合も多かった。「親戚つなぎにほしい、そうすれば先祖がうかばれるから」と言って、親戚筋で婚姻を結ぶ場合もあった。

田場沢の中村はるさん（明治四一年生）は、田場沢の東にある金沢というムラの出身だが、叔母がこの部落に嫁に来ていたことが、結婚のきっかけになったという。このような例も珍しくない。

恋愛　恋愛のことを「ドラうった」という。

恋愛結婚を親が認めない場合、駆け落ちをする。あるいはカケイリといって、親戚に頼みに行く。親戚の人に身を預けて、そこから嫁ぐ場合もある。

見合い　初めは、仲人が写真を持ってきてこの人はどうかという。実際の見合いは、仲人の家か女性の家で行う。一、二日おいて相方の意見を聞いて、話が決まれば二人で会うという段取りをする。

ナコウド（仲人）　双方でたてる場合と、「貰う側」（男性側）のみでたてる場合とがある。本家や、位置（場所）的に関係のある人に頼む。

親戚の人が実際の下ごしらえ（下準備）をして、ある段階になってから仲人を決め、頼むという場合も多い。

通婚圏　ムラウチ（村内）での結婚が、比較的多い。周辺のムラの人との結婚も多かったが、今里からは嫁をとらない方がいいと言った。昔、葛山と今里で戦をしたからだとか、（嫁をとると）家の人間が欠けるなどの言い伝えがある。

中里の勝又なを江さんのように、伊豆の松崎から嫁に来た、という例もある。半田しづさんなどは、田場沢で生まれて中村に嫁いだ人だが、若い頃、「あんまり遠くに嫁にやるのは、娘をうっちゃるみたいでいやだ」と男親が反対したという。

カネオヤ　仲人とは別に、結婚する男女の世話をする人、「仲人の上に位置する」存在として、カネオヤ、またはオヤさん、オヤブンさんなどと呼ばれる人を、結婚の際に決めた。この習慣は、終戦の頃まであったという。

カネオヤは親戚の主な人にすることもあったが、「チエン（血縁）でない方がいいと思う。オオヤ（本家）だとどうしてもオオヤぶるから、他人さんでも日頃つながっている人の方がいい」といって、縁のある「他人」に頼むことが多かった。例えば、下条の岩佐貞良さん（明治四四年生）のカネオヤは半田さんだが、これはお互いの父親が区のことをいろいろやっていて、深い縁があったからだという。中里の伊藤ちずこさんのカネオヤは、御宿の湯山芳太郎さん。

伊藤さんの息子のカネオヤも湯山さん。ちずこさんの主人が役場にいたとき、湯山さんが村長だった。また湯山家には代々世話になっていたので、その縁だという。

カネオヤは、結納や結婚式に立ち会い、式の後も、出産の報告を受けるなどつき合いは続く。結婚式の前に、カネオヤからお嫁さんにカナダライや反物を贈る習慣がある。これを「カナドオグ」という。

結納　人によって違うが、結婚式の一、二か月前にやったという人が何人かいた。男性が両親や仲人と一緒に、手みやげなどを持って女性の家へ行く。その際に仲人が、結納品（目録、お金、するめ、すえひろ、昆布、なないろ、扇子、ヤナギダルにのしをつけたものなど）をもっていく。ゲタも用意されていて、これは仲人が「足を運ぶから」といって履くらしい。この日に、結婚式の日取りを決めた。はじめて会ったこの日には、「相手の顔をよく見なかった」という女性も多い。結納品も、のしにくるんだお金をもってきてもらっただけだったという人もいる。

結納返し　仲人が、男性の家に、はかま代、のし、扇子など結納のときと同様のものを届けた。この日に式の日取りを決めた人もいる。

祝言の時期　秋、米の取り入れが終わって食べられる頃が多い。

嫁入り道具　結婚式の前々日くらいに、カネオヤから、カナダライ、カネツケ（お歯ぐろ）道具を贈られる。他に、口紅、針道具、反物を、カネオヤから貰ったという人もいた。鏡台、裁ち物板、つづら、タンス、げた箱などは、親が用意してくれたという。

結婚祝い　昔は、娘を嫁にやるというと、ムラ中の懇意にしている人一〇〇名くらいが、祝いの品物を持ってきた。縁のうすいタニンサン（他人さん）は、下駄や割烹着など、縁のこい人は、さらしの反物などをくれた。三〇年くらい前まではやっていたが、最近は、本当の親戚しか物をやり取りしない。

婚礼衣裳　田場沢の中野鶴吉さん（明治三五年生）の妻が嫁に来たときは、黒い、裾模様のある着物を着てきた。模様は松葉に野菊だった。その後、茄子紺の着物が流行したが、鶴吉さんの娘が嫁に行くときは、やはり裾模様のある黒い着物と、緋色の長じゅばんだった。

このように、婚礼のときには、黒い紋付きの江戸褄を着る人がほとんどで、よほどいい家の人は、白い衣裳を借りてきて着て、後で黒い着物に着がえたりもした。

中里の勝又ことさん（大正八年生）も結婚式には江戸褄を着たが、当時は「支那事変」（日中戦争一九三七年）があったりで「できるだけ質素に」という風潮が強く、（江戸褄でも）「華美すぎる」と役所から注意を受けた。

当日は、嫁入りの前に、近所の人から着物を着せてもらった。髪は、髪結いさんに来て貰い、やってもらった。

芹沢桂次郎さんの記した「婚禮祝儀控帳」（大正四年二月）によれば、結婚祝いとして金一〇銭を一八名から、金一五銭を二名から、金二〇銭を一六名から、金三〇銭を三名から、金四〇銭を一名から、金五〇銭を三名から、金一円、金二円をそれぞれ一名ずつより貰っている。他に品物の記録はない。

ムコイレ（婿入れ）　結婚式の当日、婿が嫁の家へやってきて昼食を食べる。これをムコイレというが、人によってやったりやら

なかったりだったという。

嫁入り　嫁入りは、夕方行う。婿側が嫁の家へやってくる。婿は、仲人、嫁、家の人、親戚総代の順で盃を交わす。婿が先に帰り、その後、嫁入り行列が出発する。嫁側のつき添いは主な親戚が七、八人で、父母がついてくる人もいる。婿側から、「ヨメッ子の方からは何人来てくれ」と言われ、それに応じた人数で行った。婿側から来た出迎えの人が大勢で、総勢一〇〇名くらいだった。お嫁さんは、仲人の奥さんに手を引かれて、あるいは馬力に乗ったりして、先頭を行った。自動車に乗ってきたという人もいる。タンスなどの道具類も、そのとき一緒に運んできた。

昭和34年頃の嫁入り（田場沢）

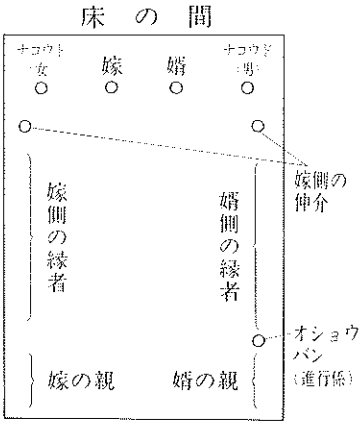
婿の家へ着く前に、途中で知り合いの家へ寄らせて貰うという習慣があった。ナコウドさんの家が、もし近くにあれば、そこに寄った。下条の御宿きよ江さん（大正六年生）は嫁にきたとき、やはり下条の荻田さんの家で、婿家のマエブルマイ（前振舞い）が終わるまで、待たせてもらっていたという。

嫁が婿の家の上口から入り口まで歩く間、「嫁入りうた」が歌われる。婿の家の門の前に、ちょうちんを持った男の子と女の子が左右に分かれて立っていて、嫁が中に入ると、入れ替わって、ちょうちんを消してしまう。これは、「一度入ったら、もう二度と出ないように」という意味があるらしい。嫁は玄関から室内に入り、持ってきたおみやげなどを渡す。座敷で茶や菓子をいただいたという人もいた。すぐに宴席に座らされたという人もいた。

本祝言　昭和四〇年頃までは、自宅（婿側の家）で婚礼の宴を催していた。その後、農協などの会場で行うことになった。

祝言には、親戚、組の人などを呼ぶ。前もって、遠い人には手紙で、近くの人には歩いて回って知らせた。長男の場合に比べると、次・三男のときは簡単で、招く人の数も少なかった。

本膳の前に、まずマエブルマイがあった。これには、三〇人から三五人くらい、うすいシンセキを呼んだ。料理ののってくる膳は小さい、足のない膳で、敷きものも本膳に比べるとよくないものを使った。前ぶるまいには、婿も嫁も出ないのが普通で、嫁は近所の家で、この宴が終わるまで待機していたりした。



図Ⅲ－5　結婚式本膳席順（一例）

本膳には、一三人から一九人くらい、多いときには、二五名くらいの人を招く。必ずはすの数（奇数）の

人数にするという。縁の濃い人を呼び、膳にのせるものも敷布も、前ぶるまいのときより上等なものを使った。

本膳の際の座席は、図Ⅲ－5のとおりである。

オショウバンと呼ばれる人が進行係を務める。これには組の人がなる。

夫婦、親子、ナコウドの順に盃を交わす。三三九度のときは、オチョウメチョウと呼ばれる幼い男の子と女の子が酒をつぐ。

嫁の色直しの度に、膳が変わったとか吸い物が途中何度も変わったという宴もある。

色直しは人によって違うが、途中でやらない人も、宴が終わる頃、シマ（縞）やお召しなど普段より少しいい着物に替えた。帯は博多帯を用いた。島田に結ってきた髪を、手の慣れた人に、まげに直してもらった。そして、その格好で来客にお茶を運んだ。

昭和30年頃の結婚披露宴（田場沢）

宴は、夜八時、九時から始まって、夜中の一時、二時まで続いた。下条の御宿きよ江さんが結婚したときも、最終的に人が全部帰ったのは、空が明るくなる頃で、「お前らの祝言のときは、夜が明けたなあ」と、後々まで言われた。

本膳の席では、嫁はものを食べるものではない、と言われている。前に膳が置いてあっても、お茶すら飲めない。子供や近所の若い衆が、障子に穴をあけて宴席の様子を見る、ノゾキコミ（覗き込み）といういたずらがあったが、嫁がものを食べたり飲んだりすると、「あの嫁はお茶飲んだ。エエカゲン（いい加減）な嫁だ」と、後でさんざん冷やかした。残った膳のものは、引き物などと一緒に、実家の親が包んで持って帰った。

祝言当日まで、婿との行き来が全くなく、「どの人が婿さんだか知らなかった」という人もいた。本膳の席が終わり、客人が帰っていった後で、初めて婿さんに声をかけてもらったのだという。

本膳の後、青年達（青年団の仲間）を家に呼んだ。少しのヒキモノ（引き物）を食べてもらった。

オカタミセ（オカタ見せ）　結婚式のそのアシタ（明日）、主な親戚が、米などをもって祝いにやってきた。芹沢桂次郎さんの記した「婚禮祝儀控帳」（大正四年二月作成）によれば、白米一升、ほかには玄米一斗、金一五銭、白米二斗、を三四軒もの人から貰っている。

オカタミセの返礼をして、またそのアシタ（明日）、嫁にボタモチをこしらえさせ、前日、祝いを貰った親戚を中心に配った。

カオミセ（顔見せ）　近所まわり、親戚まわりともいう。祝言の後、二、三日うちくらいに、嫁とナコウドの奥さんが、区長の家、浅間さん、お寺、組の人（モヨリの人）の家などをまわって、あいさつする。その際、嫁の名前の入ったタオル等を持っていった。紅白の縫い合わせの布をかぶせた膳に、お茶の葉を入れた袋をのせ、もってまわったという話もある。嫁と嫁の親が一条の長さの紙に、父親の名前を書き、三つに折ったものを持って、組の人の家をまわっ

たという話もある。

近所まわりをしなければ、村民として認められないし、まわりの人も村民として扱わなくてよいことになっていた。

ミツメ　結婚式の三日後くらいに、嫁は初めて里帰りをする。これをミツメという。婿や姑、ナコウドが同行する場合もある。赤飯をふかしておひつに入れたものや、その他何かしらみやげを用意していく。

向こうで仮の祝言のようなものを行ったり、婿がナコウドに連れられて近所まわりをしたりという話もある。

泊まらずにその日に帰る人もあれば、一泊してメシジュウというまんじゅうを作り、婚家に持ち帰って、里帰りのみやげとして近所に配ったという人もいる。

以後、嫁が里帰りできるのは、盆、正月、節句のときくらいであった。自分からは、なかなか言い出せなかった。「親があれば（生きていれば）、ヒガンメエリなんて行かなくていい」とも言われた。

離婚　離婚は、最近になってからのことで昔はあまりなかった。

再婚　兄の死によって兄嫁と結婚したというケースが、葛山に二件ほどあった。その場合、結婚式はとても簡単で、両方のナコウドとオヤが出席しただけだったという。

デロウチ　田植えの終わる日、あともうちょっとで完了というときに、結婚したばかりのヨメサン（嫁さん）、ムコサン（婿さん）に、皆で田の泥を投げつける。全身泥だらけ、目だけ見えるような状態にしてしまう。逃げると、家まで泥を持って追いかけたので、「泣いちまう」ヨメ（嫁）もいた。ヨメサンが田に入らず留守番をしているような場合には、家まで泥をもっていった。三〇年くらい前までやっていた。

㈢　厄年・年祝い

伊勢参り　青年（一八歳から二〇歳くらい）は、三年ほど奉公してお金をためると、連れ立って伊勢参りに出かけた。伊勢に参り、後、古市の遊郭へまわって帰ってくるのが、普通だった。

秋または冬の農閑期に出かける場合がほとんどで、行くと決まると、本人を床の間の座敷に据え、家族皆で祝ってから、送り出した。母親が、何かのときに困らないようにと、じゅばんの衿に、お金を縫いこんでくれた。

帰ってくるときも、紅白のひもをかけて飾りたてた馬が、駅まで迎えに出て、それに乗って帰ってきた。ムラに入ると、馬上からお菓子をばらまいた。

厄年　厄年は、女性一九歳・三三歳のとき、男性二五歳・四二歳のときである。

厄落としだといって、家のカドに金を捨てたり（置いたり）、大山さん、成田さんに参る人もいる。厄年の人が、一月一五日のドンド焼きのとき、だんごを焼きに来た子供に、お菓子やみかんを配るという習慣もある。女性は、一九歳の厄年のときは、髪を桃割れに結うものだったという。

年齢の感覚　五〇歳というと、昔はかなりの年寄りだった。長生きしても、六〇すぎまでというのが多かった。

年祝い　八八歳のとき、近親の人と、ものを交換するなどして祝った。

（鈴　木　めぐみ）

(四) 葬制・葬儀の準備

トブリャー　葬式のことを以前はトブリャー(トブライ)と言った。今でも老人はそのように言うことがある。

枕団子・枕飯　人が亡くなると、まず最初に枕団子と枕御飯を作る。米を少し水に冷やかして、それを擦って、少しの水でゆでて、まず団子を三個作る。そしてその団子をゆでた湯でご飯を炊いて、皿に盛って、その上に箸を立てる。

団子もご飯も黒いほど「後生がいい」と言った。現在は特別に炊かずに、炊飯器の普通の御飯をそのまま使用することが多いという。

北枕　人が亡くなるとすぐに枕の向きを北向きに変える。

魔除け　故人の腹の上に機織りに使う筬を置いた。これは魔除けのためだという。また竹枝をとってきて、それを神棚に被せる。これは三十五日もしくは四十九日までそのままにしておくという。

ヒワリ(日割り)　葬式の日程を決めるために暦を見ることをヒワリという。友引の日を避ける。

死の通知　死者が出た家ではまず隣の家にそのことを知らせる。隣家から組長、区長へと知らされる。他方で、近親者が二人ずつ組んで各方面に連絡に出掛けた。これをヒトニイクとかヒトヲダスという。ヒトニイクのは必ず二人一組と決まっており、それは「一人で行くとオオカミに襲われるからだ」と言い伝えられている。葬式の関係はヒトニイク以外でも二人で組むことが多いので、普段でも二人連れで歩いていると、「葬式のようだ」と言われる。

下条の御宿きよ江宅に保存されている記録によれば、ヒトニイク組は全部で八組で、①村内、②御殿場方面、③三島・長泉方面、④今里・下和田方面、⑤御宿・深良方面、⑥沼津、⑦役場関係、⑧お寺関係、に分かれて連絡に出た。割り振られた方面の通知すべき家家の住所と名前を書いた紙片を貰って出掛けた。現在ではほとんどが電話連絡になってしまっており、実際にヒトニイクことはしない。

葬儀の手伝い　葬儀の準備から後始末までの全ての仕事は、葬儀を出す家の属する組の家々によって行われ、その組の組長が葬儀委員長とでもいうべき役になり、全体を取り仕切る。組内の各家は皆手伝いに出る。原則として夫婦で出る。男は普段着、女は割烹着というのが普通である。葬儀の手伝いに行くときに、各家の主婦は一軒につき米一升持参する。これは古くからの慣行ではなく、戦争中の米がない頃に始まったものだという。

葬式の知らせに出かけた者を除いた残りの男が、日除けを作った。棺桶は木製で深さ二、三メートルあり、タテガンと呼ばれていたものと、普通のネセガンの両者が使用されていた。土葬の頃の方が棺桶は小さかったという。棺桶はガンヤと呼ばれる葬具屋で買った。位牌も葬具屋で買った。草履、藁を編んだ蛇、提灯一対、カミバタ四本などは組の人によって作られた。今ではこれらも全て葬具屋が用意して持ってくる。

手伝いの女性は料理を作る。ある葬儀に際して台所に貼り出されたメモによると以下のとおりであった。

煮物係

一、担当　北一組、西組　女性全員

一、煮物　昼食用　・おざく(大根・にんじん・こんにゃく・ちくわ・さといも)

・おから(にんじん・油揚げ・ねぎ)

・みそ汁（とうふ・ねぎ）
・漬け物（のざわ菜・たくあん）
・皿盛用（こんにゃく・きんぴら・しいたけ・竹の子・がんもどき）
・酢物（きゅうり・わかめ）
・みそ汁（とうふ・ねぎ）
・とうふ（しょうが・ねぎ）
・さしみ
・漬け物（のざわ菜・たくあん）

「おごはん」　昼食用……味つけ（醤油・しいたけ・にんじん）
忌中用……茶めし

アナホリ（穴掘り）　コシアゲともいう。現在は二人であるが、土葬当時は四人で、穴掘りをし、また棺を担ぐ役でもある。通夜にモヨリ（最寄）が集まった時にコシアゲチョウ（「腰上げ帳」）とか「穴掘り帳」と呼ばれる帳面の記載に従って担当する人を決める。アナホリはタニンが行うものである。中村は二組で構成されているが、穴掘りは死者の出た組ではなく、残りの組が担当する。やはり「穴掘り帳」に順番が記載されている。

禁忌　妊娠している女性はホトケ（死者）に触れてはいけない。また葬列で使用する道具類に触れてもいけないとされる。妻が妊娠している者はコシアゲを担当しない。

(五)　トブライの儀礼

お通夜　親族と組の人が中心になって行う。料理も組の人が作った。通夜の席では「とどきませんで、惜しいことをなさいました」などと挨拶をした。

湯灌　死者を座敷に移して、そこで行う。配偶者、子供あるいは本家や近い親族が死者の身体を拭く。昔は湯で拭いたが、今はアルコールも使って拭く。湯灌に用いる湯は、家内の竈は使わず、庭に臨時の火所を設けて沸かした。三本の竹の上部を縛り、下部を三脚のように広げて立てて、縛った部分に鍋をつるして沸かした。

湯灌の後で、死者に白い着物を左前にして着せ、紐を結んで、結び目をオッタテにし、草鞋を履かせた。旅立ちの姿である。この死装束は、組の年寄りの女性が、死者の家に集まって縫う。着物、ずた袋、帽子、脚半、紐などである。全部を完成させるのに二時間程度かかる。

人によっては、白装束ではなく、故人の持っていた衣装のうちもっともよいのを着せたという人もいる。ただし、火葬が一般化してからは、生前に持っていたいい着物は、故人の上に引っ掛けるだけで、実際に燃してしまうことはせず、寺に寄付したこともあるという。

納棺　子供や近親者が行った。死者の首にずた袋を掛けるが、その中には小糠を布に包んだもの、六文銭（三途の川を渡るために必要だといわれた）を入れた。ほかに棺の中に、生前使っていたもの、たとえば男の人だったら葉巻や酒などを入れる。土葬のときは沢山の物を入れたが、火葬になってからは減ったという。

火葬と葬儀　現在は全て火葬である。土葬から火葬に変わったのは二〇年程前からである。それまでは土葬であった。現在は、葬儀の当日午前中に火葬に付す。その際に写真、位牌、野膳は出る。霊柩車で火葬場に行き、お骨になって戻ってきてから葬儀をし、改

めて野辺送りをして墓地に向かい、火葬骨を墓に入れる。

タチネンブツ（立ち念仏）　ヤキバ（焼き場＝火葬場）に出発する前にタチネンブツを行う。そして火葬場から帰ってきてまた念仏をする。

香奠　帳場に来て香奠を差し出すときには「惜しいことをいたしました」と口上を述べ、それに対して受け付けは「ご苦労様でございます」と応答する。香奠は現金である。

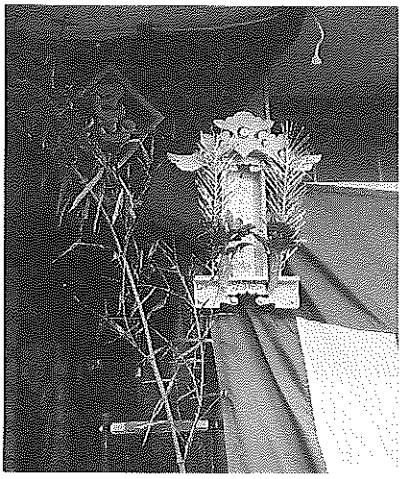
出棺　棺桶は家の玄関から出るが、和尚は庭の方から出入りする。家の玄関にはカリモン（仮門）が笹竹で作られ、また横にはサトヤと呼ばれる門牌が立てられる。

タチザケ（発ち酒）　葬列が野辺送りに出発する前に、門の内で、葬列に加わる人全員に酒と豆腐を振る舞う。炊事場の手伝いの人達がお盆に酒と豆腐を載せて配って歩く。参加者はお猪口で冷や酒を飲む。

カリモン（田場沢）

コシアゲ（輿上げ）　ヨッタリ（四人）ともいい、墓穴を掘る役目の人が棺も担ぐ。現在は墓穴を掘らないので二人である。区長が保管しているコシアゲチョウの記載順番によって担当者を決める。

野辺送り　施主の家を出て、仙年寺まで歩いていく。その通路はトブリャーミチと呼ばれて、各モヨリから仙年寺まで経路が決まっている。その途中でツジ（辻）にさしかかると、ハナカゴ（花籠）と呼ばれる竹籠を振って、なかに入れてある五円玉、飴玉などを撒く。花籠は二つである。五円玉は赤い布や赤い毛糸が付けてある。特に長寿で亡くなった老人のときに撒く。そして、皆は競って撒いた金を拾って、子供の服に縫い付けたりする。これを身につけていると長寿になるという。田場沢のある家の葬儀に際しては、自宅の庭、家から道路に出た所、田場沢の辻、下条の辻、中村公民館前、そして、仙年寺の前庭の六か所であった。



サトヤ（田場沢）

辻で花籠を振る（田場沢）

寺に着くと、本堂の前庭で三回廻り、そこで最後の撒き銭をして、それから本

堂へ上がる。右側に女性、左側に男性がすわり、老人によるご詠歌があり、最後に住職の読経がある。

野辺送りはほぼ以下のような構成になっている。

①銘旗　二人
②提灯　二人
③六道　二人
④竜頭　四人
⑤旗（紙ハタ）　六人
⑥造花
⑦僧侶　二人
⑧香炉
⑨松明
⑩棺　コシアゲ　四人
⑪位牌　施主
⑫霊の膳　施主の妻
⑬霊柩（シカバナ）　四人
⑭小天蓋
⑮近親者
⑯一般会葬者

野辺の送り（田場沢）

埋葬　現在は火葬であるが、以前はもちろん土葬であった。お棺を穴に納め、コシアゲがその位置を確認して土をかける。そして、最初にミウチの人が土を素手で掴んで三回かける。野膳にあった団子なども一緒に埋めた。埋葬した上に土を被せ丸い形にする。そして、上に石を載せる。埋葬地点にはヒョケと呼ぶ笠を置く。

ハマオリ（浜降り）　田場沢では、死者をイケテ（埋めて）、埋葬地から帰ってきた人は（現在は仙年寺の墓地に納骨して帰ってきたとき）、まず川原でハマオリをする。川原の石を数個積んで、その前に死者の戒名を書いた白木の位牌を置き、線香や蠟燭、酒の肴などを供え、皆で順番に拝み、その後その場で軽く飲み食いをする。この場で手を洗い、清めてから帰る。ハマオリの最後には、位牌を倒してしまう。

ハマオリ（田場沢）

ハマオリのイハイ（田場沢）

キチュウ（忌中）　葬式当日の、葬儀を終えた後の会食をキチュウまたはキチュウバライ（忌中払い）という。ハマオリの後で、死者の出た家、もしくは公民館で行う。葬式に参列した人は全員出席する。この席に出される料理はさまざまであるが、がんもどきは必ず出される。がんもどき

は四人で一つを分けて食べる。またオチャハン（お茶飯）という番茶を煮出して塩で味つけしたご飯を出す。

(六) 供養と先祖祭祀

キャクボトケ（客仏）　葬式当日に子供の人数だけ位牌を作っておいてもらい、帰宅するときにそれを一つずつ貰って帰った。現在は、各家にはクリイハイ（繰り位牌）と呼ばれる厚さ七、八センチメートルの黒塗り、金縁の位牌が一つのみ仏壇に納められており、死者が出るとその人の戒名等を書いた板をその中に納めるようになっている。その家の先祖たちが重ねて納められている。その結果、位牌分けは、紙に戒名を書いたものを分け、それを貰った者はそれを持って帰って、その繰り位牌の上に貼り付ける。紙に書いた戒名のことをカミイハイ（紙位牌）、ハリイハイ（貼り位牌）などと呼んでいるし、またキャクボトケ（客仏）とも呼んでいる。紙位牌を貰うのは子供であるが、時には故人の兄弟姉妹も欲しいといって貰って帰ることもある。

オトウミョウ　死後一週間、墓に火を点けに行く。これを「オトウミョウを点けにいく」という。夕方に一人で点けに行くものだという。

ヒトナノカ（一七日）　ショナノカ（初七日）ともいう。亡くなってから六日目の晩の供養で、念仏講や近所の年寄りに来て貰い、念仏を唱える。

フタナノカ・ミナノカ　フタナノカ（二七日）、ミナノカ（三七日）と七日毎に四十九日まで供養する。親が亡くなった場合には、子供が順番にネンブツ（念仏）をする。初七日は施主であるイセキの家でして、後は兄弟姉妹が順次担当する。そして最後の四十九日の念仏はまた施主の家でする。位牌は念仏をする所へ移される。今では施主の家で行い、子供たちがそこに集まり、また費用を子供がもつという形式が多い。

三十五日　死後三十五日目の供養は特別盛大に行う。サトヤを三十五日の朝八時か九時頃、沼津の千本浜まで持参して流してくる。浜に着いたらまず石を数個積んで、その前にサトヤを置き、線香、蠟燭を供え、拝んだ後、「サイノカワラへ無事渡れるように」と祈りながらサトヤを倒す。潮が早く満ちて流れてしまえば、「成仏した」ということになり、なかなか無くならないのは「未練があるからだ」という。このとき出掛けるのは故人の家族と親戚の者数名で、帰りには浜から石を五、六個拾って来る。その石は後で墓に置く。サトヤを流した後、一同は沼津の幸町のアタマヤ（頭屋旅館）で早めの昼食をとるのが通例である。このときは親戚の者がお金を出して故人の家族に振る舞う。自宅に帰ってきてから、組の者、親戚を招いて、三十五日のご馳走を振る舞う。この三十五日で神棚を隠してあった笹を外す。

四十九日　四十九日には一升三合の米を冷やかし、蒸して、四十九個の団子を作る。買ってきた籠にこの団子を入れ、お寺へ持っていく。これが済むとようやく仏さんの仲間になれたという。この四十九日の団子を早めに作って済ませてしまう家もあるが、「アタリ（当日のこと）にやらないと仏さんがかわいそうだ。先にやると、その日まで仏さんは団子を頭に抱えていなければならないから」という。

死後、家族の者は、神様に祀ったり、鳥居をくぐったり、祭典の

時の仲間になるなどということは控えているが、四十九日が過ぎるとそのような日常の神事は、平常通り参加するようになる。

百ケ日　各家で念仏をあげるなど、簡単な供養をする。

一周忌　死後一年後に一周忌の法事をする。この日までは死者をホトケサンと呼ぶが、これ以後はセンゾサンと呼ぶようになるという。死者の近親は、一年間講があっても「一講抜ける」といって、加わらなかったり、暮れのお札分けのタイマ（大麻）を「うちでは人が死んだからいらない」と断ったりするが、二年目からは平常の付き合いに戻る。

ネンカイ（年回）　法事のことをネンカイと呼ぶ。一周忌の後、三年、七年、一三年、一七年、二五年、三三年後に供養の法事をする。当日は、和尚を自宅に呼んで法要をする。和尚は家に入るときにトンボグチから入るのが決まりとなっている。座敷に祭壇を作り、会場とし、まず和尚の読経、それから一列目に座っている人から順に回して焼香する。一列目には死んだ人に一番濃い身内が座るのがこの辺りのタテマエだという。

最近では二人以上の法事をまとめてする家も多い。この場合は、大きい年忌の人の方に合わせた形で行う。時期は遅れないように気をつける。

ネンカイ（法事）（下条）

トイバライ　五十年忌の供養のことをトイバライ（ティバライと発音する人が多い）と言い、これで一通りの供養は終わったことになる。生の杉の木の先端を切って塔婆を作り、墓に立てる。人によってはまれに六十回忌までもする家もある。トイバライがすむと古い位牌を浜に流してしまう家もある。

生まれ変わり　死後、人は生まれ変わるという人もいる。蝶になるという人もいる。

生の杉の木の塔婆（トイバライ）

火葬　以前は土葬であったが、伝染病で死んだ人は火葬にした。ヤキバは山の高い所にあり、穴を大きく掘り、薪を持っていって火を点け、皆で帰ってくる。だれもが火葬になるようになったのは一五年から二〇年以前であった。

墓と墓地　江戸時代には墓は自分の家の庭にあった。また畑や山に戸別にあった。明治以降に、仙年寺の境内にムラの全戸の墓地ができた。今でも、古い墓地をそのまま残して、盆や彼岸のときにはお参りしている家もある。

（福　田　アジオ）

第四章　信仰

第一節　神社と小祠

葛山は上城、中村、下条、中里、田場沢の五つの地区からなっている。この五つの地区全体の氏神としてまつられているのが中里にある浅間神社である。また、高山（タケ）にある雷さまも葛山の五つの地区全体でまつっているものである。それに対し、上城の奥の山の中にまつられている山の神さまはもと本村と呼ばれた上城・中村・下条の三地区でまつっているもので、田場沢には田場沢だけでまつる山の神さまがある。

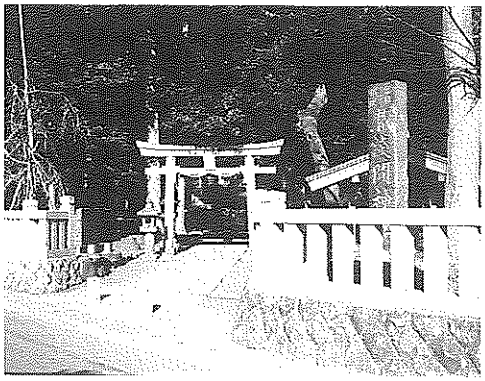
また、五つの地区それぞれの地区だけでまつっている神社もある。そして、個人の家で特にまつっているものもある。まずそれらいろいろな神のまつり方についてみてみる。

㈠　葛山全体でまつる神社

浅間神社　葛山の上城・中村・下条・中里・田場沢の五地区全体の氏神といわれている。中里にあり、はるか後方に富士山をのぞむ立地となっている。祭神は木之花咲耶姫命と伝えている。神主は現在中里の伊藤政秋氏がつとめている。

氏子組織としては、その五つの地区から一人ずつ宮世話人が選出されており、その五人を中心として、神主との相談のもとに運営されている。祭礼などの世話は当番制で、中里→田場沢→上城→中村→下条の順送りで担当している。昭和六三年の当番は中里で平成元年は田場沢である。当番の引き継ぎは秋祭りのあとで行う。

祭礼は、四月三日が本祭で一〇月一五日が臨時祭で一年に春と秋の二回行われる。春の本祭はもともとは四月一五日であったが、仕事の都合や年度の切替えに都合のよい四月三日にかえられたという。注連縄を新しくし、神主による祝詞奏上などが行われる。当番の地区と次の当番の地区の人たちが参加する。儀式のあとで直会と称して会食が行われる。むかしは当番の家々で餅をついて供え、また家々に配ったという。費用は当番の地区の家々から徴収する。余興としてむかしは夜に芝居や浪花節などが行われた。春は芝居や浪花節が多く行われたがこれらはよそから招いてきたものであった。秋は映画の上映が多かった。とても賑わったものだというが、いつか御宿の八幡神社の余興のときに刃傷事件が起きて自粛ということになり、その後は昼間に親睦のためのソフトボール大会が行われるようになっている。もう二〇数回も行われており、春は子供、秋は壮年が行っている。球場は小学校と中学校の校庭を借りている。



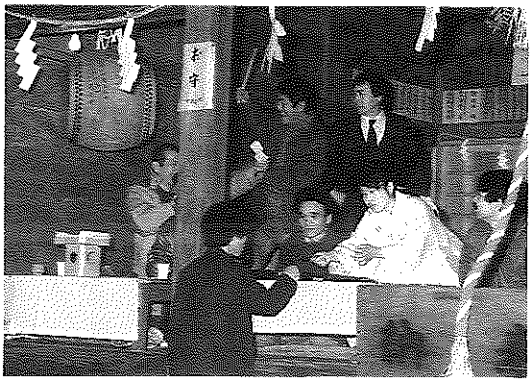
葛山の鎮守　浅間神社

春と秋の二度の祭りのほかには、大晦日から正月へかけてのおまいりがさかんである。当番の地区でおみくじも用意する。高校生のアルバイトで巫女も出る。

正月以外では一一月の七五三のお参りや、新生児のお宮参りがこの氏神の浅間神社で行われる。

雷さま　雨乞いの神さまである。高山にある。雨が降らず農作物への被害が心配される状態となるとむかしはよく雨乞いをした。

普通は藤畑（富士畑）の雷さんへ参ったが、よほどのときには嶽の雷さんへ参った。葛山の五つの地区で必ず一戸に一人は出て泊まりがけで参った。愛鷹山の八合目くらいのところにタケ（嶽）の雷さまは石の祠に祀ってある。人々はそこへ蓑・笠・雨ゴザ・御神酒などをもって参り、雷神宮の幟を立て、一晩中火をもやしながら二手にわかれて、第一のグループの者が「雨ふらせたーまえなー」第二のグループの者が「かみなりさまへのりゅうがん（立願）だー」と唱え、これをくりかえす。少し休んでは何度も唱える。日照りが続いてさすがに日が経っているのでこうするころにはよく雨が降ったものだという。昭和三〇年代ころまでよくやった。なお、藤畑の雷さんは女で、嶽の雷さんは男だという。



浅間神社の元旦祭（葛山）

また、この雷さまの祭りは七月二〇日で、下条の四辻のところで行う。幟を立てて飲み食いをし草相撲などもやった。祭りについては下条が主催するが、祠への道刈りの当番は田場沢→上城→中村→下条→中里と右まわりで順番に担当する。

(二)　上城の神社

神社は上城に集中している。この地区の家々は二本の道路に沿って立地している。地図を見てもわかるように一つは集落の西から東の方向へむかって流れる大久保川に並行する道路で、もう一つはその北を流れる小川に並行する道路である。そして、それぞれの家並配置にしたがって天王さまと八幡さまという二つの神社が祀られているように見受けられる。いずれもこの上城だけでなく、上城・中村・下条のもと本村と呼ばれた三地区で祀っている神様である。

天王さま　大久保川沿いに立地しているのが天王さまで、祭日は七月一四日である。むかしは青年たちが中心となって、草相撲をしていた。景品は青年たちが商店などをまわって醤油などをもらっておいてそれをあてた。カギトリ（鍵取り）といって神社の鍵を

天王さま（上城）

もっており祭りの世話をしたり社殿の掃除をしたりする家が世襲的に決まっており、この天王さまは近くの大川正幸家がつとめている。祭りの日にはお赤飯をつくって参拝の人にわける。直会の飲み食いは以前はカギトリの家で行ったが、最近は一三日の夜、神社で行っている。

八幡さま　坂田照夫家の裏手の山林の中にあり、カギトリは代代市川芳郎家がつとめている。祭日は九月一〇日で、最近では九月の一〇日前後の日曜日となっている。もともとは十五夜のころにあわせたのではないかともいう。二〇年以上も前のむかしは青年たちの草相撲が上城で行われていたが、最近は運動会を行っている。上城で五つの組に分かれてリレー競技などをする。景品は寄付された品物で出す。カギトリが中心となって世話をする。費用は上城・中村・下条の各戸から集める。お供えは鏡餅に御神酒、それに百姓のものとして二升の米、ごぼう、人参、りんごや梨などの果物、イカのするめ、その他季節のものなどで、その他とくにゴクウ（御供）といって赤飯を二升ぐらいつくる。ゴクウの赤飯は参拝者に食べてもらう。直会の飲み食いはカギトリの家でしたが、最近では集会所でするようになっている。

サイノカミ（塞の神）　八幡神社への入口の小川沿いの三叉路に祀られている。一月一四日、一五日にサイト焼きの行事があり、団子を焼いて食べると一年中病気にならないという。

水神　サイの神の祀ってあるところから少し小川をさかのぼったあたりに祀られている。近くの坂田政明家がカギトリをしている。もとはこの場所と市川甲子良家の裏のところからしか水が出なかったといい、もとの水源の場所に祀られている神さまである。祭日は四月一日で御神酒などをあげて上城の家々で祀っている。

サイノカミ（上城）

コウボウさん（弘法さん）　荻田富雄家の裏手の山の中に祀られており、同家の屋号を同じくコウボウさんというが、その地所は近くの坂田照雄家のもので、このコウボウさんはその坂田家で祀っている。

山の神　上城から愛鷹山の方へ登った山中に祀られている。上城・中村・下条のいわゆる本村で祀っている。田場沢には別に山の神が祀られている。一月一七日が祭日で昔は早朝から大勢にぎりめしやとうふ、こんにゃく、酒などをもって参り、夕方まで遊んだという。丁半のさいころ博奕をやったり、土手に的を作って鉄砲を撃ったりした。狩猟の神でもあった。その他、四月、一〇月、一二月と四回やるものだという。カギトリは勝又壮治家で、もとこの家はこの山の神祠の前の屋敷に住んでいたといい伝えている。現在でもこの勝又家の一族が中心となって祀っている。

屋敷神・屋内神

大川秀次家　屋敷神として稲荷を祀っている。初午に幟や赤飯などをあげて祀っている。古い家にはたいがい屋敷神を祀っているという。

勝又瀧雄家　この家は勝又章信家の分家で今の瀧雄氏で二代目である。屋敷神は祀っていない。屋内神として座敷に大神宮や座敷の神さま、台所に荒神に大黒、井戸に水神を祀っている。

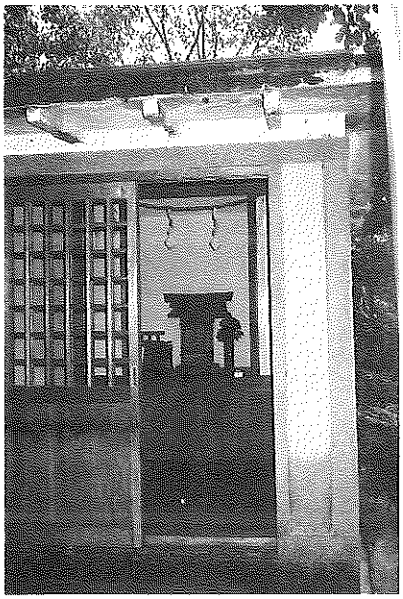
塩崎クラ子家　屋敷神として稲荷、八幡、観音、水神を祀っている。屋内神としては大神宮、恵比須大黒、荒神を祀っている。

(三)　中村の神社

中村にはこの地区を単位として祀っている神社というのはない。いずれも個人の家で屋敷神というようなかたちでまつっているものばかりであるが、瀬戸太巳家の金山神社のように他の人たちからも信仰を集めているような例も見られる。

金山神社　もともとは瀬戸家のオオヤ（本家）の守り神であるが、分家である瀬戸太巳家の所有する地所にあることから現在は瀬戸太巳家で祀っている。瀬戸のオオヤ（本家）の屋敷からみて表鬼門に金山彦の神、裏鬼門に八幡、稲荷が祀られているかたちになっている。この金山彦の神は鍛冶の神を祀ったもので瀬戸家の先祖が葛山備中守の家臣で刀鍛冶であったからだといい伝えている。また、瀬戸太巳氏のおじいさんの代に台風で神社が雨漏りし白蟻にくわれていて倒壊したので現在のようにブロックを積んで宮を建てたという。御神体は刀状の金属が三本並んで台にさしてある。

この金山さんはものがなくなった時、おがむとそれが戻ってくるといった。瀬戸太巳氏のおばあさんがよく人に頼まれて金山さんに祈願したものだといい、ものをなくした人の名前と年齢をいってお願いした。瀬戸家以外の人でもこの金山さんに信仰をよせてまいる人がいる。それは金山さんに祈願してなくしたものが出てきた人とか仕事が軌道にのった人などである。祭日は毎月一七日で一月、五月、九月は赤飯、それ以外は小豆御飯をそなえる。普段は毎日ご飯をそなえている。一七日の祭りの日は神社のそうじをして、ろうそくをあげ、赤飯か小豆御飯その他の供物をして家族も赤飯又は小豆御飯を食べる。信仰している人たちからお賽銭をもらうことがあるが、それをためておいてろうそくを買ったり、鳥居の塗りかえの費用にあてる。正月三ヶ日は雑煮をそなえる。金粉の入った酒をもって初詣でに来る人もいる。



金山神社（中村）

屋敷神・屋内神

瀬戸太巳家　前述の金山神社の他に屋外に祀っている屋敷神の類はない。ただ庭に落武者のものであろうといわれる墓がある。かつては畑の中にあったので今も畑の神さまと呼ばれている。庭へ移動した時もとくに災いがなかったのでおだやかな神さまとして今も祀っている。屋内では座敷に太神宮、台所に荒神、大黒を祀っている。太神宮には毎日ご飯とお茶をそなえる。荒神さんにはむかしは

一日と一五日に御飯とお茶をそなえたというが今はしない。大黒へは毎日のおそなえはしない。

半田隼家　屋敷神といえるかどうか問題であるが、この家ではイヌカイさん、稲荷さん、コンピラ（金比羅）さんの三つをまつっている。イヌカイさんはこの家から表鬼門の方角でずっと遠く離れた勝又常一家のそばに石の祠がある。稲荷さんはこの家からおもての通りへ出て少し歩いていった右側にある。コンピラさんはこの家の裏鬼門の方角の山の上にまつってある。年末に注連縄をはりかえお供えをあげている。

イヌカイサン（下条）

また、この家でも畑の中に古い墓がある。何百年も前に山に逃げてきた人が下をみたら一晩中明かりがついている家があり、そこを頼りにおりてきたところ捕まえられてしまった。その時の家がこの家で、逃亡者が死ぬときに「雨露のしのげるところへおいてくれ」といったのでここに墓を建てたといわれている。屋内神としてはダイジン（大神）、恵比須、荒神をまつっている。

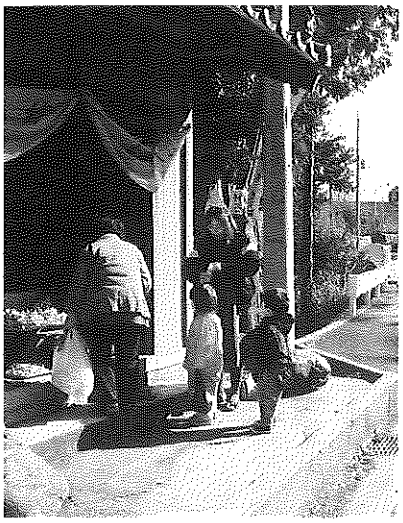
瀬戸重利家　屋敷神として文殊をまつっている。学問の神だという。一月二五日が祭日で、朝、赤飯をあげ、家族も食べる。祭りは家族だけでする。盆にはすし、正月は雑煮、彼岸にはぼたもちをそなえる。屋内ではダイジン（大神）と年神が一緒にまつってある。正月、四月三日の節句、一〇月一五日にはおそなえの鏡餅をそなえる。それぞれ一月六日、四月六日、一〇月一七日ころにさげて食べる。

伊藤千鶴家　この伊藤家の現在の屋敷内にカリタカさんと呼ばれる神がまつられている。御神体は石の男根で子授けの神さまだという。ひいおじいさんがまつったものだという。

クダギツネ　クダギツネがいるといわれていた家があった。ある人が、夕方その家のところで道に迷った。朝、草刈りに来た人に「おばあちゃん、何してる」と声をかけられて我にかえった。つまりもう翌朝になっていたわけであるが、まわりの人にそのおばあさんはクダギツネにだまされたのだといわれたという。

(四)　下条の神社

瘡守（かさもり）稲荷　宮川橋の手前の道路端に祀られている。これは勝又五郎家が個人で祀っているものだが、これにまいる人は多い。瘡守の名のようにむかしはカサッカケなどと呼んだ皮膚病の一種でおできのようなものにかかる子供が多かったが、それをなおす御利益があったという。祭日は毎年の初午の日だが、節分の前に初午がくるとその年は火事になりやすいといって次の午の日にのばす。明治から大正、そして昭和も一五年ころまではまいる人が多く出店もならんで、たいへんにぎわったものだという。赤、青、黄、緑、白の正一位瘡守稲荷大明神と書いた幟がたくさん奉納され、戦後になっても昭和二五年ころまでは勝又家で畑のトマトに立てる竹はこの稲荷へあがるのを使えば十分であったという。幟をあげるのは子供や



瘡守稲荷の初午（下条）

病人が多いという。おそなえは強飯と二段餅と油揚げで魚のおそなえはない。油揚げもむかしはあげたが今はあげない。その他いろいろなおそなえ物があがるが、それは勝又家でもらってくる。勝又家ではたくさんの強飯を炊いて稲荷のところへふとんやこたつをもっていき、まいる人たちにその強飯やお菓子をわけてあげる。願かけをしてカサッカケの病気がなおった子供はお願いばたしといって松かさを年齢の数ほど稲荷へあげた。一年もたつと松かさがいっぱいになったという。勝又家では風呂の燃料などに利用したという。現在の社殿は一〇年ほど前に建てたものだが、近郷の人たちの寄付の名前が杉の板にたくさん書かれていたという。その板は今はもうどこへ行ったのかわからない。

また、むかしはこの稲荷の初午のとき、富士山三宝院の版木で刷った不動の紙札を配っていたともいう。

岩佐勲家の稲荷　同家の前の小道を中里方面へ歩いて行くと佐野川にかかる橋のたもとに祀られている。毎年初午には赤飯や油揚げをそなえ、また、正月その他のモノビには神棚や仏壇と同じようにそなえものをしている。五、六年前に社殿を改築したときには文久などの年号が書かれた木の札などが出てきたという。この稲荷のもとは中里の佐々木ハナ家にあるともいい伝えている。

サイノカミ　勝又常一家の前の道路脇と荻田敏雄家の前の道路脇とに石造のサイノカミがまつられている。

勝又常一家の前のサイノカミ（下条）

屋敷神・屋内神

岩佐貞良家　屋敷内の東北隅、乾の方角にあたるところに稲荷、第六天王、注連の神の三つの神を一つの祠に仕切りをして祀っている。札は代々の施主が神主にその人一代のものをもらって納めておくという。屋内神としては大神、荒神、恵比須の三つを祀っている。

勝又常一家　屋敷神はない。屋内神としては皇大神宮、浅間社、不動、秋葉（荒神）、恵比須大黒を祀っている。このうち皇大神宮と浅間とはオオガミ（大神）さまと呼び、家のきれいなところ、人がいつもいるところに祀る。秋葉（荒神）さんは火を使うところに祀る。恵比須大黒は商売の神で北向きに祀るのがよいという。正月に注連縄、おかざりなどをそなえる。

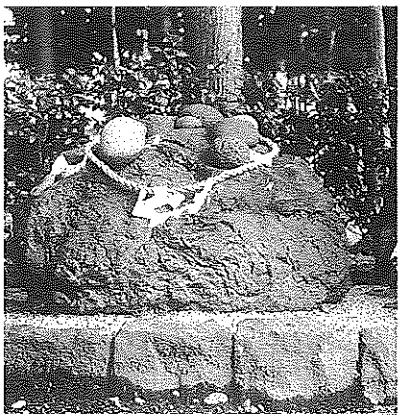
(五) 中里の神社

大六天神社　中里地区の家々で祀っている。中里地区はもとは上、中、下の三地区にわかれており各組が順番に当番となって祭りの世話などをした。現在は八組に分かれており、二組ずつ、一緒になって当番をつとめている。祭りの日は七月一五日で、最近はそれに近い日曜日をあてている。神主を招いて祭典を行ったあと、公民館で飲み食いをする。むかしは土俵をつくって相撲をやり、賞金や賞品を出してにぎわったものだという。夜店もならんだ。賞品は当番の人たちが商店をまわって寄付してもらったものをあてた。

サイの神と庚申塔　遠藤のぶ家の前の道路脇に祀られている。

摩利支天　グランドのところの道路脇に祀られている。これは中野進家のむかしのおじいさんの福次郎氏が祀ったものという。福次郎さんは占いなどをした人だという。

乳房の神さん　浅間神社の鳥居をこして右のところに祀ってある。六年前に穴を掘ったら出てきたので祀った。まいると乳が出るという。



乳房の神さん（浅間神社内）

さなださん

佐々木はなさんがまつっている神様で掛軸が本尊だという。武者の姿が描かれており、「真田神社七難即滅　南無妙法蓮華経神通力　七福即生」と書かれているという。はなさんの心に浮かんだものをそのまま人にかいてもらったものだという。床の間にかけてあり、はなさんはこの部屋で人に頼まれてよく祈禱をした。最近は高齢のためあまりできなくなったが、かつてはいろいろな人がたずねてきてよく祈禱をしていた。まずはなさんがさなださんの掛軸にむかって依頼者とならんで坐り、名前と年齢をたずね依頼の内容をきく。そして題目をとなえる。そのうちはなさんの体がゆれだし、さなださんがはなさんにのりうつり、言葉を発する。その話し方はふだんのおとなしい話し方とは異なり、はきはきしているという。数珠を投げ出したり激しく動くこともあるが、再び題目をとなえるとさなださんがぬける。

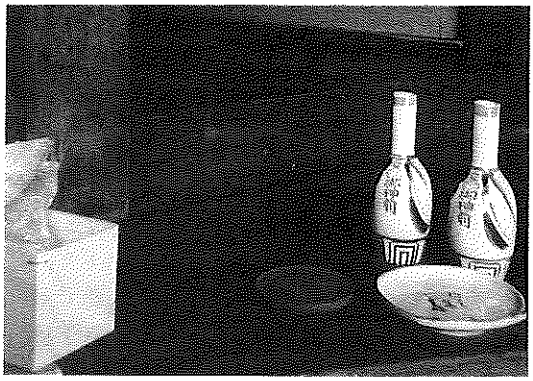
はなさんが神がかりにあうようになったきっかけは、家の運勢がわるく災難ばかりで、嫁ぎ先でも折り合いがわるく、さなださんを信仰するようになり、そのうち神がかりにあうようになったという。近くの中野福次郎さんがよく占いなどを頼まれてあちこちまわっていたので、その福次郎さんといっしょに歩いてまわるようなこともしたが、祈禱を福次郎さんに習ったのではなく、はなさんが神がかりにあうようになったころ、その神さまを自分の力ではきれなかったので、福次郎さんにきってもらっていたのだという。親類の中でもこのようなことができるのははなさんだけで、はなさんの両親も子供もできない。

毎月二三日、はなさんの自宅では本尊の前で火を焚き題目をとなえる。題目のあとは田場沢の人が伝えたという歌唱目をとなえる。太鼓もたたく。むかしはたくさんの人が集まったものだというが、

最近では近くの年寄り二、三人が集まる程度になっている。

(六) 田場沢の神社

山の神　田場沢の山の神で、集落の西方の山の中に祀られている。もともとは芹沢房江家のものというがいつのころからか地区のものとなったという。現在では当番の家で順番に祭りの世話をしている。祭りは一月一七日でそのほかに四月、一〇月、一二月にも行うものだという。



御神前と書かれた酒徳利一対（田場沢）

当番の家をまわされる箱には次のようにある。まず箱のふたには「嘉永七寅年　正月十七日述之　大工濱堅物伊平」とあり、箱の底には「山神宮御筥」とある。中に納めてあるのは御神前と書かれた酒徳利一対、陶器の皿一枚、木の皿一枚、それに天狗の絵の掛軸である。そして、昭和六三年の当番のときのメモもあるので引用しておこう。

昭和六十三年十月十七日　公民館

テーブルならべ　床の間に引きつぎの掛軸をかざり、塩、洗米、さかき、煮もの、赤飯、酒をお盆にのせておそなえする。灰皿、ざぶとんならべ、菓子、つまみは地区で用意する。

先に集会、お茶出し　（茶葉用意）

昭和六十三年十月十七日　山神社祭典

旗上げ　十六日の夕方

暗どん　三〜四日前にもってきて洗い障子紙を張る。左右順序をまちがわないようにする。

右

昭和〇年〇月〇日
氏子中
御神燈
区内安全

左

区内安全
御神燈
氏子中
昭和〇年〇月〇日

とする。

神社のそうじ（回りのそうじ　神殿の中のそうじ）　用具

ごみとり　マッチ

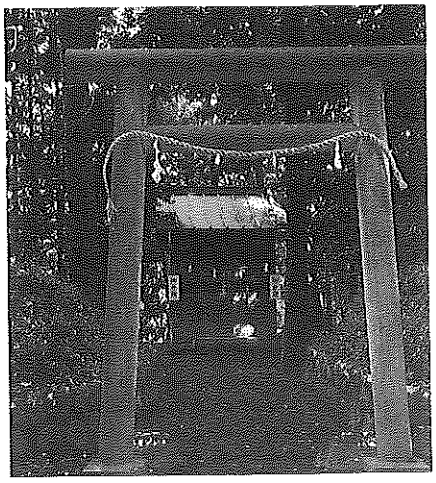
（キャタツ　竹ぼうき　庭ぼうき　バケツ　ぞうきん　スコップ）

☆天気つづきの場合は川に水がないので水を用意していく。

締め飾り（おしめ用意する）

鳥居、神殿、神殿の中　神殿の中のジュータンをひく（公民

館の押し入れにある）
料理、おそなえ
もち…上下セット
一升（半紙　水引き）
赤飯　三升…五升
用意した　塩ごま
山神社へ


山の神（田場沢）

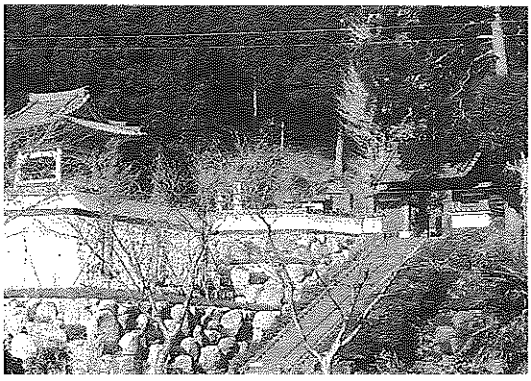
（三升はくばり、二升は手伝いの人にもたせた。）
しゃもじ二本
煮物　キンピラ　いもの煮ころがし
こんにゃく（重箱に入れていく）
・酒一升　奉納
・洗米、塩、水（家からもってくる）
・ローソク三本（一本小　二本中）
・湯のみ　三十個ぐらい用意
・さしみ皿（小）　五十枚
・わりばし　五十くらい
・さかき二本　山神社にある。五十㎝くらい
・ビニール袋　百枚位（菓子入）
・おさい銭
・小皿三枚位用意（紙でなくて陶器）
お盆

第二節　寺院・堂

葛山の五つの地区のほとんどの家が檀家となっているのが中村にある浄土宗仙年寺である。また下条から南へ行った佐野川の渓流の中に景ヶ島の依京寺があり、これも仙年寺の管理下で葛山の人々によって景ヶ島和讃が今も四月と八月に唱えられている。

また、田場沢には田場沢だけの薬師堂がある。

仙年寺　葛山の五つの地区のほとんど全戸約二〇〇戸が檀家である。他にも御宿約五〇戸、上田約二〇戸、金沢約二〇戸の檀家がある。寺伝によれば、文明一一年七月一日、文蓮社隆誉上人光冏（けい）大和尚が開山となって建立されたと伝える。この隆誉光冏というのはのちに芝の増上寺の第四世となった人物という。もとは上城からずっと山中に入ったところにあったが、元中一年にこの地の領主葛山備中守惟信が現在地へ移したと伝える。宗旨はもと真言宗であったのを葛山氏が浄土宗を信仰するようになったのでこの寺も浄土宗へと変わったという。文明一一年のことだともいっている。これらはいずれも寺


仙年寺の山門（中村）

伝として伝えられているものであり、記録がのこされているわけではない。

本堂には中央に阿弥陀如来、左右に観音菩薩と勢至菩薩、さらに両脇に善導大師と法然上人を祀ってある。

檀家総代は現在、岩佐貞良氏と半田隼氏がつとめている。総代は世襲ではなく、寺の住職が適任者を任命することになっているが、実際は世襲のようなものだという。寺の行事としては八月一五日の施餓鬼法要、九月の十五夜法要、葛山氏の命日にあたる旧二月一五日（新暦は三月）の葛山氏の法要などが行われている。また、念仏講の人たちが御詠歌や和讃を教わるのもこの仙年寺である。月に二、三回くらい級をとるためにやってきて練習をしている。

景ヶ島　川の中ほどの岩場に依京寺という寺があり観世音菩薩をまつっている。弘法大師の開基を伝え、西行の手植えの松というのもある。現在、仙年寺の管理下にある。景ヶ島和讃というのが毎年四月四日と八月一六日に行われている。当番制で、田場沢→上城→中村→下条→中里の順にまわっている。

依京寺（景ヶ島）

仙年寺にある縁起には次のように書かれている。

正観世音菩薩御縁起

押當山正観世音菩薩者弘法大師御作也。倩々大師御出席ヲ奉尋、人四十九代光仁天皇之御宇寶亀五年ニ有ニ御端生一　然ルニ延暦年中十八歳ノ御時於ニ南都東大寺一ニ学顕密ニ教一既ニ智道兼備聖者タリ　自レ其為　御修行一日本廻國於ニ國々所々一名所伽藍拝見シ或ハ向テ岩石一則チ刻ニ仏像一給フ夏雖数多一シト別面相州箱根山ニ御入被レ成然ルニ此箱根山ハ狐獨ノ地獄依レ為ニ賽ノ河原ノ地蔵菩薩或二十五菩薩ヲ刻ミ亦　殿上ノ小地獄ニ分入給テ奪衣婆鬼ヲ刻ミ以ニ岩石一顕シ自其當國當所此嶋ニ来給イ岩石ニ掛御腰暫ク有御休息末世為利益思召則此石寶殿正観世音菩薩刻給雖尓世人大師御作不知所本山第二代目日曌上人夢中蒙示現依之尊躰ヲ奉レル拝光ノ明放テ照給フ誠ニ弘法大師御作無紛因朝暮尊敬シ奉畢ヌ而送年月所ニ至徳年中此ニ當村ノ城主葛山次郎大夫維兼公十代孫葛山備中守惟信公亦不思議蒙レ告警テ奉尊躰拝則守リ崇メ本尊供敬礼拝給コト深シ依之結　草庵ニ　則景嶋山依京寺号然ルニ此観世音菩薩往昔ヨリ此方考一ルニ年符一八百六十余年之星霜ヲ雖レ送ト至レ今利生新ニテ衆生済度シ給者也

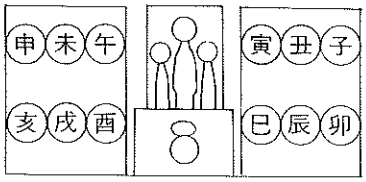
仍縁起大旨如件

肴　明暦三丁酉歳三月十八日

日當山仙年寺　第十九世　音蓮社響譽謹書

田場沢の薬師堂　公民館の並びにあり、田場沢の家々でまつっている。堂内には本尊仏と十二神将が図のように配置してある。十二薬師ともいう。下に丸石が二つ重ねにしておいてある。この丸石は、むかし中野鶴吉氏の家の裏にこの薬師堂が祀られていたのを、現在地に移転したときに、本尊の下から出てきたものだといってい

る。これにさわると病気が治るといわれている。人々は重い病気や流行病にかかったときにはよくこの薬師堂にお願いに行ったといい、治るとお礼に念仏をあげた。これを「おわたし」という。中野鶴吉氏宅の裏手から現在地へ移転したのはおよそ一三〇年前のことというがその根拠ははっきりしない。本尊の入っている箱のふたの裏には「日當山廿五世　到譽造立　明和元申歳八月二十七日入佛　大工　勝間田平六」とある。この日當山というのは仙年寺のことである。



図Ⅳ－1　薬師堂内仏壇配置

毎月旧一二日に年寄りが団子、菓子、花、水などをそなえ念仏をあげている。費用は田場沢の地区で出す。

第三節　講

講には、葛山五地区を含み、かつ旧富岡村へとひろがる大規模な念仏講がある。また五つの地区ごとに結成され運営されている各種の講もある。

念仏講　旧富岡村の各地区ごとに毎年当番となって春と秋の彼岸に大念仏を行っている。順番は、御宿→新田→葛山→上田→金沢→今里→下和田となっている。大念仏の当番にあたった年は準備その他でたいへんである。葛山では春の彼岸は本村と呼ばれる上城・中村・下条の方が担当し、秋の彼岸は田場沢・中里の方が担当することになっている。七、八年前までは、各地区あわせて全体で一〇〇人以上、葛山では一三人の講員がいたが、現在では全体で七、八〇人くらい、葛山では六人になっている。

行事としては、毎月一四日に行う月並念仏、旧六月八日（新暦では七月）のおてんとうさん念仏、それに葬式が出た場合はその葬式のとき、他にも年忌供養のある家から依頼されて行う場合などがある。月並念仏は、毎月一四日であるが、八月と一〇月は盆や浅間神社の祭りとぶつかるので一〇日に、一月の分は一二月のうちに一〇日と一四日と二回やっておく。

念仏の順番はおよそ次のとおりである。

①香偈文　②さんぽうらい　③ざんげ文　④開経偈　⑤般若経　⑥請益文　⑦念仏一会　⑧釈迦経　⑨観音経　⑩弘法大師御詠歌　光明真言（⑩は大念仏のときはあげるが、葬式や年忌供養の時はあげない）　⑪十三仏如来　⑫六道地蔵尊　⑬善光寺如来御詠歌（十八番まで）　⑭祈願文　⑮休憩御詠歌　⑯念仏一会　⑰西国三十三所観世音御詠歌（三十三番まで）お茶の御礼　⑱奉願文　⑲請願文　⑳回向文

なお、葬式の時に寺でやるときは、⑬につづいて(1)入堂和讃（僧の入堂のとき）　(2)光明和讃　来迎和讃　月影　(3)退堂和讃（僧の退堂のとき）とやる。また年忌供養で家でやるときは僧はいないが⑬につづいて(1)入堂和讃　(2)追善供養　(3)退堂和讃とやる。また、戦死者英霊供養念仏の場合は、⑬につづいて(1)光明真言　(2)供養御詠歌　(3)生魂和讃　(4)慰霊和讃とやる。

費用としては、区長から月並念仏のためとして一年分、二〇〇〇円もらっているが、飲食費など、一回三〇〇〇円程度で不足分はおてんとさん念仏の収入でまかなう。おてんとさん念仏は一戸から

一〇〇〇円ずつ出してくれる。葬式や年忌のときはそれぞれの家から適当な額が出される。

なお、この念仏講のような大きな組織とは別に次のような各種の講が、葛山の五つの地区ごとに運営されている。これらの中にはもうあまり活動できなくなっているものもあるが、戦後しばらくの間まではさかんに活動していたものという。

淡島講　子安講ともいい、正月、四月、一〇月に婦人会が中心になって行っている。お茶や菓子を用意して集まる。講に積み立てられたお金があり、出産の費用として妊婦が借りて翌年一割の利子をつけてかえす。正月にかえす。こうすると安産であるともいう。

秋葉講　火伏せの神として清水市の秋葉山へ代参を立てお札をうけてくる。一二月一六日近くの日曜日をつかって当番制で三、四人ずつ行き、帰ってきたその晩に集まって講をする。

天神講　子供たちが米やお金を出しあい二月二五日にヤドをかりてあつまり一晩中さわぐ。ヤドは適当な家を子供たちが頼む。字がうまくなるように梅を飾ってごはんを盛って供える。習字の練習もする。

不動講（田場沢）

大山のお札（田場沢）

不動講の供物（田場沢）

不動講　神奈川県伊勢原市の大山阿夫利神社へ代参する講である。節分の二月三日のころ当番の三、四人が行ってお札をうけてくる。戻ると公民館で不動講をやる。お神酒をそなえあかりをつけて拍子木などを叩き、「ノーマクサーマンダーザァサラバーセンダンマーカルシャーター　スラカヤウンダラターカーマ」とくり返し唱える。

（新　谷　尚　紀）

附録　葛山区有文書　1

安永六酉年

駿河国駿東郡葛山村　明細帳

八月日　　松平内蔵允知行所

葛山村

村方扣帳

八拾年以前元録(ママ)十一寅年当御地頭ニ成ル

松平内蔵允知行所

駿州駿東郡　葛山村

田方　千賀三右衛門様

日置善右衛門様　御検地

百六年已前寛文十二年　井田伊兵衛様

畑方　宇佐美市左衛門様

御水帳三冊

田畑屋舗共

一　高四百弐拾壱石四升四合

内　高　壱反九畝十歩

五斗七升三合三才　無地高

高　三石壱斗四升　山手役御高ニ結

内　郷蔵屋舗

田方永荒

酉之川欠溝代引

未之永荒引

申之永荒引

午之山崩道代引

申年御地頭改荒引

溜井地代引

宝永年中改引

酉戌亥ゟ永引

享保年中荒引

小以反別三町八反十三歩　永荒引

分米十六石三斗八升六合六勺

反別六拾三町三反弐畝九歩

内

田反別六町八反四畝廿七歩但シ三丁五反六畝一歩両毛作

此分米八拾九石四斗壱升六合六勺五才

畑反別四拾六町五反七畝歩

此分米弐百八拾六石壱斗弐升三合六勺六才

屋敷壱町六反九畝歩

此分米拾六石九斗

此訳

十四盛

上田四町三反五畝十四歩

分米六拾石九斗六升五合三勺弐才

十二盛

中田壱町七反八畝拾弐歩
分米廿壱石四斗八合

十ノ盛

下田六反八畝壱歩
分米六石八斗三合三勺三才

八ッ盛

下々田三畝歩　永荒
分米弐斗四升

八ッ盛

上畑拾弐町六畝廿七歩
分米九拾六石五斗五升弐合
内三畝十歩　郷蔵敷引
分米弐斗六升六合六勺
拾弐町三畝拾七歩
分米九拾六石弐斗八升三合六勺

七ッ盛

中畑八町五反弐畝拾五歩
分米五拾九石六斗七升五合
弐反七歩　寛永二酉年　満水川欠溝代引
分米壱石四斗四升七合
八町三反弐畝八歩
分米五拾八石弐斗弐升八合

五ッ盛

下畑弐拾五町九反七畝廿八歩
分米百廿九石八斗九升六合六勺六才
内五反九畝三歩　未荒永引
分米弐石九斗六升七合
壱反壱畝弐歩　申年荒引
分米七斗九升五合
弐反八畝七歩　同断荒引
分米壱石四斗三升五合
七畝七歩　午ノ山崩道代引
分米三斗八升三合
七反歩　申ノ年御地頭様
分米三石五斗　御改被下荒永引
廿四町弐反弐畝九歩
分米百廿石八斗壱升六合

三ッ盛

下々畑七町九反五畝六歩
分米廿三石八斗五升六合
内弐反七畝廿弐歩　元録(ママ)十丑年ゟ溜井地代引
分米八斗壱升七合
八反八畝六歩　宝永元申年地頭改ニ而永荒引
分米弐石六斗四升六合
五反五畝六歩　酉戌亥ゟ永荒引
分米壱石六斗七升

七畝三歩
分米弐斗弐升
六町壱反六畝廿九歩
分米拾八石五斗三合
四ッ盛
新見取弐反五畝廿六歩
分米壱石三升四合六勺六才
十ノ盛
屋舗壱町六反九畝歩
分米拾六石九斗
山手
一 高三石壱斗四升　五ッ四分取　当村無御座候
一 田畑起返リ場　毎年者無御座候
一 田畑水腐場　当村ニ無御座候
一 新田畑　相納不中候
一 米役永　当村ニ無御座候
一 舟之儀者　当村ニ無御座候
一 種物借
一 御地頭様ゟ御物借金三拾両
是ハ去未申両年麦作違ニ付百姓御助夫食ニ御願申上候得者
被□仰付御返済之儀ハ当暮ゟ三ヶ年ニ被　仰付候
一 薪山之儀　当村内ニ而取来申候
一 秣苅場　大野原と申所ニ而苅米申候入会村方七十ヶ村入会申候
一 当村嶽山ハ愛鷹山東而ニ而　当村ゟ野口迄半里余

享保年中寅年ゟ荒引
但シ山境東ハ御宿村上ヶ田村西ハ長久保北ハ下和田村
今里村南ハ千福村
一 当村嶽山之内次釜入与中所金沢村上田村御宿村当村四ヶ村入会
申候尤右三ヶ村者まき切為致不中候
一 当村嶽山之内本洞入次釜入一と申所北境先年今里村下和田村と
及論御検使前ニ而山八合通リ江御はり紙御座候而御見分無御座
内ニ御はり紙通リ境ニ相心得罷在候右之訳御裏書御座候御絵図
被下置候
一 当村嶽山之内之洞与前十五ヶ村入会ニ御座候
大畑村富沢村一色村納米里村本宿村水久保村
右入会村上土狩村中土狩村下土狩村柿田村新宿村
伏見村長沢村竹原村八幡村
右十五ヶ村山元　葛山村　千福村　都合十七ヶ村
一 当村嶽山之内本洞与申所是ハ前々郷山ニ御座候
一 当村嶽山之内三洞日なた平与中所　葛山村　千福村　両村入会
右八ヶ所之山手御年貢米壱石六斗九升五合六勺
一 御伝馬宿入用　当村無御座候
一 六尺給米御蔵入用　当村無御座候
一 芝地野永　当村無御座候
一 浜運上等　当村無御座候
一 漁猟運上　当村無御座候
一 御林御地頭林　当村無御座候

一　百姓持林之儀　凡反別四拾丁
但雑木立ニ而小竹重リ相分リ不申候
一　苗木林　当村無御座候
一　下草永落葉永　当村無御座候
一　御林守十分一　当村無御座候
一　万浮役河原役　当村無御座候
一　鉄炮役立薮　当村無御座候
一　漆納　当村無御座候
一　大豆　小豆　納　当村無御座候
一　萱野者　当村入山之洞与申所ニ御座候茹取申候
此山手之儀右八ヶ所御年貢内ニ御座候
一　芦野者　当村無御座候
一　御年貢者四斗入　私領ニ而船積不仕候大方者
其所ニ而御払被成候
一　御年貢米金小物成請納方日限無滞上納仕尤例年格を以御下知以
前百姓厳敷申渡仕度為致置御日限通取立仕来リ申候
一　欠米諸運上　当村無御座候
一　用水堰　長五間　山沢古道堰　横壱間　石堰　壱ヶ所
一　用水堰　長六間　山沢新石堰　横壱間　石堰　壱ヶ所
一　用水堰　長八間　御宿村新堰　横壱間　壱ヶ所

是ハ箱根湖水ニ而字せき与唱五ヶ村組合ニ而用水引取申候尤
普請之儀者年々組合自普請仕来申候
一　用水溜井
是ハ金沢村地内ニ而金沢村葛山村両村ニ而用水引取申候尤水
ッ樋口等損候節者両村ニ而御地頭様へ御願申金壱両弐分ツヽ
御地頭様方被下置普請仕候
一　用水溜井下々畑弐反七畝廿弐歩　壱ヶ所
是ハ当村ニ候へ共場所悪敷故ニ水相持不申潰申候
一　悪水川原　字宮川　壱ヶ所
是ハ大野原溜水悪水川村内　長五丁　横□所ニ方八間十五間なと
一　悪水堀　長五百間　巾凡三間　村中通リ申候　壱ヶ所
是ハ源ハ金沢村溜井悪水払ニ而
村内東西へ流申候右土手普請之儀者御宿村千福村上ヶ田
但シ村当村共四ヶ村ニ而仕候
一　当村山沢　川巾凡四間　川長凡壱里余　御田地用水
源ハ三洞与申所方瀬名江落合申候村内ニ少々
但御地頭様御普請所御座候尤石詰仕候先年酉ノ
満水之節者御入用被下置候只と破損償ハ自普請仕候
一　川除等　只今迄ハ無御座候
一　石出蛇篭等　当村無御座候
一　用水入樋等　当村無御座候
長弐ヶ所ハ弐門半壱ヶ所弐間

一　土橋　横三尺四尺　山沢川　三ヶ所
但自普請
一　御年貢米納方三斗五升之俵切出目五升入四斗入相納申候尤御蔵米百五拾表(ママ)相納リ残者金納ニ而度々納申候
一　延米口米之儀ハ前々ゟ相分リ不申
一　当村東西ハ御宿村境ゟ山嶽長久保村境迄弐里
南北江十四丁隣村者東者御宿村上ヶ田村西ハ愛鷹山南ハ千福村北ハ金沢村今里村下和田村
一　富士山者戌亥ニ当リ天城山鷲頭山ハ南ニ当箱根山者東ニ当海辺ハ午未ニ当ル
一　当村ゟ江戸迄陸路三十里
但シ東海道者三嶋宿江出申候申別路之遠道不奉存候
一　江戸江海上沼津ゟ七拾里
一　駿府迄道里拾九里
一　沼津迄同四里半
清水迄同拾七里
一　沼津宿加助役相勤申候
但九月駿府御番衆様御交代之節丸高相勤申候
一　村内ニ渡船往還掃除丁場　当村無御座候
一　御朱印高十三石弐斗余　浄土宗　日当山仙年寺
是ハ京都知恩院末寺
一　富士浅間領御除地下畑壱反九畝廿五歩　別当　修験　明王院
高九斗九升弐合
八幡領御除地下畑壱反弐畝歩　祢宜弥右衛門
高六斗

一　仙年寺扣地　依京寺
一　仙年寺扣地薬師堂　壱ヶ所
一　仙年寺扣地庚申堂　壱ヶ所
一　山神宮　弐ヶ所
一　名主壱人
是ハ給分前々ゟ高百石ニ付十石ツヽ役高引ヲ仕相勤申候
一　組頭三人
是ハ米弐(ママ)表代ヲ三人割村之役ニ入相勤申候
一　米見
是ハ組頭加役ニ相勤申候
一　高札場　壱ヶ所
一　郷蔵番　百姓共廻り役ニ相勤申候
一　升取壱人　給分銭六百文宛村役入申候
一　定使壱人　給分ハ百姓前石集メ仕候
一　醫師浪人　当村無御座候
一　木挽壱人　御座候
一　大工弐人
一　樋屋
一　瞽女座頭
一　屋ね板へき四人
一　山伏弐人
一　御貸付鉄炮ハ
一　百姓取持之鉄炮八挺　威筒　持主　直右衛門　安次郎　喜右衛門

弥平治
市右衛門
定七
九右衛門
嘉左衛門
新八
彦四郎

一 猟師筒弐挺　持主

是ハ小長谷勘左衛門様御吟味之上畜類多諸作荒□百姓難儀ニ付右之通御免被下候尤御地頭様へ鉄炮帳指上ヶ置申候

一 小売酒屋　壱軒
一 馬三拾疋　御座候
一 牛弐疋　御座候
一 土地ハ黒野地石まぢり
一 田植ハ五月中迄ニ仕付候稲作者中手多作申候
秋ハ土用中苅入仕候
一 田方種入壱反ニ付籾壱斗ツヽ　但シ上中下同断
但田畑共麦種壱反ニ付壱斗ツヽ小麦ハ壱反ニ付五升宛
一 田畑小作入上
上壱反ニ付　米四表半（ママ）
中田壱反ニ付　右同断
下田壱反ニ付　右同断
畑方ハ上中下共山畑ニ御座候間相定リ候儀無御座候
一 田畑屋敷質入値段　田壱反ニ付金三両位
畑壱反ニ付金壱両弐分位
一 畑作者大麦　小麦　粟　稗　菜　大根　芋

右之通作リ申候
一 稲作　ひせん　たろ屋らく　うづら　大屋らく
右之内ひせんたろ屋等多々作リ申候
一 田畑こやし之儀者夏秋冬迄馬草苅ためこやしにニ仕候
一 農業之間男ハ薪取炭焼小竹伐稼仕女ハ山出シ等手伝木綿抔取売替式出（カ）春中ハ猪鹿除仕候山付稼在所ニ御座候
一 百姓夫食之儀者年中粟稗麦芋菜大根等を用申候
一 原地芝地空地等無御座候
一 田畑見立新田無御座候
一 家数百拾四軒　但シ大小百姓惣家数
此訳ヶ　本百姓百軒
無田水呑十四軒
一 人別五百拾九人　但シ大小男女下男下女共
此訳ヶ　男弐百七拾九人
女弐百四拾人

右御尋ニ付今般委細相改書上申所相違無御座候以上

松平内蔵允知行所　駿東郡葛山村
名主　嘉左衛門
組頭　喜右衛門
同　勝左衛門
同　定　七
百姓代太　兵　衛

安永六酉年八月

内藤源八郎様
栗原礼助様

附録　葛山区有文書　2

文政十三寅年　駿州駿東郡
村方明細相改書上帳
葛山村
八月六日

村方差出覚

一　百三十三年以前元録(ママ)十一寅年
当御地頭様ニ相成ル
松平内蔵允様御知行所
駿州駿東郡
葛山村
田方　千賀三右衛門様
日置善太夫様

一　百五拾九年以前寛文十二年御検地
畑方　井田伊兵衛様
宇佐美市左衛門様

一　高四百弐拾壱石四升四合御水帳三冊田畑共
内高三石壱斗四升　山本役御高ニ結
高三斗弐升壱合無地高
郷蔵屋敷

田方永荒引
酉ノ川欠引
未ノ永荒引
申ノ永荒引
午ノ山崩道代引
溜井地代引
申ノ御地頭様改引
宝永年中改引
酉戌亥ゟ永荒引
寛政年中改引
文化年中川欠荒引
文化酉年御見分之上荒地御引上御林ニ相成
小以反別拾八町壱反三畝廿九歩荒地高
此分米七拾四石四斗弐升壱合壱勺
惣反別六拾三町三反弐畝九歩
田反別六町八反四畝弐拾七歩但三町五反六畝壱歩両毛作之分
此分米八拾九石四斗壱升六合
畑反別五拾四町八反壱畝弐拾弐歩
此分米三百拾壱石弐斗六升六勺
屋舗反別壱町六反九畝歩
分米拾六石九斗
拾四ノ盛　此訳ヶ
上田四町三反五畝拾四歩
反ニ七斗八升　分米六拾石九斗六升五合二勺三才

拾弐ノ盛　取米三拾三石九斗六升六合四勺
中田壱町七反八畝拾弐歩
分米弐拾壱石四斗八合
反ニ七斗五升　取米拾三石三斗八升
十ノ盛　下田六反八畝壱歩
分米六石八斗三合三勺
内七畝歩　文化元子年川欠荒引
引〆　下田六反壱畝壱歩
分米六石壱斗三合三勺
反ニ七斗三升　取米四石三斗九升四合三勺
八ッの盛　下々田三畝歩　永荒引
分米弐斗四升
八ッの盛　上畑拾四町八畝七歩
内壱反四畝拾歩　畑田ニ成ル
同九畝弐拾歩　未ノ永荒引
分米七斗三合三勺
同弐拾歩　酉ノ御見分荒地御引上御林ニ相成ル
分米五升三合三勺
上畑拾壱町八反三畝七歩
引〆　分米九拾四石六斗八升五合三勺四才
三ッ三分　取米三拾壱石弐斗四升六合壱勺二才
七ッノ盛　中畑八町五反四畝拾七歩
内弐反歩　宝永二酉年満水川欠荒引
分米壱石四斗壱升六合三勺
同断四反九畝弐拾六歩　酉年荒地御見分之上

引〆　分米三石四斗九升六勺　引上地御林ニ相成ル
中畑七町八反四畝弐拾壱歩
分米五拾四石九斗壱升弐合七勺
三ッ三分　取米拾八石壱斗四升壱合壱勺
下畑弐拾五町九反七畝廿八歩
内五反九畝三歩　未ノ永荒引
分米弐石九斗五升五合
下畑　同壱反壱畝弐歩　申ノ永荒引
分米五斗五升三合三勺
下畑　同断弐反八畝七歩　永荒引
分米壱石四斗壱升壱合六勺
下畑　同断七畝七歩　午山崩道代引
分米三斗六升壱合六勺
下畑　同断七反歩　申年御地頭様御改之上永荒引
分米三石五斗
下畑　同断弐反六畝弐拾三歩　寛政三亥年荒
分米壱石三斗三升八合三勺
同断六畝歩　文化元子年川欠荒引
分米三斗
同断六町八反三畝拾四歩　文政酉年御見分荒上御
分米三拾四石壱斗七升三合二勺　引上地御林ニ相成ル
引〆　下畑拾七町六畝弐歩
右之内五ッの盛　分米八拾五石三斗三合三勺
四畝壱歩　畑田ニ成ル
分米弐斗壱合六勺

引〆　下畑拾七町弐畝壱歩
三ッ三分　分米八拾五石壱斗壱合六勺六才
三ッの盛　取米弐拾八石八升三合五勺四才
下々畑七町九反五畝六歩
内弐反七畝弐拾弐歩　元録（ママ）十丑年溜井地代引
分米八斗三升壱合九勺
同断八反八畝六歩　宝永元申年御地頭様御改永引
分米弐石六斗四升六合
同断五反五畝六歩　酉戌亥永荒引
分米壱石六斗五升六合
同断七畝三歩　享保年中寅年ゟ永荒引
分米弐斗壱升三合
同断六反四畝拾九歩　寛政三亥年荒引
分米壱石九斗三升九合
同断三町九反拾七歩　文政年中酉年御見分之上荒地御引上御林ニ相成ル
分米拾壱石七斗壱升六合九勺八才
引〆　下々畑壱町六反四歩
分米四石八斗三升九合九勺
一ッ五分　取米七斗弐升九合九勺
四ッの盛　新下畑弐反五畝廿六歩　文政年中酉年御見分之上荒地御引上御林ニ相成ル
分米壱石三升四合壱勺
高三石壱斗四升　山手小物成高
五ッ四分　取米壱石六斗九升五合六勺
高三斗弐升壱合八勺　無地高也
八ッの盛　上畑成田壱反四畝拾歩
分米壱石壱斗四升六合六勺
七ッ七分　取米八斗八升弐合九勺
五ッの盛　下畑成田四反壱歩
分米弐斗壱合六勺五才
七ッ七分　取米壱斗五升五合三勺
十ッの盛　屋舗壱町六反九畝歩
内弐畝弐拾歩　郷蔵屋敷引
分米弐斗六升六合六勺
引〆　屋舗壱町六反六畝拾歩
分米拾六石六斗三升三合三勺
三ッ三分　取米五石四斗八升九合
惣高合四百弐拾壱石四升四合
内高七拾壱石八斗弐升弐合四勺　川欠荒溜井敷地郷蔵屋敷御林地敷無地高共
残而高三百四拾九石弐斗弐升壱合六勺　生地勤高
取米百四拾八石六斗壱升九合七勺
右之所
米三百七拾壱俵七分六リン六毛
先免之通リ御請上納仕候
内米三俵四升四合　前々目録潰引
芹澤勝左衛門殿御扶持米当寅年ゟ芹澤勢吾郎殿江渡ス
内米九俵
孫次郎方へ前々ゟ被下置候御扶持米
内米四俵五分
残而米三百五拾五俵壱分五厘六毛上納可仕米〆

一　御朱印　高拾三石弐斗余
　　浄土宗京都智恩院末
　　日当山仙年寺
一　御除地　高九斗九升八合五勺
　　浅間領
　　真言宗修験不動山明王寺
一　御除地　高六斗
　　八幡領
　　鍵取　市左衛門
　　真言宗修験金胎山福寿院
　　景嶋山依京寺
　　仙年寺脇寺
　　薬師堂
　　仙年寺脇寺
　　庚申堂
一　給分弐石ヅヽニ而四拾石役高引名主弐人
前々弐人ニ而相勤候得共村方相談を以右役高給分を壱人江取唯今者壱人ニ御座候
一　給分米弐俵代ヲ村役ニ入　是ヲ四人ニ而割合取相勤申候　組頭四人
一　給分銭六百文宛村方ゟ出シ　御米斗リ升取壱人
一　米見前々ゟ組頭ニ而相勤申候
一　御高札場前々ゟ村方入口ニ御座候
一　郷蔵番前々ゟ惣百姓廻り役ニ而相勤申候
一　醫者壱人　隣斉
　　字本洞与申所者古来之御林ニ御座候荒地御引上地
一　御地頭御林　御林字藤畑七まがり並山神戸嶋向ひと申所御見分之上四ヶ所江御引地被遊御仕立ニ御座候
一　当村嶽山之内字次釜入と申処東者ませ口ゟ打続キ中通リ文化年中御定杭ゟ北之方地元葛山ニ而入会者御宿村上ヶ田村金沢村今里村右四ヶ村入会北境峯通水わけ文化年中御定杭迄西者長久保村山境迄
一　右嶽山次釜入中通文化年中御定杭ゟ南ノ方次釜入日かけ峯迄当村地元入合御宿村上ヶ田村金沢村右三ヶ村ヲ為入会候場所ニ御座候
一　当村嶽山之内高畑ヶひらと申処東者百姓持林境南ハ洞道境北者右次釜入日かけ尾根三ヶ村入会之境迄同北ニ而茂上之方者中通リ文化年中御定杭四ヶ村ヲ為入会候境迄西ハ本洞口境木竹品々村方百姓小前一同御年貢御上納かせぎ場ニ御座候
一　当村嶽山之内本洞と申所東者高畑之ひら境西ハ本洞口ゟ結迄御殿様山境
一　当村嶽山之内字小洞と申所東中尾境北ハ本洞境南ハ千福村入会境西ハ北南ゟ合リ申候
一　当村嶽山之内本洞御殿様山東ハ本洞口境北者文化年中御定杭境南裾者小洞境嶽者千福村入会山境迄西者長久保村山境
一　当村嶽山之内中尾と申処東者百姓持林境南ハ千福村入合山境北者洞通境西者小洞境秡場
一　当村嶽山之内字箕洞日向ひらと申所地元葛山村入合千福村北者中尾境並ニ本洞結境西者長久保村山境嶽東者横渡リ道入会境中ニ而大どい拾五ヶ村を為入会候山境通リ東者出合沢迄
一　当村嶽山之内箕洞日陰ひらと申所地元葛山村並ニ千福村此南竈場之洞と申所迄並ニ入合
大畑村　冨沢村　一色村　納米里村　本宿村　水久保村

上土狩村　中土狩村　下土狩村　柿田村　新宿村　伏見村
長沢村　竹原村　八幡村
右拾五ヶ村を入会せ申候
右八ヶ所嶽山者愛鷹山東西ニ而境目者東ハ御宿村上ヶ田村金沢村北者今里村下和田村境西者長久保村山嶽境南者千福村境右書出之秩嶽山通リ此八ヶ所山手小物成として三石壱斗四升村高ニ結し米壱石六斗九升五合六勺ヅヽ是迄上納仕候

一沼津役之儀者九月駿府御番所様御交代之節者沼津定助郷私共組合高江納米里村一色村富沢村大畑村千福村御宿村飛森村葛山村此八ヶ村高ヲ加へ相当之人馬差出シ相勤申候

一当村ゟ江戸陸道三拾里但シ東海道通リ

一当村ゟ沼津宿へ四里三嶋三里ニ御座候

一当村ゟ駿府江道法拾九里

一当村ゟ厚原江九里半

一当村ゟ東西ハ御宿村境ゟ山嶽長久保村山境迄道弐里余南北者今里村千福村境迄凡拾四五丁余隣村ハ東ハ御宿村上ヶ田村南ハ千福村北ハ今里村金沢村下和田村御座候

一百姓持林居村近所ゟ嶽山際超少々ヅヽ御座候

一萱野者当村嶽之内箕洞と申所ニ而刈来リ申候

一株刈場　大野原と申所ニ而刈来リ申候入会村方七拾ヶ村余当村ゟ野口迄半リ余

一薪山之儀者　当村内百姓持林並ニ嶽山ニ而植来リ申候

一田畑起返場　当村ニ無御座候

一田畑水腐場　毎年無御座候

一用水堰壱ヶ所但シ石堰山沢長五間字刈込と申越候

一用水堰壱ヶ所但シ石堰山沢長八間字新脇と申所
是ハ箱根湖水ニ而場所ハ御宿村ニ而当村内へ者外田加いとと申処へ引取水之堰ニ御座候尤普請之儀者組合自普請ニ仕来リ申候此水筋新堀と申当村地内凡五六拾間程之間数ニ御座候川筋五筋ニ訳リ上ヶ田村安藤様御地内江懸ル水筋ニ御座候

一用水溜井壱ヶ所下々畑弐反七畝弐拾弐歩
是ハ地柄悪地ニ而水相持不申候而潰シ申候

一用水溜井壱ヶ所金沢村地内ニ御座候此水筋ニ当村地内者まい場と申所ニ水道土手御座候損シ候節者御定式御普請金被下置候場所ニ御座候

一悪水大河原壱筋字宮川と申所是ハ大野原並ニ富士山ゟ之雨水悪水川当村内凡拾五丁余相懸リ横幡(ママ)場所ニヨリ十間十五間十七八間ゟ廿間迄位も有之場所も御座候

一板橋壱ヶ所　長六間　依景(ママ)寺前
幡(ママ)壱間

是ハ宮川河筋普請ハ自普請ニ仕候

一御田地用水川壱筋　川幅四間程　字砂原川与申所源ハ箕洞と申所本洞与申所ゟ下者瀬名沢江落合申候村内御地頭様御普請所ニ御座候

一用水樋壱ヶ所長弐拾間字樋口与申所是ハ常縁田懸リ前々ゟ御普請金被下置候

一川除石わく四ヶ所　長拾間ツヽ三ヶ所　字大川原と申所候
長拾八間壱ヶ所

右宮川筋是ハ文化八未年御見分之上御普請仕立申候猶又大雨水

ニ而損シ候処者御普請御仕立被下置候場所ニ御座候

一　御殿傳馬宿入用　　当村ニ無御座候

一　屋根屋　　弐人御座候

一　小売酒屋　　壱軒御座候

一　猟師筒弐挺　　持主　栄吉

同断　銀蔵

右鉄炮弐挺者小長谷勘左衛門様猪鹿防之ため玉入御免被下置候

一　威筒八挺　　持主　喜十郎

同　銀蔵

同　佐兵衛

同　忠右衛門

同　徳右衛門

同　要左衛門

同　伊右衛門

同　林右衛門

右鉄炮八挺者小長谷勘左衛門様御吟味之上畜類多く諸作荒シ候而難儀ニ付威筒被下置候

一　愛鷹山野馬狩之儀先年寛政十午年初リ　御公儀様ニ而御取馬被遊候但シ高百石ニ付勢子人足六人ヅヽ相当リ相勤申候村々難儀ニ付奉願上候処文化四外の年与リ勢子人足壱人ニ付玄米壱升ヅヽ之代永御扶持被下置候

一　家数百弐拾軒　但シ大小之百姓水呑共内潰百姓弐拾五軒残而九拾五軒　但シ大小百姓水呑共惣家数

一　村方惣人別四百五人但シ大小男女共馬四拾疋村方ニ御座候

右者御尋ニ付今般委細相改差上申候若字違等御座候ハヽ御高免奉願上候以上

文政十三寅年八月

厚原村

御役所

大村和惣兵衛様

安政六巳未年三月

駿州駿東郡

葛山村

名主　喜十郎

組頭　忠右衛門

同　定七

同　九兵衛

同　圓蔵

百姓代豊之介

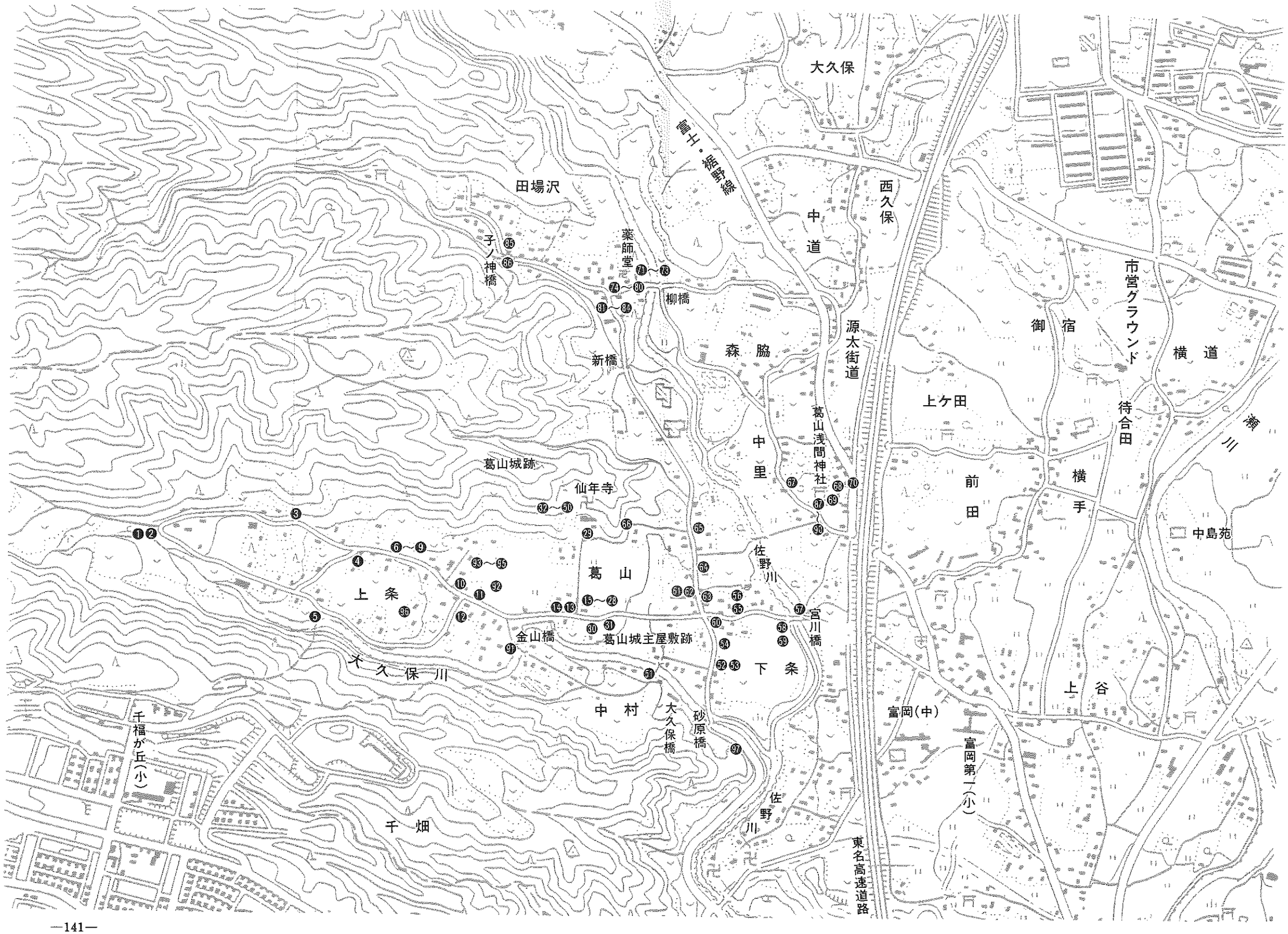
同　次左衛門

葛山村

名主　芹澤勢吾朗

控之置也

附録　葛山区石造物分布図



葛山区石造物調査表－1

番号	名　称	年　号（西暦）	形　態	主　な　銘　文	施　主・願　主
1	馬頭観音	明治16（1883）	文字碑	馬頭観世音菩薩	勝又萬吉
2	馬頭観音	大正8（1919）	浮彫座像	馬頭津大	塩崎竹蔵　塩崎茂作　勝又田茂作
3	馬頭観音		浮彫立像	中村	世話人　徳右ヱ門
4	馬頭観音	文政13（1830）	浮彫立像		
5	馬頭観音	大正13（1924）	文字碑	馬頭観世音菩薩	藤井兼吉
6	道祖神	明和3（1766）	浮彫立像		
7	道祖神		浮彫立像		
8	庚申塔	天保6（1835）	六手金剛		勝間田定七　同重助　坂田藤七　他
9	馬頭観音	大正10（1921）	文字碑	馬頭観世音	勝又源作
10	地蔵尊音		浮彫立像	證　製造所	
11	馬頭観音		浮彫立像	馬頭観世音菩薩	葛山　市川藤作
12	宝篋印塔				
13	道祖神		浮彫立像		
14	道祖神		浮彫立像		
15	横道供養塔	寛延1（1748）	丸彫座像	奉供養横道三十三所	半田平九郎　勝間田傳右衛門　他
16	順礼供養塔	寛保1（1741）	丸彫座像	奉供養西国三十三所順礼	半田七郎兵衛　内儀　同行四人
17	順礼供養塔	明和2（1765）	文字碑	観世音順礼供養塔	塩崎治郎右衛門　他
18	馬頭観音		文字碑	馬頭観世音	
19	庚申塔		文字碑	奉納庚申前	志ノ主　半田氏
20	順礼供養塔	宝永8（1711）	文字碑	奉供養横堂三十三所　奉供養観等	上ケ田村　助治郎　御宿村　甚四郎等

葛山区石造物調査表－2

番号	名　称	年　号（西暦）	形　態	主　な　銘　文	施　主・願　主
21	笠　塔　婆	貞享5（1688）	文字碑	法香　挙身光中五道衆生	
22	供　養　塔	元禄5（1692）	文字碑	奉供養西国三十三所	荻田弾右衛門　遠藤九右衛門　他
23	供　養　塔	天明3（1783）	文字碑	奉納百八拾八番霊佛供養塔	勝間田氏傳右門
24	地　蔵　尊		丸彫座像		
25	地蔵尊一部		丸彫座像		
26	願礼供養塔	宝永4（1707）	丸彫座像	横堂三十三所　奉供養観世音願礼	
27	地　蔵　尊		丸彫座像		
28	地　蔵　尊		浮彫座像		
29	万　霊　塔	延享1（1744）	文字碑	三界萬霊	当寺六・四世穏譽代　念故
30	墓	寛保3（1743）	文　字	有縁無縁之聖霊	
31	馬頭観音	文久1（1861）	文字碑	馬頭観世音菩薩	半田林平
32	五　輪　塔				
33	五　輪　塔				
34	宝篋印塔				
35	宝篋印塔				
36	宝篋印塔				
37	宝篋印塔				
38	五　輪　塔				
39	五　輪　塔				
40	五　輪　塔				

葛山区石造物調査表－3

番号	名　称	年　号（西暦）	形　態	主　な　銘　文	施　主・願　主
41	五　輪　塔				
42	宝篋印塔	康応1（1389）			
43	宝篋印塔				
44	宝篋印塔	明徳5（1394）			
45	宝篋印塔				
46	五　輪　塔				
47	五　輪　塔				
48	五　輪　塔				
49	墓地囲い	嘉永7（1854）			発起　当村　松本儀右ヱ門
50	水　　神		浮彫座像		
51	馬頭観音	明治10（1877）	浮彫立像		兼井○平
52	道　祖　神		浮彫立像		
53	道　祖　神		浮彫立像		
54	馬頭観音	明治5（1872）	浮彫立像		勝間田源治○
55	馬頭観音	安政6（1859）	文字碑	馬頭観世音菩薩	当村源七
56	馬頭観音	天保14（1843）	浮彫立像		
57	庚　申　塔	元禄6（1693）	文字碑	南無阿弥陀佛	荻田　坂田　他
58	記　念　碑	昭和3（1928）	文字碑	宮川橋記念碑	葛山区発起人総代
59	記　念　碑	昭和55（1980）	文字碑	記念碑誌	
60	記　念　碑	昭和8（1933）	文字碑	道路記念	葛山道路委員一同

葛山区石造物調査表－4

番号	名　称	年　号（西暦）	形　態	主　な　銘　文	施　主・願　主
61	道　祖　神	明治33（1900）	浮彫立像		
62	道　祖　神	文化8（1811）	浮彫立像		
63	燈　　篭	明治42（1909）	燈　　篭	秋葉神社常夜燈	半田和七　北村　下條　中村
64	馬頭観音	明治7（1874）	浮彫座像	馬頭観世音菩薩	
65	馬頭観音	慶応4（1868）	文字碑	馬頭観世音菩薩	岩佐久左ヱ門
66	馬頭観音	明和2（1765）	浮彫立像	轉維畜縁菩提	
67	木食名号碑			木食觀正	当村中
68	庚　申　塔	宝暦2（1752）	文字碑	奉供養庚申〇塔	井上惣三郎　勝間田八郎右門　他
69	道　祖　神		浮彫立像		
70	馬頭観音	大正8（1919）	浮彫座像	馬頭観世音	遠藤音吉　中野正平　中野福次郎　他
71	馬頭観音	明治19（1886）	文字碑	馬頭観世音	芹沢忠太郎
72	馬頭観音	文化5（1808）	浮彫立像		世話人　杉本平左ヱ門　他
73	馬頭観音		文字碑	馬頭観世音六井	
74	地　蔵　尊		丸浮座像		
75	地　蔵　尊		丸彫立像	三界万〇	禅光
76	馬頭観音		浮彫立像		中村徳右門
77	馬頭観音	宝暦8（1758）	浮彫立像		清八
78	馬頭観音	寛政12（1800）	浮彫立像		
79	笠付奉納塔	明和4（1767）		薬師前	到誉
80	万　霊　塔		文字碑	三界萬霊	

葛山区石造物調査表－5

番号	名　称	年　号（西暦）	形　態	主　な　銘　文	施　主・願　主
81	庚　申　塔				
82	道　祖　神		浮彫立像		
83	庚　申　塔	寛文12（1672）	文字碑	駿州葛山村庚申供養都合十八人	
84	庚　申　塔	亨保	文字碑	南無阿弥陀佛	天下和順日月清明風雨以時拾三人
85	馬頭観音	明治34（1901）	浮彫立像		中村信太郎
86	馬頭観音	明治42（1909）	文字碑	馬頭観世音	中野為茂
87	燈　籠	寛保3（1743）	燈　籠	奉納浅間宮	当村
88	燈　籠	亨保20（1735）	燈　籠	奉納浅間宮	半田○兵衛
89	燈　籠	寛保1（1741）	燈　籠	奉納八幡大明神	当村
90	燈　籠	延亨1（1744）	燈　籠	奉納八幡大明神	勝間田傳右ヱ門　半田勝右門　他
91	馬頭観音		浮彫立像		
92	宝篋印塔				
93	馬頭観音		浮彫立像		
94	宝篋印塔				
95	宝篋印塔				
96	宝篋印塔	康応1（1389）			
97	馬頭観音	明治2（1869）	文字碑	馬頭観世音菩薩	敬白

注1．表の番号は石造物分布図番号と同じ
　2．表中の○は解読不明な文字

編集後記

裾野市では、昭和六三年度から市史編さん事業へ本格的な取組を開始しました。当市の刊行計画では、平成一一年を目処に資料編・通史編を発刊予定で、本年度は市史第一冊目となる「資料編　深良用水」を刊行いたしました。平成七年度に「民俗編」が計画されていることから、地域単位とした「民俗調査報告書」を随時刊行していくこととなりました。

歴史のなかにおける「民俗」の考えかたや、この重要性については本書の監修者である福田アジオ先生が序章で述べられており、市内の一定の地域のなかでは「歴史」のある葛山地区について第Ⅰ集としてまとめていただきました。

地域「ムラ」のなかにおける共通の生活リズムでの生活、行事や祭礼、また共同慣行、組織などについて、調査にあたった委員や学生諸氏は延べ数十日間にもおよぶフィールドワークを実施、地元の方々の協力を得てさまざまなお話をお伺いすることができました。涙を流しながら昔のことを話してくれるご老人、ご自分が知らないうちに結婚が決まり相手も当日の式で初めて知った話、嫁に行くには下へ転がるが良い（場所をさす）と言われたこと、そば造りのたいへんさや「講」のこと等、私自身も同行しながら興味深く勉強をさせていただきました。話者からの聞き取りの整理、原稿執筆等の都合上部門によっては時間的に充分ではなかった部分もあったかと思いますが、民俗調査という、かって市では経験をしたことのない事務内容・作業であり、事務局である市史編さん室職員も当初は困惑したこともありました。しかし調査準備期間から本調査、補充調査期間を通じて市史編さん事業全体をより身近に、密接のものとして地域の方々にも受け止めていただけたのではと自負しております。

調査にあたっては葛山地区の区長会長　勝又文雄様をはじめ関係区長、役員様、老人クラブ、婦人会、葛山城址保存会等地区民の多くの皆様方の大変なご協力により成果をあげることができ感謝する次第であります。また事前予備調査から補充調査まで、担当委員、学生や当室職員等個々に突然お伺いするなどご迷惑をおかけしたこともこの紙面を借りてお詫びいたします。地区の方々・関係委員・学生諸氏皆様のおかげで立派な「民俗報告書」第Ⅰ集を発刊できることになりました。

当初からお骨折りいただいた地区協力員の勝又常一様、芹沢正巳様には原稿入稿後の校正作業でも連日市史編さん室へ出向いて印刷会社からの原稿校正をお手伝いいただくなどお二人には重ねてお礼申しあげます。また、本書掲載の石造物調査や事前準備等に携わった当時担当者の袴田稔君（現社会教育課）や、本書完成までの資料準備の補助や石造物調査員として市史編さん室へ勤務していただいているたくさんの主婦の方々にご協力いただいていることも申し添えます。

第二回目の調査としてすでに「深良地区」を実施し、現在補充調査や一部写真撮影を残し担当された委員諸氏が執筆中です。平成三年度秋には、茶畑地区を予定しておりますので地区協力員や地区の方々に御世話になります。

伝統文化の伝承の大切なことは無論、私たちが日頃何の注意も払

わず行動していることのなかにも大切な「歴史」として後世へ伝えていかなければならない多くのことがあります。本書が裾野の歴史を理解していただく一端となることを念願しておりますが、内容等についてご意見・ご感想をお待ちしております。

平成三年三月二五日

裾野市教育委員会
市史編さん室長　長谷川　博

市史編さん室

室　長　長谷川　博
主　査　中野鈴子
主事補　今関浩子
事務員　濱田　明
〃　丸山ゆかり
〃　野村美穂子
臨時職員　細谷保子
猪股律子
山入アヤ子
境野仁子
横塚啓子
石造物調査　鈴木康代
山本けい子
窪田紀子
勝又治枝
山之内マス子
写真撮影　永島愛治

裾野市史編さん専門委員・調査委員名簿

専門委員

代表	有光　友學	横浜国立大学教育学部教授
	高橋　敏	国立歴史民俗博物館教授
	中野　國雄	日本考古学協会会員
	福田アジオ	国立歴史民俗博物館教授
	安田　常雄	電気通信大学教授
	四方　一瀰	国士舘大学教授・国士舘大学付属高等学校長

調査委員

	井口　敏靖	加藤学園暁秀中・高等学校教諭
	石田　義明	静岡県立韮山高等学校教諭
	岩崎　信夫	都立目黒高等学校教諭
	岩田　重則	早稲田大学大学院文学研究科博士課程
	菊地　邦彦	都立航空工業高等専門学校助教授
	斉藤　弘美	日本民俗学会会員
	坂本　紀子	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
	柴　雅房	静岡県立長泉高等学校教諭
	新谷　尚紀	山村女子短期大学国際文化科助教授
	杉村　斉	三島市教育委員会三島市郷土館学芸員
	関根　省治	静岡県立沼津東高等学校教諭
	仁藤　敦史	早稲田大学文学部助手
	前田　耕司	国士舘大学文学部講師
	松崎　真吾	横浜国立大学大学院教育学研究科修士課程
	松田香代子	日本民俗学会会員
	湯川　郁子	一橋大学大学院社会学研究科博士課程
	脇野　博	秋田工業高等専門学校講師
	渡瀬　治	裾野市立西小学校教諭

裾野市史調査報告書第一集

葛山の民俗

平成三年三月二十五日

編集　裾野市史編さん委員会
発行　教育委員会市史編さん室
裾野市茶畑399
電話　〇五五九―九三―七一七〇

印刷　みどり美術印刷株式会社

題字　裾野市史編さん委員会副委員長
勝又壽

ムラ入り……58
村規約……55
ムラ境……51
ムラダ(村田)……47,59,72

〈も〉
モシキ(燃し木) …15,29,30,31
モシキトリ……31
モシキ拾い……39
モジリ……23
モズ……39
モトヤシキ……43
モノビ ……122
モヨリ(最寄)… 5 ,47,53,64,66
最寄総代……59
モライッコ……43
もらい風呂 ……30,64
モロコシ……92,101

〈や〉
ヤウツリ(家移り)…… 5 ,33,34
ヤウツリガユ(家移り粥)
……33,34
ヤウツリギョウ(家移り経)…33
薬師堂 ……126
厄年 ……110
屋敷神 ……119,120,122
屋敷墓……36
ヤッパタ(焼畑)……16
ヤネガエ ……31,32
ヤブコウジ ……105
ヤマカガシ……23
ヤマドリ(山取り)……32
山の神 ……119,124
山の神講……90
ヤマミチツクリ……59

〈ゆ〉
結納 ……107
結納返し ……107
ユウジャ……79
ユウニジ(夕虹)……21
湯灌 ……112
ユリイ……29
ユリイバタ……29

〈よ〉
ヨウカドウ……91
ヨウジャ(お茶休み)…31,33,79
ヨウハン……79
ヨコザ……29
ヨッタリヅケ(四人付け)……62
ヨナベ……79
ヨバイ……28,64,65
嫁……38
嫁入り ……108
嫁入り道具 ……107
ヨモギ……92

〈ら〉
雷神宮 ……60,61
ラバックス ……10,11
ラオ……83
ラオヤ……68

〈り〉
離婚 ……110

〈れ〉
恋愛 ……106

〈ろ〉
ロウカ(廊下)……38
露店商……70

〈わ〉
若い衆……58
ワカレ……44
ワキ(脇) ……12,14
ワラゾウリ……97

二番正月 ……87,88
ニバンドリ……80
二百十日……95
ニュウカイ ……12,57
ニワ ……27,29
妊娠 ……102
ニンジンイモ……99
妊娠祈願 ……102

〈ぬ〉
沼津……68

〈ね〉
ネイミ(小児見) ……104
ネセガン ……111
ネンカイ(年回・法事)
……29,46,116
念仏……60
念仏講 ……63,67,127

〈の〉
納棺 ……112
農地解放……15
農休み……93
ノコギリ鎌……75
ノシバ(野芝) ……8,77
ノゾキコミ(覗き込み) ……109
ノチザン(後産) ……103
野辺送り ……113
ノヤキ(野焼き)……13
ノラベントウ……79

〈は〉
パイスケ……14
ハクビシン……18
箱根山……21
ハタ(機)……98
八幡さま ……119
初午 ……70,91
二十日正月……90
初正月 ……105
初節句 ……105
初誕生 ……105
ハツノコ ……104
ハツヤマ(初山) ……66,86
ハツヨリアイ(初寄合)……53
ハデヤー……11
ハナカゴ(花篭) ……113
ハナドリ(鼻取り)……74
ハマオリ(浜降り)
……6,63,69,114
早起き会……11
ハラミット ……102
バリキ(馬力)……13,31,68
ハリヒキ……32
ハレ……28,29,69
ハレの着物……98
番木……53
ハンテン……97

〈ひ〉
ヒーナサン(雛さま)……91
ヒイラギ……37
彼岸……91
ヒキツギモチ……53
ヒキワリメシ ……101
ヒジリ……30
ヒジロ……29
ヒジロバタ ……29,30
ヒトナノカ(一七日) ……115
ヒトニイク ……111
雛節句……91
火の神様……54
百ヒトエ ……104
百ケ日 ……116
ヒルメシ……79
ヒロマ……27,28,29
ビワの木……37
ヒワリ(日割り) ……111
ビンカ(柘植)……37

〈ふ〉
富士山 ……16,20
フジシバ(富士芝)……77
フジバタ……60
フジバタノカミナリサン(藤畑・富士畑の雷さん) ……22,118
ふたご ……103
フタナノカ ……115
不動講 ……60,90,128

〈へ〉
ヘソの緒 ……103
別火のカマド……62
ヘビイチゴ(蛇苺)……23
ヘラックワ……82

〈ほ〉
奉公 ……63,68
ホウソウ ……105
ホウソウ団子 ……105
ホカヤ……35
ボタモチ ……61,91
ボッコツギ……30
ホッサン(宵の明星)……78
ホトケ……29
盆……94
ボンガマ(盆釜)……94
本祝言 ……108
盆棚 ……28,95
盆ミチツクリ……59
ボンメシ(盆飯) ……66,94
ホンムラ(本村)……11,47,52

〈ま〉
埋葬 ……114
マエブルマイ ……108
マキムシ……98
枕団子 ……111
枕飯 ……111
マムシ……22
マメマキ……90
魔除け ……111
摩利支天 ……123
マワシネンブツ ……60,67
マンガ……73

〈み〉
見合い ……106
三島甘藷……8
三嶋大社 ……40,70
ミソカソバ(晦日蕎麦)……80
ミソグラ……35
ミチツクリ ……54,59
ミツメ ……110
ミナノカ ……115
ミナミヤマ ……7,8
宮川……30,51,69
宮世話人 ……117
明神さん……70
民間療法……23

〈む〉
ムカイザシキ……27
ムカエビ……28
麦刈り鎌……72
ムコイレ(婿入れ) ……107
ムジナ……24
棟上げ……33

シンコ……44
震災(関東大震災)……15
シンセキ
……29,32,33,42,44,45,63,64
シンタク……42
人糞……13
シンヤ……44

〈す〉
水源……19
水神……61,119
水神講 ……19,61
水神さま……19
スジナメラ……22
ススダケ……79
ススハキ……85
雀……22
捨て子……40
炭焼き……14

〈せ〉
青年会……57
青年団 ……61,63,64,65
セガキ(施餓鬼)……94
節分……90
浅間神社
……47,53,54,66,69,92,117
センダツ(先達)……33
仙年寺 ……40,47,52,53,125
千福ニュータウン……17
センフリ……23
千本浜……69,115
膳椀小屋……58

〈そ〉
葬式組……48,51,61
ソートメさん……74
ソトエン……38
ソナエワリ……87
蕎麦 ……100
ソバブルミャア(蕎麦振る舞い)
……80,100

〈た〉
代参……60
大正の震災……19
ダイジンサン……85
大念仏……67
堆肥……13
タイマ(大麻)……54
タイマツ……28
大六天神社 ……123
田植え……74
タケノカミナリサン…21,59,60
タケ(嶽)の雷さま ……118
タケノコ……98
タチザケ(発ち酒) ……113
タチネンブツ(立ち念仏) …113
脱穀……75
タテガン ……111
建前……63
七夕……94
種籾……73
タメ(溜め) ……19,58
タモ……16
檀家総代 ……126
タンク……20
ダンゴ……98
ダンゴボク(団子木)……88

〈ち〉
ヂヅキ(地搗) ……32,63
乳房の神さん ……123
チブス……26
地祭り……63
チャゴシ……79
チャノコ……80
チャノマ……29
チャンチャンコ……97
調整……75
朝鮮人……25
チラシガミ……98

〈つ〉
通婚圏 ……106
月並念仏……67,127
月見……95
ツジ(辻) ……113
ツブレヤシキ……42

〈て〉
帝室御料林……15
テヌグイ……97
出不足金……59
デブソクニットウ(出不足日当)
……59
デミマイ(出見舞い) ……103
テャーマツナギ ……42,44
デロウチ ……110
デロカケ……65
デロブチ……65,72,75
天神講……21,128
テンスイ(天水)……30
天王さま ……118

〈と〉
トイバライ ……116
東急……12
冬至……96
道祖神 ……48,66
ドエ ……30,35
ドクダミ……23
年祝い ……110
歳神様……54
年神さん……86
トネ……74
どぶ田……11
トブライグミ(葬式組)
……45,61,62
トブリャー ……111
トブリャーミチ……52
トボグチ ……27,28
ドヨウサブロ(土用三郎)……21
ドラウチ……65
ドラッコ……65
トリアゲバアサン ……102,104
トンガ(唐鍬)……99
ドンドヤキ …… 6 ,48,65,66
トンボ……21
トンボガサ……97
トンボグチ……29

〈な〉
ナエシロ(苗代)……73
ナカジキリ……27
ナガシロ(苗代)……73,82,92
ナカバシラ(大黒柱) ……31,38
ナキャ ……27,29
ナコウド(仲人)…29,46,93,106
ナゼガワの狐……24
ナタ鎌……83
ナデ川 ……51,52
七草……86
ナライ……21
ナンテン……37,104
ナンド……27,28,29

〈に〉
ニイボン(新盆)……94
二十三夜……95

カラウス ……39,75
カラウスヒキ(唐臼挽き)……95
カラウスヒキの歌 ……76,95
烏……22
カラスノクチア(ヤ)ケ……91
カリモン(仮門) ……113
カワバタ(川端)…… 7 ,18,35
簡易水道……19
元旦……86
関東大震災 ……23,25
神主 ……117
ガンヤ ……111

〈き〉
キジリ……30
キジリセ……30
黄瀬川……94
北枕 ……111
キチュウ(忌中) ……45,53,114
キチュウバライ(忌中払い)
……114
狐……24
キモン(鬼門) ……35,91
鬼門除け……35
キャード……35
キャクボトケ(客仏)…5,41,115
救済道路……10
行商……70
キョウユウ……57
共有地……57
共有林 ……31,57,58,65
キリカエシ(切りかえし)……13
キリコミ……79
キリバン(まな板)……86
キリボシ(切り干し)……99
禁忌作物……37
キンジョ……64

〈く〉
草刈り鎌……83
草刈り場……12
クサカリハジメ(草刈り始め)
……13
クサトリ……77
クダギツネ ……121
区長 ……54,62
クミ ……48,51
クミ境……51
クラブ(倶楽部)
……48,51,52,64,65,68
クラヤ……35
桑…… 9
クンチモチ(九日餅)……85

〈け〉
景ヶ島 ……126
ケコミ ……27,38
結婚祝い ……107
ゲヤ……35

〈こ〉
香奠 ……113
コウバナ……37
コウボウさん(弘法さん) …119
五月節句……92
ゴクウ(御供) ……119
コサウチ ……54,59
コシアゲ(輿揚・輿上げ)
……51,54,62,112,113
コシアゲチョウ(腰上げ帳)
……112
コシマキ……97
子捨て ……103
コチ……22
御殿場……68
コトヨウカ……91
コニダ(小荷駄) ……13,15
コビル……79
こぶしの花……21
コブン(子分)……46
コマ ……27,29
コマンザライ(熊手)
……14,82,100
小麦…… 8
小麦まんじゅう……91
子守 ……105
婚礼衣裳 ……107

〈さ〉
再婚 ……110
サイトヤキ…… 6 ,65,88,119
サイノカミ(塞の神) …119,122
サイノカミサン……88
サキヤマ……68
ザシキ……27,28,29
サシマワシ……60
ザツボクリン(雑木林) …13,14
サツマ(サツマイモ)… 8 ,92,99
サツマグラ……83,100
サツマの栽培 ……100
サトミチツクリ……59
サトヤ ……113,115
さなださん ……123
サャートヤキ……48
猿……18
サワガニ……24
産後 ……104
三三九度 ……109
三十五日 ……115
産婆 ……102

〈し〉
シオバナ ……104
鹿……18
シカソンキョウユウニュウカイ
(四か村共有入会) ……12
仕事着……97
シシ(猪)……18
四十九日 ……115
下刈り ……58,59
七五三……96,106
シドメバラ……17
シノダケ(篠竹) ……68,83
死の通知 ……111
芝…… 8
シバグシ(芝ぐし)……76
ジバシリ……32
シバハタ(芝畑)……76
シホウモチ(四方餅)……33
ジマツリ(地祭り)……32
十一日正月……87
集会場……48
収穫……75
十五夜 ……94,95
十三夜……95
姑……39
出棺 ……113
出産 ……103
出産祝い ……104
出産見舞い ……104
授乳 ……104
シュロの木……37
ジュンヨウシ(準養子)……43
ジョウカイ(常会)……53
ジョウグチ……28,35,36
ジョウヅカイ(定使い)……54
縄文式土器…… 7
ジョウヨウ ……37,38
植林……16
シロカキ(しろ掻き)……74

〈あ〉
赤土……7
アカマサ……7
アガリット……27,28,30,38
秋葉講……128
秋葉神社……60
アクヌキ(灰汁抜き)……98
アサニジ(朝虹)……21
アサメシ……78
愛鷹山……12,17
愛鷹山組合地……12
アズキガユ(小豆粥)……87
遊び……40
アタマッパライ(頭払い)……57
アナホリ(穴掘り)……112
アネサンカブリ……97
雨具……97
雨乞い……21,118
アラクオコシ……71
蟻……21
アワシマコウ(淡島講)…67,128
安産祈願……102

〈い〉
イイ(ユイ・結い)……44,64,74
イイガエシ……44,64
イエミ(家見)……34
イセキ……42
イセキムスメ……42
伊勢参り……69,110
イタチ……22
一人前……59
イチバンドリ……79
イチヤカザリ(一夜飾り)……85
イチヤモチ(一夜餅)……85
一周忌……116
イット(ウ)……44,45,62
井戸……25
イドガエ(井戸替え)……19
イドサライ(井戸浚い)……19
イナサ……21,22
稲荷……91
戌の日……102
イノコのぼた餅……96
イハイワケ(位牌分け)
……6,41,115
イロリ……29
インキョ(隠居)
……19,41,42,43,44
インキョオヤ……42,43
インキョッコ……42
インキョヤ……44

〈う〉
ウッチャリッコ……40
うどん……101
ウマヤ……35
ウラキモン……36

〈え〉
エナさん取り……103
恵比寿講……96
エンガワ……28,38
演習場……58
エンスイセン(塩水選)……73

〈お〉
大久保川……30,35
オオゴ……42
オオド……38
大野原(演習場)……11,17,58
オオヤ(本家・大家)
……41,42,43,44,120
オオヤマサンノツツガユ(筒粥)
……90
オカザリ……85
オカタミ……63
オカタミセ(オカタ見せ)…109
オカッテ……27,28,29
オカボ(陸稲)……71,73,92
オキ(沖)……12
屋内神……120,122
送り盆……94
オサンバショ(お産場所)……29
お七夜……104
オジャンメ……40
オショウバン……109
オシルニ……79
オタナ……28
落葉……13
お茶……10
オチャマエ……78
オチョウメチョウ……109
お通夜……112
おてんとうさん念仏……127
オトウミョウ……115
オバンシ……78
帯祝い……102
オビグモ(帯雲)……20
オヒマチ(お日待ち)……95
オブギ(産着)……105
オブツナさん……103
オブ湯(産湯)……103
オフルマイ(お振舞い)…67,92
オモヤ……41
オヤキ……101
オヤブン……41,46
オヤブン・コブン……6
女の節句……91
オンベ……88

〈か〉
カービタリ(川浸り)……96
カイコ(蚕)……92
カイコシ……38
カイコン(開墾)……15,16,57
開墾百姓……72
カエリビ……28
カオミセ(顔見せ)……109
カギトリ(鍵取り)…37,118,119
柿の木叩き……87
カケバン……11
カサグモ(笠雲)……20
カサッカケ……121
カシワ……37
風祭り……95
瘡守稲荷……40,66,70,121
カセギ……83
火葬……112,116
カタッカユ(片粥)……87
カッチャク(活着)……77
河童……24
カッポシ……72
門松……85
カナドオグ……107
金山神社……120
カニ……23
ガニブチ……24
カネオヤ(鉄漿親)
……29,41,43,46,93,102,106
カボチャ……96
カマヤ(釜屋)……30,31,35
カマンド(カマド・竈)…30,63
紙位牌……41
髪形……98
カミザ……29
雷さま……118
カミナリサン(雷神)……21,93
カヤカリ……31,32
カヤバ(萱場)……14,31,57

索　　引